インドの伝統的都市における
都市構造の形成と居住空間の変容に関する研究

― ヴァーラーナシーとマドゥライを事例として ―

2008年2月

柳沢　究

目次

序章

0-1　研究の背景 3

0-1-1　「ヒンドゥー都市」とコスモロジー 3

0-1-2　ヒンドゥーの「聖都」 4

0-1-3　ヴァーラーナシーとマドゥライ 6

0-2　研究の目的と視点 8

0-3　既往研究と本研究の位置付け 10

0-3-1　インド都市史研究 11

0-3-2　「ヒンドゥー都市」研究 15

0-4　研究の方法と論文の構成 17

0-4-1　研究の方法と調査概要 17

0-4-2　論文の構成 19

第１章　ヴァーラーナシーの都市構造の形成と理念的モデル

1-1　はじめに 25

1-2　ヴァーラーナシーの都市構造の形成 27

1-2-1　都市形成史の概要 27

1-2-2　都市構造の形成 29

1-2-3　都市の発展とエスニック・グループの分布 31

1-3　ヴァーラーナシーの理念的モデル 31

1-3-1　ヒンドゥー教における聖地と巡礼 31

1-3-2　巡礼路の理念的構造 33

1-3-3　巡礼路の成立と変容 36

1-4　アンタルグリハ巡礼路と寺院・祠 38

1-4-1　アンタルグリハの巡礼地 38

1-4-2　寺院・祠の分布と巡礼路 42

1-5　街区形態の変容と巡礼路 45

1-6　まとめ 46

第２章　ヴァーラーナシーの居住空間構成とその変容

2-1　はじめに 53

2-2　近隣単位・モハッラ 54

2-2-1　北インド都市におけるモハッラの形成パターン 54
2-2-2　ヴァーラーナシーのモハッラ 55
2-2-3　アンタルグリハ地区の構成 56
2-3　モハッラの空間構成 59
2-3-1　境界の形式 59
2-3-2　名称の由来 61
2-3-3　モハッラ内の諸施設 62
2-3-4　規模と形状 62
2-3-5　モハッラの二類型 64
2-4　住居の基本構成と住居類型 65
2-4-1　近郊村落の住居 65
2-4-2　ハヴェリ 68
2-4-3　住居の構成要素 70
2-4-4　住居平面の類型 73
2-5　街区空間の構成とその変容 76
2-5-1　カリカ・ガリー地区 76
2-5-2　ハウズ・カトラ地区 82
2-6　まとめ 88

第３章　マドゥライの都市構造の形成と理念的モデル

3-1　はじめに 97
3-2　南インドにおける寺院都市の成立 98
3-2-1　寺院から寺院都市への発展 98
3-2-2　都市空間のマンダラ化と王権 101
3-3　マドゥライの都市形成 102
3-3-1　都市形成史の概要 102
3-3-2　古文献中のマドゥライ 106
3-4　マドゥライの都市空間構造 109
3-4-1　街路形態と理念的モデル 109
3-4-2　巡行祭礼の構造と機能 110
3-5　都市施設の配置とその特性 113
3-5-1　王宮 113
3-5-2　宗教施設 114
3-6　まとめ 118

第４章　マドゥライの居住空間構成とその変容

4-1　はじめに 127

4-2　住み分けの構造 127

4-2-1　店舗分布 127

4-2-2　カースト分布の現況 129

4-2-3　住み分けの構図 132

4-3　住居の構成要素と住居類型 134

4-3-1　住居の構成要素と基本型 134

4-3-2　住居平面の類型 138

4-4　街区空間の構成とその変容 141

4-4-1　バラモン地区 141

4-4-2　ヤーダヴァ地区 147

4-4-3　チェッティヤール地区 155

4-5　まとめ 161

結章

5-1　各章で得られた知見のまとめ 169

5-1-1　ヴァーラーナシー 169

5-1-2　マドゥライ 170

5-2　結論と今後の課題 172

付録　実測住居平面図 175

参考文献 201

研究業績リスト 209

図表一覧

序章　図 0-1　ヒンドゥー教の宇宙観（鳥瞰図）

図 0-2　インドの伝統的都市の分布と本研究の対象都市

図 0-3　ヴァーラーナシーの同心円状の巡礼路とその理念的構造

図 0-4　マドゥライの同心方形状街路

図 0-5　マンドゥーカ・マンダラの構成と諸神の配置

図 0-6　『アルタシャーストラ』に基づく古代インドの理想的王都の復元図

第１章　図 1-1　ヴァーラーナシ旧市街概要図
図 1-2　都市の発生と初期の展開
図 1-3　ヴィシュワナート寺院周辺の街路パターンの変化
図 1-4　エスニック・グループの分布
図 1-5　『マハーバーラタ』に説かれる巡礼路の想定図
図 1-6　チャウラシークローシー・ヤートラ
図 1-7　同心円をなす５つの巡礼路
図 1-8　同心円をなす五つの巡礼路のマンダラ構造
図 1-9　アンタルグリハ巡礼路とその巡礼地
図 1-10　寺院の地下にあるリンガ
図 1-11　増改築により取り込まれた寺院
図 1-12　アンタルグリハ地区における宗教施設の分布
図 1-13　ダルマクープ街区の変遷
図 1-14　巡礼路と街路の関係（模式図）
表 1-1　巡礼路について言及する主なマーハートミヤ
表 1-2　アンタルグリハ巡礼路の巡礼地の特徴

第２章　図 2-1　アンタルグリハ地区の 1822 年の状況
図 2-2　アンタルグリハ地区の現況
図 2-3　アンタルグリハ地区の街路構造
図 2-4　モハッラの分布と境界形式
図 2-5　モハッラの境界を示す門と祠
図 2-6　モハッラの中心的宗教施設の分布
図 2-7　アンタルグリハ地区における井戸の分布
図 2-8　街路型モハッラと領域型モハッラの分布
図 2-9　村落住居の典型例
図 2-10　村落住居の空間構成モデル
図 2-11　ハヴェリの典型例
図 2-12　ハヴェリの空間構成モデル
図 2-13　住居規模分布図
図 2-14　ヴァーラーナシーの都市住居の典型例
図 2-15　住居へのアプローチにおける視線の制御
図 2-16　中庭のサイズ分布
図 2-17　ヴァーラーナシーの住居平面類型と事例数

図 2-18　ヴァーラーナシーの住居平面類型図（1/600）
図 2-19　街区構成の調査対象地区
図 2-20　カリカ・ガリー地区（#41 周辺）の街区構成
図 2-21　ダルマクープ地区の一階平面図（1/1000）
図 2-22　ダルマクープ地区の住居類型分布図
図 2-23　1929 年のダルマクープ地区
図 2-24　ダルマクープ地区の 1929 年〜現在の変化
図 2-25　1822 年のダルマクープ地区
図 2-26　ハウズ・カトラ地区（#23 周辺）の街区構成
図 2-27　チャフメフマン地区の一階平面図
図 2-28　チャフメフマン地区の住民構成図
図 2-29　チャフメフマン地区の住居類型分布図
図 2-30　1929 年のチャフメフマン地区
図 2-31　チャフメフマン地区の 1929 年〜現在の変化
図 2-32　1822 年のチャフメフマン地区
表 2-1　モハッラの形成パターンと特徴
表 2-2　街路型モハッラと領域型モハッラの特徴
表 2-3　図 2-11 で示したハヴェリの概要
表 2-4　住居平面類型別の規模
表 2-5　カリカ・ガリー地区における街区・敷地の平均面積および袋小路の比率
表 2-6　カリカ・ガリー地区における住居入口の方位別分布
表 2-7　ハウズ・カトラ地区の街区・敷地の平均面積および袋小路の比率
表 2-8　ハウズ・カトラ地区における住居入口の方位別分布

第 3 章　図 3-1　マドゥライ旧市街概要
図 3-2　プラーカーラ（周壁）とゴープラ（楼門）
図 3-3　シュリーランガム
図 3-4　ミーナクシー・スンダレシュワラ寺院平面図
図 3-5　1688 年のマドゥライ古地図
図 3-6　1755 年のマドゥライ
図 3-7　1755 年のマドゥライ（詳細図）
図 3-8　1907 年のマドゥライ旧市街
図 3-9　ナンディヤーヴァルタの同心方格囲帯状構成
図 3-10　マドゥライにおける巡行祭礼のルート

図 3-11　チッタレイ祭での山車の巡行
図 3-12　ヒンドゥー寺院の分布
図 3-13　マシ通内側における祠の分布
図 3-14　モスク・キリスト教会・ジャイナ寺院の分布
表 3-1　月毎の祭礼と巡行路
表 3-2　マドゥライ旧市街におけるヒンドゥー寺院の分布状況
表 3-3　同心方形状街路に面するヒンドゥー寺院の分類とその割合

第 4 章　図 4-1　商業施設分布図
図 4-2　主要四業種の店舗分布図
図 4-3　マドゥライ旧市街におけるカースト分布の現況
図 4-4　ナーヤカ朝初期のカースト分布推定図
図 4-5　調査対象地区
図 4-6　マドゥライの典型的住居の構成
図 4-7　マドゥライの住居平面類型と事例数
図 4-8　マドゥライの住居平面類型図（1/600）
図 4-9　バラモン地区の一階平面図と居住空間構成（1/800）
図 4-10　バラモン地区の用途分布
図 4-11　バラモン地区の街区構成（現況）
図 4-12　バラモン地区の街区構成（1907 年）
図 4-13　ヤーダヴァ地区の一階平面図と居住空間構成（1/800）
図 4-14　ヤーダヴァ地区の用途分布
図 4-15　ヤーダヴァ地区の街区構成（現況）
図 4-16　ヤーダヴァ地区の街区構成（1907 年）
図 4-17　チェッティヤール地区の一階平面図と居住空間構成（1/800）
図 4-18　チェッティヤール地区の用途分布
図 4-19　チェッティヤール地区の街区構成（現況）
図 4-20　チェッティヤール地区の街区構成（1907 年）
表 4-1　調査対象三地区における建物の構造・階数・用途
表 4-2　住居平面類型別の規模
表 4-3　バラモン地区の実測対象住居の概要
表 4-4　ヤーダヴァ地区の実測対象住居の概要
表 4-5　チェッティヤール地区の実測対象住居の概要

序章

0-1　研究の背景

1991年の経済自由化以降、急速な経済成長を背景として、インドの都市部は現在激しい変化の波にあらわれている。具体的には、都市中間層の飛躍的増大にともなう新興宅地開発と都市のスプロール、周辺村落からの人口流入の激化によるスラム街の拡張、無秩序な既存街区の再開発などが、都市問題として生起しつつある。これらの現象は、いまやデリーやムンバイ、コルカタなどの大都市にとどまらず、これまで比較的開発を免れてきた地方都市にまで波及しつつある。とりわけ、地域固有の歴史的・文化的背景のもと豊かな歴史的市街地を形成・保持してきたインド各地の伝統的都市では、マスツーリズムの浸透による商業的観光地化の影響も強く、事態はより深刻である。歴史的市街地の無秩序な開発・更新、それにともなう伝統的都市景観の破壊などがすでに進行しつつあり、早急な都市計画的対応が求められている。そしてその前提として、都市構造の歴史的形成過程やその地域固有の居住空間構成の特質の把握が必要となることは論を待たないであろう[1)]。

以上のような問題意識のもと本論文が焦点をあてるのは、ヒンドゥー教のコスモロジー（宗教的宇宙観）との密接な関連が指摘されており、インドの伝統的都市の一側面を代表する都市類型と考えられる、ヒンドゥーの「聖都」である。具体的には、北インドにおけるヒンドゥー教最大の聖地・ヴァーラーナシー Varanasi と、南インドにおける最大の寺院都市・マドゥライ Madurai の旧市街を事例として、コスモロジーと都市空間の物的構成との関係に注目する。

0-1-1　「ヒンドゥー都市」とコスモロジー

一口にインドの伝統的都市といっても様々である。都市の担う機能に応じて分ければ、行政都市・交易都市・寺院都市などが代表的なものであるが、前近代の都市では多くの場合これらの性質は複合している。また、広大なインド亜大陸では地方による差異も大きい。インドでは全土を支配する統一的王朝が歴史的にほとんど存在しなかったため、各時代各地方において様々な王朝が割拠し、それぞれ異なった文化を醸成してきた。特に、ガンジス川流域を中心とした北インドとデカン高原以南の南インドでは、民族的・文化的背景の違いも大きく、インド都市を包括的に論じる際には一定の配慮が必要とされる。

このような背景のもと多岐にわたるインド都市であるが、都市の空間的構成という側面において、地方や時代の差異を貫いて共通する特徴を浮かび上がらせるのが、「ヒンドゥー都市」という枠組みである。「ヒンドゥー都市」とは、インドの伝統的都市の空間構成を、インド文化の根幹の一つであるヒンドゥー社会の諸制度や儀礼、ひいてはコスモロジーとの連関において把握しようとする視点のフレームである。ヒンドゥー教におけるコスモロジーとは、きわめて簡略に要約すれば、世界の中心にそびえるメール山を中心とした同心円状構造の宇宙観である（図0-1）。メール山の頂上に最高神の領域があり、それを取り巻いて世界を守る神々が配置されており、数字や方位のシンボリズムも重要な要素として含まれている。この宇宙観を図像化したものが、いわゆる「マンダラ mandala（曼荼羅）」である。マン

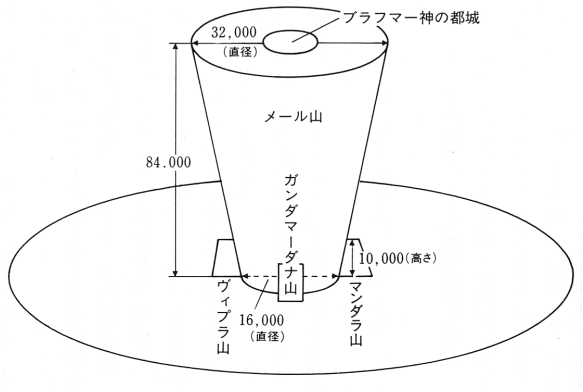


図 0-1　ヒンドゥー教の宇宙観（鳥瞰図）
出典：定方（1985）

ダラとは「聖なる世界の縮図」であり、このマンダラを地上世界に実現するための都市・建築の計画手法を体系的に整理したものが、『アルタシャーストラ Arthasastra』や、「シルパ・シャーストラ Silpasastra」と総称される一連の古代インドの建築書である。後述するように、近年これらに記された都市計画理念や様々なサンスクリット古文献の記述との対照によって、ヒンドゥー的コスモロジーと都市空間との対応関係を計ろうという試みがなされている。具体的には、ジャイプル Jaipur やヴィジャヤナガル Vijayanagar、インドネシアのチャクラヌガラ Chakranugara など、ヒンドゥー系諸王朝や藩王国の首都として建設された、「ヒンドゥー王都」とも呼ぶべき都市が注目されている（図 0-2）。これらの都市では、王によって建設されたその都市形態にコスモロジーが投影されていると考えられている。王権の表現として、宇宙全体を包含する超越的秩序、すなわちコスモロジーが都市形態に投影されることは、とりわけ政事と祭事が密接に結びついていた前近代においては、インドに限らず中国世界や東南アジアでもしばしば見られる事象である。しかしながら、都市とコスモロジーとの密接な関わりは、必ずしも「王都」に限定されるものではない。

0-1-2　ヒンドゥーの「聖都」

より一般化して言えば、宇宙的秩序の空間への投影という構図は、単に王権の表現という水準にとどまらない。エリアーデが「世界の中で生きることができるためには、世界を創建せねばならぬ…固定点、〈中心〉を発見あるいは投射することは、世界創造にひとしい」[2] と論じたように、ある白紙の土地にいかにして人間が意味を与え空間をつくりだすかという、空間の聖性の構造に係わるものでもある。その意味で、ヒンドゥー教と都市とのより親和的な関係を見いだしうるのが、ヒンドゥー教の大聖地や巨大寺院を中心に形成された都市群である。シヴァ神の聖地・ヴァーラーナシー、ハルドワール Hardwar、クリシュナ神の生誕地・アヨーディヤ Ayodhya、ラーマ王子の生誕地・マトゥラー Mathura、ウッジャイン Ujjain、ドゥワールカ Dwarka、カーンチープラム Kanchipuram など、「七聖都（サプタプリー Saptapuri）」と呼ばれるヒンドゥー教の聖地を核とする都市、マドゥライ、シュリーランガム Srirangam をはじめとする南インドの寺院都市などが、その代表例である（図 0-2）。これらの都市には、共通して以下のような特徴を指摘することができる。

① コスモロジーが何らかの形で都市に投影されていること。水辺の聖地などを核として自然発生的

に形成された都市では、王都のように計画的に建設された場合と異なり、コスモロジーが都市形態としては明快に表象されないケースもある。しかしそのような場合でも必ず、中核となる寺院を世界軸（アクシス・ムンディ Axis Mundi）として、また伝説や神話を媒介として、あるいは他の聖地とリンクするかたちで[3)]、都市は宇宙的秩序に観念的に接続されている。

② ①の手段あるいは結果として、卓越した宗教的重要性をもつ寺院などの宗教施設が、都市の中核

図 0-2　インドの伝統的都市の分布と本研究の対象都市

あるいは都市形成の主要な契機となっていること。マドゥライやシュリーランガムなどの南インドの都市群が「寺院都市」と呼ばれるのは、この特徴がとりわけ顕著なためである。

③ ヒンドゥー教徒にとって都市そのものが聖なる存在と認識されており、現代においてもなお、巡礼などの宗教活動の対象となっていること。

上記①〜③の特徴を備えた都市を、本論文では、英語の "Sacred City" あるいは "Holy City" に対応する語として、ヒンドゥーの「聖都」と呼ぶこととする。「ヒンドゥー都市」のもう一つの系譜といってよい。このようなヒンドゥーの聖都に共通してみられる、注目すべきもう一つの特徴として、

④ 極めて長い時間を都市として持続していること、をあげることができる。ヴァーラーナシー、アヨーディヤ、マトゥラーはいずれも前6世紀頃に栄えた十六大国[4]の首都を源流とし、マドゥライもまた前6世紀、カーンチプラムは4世紀、上述した中ではシュリーランガムが最も新しいが、遅くとも7世紀にまで遡りうる歴史を有する。

①・②は、程度の差はあれヒンドゥー王都にも共通する特徴である。②の中核となる宗教施設は、一般に王による寄進というかたちで建設・拡張されてきた。「王都」との大きな相違点は③である。ただし、「都市の聖性」の根拠は何かという問題には容易に答えることはできない。聖性を帯びた場所がまずありそれゆえに①・②のような都市が生まれたのか、あるいは、①・②のような都市が存在するがゆえに聖性を帯びるようになったのか。おそらくは両者であろうが、歴史的・実証的に検証することは困難であろう。また、④で触れているように、宗教的権威と世俗的権威が分かちがたく結合していた古代においては、しばしば「聖都」は政治的中心として「王都」を兼ねており、また当然のように、交易・商業都市でもあるといった複合性を備えていた。しかし、都市空間の物的構成を論じようとする本研究にとって重要なのは、聖性の出自や純粋性を問うことではない。①・②のような特徴を備えた都市が、聖性を帯びた都市として広く認められながら（③）、同時に人々の多様な生活の場としてきわめて長い歴史を経て現代にいたるまで持続してきた（④）という事実である。このような特徴をもつ「聖都」へ着目することは、都市とコスモロジーとの対応関係を俯瞰するだけではなく、都市空間をそこに生きる生活者の視点から読み解こうとする試みにとっても有効であろう。

また、イスラーム政権によって建設された都市を除けば、一般にインドの伝統的な都市や集落の多くにおいて、その中心はヒンドゥー寺院によって占められているのであり、少なくともその点において、インドの伝統的都市のほとんどは、多少なりとも「聖都」と共通する側面を有していると考えられる。

以上が、インドの伝統的都市における空間構成とその形成・変容を視点とした場合に、ヒンドゥーの「聖都」に焦点を定める背景である。

0-1-3　ヴァーラーナシーとマドゥライ

本研究で具体的な事例として取り上げるのは、北インド、ウッタル・プラデーシュ Uttar Pradesh 州のヴァーラーナシー旧市街と、南インド、タミル・ナードゥ Tamil Nadu 州のマドゥライ旧市街である。

ヴァーラーナシーは、北インド中部、ガンジス川中流域の河岸に位置する。遅くとも前6世紀頃には、

北インドで栄えた十六大国の一つカーシー Kashi 国の首都として栄えていたことが知られている。同時代に、現在の都市北郊 10km にあるサールナート Sarnath でブッダによる初の説法（初転法輪）が行われたことが示すように、ヴァーラーナシーは当時よりガンジス川中流域で最大の文化的・宗教的中心であった。そして 13～18 世紀のムスリムによる支配、19～20 世紀のイギリス植民地支配を経て、今なお同地方の政治・経済・宗教の中心的都市として繁栄している。「聖都」としてのヴァーラーナシーの特徴は第一に、ガンジス川に対する信仰と結びついた、その卓越した宗教的重要性である。古来ヒンドゥー教最大の聖地としてメッカやエルサレムにも例えられ、インド国内外より数多くの巡礼者を集める都市である。第二には、都市の中核となるヴィシュワナート Vishvanath 寺院をはじめ、市街には一説に 3000 を越えるといわれる大小のヒンドゥー寺院や祠が存在する点である。第三には、それらの寺院・祠を結びつける複数の都市内巡礼路が、ヴィシュワナート寺院を中心としたマンダラ状の構造を形作るように設定されており、都市が総体としてヒンドゥーのコスモロジーを表象しているとされる点である（図 0-3）。

マドゥライは、南インドのタミル・ナードゥ州南部を流れるヴァイガイ Vaigai 川の南岸に位置する。マドゥライは歴史的にはタミル民族の王朝パーンディヤ Pandya 朝の首都として知られ、その起源は前 6 世紀頃まで遡るとされる。現在では、チェンナイに次ぐタミル・ナードゥ州第二の都市である。マドゥライの第一の特徴は、都市の中心部が南インド最大の巡礼寺院として知られる、ミーナークシー・スンダレシュヴァラ Minaksi-Sundareshvara 寺院（以下「ミーナークシー寺院」）の巨大な境内によって占められている点である。第二には、ミーナクシー寺院の周囲を、寺院を中心とする同心方形状の幹線街路が五重に囲い込んでおり、それによって、ヒンドゥー教のコスモロジーが都市形態にきわめて明快に表象されている点である（図 0-4）。第三には、この同心方形街路を巡行する都市祭礼が、今なお活発に催されている点である。タミル・ナードゥ州周辺には、このような特徴を共有する「寺院都市」が複数存在しており、「シルパ・シャーストラ」に記された都市計画理念との関連が早くから指摘されている。ヒンドゥー世界では、コスモロジーを形象化していると考えられる寺院などの建築は少なくないが、

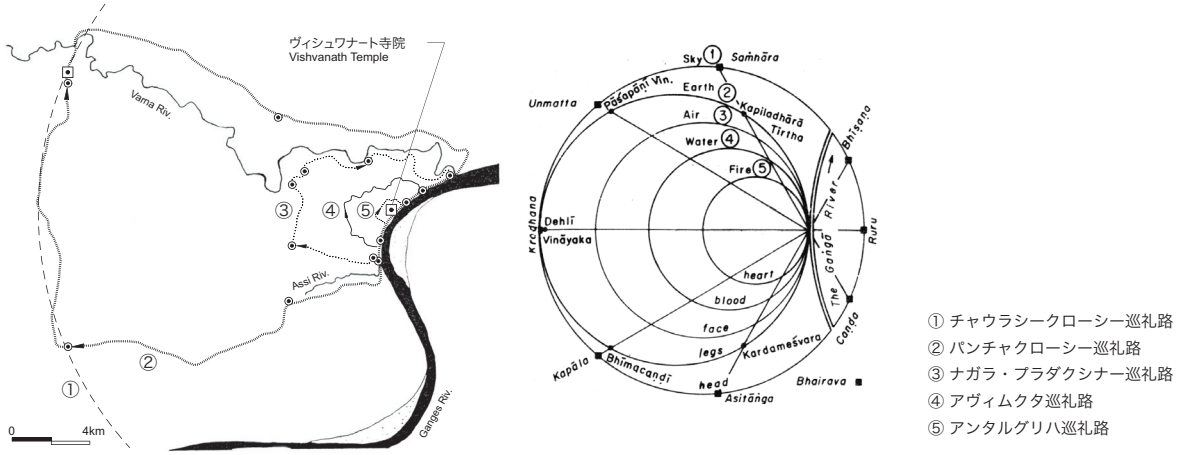


図 0-3　ヴァーラーナシーの同心円状の巡礼路とその理念的構造
左：Gutschow (1994)、右：Singh, R.P.B. (1993) 所収の図に加筆

図 0-4　マドゥライの同心方形状街路
"Madura District, Madura Town: Revenue Map", 1907にもとづき作成

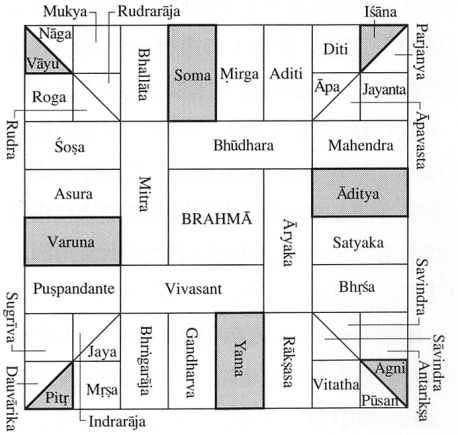


図 0-5　マンドゥーカ・マンダラの構成と諸神の配置
「シルパ・シャーストラ」の都市計画理念のベースとして用いられるマンダラの一つ
出典：布野（2003）

これほど明快な形態を都市レベルにおいて表した例は、他に見ることができない。マドゥライはその中でも最大規模の都市であり、かつ最も明確な都市形態を有するものの一つである。

以上のようにヴァーラーナシーとマドゥライは、前項で述べた「ヒンドゥー聖都」の特徴のいずれもを、他の聖都に比しても際立ったかたちで示している。とりわけ同心（円・方形）状の巡礼路や街路といった物理的要素を通じて、コスモロジーが都市に表象されている数少ない都市であり、インドの南北におけるヒンドゥーの「聖都」の代表例として位置づけることができる。

インドにおける特徴的な地方差異としては、大きく北部のアーリア文化と南部のドラヴィダ文化の差があげられる。北部ではアーリア文化を軸としながらも中世以降イスラーム勢力の絶え間ない侵入・支配を経て文化的混淆が進んだ。またそれと同時に、カウンターとしてのヒンドゥー教理念の純化がなされてきた。南部では在地王権と寺院の密接な結びつきから、より土着的なヒンドゥー文化が保持・強化されてきた。ヴァーラーナシーとマドゥライは、このような南北における歴史的・文化的背景の差異とも対応しており、本論文における両都市の比較の前提となる。

0-2　研究の目的と視点

以上の背景をふまえ、本論文では、コスモロジーとの密接な関係が指摘されており、かつ二千年にわたる時間を持続してきたヒンドゥーの「聖都」の代表的的都市、ヴァーラーナシーおよびマドゥライの旧市街を対象として、ヒンドゥー教のコスモロジーが都市空間構成へ及ぼした影響とその特質を明らかにすることを目的とする。そのために本論文では、大きく以下の二つの視点のもとに、都市空間の物的構成およびその形成・変容過程に関する調査分析を行う。

（1）都市構造と理念的モデルの関係

コスモロジーが都市に投影されるといっても、メール山を中心とした神々の配置が直接都市に重ね

られるのではない。これを抽象化したダイアグラムがまず想定され、コスモロジーとの対応が語られる。ヴァーラーナシーについて言えば、同心円をなす巡礼路が描くマンダラ（図 0-3：右）であり、マドゥライについては、「シルパ・シャーストラ」に記された理想都市モデル、あるいはそのベースとなっているマンダラ（図 0-5）が想定されている。このようなコスモロジーと実際の都市の中間に位置し、両者を媒介するダイアグラムは、いわば都市の理念的な構造を表現したものであり、本論文ではこれを「理念的モデル」と呼ぶ。

これまでの研究でも、両都市がインド的コスモロジーを表象しているということは繰り返し指摘されてきた。

ヴァーラーナシーの都市内巡礼路群が、ヴィシュワナート寺院を中心とした同心円構造を有していることは、宗教学分野におけるサンスクリット文献研究を通じて早くから指摘されており、ヴァーラーナシーがインド第一の聖地であることを主張する諸言説の根拠の一つとなっている。それらの研究を包括し、さらに古典サンスクリット文献の記述と照合しながら巡礼路のルートを推定したのが R.P.B. シン Singh（1993）である。R.P.B. シンは、ヴァーラーナシーの巡礼路群はヴィシュワナート寺院を中心とした五重の同心円構造を有するとともに、巡礼路の要所にある寺院・祠にはヒンドゥーの方位観対応した神々が祀られており、総体としてヒンドゥーのマンダラを描いているとする。都市とコスモロジーの対応関係を宗教地理学的立場から読み解こうとする興味深い研究であるが、その焦点は巡礼路の理念的構造化にあてられており、都市空間との関連については巡礼路や巡礼対象となる寺院・祠の地理的位置の指摘にとどまっている。

マドゥライについては、寺院を中心とした矩形の都市形態をもつこと、また明快な同心方格状の街路構造をもつことから、「シルパ・シャーストラ」に記された都市類型との関連が注目されてきた。古文献の記述を基に、パーンディヤ朝時代の古代マドゥライが「シルパ・シャーストラ」に則って計画されたと指摘するのがアヤール Ayyar（1916）である。しかし、具体的にどのような都市類型をモデルとしているのかは明らかではない。都市が建設されるにあたって参照された都市類型に言及する研究もわずかながらあるが、いずれも都市の中心を寺院が占めている点のみを論拠とするものである。

総じて言えば、コスモロジーと都市との関係に関する既往の言説の焦点は、両都市とも、コスモロジーとの関連性の指摘、あるいは都市の表象する理念的モデルの図式的理解・解説にあり、具体的な都市空間の実態やその形成・変容過程との関連づけた検証は十分になされていない状況である。

そこで本論文では、都市とコスモロジーとの関係を論じるにあたって、まずそれぞれの都市について想定されている理念的モデルの構造を把握した上で、それが都市空間の物的構成にどのような影響を及ぼしているのか、その対応関係あるいは相互関係を、都市構造の実態および形成過程と比較しながら考察を行う。

ここでいう「都市構造」とは、市街地の範囲や街路体系、主要施設の配置といった、都市スケールにおける諸要素の空間的な配置構成を指す。理念的モデルとの関係を図るにあたって都市構造に注目するのは、『アルタシャーストラ』や「シルパ・シャーストラ」に記された都市計画理念は、上述の都市構

造に関する記述が中心的なものだからである。またその際には、理念的モデルの構造と都市構造を比較・対応させるだけではなく、理念的モデルを実体化する個々の物的要素、すなわち寺院・祠や巡礼路、同心方形状街路などの、空間的特性および周辺都市空間との関係・相互作用も考慮して考察を行う。

具体的な調査分析にあたっては、主として次の四点の把握を課題とする。①都市構造の歴史的形成過程、②都市の理念的モデルの構造、③ ①②の相互関係、④理念的モデルを表象する諸要素の特性と都市空間との関係。

(2) 居住空間の構成と変容

本論文が対象とするのは、純然たる宗教的な場としての寺院や聖地ではなく、人々の生活と歴史が重層する都市である。両都市は聖都として二千年を越える歴史を有するとともに、今なお活発に生きられている都市でもあり、その都市空間を単純にヒンドゥー教の宗教的理念の反映としてのみ解釈することは適切ではない。そこには、近隣単位やカースト・民族毎の生活様式、人口圧力に起因する増改築や敷地分割といった居住の論理が少なからず作用しているはずだからである。12世紀以降、インド全体に広がったイスラーム文化の影響も見過ごすことができない。

したがって、ヒンドゥー教のコスモロジーが都市空間構成へ及ぼした影響とその特質を考察するにあたって、都市／コスモロジーの対応関係を大前提として都市を読むのではなく、それをあくまで都市を規定する要因の一つとして位置づけた上で、都市スケールだけではなく、近隣単位や街区構成、伝統的住居の空間構成など、よりミクロなスケールにおける都市空間、すなわち居住空間の構成とその形成・変容過程の実態把握を行う必要があると考える。このような生活者の視点から、居住空間構成とその変容を明らかにすることによって初めて、コスモロジーやそれに基づく理念的モデルが都市空間にどのような影響を及ぼしているのか、あるいは及ぼしていないのか、また都市が人々の生活の場として生きられる中でどのように変容しているのかという点について、より精確な評価を行うことが可能になると考えるからである。

具体的な調査分析にあたっては、主として次の四点の把握を課題とする。①都市の基本的居住単位の空間構成、③都市住居の空間構成、④街区空間の構成と変容。

0-3　既往研究と本研究の位置付け

本論文の対象とする二都市は、インド有史以来二千年にわたる時代を持続してきた「聖都」である。そこで本節では、まず「インド都市史研究」の展開過程を概括した上で、近年確立しつつある「ヒンドゥー都市研究」の既往研究を整理しながら、本研究の位置づけを行いたい。対象とする二都市に関する社会学・地理学などの他分野における既往の関連研究については、関連する各章において触れている。

0-3-1　インド都市史研究

従来インドの歴史区分は、①古代＝ヒンドゥー時代（アーリヤ人の来住から13世紀初頭のムスリム政権成立まで）、②中世＝イスラーム時代（13世紀初頭からイギリスのインド支配が開始される18世紀半ばまで）、③近代＝イギリス植民地時代、④現代＝独立以後というように、四時代に区分されることが多かった。しかし、これらは支配者の奉ずる宗教や支配層の交代など、政治的・宗教的な理由からなされたものであり、都市の展開過程とは必ずしも対応しない。ここでは新規の都市建設が主である③・④には触れずにおき、小倉泰による「中世都市」・「古代都市」の区分の指摘に拠りながら、②を三つの時代に細分し、その前史としてのインダス文明の時代を加えて、大きく以下の五つの段階に分けて、インド都市史の展開および各時代の都市に関する既往研究を概括したい（北インドと南インドでは歴史の展開にある程度差があるため、括弧に付した年代はおおよその目安である）。

(1) インダス文明の諸都市（～前18世紀頃）

インドの伝統的建築が学術的に研究されるようになったのは、1784年にインド各地に散在する遺跡の評価・補修を目的とした「ベンガル・アジア協会 The Royal Asiatic Society of Bengal」の設立に始まる。1808年にはタージ・マハル修理のための組織が発足。1861年には、「インド考古局 Archaeological Survey of India」が設立され、現在にいたるまでインド亜大陸全土の遺跡を対象とした考古学的調査・記録活動を継続している。19世紀半ば以降の鉄道の普及により、インド各地の遺跡が次々に発見された。それらの遺跡の様式分類と体系化を行ったのが、ファーガソン Ferguson（1876）らであるが、この時期に研究対象となったのは、もっぱら寺院やその遺跡などモニュメンタルな単体建築であり、主要な関心は、それらの建築様式分類、歴史的芸術的価値評価、建築の発生・発達などの問題であった[9)]。

都市に関する研究が飛躍的に増大する契機となったのが、20世紀初頭のインダス文明の「発見」である。1920～30年代にモエンジョ・ダーロ Mohenjo daro やハラッパー Harappa の都市遺跡が相次いで発掘された。これらの成果は、第三代インド考古局長 J. マーシャル Marshall（1931）により調査報告書として出版され、インダス文明の存在は揺るぎないものとなった。その後も、1950年代にロータル Lohtal が、60年代にはカーリーバンガン Kalibangan、ドーラーヴィラー Dholavira などの都市遺跡が次々と発見され、現在も発掘が続いている。考古学的発掘に基づきながら、これらの都市をインド文化の源流と位置づけようとする膨大な研究がインド国内外で積み重ねられてきた。これまでに、城塞と市街地を明快に区分する二重構造、寸法体系を有したグリッド状街路、中庭式の都市型住居の存在、大規模な水利システムの存在などが明らかにされている。インダス文明は前2000年頃に最盛期をむかえた後、徐々に衰退し始め、前1800年頃には解体し、その後は村落文化へと退行していったとされる。近年の考古学・言語学の研究成果により、インダス文字がドラヴィダ系言語であることはほぼ確定し、現在ドラヴィダ民族が中心的に居住する南インドの古代文化との関係が推論されているが、両者を直接結びつける証拠は今のところ見つかっていない。

(2) 古代都市（前６世紀〜後６世紀頃）

インダス文明に続いて歴史上にあらわれる都市は、前6〜5世紀頃に北インド・ガンジス川中流域で栄えた都市国家群であり、インドの都市史には、この間1000年以上の空白期間がある。いわゆる十六大国と呼ばれるこれらの都市国家の首都は、マガダ国のラージャグリハ（現・ラージギル Rajgir）、パータリプトラ Patriputra（後にマウリヤ朝の首都。現・パトナー Patna）コーサラ国のシュラーヴァスティー Sravasti、ヴァンサ Vamsa 国のカウシャーンビー Kausambi、アヴァンティ Avanti 国のウッジャイン Ujjain、そしてカーシー国のヴァーラーナシーなどである。南インドでも遅くとも前1世紀頃には沿岸や川沿いに都市が形成されていたことが、文献史料や貨幣・青銅器等の発掘調査によって判明しており、東南アジアや中国、ローマ世界との交易によって栄えていたことが知られている。代表的な都市はパーンディヤ朝の首都マドゥライ、チェーラ朝の首都ヴァンジ（現在のカルール Karur）、4〜5世紀頃の仏教の中心地であったというコンジェーヴェラム（現在のカーンチープラム）、チョーラ朝の港市カーヴェーリパッティナム Kaveripattinam などである[5)]。

この時期には、インド内外の交易が栄え、それによって力を蓄えた都市の商工業者を基盤として、インド全土にわたり様々な都市が興隆した。小倉（1992）は、仏教やジャイナ教の隆盛と時期を同じくするこれらの都市を、インダス文明の諸都市や11世紀頃以降に栄えた都市群（中世都市）と区別して、インドにおける第一期の都市＝「古代都市」とする[6)]。いくつかの都市については考古学的発掘がなされており、城壁や土塁の存在、王宮の位置、都市住居の痕跡などが確認されている[7)]。しかし部分的な発掘が多く、また現在でも発掘がほとんど住んでいないため、都市の全体像についてはいまだ不明な点が多い。そのためこれら「古代都市」の研究は、古代の仏典やサンスクリット文献を用いた文献研究からのアプローチが中心である[8)]。主に北インドの諸都市を扱う Basham（1954）や Auboyer（1965）、南インドの諸都市を論じる Ayyar（1916）、パータリプトラの佐藤（1971）、ウッジャインの奈良（1971）などがある。これらの研究は、ある程度当時の都市の姿や人々の生活を捉えることに成功しているが、資料的な制約もあり、具体的な都市構成を描写するまでは至っていない。同時期の比較的良好な状態で残った都市遺跡としては、パキスタンのタキシラにあるシルカップ Sirkap が知られている。南北を走る幹線道路とそれに直行する東西の小路という街路構造や格子状に区画された居住区が確認されており、ギリシャ文化の影響が指摘されている[11)]。

(3) 前中世都市（6世紀〜11世紀頃）

「古代都市」は、グプタ朝期（320〜550年頃）を境に急速に衰え、その後は発掘調査の遅れや文献の偏りもあり、北インドでは13世紀に始まるムスリム支配期、南インドでは11世紀のチョーラ朝の勃興にいたるまで、都市の物的構成をたどることはできない[12)]。インド都市史上の第二の空白期間である。

しかし歴史的には、グプタ朝時代に開けた新しい交通路により地方都市が発達し、北インドではカーニャクブジャ Kanyakubja（現・カナウジ Kanauj）が歴代王朝の首都パータリプトラに取って代わり、ナーランダー Nalanda は仏教の研究教育中心、ターネーサル Thanesar は戦略上の要衝であったことが知られている。巡礼の聖地として、ハルドワールやヴァーラーナシー、マトゥラーが浮上し、交易拠

点としても発達した。タークル Thakur, R.（1994, 2002）は、8～12世紀の都市を交易都市・首都・行政都市・宗教都市・教育都市の五つのカテゴリーに分類し、その分布を示している。この時期の都市研究は、主に都市地理学分野からのマクロレベルでの関心（都市化の地域差や都市間・都市／村落間の経済的・政治的相互作用など）が中心であり[13]、個々の都市の具体的な姿についてはほとんど明らかになっていない。

(4) 中世都市（12世紀～15世紀頃）

北インドではムスリム勢力の侵入を契機として、南インドでは海外貿易の高まりを背景として、この時代にはインド各地に数多くの都市が興隆する。小倉（1992）は、これらをインドにおける第二期の都市＝「中世都市」と位置づけている。

北インドでは、11世紀頃からアフガンからのムスリム勢力のインド侵攻が始まり、既存の都市の多くが破壊された一方で、多くの新都市が建設された。13世紀初頭にはムスリム政権である奴隷王朝がデリーに樹立され、以降、デリー・サルタナットと呼ばれるムスリム諸王朝の北インド支配が展開される。デリー一帯にはシーリー、トゥグルカーバード、フィローザーバードなどの歴代王朝の都城が築かれた。ラクナウ Lucknow、アフマダーバード Ahmadabad、ジャウンプル Jaunpur など、ムスリム勢力の拠点となった都市が歴史上に登場する。中小の地方都市にも大きな市場が設けられ、国内外の交易センターとなり商工業が発達した。ラジャスターン地方では、12世紀にジャイサルメール Jaisalmer がオアシス都市として形成される。15世紀以降にはジョードプル Jodhpur やウダイプル Udaipur などのヒンドゥー系の王都が登場する。

南インドでは、11世紀頃からチョーラ朝支配のもと海外貿易が急激に拡大する。経済力を蓄えた商人や支配者による大規模なヒンドゥー寺院の建立が活発化し、大規模な寺院建築が都市景観の中心を占める、いわゆる「寺院都市」の一群が生まれる。チョーラ朝の首都タンジャーヴール Thanjavur、ガンガイコーンダチョーラプラム Gangaikondacolapuram、カーカティーヤ朝のワランガル Warangal などが初期のものである。14世紀になるとヴィジャヤナガル Vijayanagar 王国がデカン南部に興り、その都ヴィジャヤナガルは当時のインドで最大の都市であった。ヴィジャヤナガル王国のもとヒンドゥー文化が繁栄し、シュリーランガムやチダンバラム Chidambaram、スチンドラム Schindram、ティルバンナーマライ Tirubannamalai などの寺院都市が形成されていく。

この時期に形成された都市のいくつかは現代まで存続しているのであるが、後代の改変が重層していることもあり、当時の都市成を復元するには大きな困難がある。小倉（1992）などにより中世都市研究の重要性が指摘されつつも、諸研究の焦点は単体の建造物や遺跡が中心である。

一方、南インドの諸都市については、比較的良好な状態で残った都市遺跡や寺院都市の存在もあって、都市のレイアウトを王権とコスモロジーの関係を視野に入れて解読しようとする研究が進みつつある。次項で詳述する「ヒンドゥー都市研究」の一潮流をなすものであり、本研究とも関連が深い。フリッツ J. Fritz ら（1984, 1991）は、計画的に建造されたヴィジャヤナガルの都市レイアウトを明らかにしながら、諸施設の配置にヒンドゥーのコスモロジーとの関係を見出している。寺院都市に関する研究はミッチ

ェル G. Michell (1993)、小倉 (1991) が代表的なものである。前者は中核となる寺院への関心が中心であるが、後者は当時の南インドの政治状況を考慮しつつ、『マヤマタ』等の文献の記述と対応させながら都市の構成理念を考察する興味深いものである。

(5) 近世都市 (ムガル帝国時代：16世紀～18世紀)

16世紀にはムガル帝国が成立する。アクバル以降その領土は拡大し、要衝地に城塞や都城が建設された。帝国治下の主要都市にはコートワール (市長) が置かれ、都市の治安維持、行政管理システムが整えられた。幹線道路や駅舎が整備され、交易、商工業の発達にともない、都市が成長した。この時代を代表するのは、歴代ムガル皇帝によって首都として建設された、ラーホール Lahore、アーグラー Agra、シャージャハーナーバード、ファテープル・シークリー Fatehpur Sikri などの都市である。これらの都市については、都市のモニュメンタルな要素に焦点をあてその計画理念を考察する飯塚 (1971) をはじめとして、文献史料を基に都市の形成過程を描く Blake (2002) や Chenoy (1998)、街区空間の構成に着目した山根 (1998) など、近年に多くの研究が発表されている。本研究で対象とする二都市も、この時期ムガル帝国の支配下に入っており、これらの既往研究は都市におけるイスラーム的要素の影響を計る際の大きな前提となる。

18世紀初頭には、ムガル帝国の間接統治下で独自のヒンドゥー文化を育んだラージャスターン地方で、インドでも希有の計画都市ジャイプルが建設される。ジャイプルは整然と計画されたグリッドプランの都市構造を有し、その都市レイアウトについては、「シルパ・シャーストラ」に示された都市類型「プラスタラ」との関連で活発な議論がなされてきた。

現在見られるインドの伝統的都市の旧市街は、多くがこの時代に形作られたものである。そのため、この時期の都市については他に、歴史的都市景観の保存、地域固有の住居形式の把握、居住環境の改善といった問題意識のもと、伝統的住居や生活空間に焦点を当てた歴史的市街地の構成に関するデザイン・サーヴェイ的研究が、現地の大学の都市計画・建築計画分野において蓄積されている。主に北・西インドの都市が対象であるが、アフマダーバードやデリーの大学などにおいて、継続的な調査が行われている。また、「インド芸術・文化遺産ナショナルトラスト[16)]」は、歴史的都市景観の保全を目的として、ラクナウやデリーの他、中小の地方都市の歴史的市街地の調査を進めている。

(6) 本研究の位置づけ

以上、大きく五段階に分けてインド都市史の展開を概括したが、都市の空間的構成の把握という視点から、これらの諸研究のアプローチを整理すると、以下の三種の流れがある。

①インダス文明の諸都市や古代・中世の都市遺跡などを対象とした、考古学的発掘に基づく研究、②考古学的知見が得られない古代～中世の都市、あるいは現代まで存続しているため過去の痕跡をたどれない都市について、歴史的文献 (仏典や文学作品等) を用いて往時の都市の姿を描こうとする研究、③現代ある歴史的都市空間 (中世～近世) を対象に、環境改善・景観保存を主たる視点としながら、フィールドサーヴェイにより歴史的都市空間の実態を把握しようとする研究。

対象二都市については、考古学的知見はごくわずかであり、都市の歴史的形成過程については基本

的に②の成果がベースとなる。本論文はインド都市史研究という枠組みの中では、③と問題意識・アプローチを共有する。しかし、対象二都市に関するこの種の研究蓄積はほとんど無いに等しい。これは、「聖地」「寺院都市」という特徴がことさら強調され、単体の寺院建築やコスモロジーに注目が集まり、都市を生きられた居住空間として捉える視点が欠けていたためであろう。

本論文は、これまであまり注目されてこなかった「聖都」の都市空間構成に着目し、とりわけ居住の形態について、20世紀初頭の地図資料と臨地調査に基づきながら具体的に明らかにする点に、一つの意義を有している。

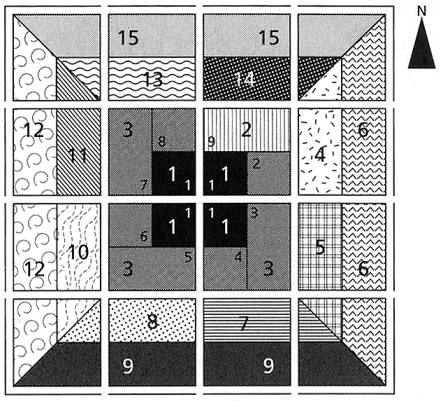
0-3-2 「ヒンドゥー都市」研究

先述したように、インドの伝統的都市の空間構成を、ヒンドゥー社会の諸制度・儀礼あるいはコスモロジーとの連関において把握しようとする、「ヒンドゥー都市」論ともいうべき研究が近年盛んになっている。

(1) 古代インドの都市計画理念に関する研究

このような「ヒンドゥー都市」への注目は、まず『アルタシャーストラ』や「シルパ・シャーストラ」などのサンスクリット文献に記された古代インドの都市計画理念への関心から始まった。

『アルタシャーストラ[17)]』は、「実利論」とも訳される古代インドの帝王学的文献であり、その一部が理想的王都のレイアウトに関する記述にあてられている。「シルパ・シャーストラ」とは古代インドの造形芸術（シルパ Silpa）に関する論書（シャーストラ Sastra）の総称であり、諸神の像容・絵画・彫刻なども扱うが、中心となるのは建築論（ヴァーストゥ・シャーストラ Vastu-Sastra）である。類書は約300に及ぶが[18)]、最も体系的に整理されているのが『マーナサーラ Manasara[19)]』と『マヤマタ Mayamata[20)]』である。寺院・住居・王宮の設計方法や寸法体系・建築儀礼などとともに、都市や村落の計画理念が類型ともに示されており、そこには、マンダラに基づく街路形態や寺院の配置、カースト・職業毎の居住区分など、ヒンドゥー教のコスモロジーや浄・不浄観念が色濃く反映されている。



核　心　1 神殿（寺院）群
内囲帯　2 王宮　2・3 最良の住宅地
中囲帯　4 北微東　5 南微東　7 東微南　8 西微南
10 南微西　11 北微西　13 西微北　14 東微北
外囲帯　6 北微東と南微東の彼方　9 東微南と西微南の彼方
12 南微西と北微西の彼方　15 西微北と東微北の彼方

図 0-6
『アルタシャーストラ』に基づく古代インドの理想的王都の復元図
応地利明による復元案。出典：布野（2003）

これらのサンスクリット文献に基づく古代インドの都市計画理念に関する議論は、20世紀初頭に始まる。飯塚（1981）は、この動きの背景にニューデリー建設計画があったことを指摘する。1911年のニューデリー遷都計画交付から、1931年の開都という時代的背景の中、インド固有の都市像への関心が高まり、多くの研究が発表されたのである[21)]。イギリスの生物学者・社会学者であり都市地域計画の先駆者でもあるパトリック・ゲデス Patrick Geddes が、インドで精力的な活動を展開し[22)]、インドにおいて伝統的都市や集落への関心が芽生え始めた時期でもある。

『アルタシャーストラ』、『マーナサーラ』については、内容に関する議論も含め、布野（2006）が包括的に論じている。それによりながら要点を整理すると以下のようである[23)]。

『アルタシャーストラ』の存在は古来より知られていたが、一般にその内容が参照可能となったのは、20世紀初頭である。1904年に椰子の葉に書かれた完全原稿が発見され、それに基づくサンスクリット原文（1909年）と英訳（1915年）がシャマシャストリ Shamasastry によって出版された。その後様々な注釈書や翻訳が出されるが、それらを集大成する形で英訳を行ったのがカングレー Kangle（1965）である。近年ではランガラージャン Rangarajan（1992）の新編纂書、日本語訳では上村（1984）がある。『アルタシャーストラ』の成立年代には諸説があるが、一般には 3, 4 世紀頃とされる。そこに述べられた

古代インドの理想的王都の形態復元の試案をはじめに提示したのは、カーク Kirk（1978）でありベグデ Begde（1978）であった。その後、ランガラージャン（1992）も復元案を示す。これらの検討を包括しながら極めて説得力を持った復元案を提示したのが応地（1994）である。これらの議論を通じて明らかになった古代インドの理想的王都の構成は、都市の中心に位置する寺院を核として、それを取り巻く三層の同心方格囲帯が各々明瞭な機能分化を示しつつ、階層性をもって配列される、というものである（図 0-6）。方位に関しては、東と北が聖なる方位として重要視されており、王宮やバラモンの居住地の位置、神殿の向きなどは、すべて東または北と定められている（その一方で西や南の方位は、商人や奴隷の居住地、家畜小屋などにあてられている）点も注目される[24)]。

『マーナサーラ』は村落・都市・要塞についてそれぞれ八つの類型を示すが、都市・要塞についての記述はきわめて簡略である。計画理念が詳しく述べられ、議論の中心となっているのは村落類型である。しかし村落といっても、その規模は最大で 4km 四方におよび、都市といっても差し支えがない規模であるため、一般に「『マーナサーラ』に記された都市計画理念」として言及されるのは、村落類型に関する記述である（本論文においても特記なき場合は同様の記述とする）。

『マーナサーラ』に示された計画理念を扱う最初期の文献は、ラーズ Raz（1834）である。ヒンドゥー寺院の構成の紹介が中心であり、都市に関する記述は簡略であるが、『マーナサーラ』に基づく村落類型の復元図を提示している。『マーナサーラ』の存在は、1920～30年代にかけてアチャルヤ Acharya による英訳がイギリスで刊行されたことにより、広く知られることになる。アチャルヤ（1927-34）を始めとして、ハヴェル Havell（1915）、ベグデ（1978）も都市・村落類型の復元図を提示している。布野（2006）はこれらを包括した上で、『マーナサーラ』の記述する村落形態の特性を整理している。『マーナサーラ』に示された村落類型に共通するのは、正方形（長方形、円形、半円形の場合もある）を幾何学的に分割

したマンダラ状の構成を基本として、諸施設や居住地の配置を決定していくというものである。形態には類型毎に幅はあるが、基本理念は、『アルタシャーストラ』の記述と共通するといってよい。

南インドの寺院都市をはじめ、インドの諸都市について言及される際に、これらの文献に示された類型との類似が指摘されることはしばしばあるが、その計画理念がどのように実際の都市に適用されてきたかを、具体的な都市に即して論じる研究はほとんどない。理由の一つは、文献に示されるような整然とした幾何学的形態をもった都市がそもそも少ないことである。理念的モデルが都市に明快に投影されることは、むしろ稀であり、ジャイプル[25]やシュリーランガム[26]、本論文で扱うヴァーラーナシーやマドゥライは、その数少ない事例である。

(2) 都市レイアウトの象徴性に関する研究

一方で、こうした古代サンスクリット文献の大伝統によるのではなく、考古学や建築史上の成果を参照しながら、個々の都市に密接な関係をもった神話や伝説、儀礼などを記した中世の地方的文献資料から得られた知見を援用して、都市のレイアウトの意味する象徴性を読み解こうとする研究が、1970年代ころから始まっている。マーハートミヤ mahatmya と呼ばれるこうした文献は、近年サンスクリット研究の中でも注目され始め[27]、インド各地の聖地の研究にも応用されつつある[28]。

サンスクリット学者・カルケ Kulke (1980) による、中世オリッサ王国の首都レイアウトの発展を、王権と宗教的権威の結びつきという視点から分析した研究や、宗教地理学者 R.P.B. シン Singh (1987, 1993, 2003) によるヴァーラーナシーの巡礼路の構造の解明、ピーパー (1996) の南インドの寺院都市の巡行祭礼への注目、フラー Fuller (1993) やレイノルズ Raynolds (1987) のマドゥライに関する考察などがあげられる。上述したフリッツ J. Fritz らによるヴィジャヤナガルの都市遺跡に関する研究も、この流れに位置づけることができる。

(3) 本研究の位置づけ

本論文は、このような「ヒンドゥー都市」研究の流れの中に位置するものであり、都市の理念的モデルに関する議論は、とりわけ後者の研究成果に基づいたものである。しかし先述したように、これらの研究の焦点は、主として理念的モデルの理解・解説にあり、具体的な都市空間と関連づけた検討はほとんど行われていない。本論文はこれらの研究蓄積を、現代の都市空間における臨地調査に基づきながら、居住空間までを視野に入れた具体的な都市空間の構成・形成・変容過程と関連づけて考察する点に、大きな手法的特色がある。

0-4　研究の方法と論文の構成

0-4-1　研究の方法と調査概要

(1) 研究の方法

本論文は、ヴァーラーナシーおよびマドゥライの旧市街を対象として、①都市構造と理念的モデル

の関係性を明らかにした上で、②居住空間の構成と変容を把握することによって、インドの伝統的都市の空間構成におけるヒンドゥー教のコスモロジーの影響とその特質を明らかにすることを目的としている。

① 都市構造と理念的モデルの関係性については、主として既往研究に基づきながら、都市構造の歴史的形成過程と理念的モデルの構造の把握を行った上で、両者の相互関係について考察を行う。続いて、臨地調査で得られたデータを基に、理念的モデルを表象するとされる諸要素と都市空間の関係を考察する。具体的には、ヴァーラーナシーにおいては主に巡礼路の経路と寺院・祠の分布・実態、マドゥライにおいては主に同心方形街路の形態とそこで行われる巡行祭礼、および宗教施設の配置構成に注目する。

② 居住空間の構成と変容については、文献・資料によってデータを補いながらも、基本的に臨地調査によって得られた知見に基づいて考察を行う。まず、都市の基本的な居住単位として、ヴァーラーナシーにおける近隣単位・モハッラ、マドゥライにおけるカースト別居住地に注目し、その空間的な配置構成を検討する。続いて、街区空間の構成単位である都市住居の空間構成を、平面実測調査によりながら把握した上で、19世紀および20世紀初頭の地図資料と比較により、街区空間の構成およびその変容を具体的に明らかにし、それぞれの相互関係を考察する。

(2) 調査概要

本論文は、以下の六次(通算七ヶ月)にわたる継続的な臨地調査を基にしている。

◎ 第一次:1999年8月〜10月、ヴァーラーナシー(調査協力者:モハン・パント、布野修司、吉村理):文献・地図資料収集、アンタルグリハ地区の現況把握調査

◎ 第二次:2000年10月〜11月、ヴァーラーナシー(調査協力者:橋本慎吾):文献・地図資料収集、アンタルグリハ地区のモハッラ調査、巡礼路および寺院・祠の実態調査、カリカ・ガリー地区の住居平面実測およびヒアリング調査

◎ 第三次:2002年7月〜8月、マドゥライ(調査協力者:大辻絢子、丹羽哲矢、布野修司):文献・地図資料収集、マドゥライ旧市街の現況把握調査①、アヴァニ・ムーラ祭の記録調査

◎ 第四次:2003年10月〜11月、マドゥライ(調査協力者:大辻絢子、廣富純、村上和):文献・地図資料収集、マドゥライ旧市街の現況把握調査②、寺院管理者へのヒアリング調査、カースト集団の住み分け調査、ブラフマン地区、チェッティヤー地区、ヤーダヴァ地区の住居平面実測およびヒアリング調査

◎ 第五次:2007年6月、ヴァーラーナシー(調査協力者:柳沢朋子):ハウズ・カトラ地区の住居平面実測およびヒアリング調査

◎ 第六次:2007年8月〜9月、ヴァーラーナシー、マドゥライ(調査協力者:中濱春洋、岡村知明):マドゥライ旧市街の変容調査、ハウズ・カトラ地区の住居平面実測およびヒアリング調査、ガルバシー・トーラ地区の住居平面実測およびヒアリング調査

臨地調査においてベースとしたのは、20世紀初頭のイギリス植民地時代に作製された、以下の二点

の地図である。これらを元にした予備調査を経て調査地区を選定し、現況と照合して現代版を作成した上で、各種の調査を実施した。

◎ "Benares City : season 1928-1929"、1928～1929年、縮尺 1/1000、102×78 cm、全 17 葉中 16 葉：ヴァーラーナシー旧市街のほぼ全域をカバーしており、建築物の外形、街路名称、モハッラ名称、寺院・祠・モスク・井戸・ポンプ・街灯などの諸施設がプロットされている。ヴァーラーナシー・ナガル・ニーガム Varanasi Nagar Nigam による複写版を使用。空間研究所（当時）の弘中誠二氏所有のものから複製をとらせていただいた。

◎ "Madura District, Madura Town: Revenue Map"、1904～1906年（1907年出版）、縮尺 1/792および 1/1584、42×30 cm、全 178葉：マドゥライ旧市街を網羅する地籍図であり、敷地境界線、地番、建築物の外形、街路名称、寺院・公共施設等の諸施設が記載されている。マドゥライ・コーポレーション Madurai Corporation より入手した。

都市の経年変化をたどる一次資料として、大英図書館 British Library 所蔵の 18～20世紀初頭の都市地図四点を必要に応じて使用している。

◎ "The City of Bunarus: Surveyed by James Prisep"、London: C. Hullmandel、1822年、縮尺 1/8047、45×74 cm、全 1 葉（大英図書館・資料番号：53345(6)）

◎ "Town Guide Map of Benares City: Sheet No.2"、Calcutta、1918-19年、縮尺 1/5280、42×80 cm（大英図書館・資料番号：IOR/X/9308/2）

◎ "Map of the Madura Town and Municipality"、Madras: Central Survey Office、1886年、縮尺 1/3960、全 6葉中 1 葉（大英図書館・資料番号：004884580）

◎ "A plan of Madura: drawn by William Jenings, in 1755"、Madura: Madras Presidency (Town)、1755年、縮尺 1/4320、51×30 cm、全 1 葉（大英図書館・資料番号：Maps K.Top.115.88）

0-4-2　論文の構成

本論文は、序章と結章に加え、以下の四章から構成される。

第 1 章では、ヴァーラーナシーにおける都市構造の形成と巡礼路に表象される理念的モデルの関係について考察する。まず、主として既往研究をもとに都市構造の歴史的形成過程と理念的モデルの構造を把握した上で、巡礼路群の成立とその構成に関する考察を行い、都市構造の形成過程と理念的モデルの関係を明らかにする。また、同心円を描く巡礼路群のうち最奥のアンタルグリハ巡礼路を対象として、巡礼路の経路・機能および寺院・祠の分布・実態調査を通して、これらの要素の空間特性および周辺にあたえた影響について考察する。

第 2 章では、アンタルグリハ巡礼路の内側の領域を対象に、ヴァーラーナシーにおける居住空間の構成と変容に関して考察する。まず北インド都市に共通してみられる伝統的近隣単位であるモハッラの形成パターンを考察した上で、施設分布や境界形式、規模と形状に関する現地調査を通して、ヴァーラーナシーにおけるモハッラの基本的空間構成を明らかにする。続いて、上記の作業により明らか

となったモハッラの特徴を典型的に表す地区を対象として、実測調査に基づく住居平面の類型化をふまえた上で、より微視的な視点から街区構成を検討するとともに、19世紀および20世紀初頭の地図との比較を通じて街区空間の変容を具体的に明らかにしていきたい。

第3章では、南インドのマドゥライにおける都市構造の形成と理念的モデルの関係について、主に都市で催される巡行祭礼と都市施設の配置を視点とした考察を行う。まず、南インドにおける「寺院都市」の展開とその背景をふまえた上で、諸文献をもとに都市構造の歴史的形成過程をあとづけるとともに、現在見られる都市形態と比較しながら、都市の建設・再編にあたって用いられた同心方格囲帯状の理念的モデルを推定する。また、その構造を再生･強化する都市祭礼の機能について論じる。続いて、王宮、宗教施設分布をもとに、都市空間における寺院・祠の役割、宗教別の居住地配置について考察を行う。

第4章では、マドゥライにおける居住空間の構成と変容に関して考察する。店舗分布・街路名称・コミュニティ施設・寺院所有者に関する調査・分析から、カースト集団の住み分けの現況を明らかにするとともに、現在の都市が形作られた17世紀初頭の居住地配置を推定し、都市の理念的モデルと関連づけて考察を行う。続いて、この作業を通じて確認された主要三カーストの集住する地区を調査対象として、支配的な住民カーストの差異が街区と住居にどのように反映されているかという視点から、住居の平面構成の分析・類型化をふまえて、各地区の街区構成を検討する。また20世紀初頭の地図資料との比較により街区構成の経年変化について考察を行う。

結章では、結論として、①都市構造と理念的モデルの関係、②居住空間の構成と変容、という観点から各章で得られた知見をまとめた上で、対象とした二都市における相違点と共通性を考慮しながら考察を行う。

序章　注釈

1）インドの建築界の重鎮、バルクリシュナ・ドーシ Balkrishna Doshi は、インドールでのハウジング・プロジェクトにおいてアフマダーバード旧市街の伝統的居住区の空間構成に関する研究を参照したこと、また他地域における同様の研究の必要性を述べている（Doshi: 2002, p.15）。

2）エリアーデ： 1969, p.13。

3）インド全土には数多くの聖地が存在するが、これらのうちいくつかの重要な聖地が組み合わされて、「七聖都」、「三祖霊供養所」、「四大神領」といった聖地グループが形成されており、またそれらを一筆書きの円環状に結ぶ巡礼路が設定されている（Bhardwaj: 1973）。

4）仏教経典に記された、ブッダ時代の古代インド都市国家の総称。国名は経典によって若干の相違があるが、一般には以下の 16国とされ、ガンジス川中流域の諸国が大部分を占める。アンガ Anga、マガダ Magadha、カーシー Kashi、コーサラ Kosala、ヴァッジ Vajji、マッラ Malla、チェーティ Cheti、ヴァンサ Vamsa、クル Kuru、パンチャーラ Pancala、マッチャ Maccha、スーラセーナ Surasena、アッサカ Assaka、アヴァンティ Avanti、ガンダーラ Gandhara、カンボージャ Kamboja。

5）Ayyar（1916, pp.24-97）にこれらの四都市に関するプラーナ文献の記述がまとめられている。

6）この時代におけるインド都市の問題については、Sharma（1987）が論じている。

7）上杉（1999: p.16-17）によれば、しかし木造建物から焼レンガ建物への転換、中庭とそれを囲む部屋列からなる建物形式の確立、木製瓦葺き屋根の存在などが断片的にわかっているという。また丸山（1971, pp.82-91）は、この時期の北インド諸都市の発掘状況について整理している。

8）小倉 : 1992, p.184。

9）飯塚 1981, p.9。

10）Auboyer: 1965。

11）上杉 : 1998, pp.25-50、Marshall（1951）に 1/1000の実測図がある。

12）布野：2006, p.17。

13）Thakur, B: 1993

14）Flitz, J.; Michell, G: 1984,1991。

15）Chenoy: 1998。

16）"The Indian National Trust for Art and Cultural Heritage"、通称 INTACH。1984 年に設立。ニューデリーの本部のほか、全国に百六十の支部を持ち、多くのボランティアによって運営される。自然景勝地、歴史的建築、景観・住居、芸術作品、工芸技術などの保存や継承に関わる調査・教育・出版などの諸事業を行う組織。

17）Rangarajan: 1992。

18）Acharya: 1934。

19）Acharya: 1934。マーナ mana は「寸法の」、サーラ sara は「基準」を意味する（著者の名前という説もある）。成立年代は諸説あるがアチャルヤは 6〜7世紀に南インドで書かれたものとする。内容は全 70章からなる。創造神ブラーフマに捧げる祈りにはじまり（1章）、建築家の資格と寸法体系（2章）、建築の分類（3章）、敷地の選定（4章）、土壌検査（5章）、方位棒の建立（6章）、敷地計画（7章）、供犠供物（8章）と続く。9、10章は村落と都市・城塞のレイアウト、11〜17章は建築各部、18〜30章までは 1〜12階建ての建築が順次扱われる。31章は宮廷、以下建築類型別の記述が 42章まで続く。43章は車についてで、さらに家具、神像の寸法にまで記述は及んでいる。

20）Dagenz: 1985。『マーナサーラ』と並ぶ代表的なヴァーストゥ・シャーストラ。『マハーバーラタ』にも登場する建築家マヤ Maya が記したと伝えられる。チョーラ Chola 朝中・後期に成立し、他の類似文献に大きな影響を与えたとされる。全 36章からなり、構成は『マーナサーラ』とほぼ同じであるが、村落・都市類型に関する記述はより明快かつ体系的である。

21）飯塚キヨ : 1981, p.22。

22）Geddes, P., "Reports on Re-planning of Six Towns in Bombey Presidency", Bombay, 1915、"Town Planning in Balrampur Lucknow", 1917など。

23）布野 : 2006, pp.27-99。

24）応地 : 1993。

25）布野ほか : 1997, 1998, 2001

26）小倉 : 1991。

27) Kulke: 1970, pp.30-40。

28) Bakker: 1990。

第 1 章

ヴァーラーナシーの都市構造の形成と理念的モデル

1-1　はじめに

本章では、ヴァーラーナシー[1)]の旧市街域における都市構造の形成と、巡礼路に表象される理念的モデルおよび寺院・祠の関係について考察を行う。本章における主要な論点は、コスモロジーを表象しているとされる巡礼路および寺院・祠[2)]を、都市空間の物理的形成・変容過程における要因の一つとして評価することである。

ヴァーラーナシーはヒンドゥー教の最大の聖地としてメッカやエルサレムに例えられ、インド国内外より数多くの巡礼者を集める宗教都市であり、都市内には多数の宗教施設と体系だてられた巡礼路が存在している。このような宗教都市においては、その宗教固有の宇宙観やそれに基づく理念的モデル、巡礼や祭礼などの都市儀礼、寺院・祠といった宗教的施設の存在が、都市の形成に何らかの影響を及ぼしていることが当然考えられる。特にヒンドゥー世界では、コスモロジーや宗教的理念の具現とし

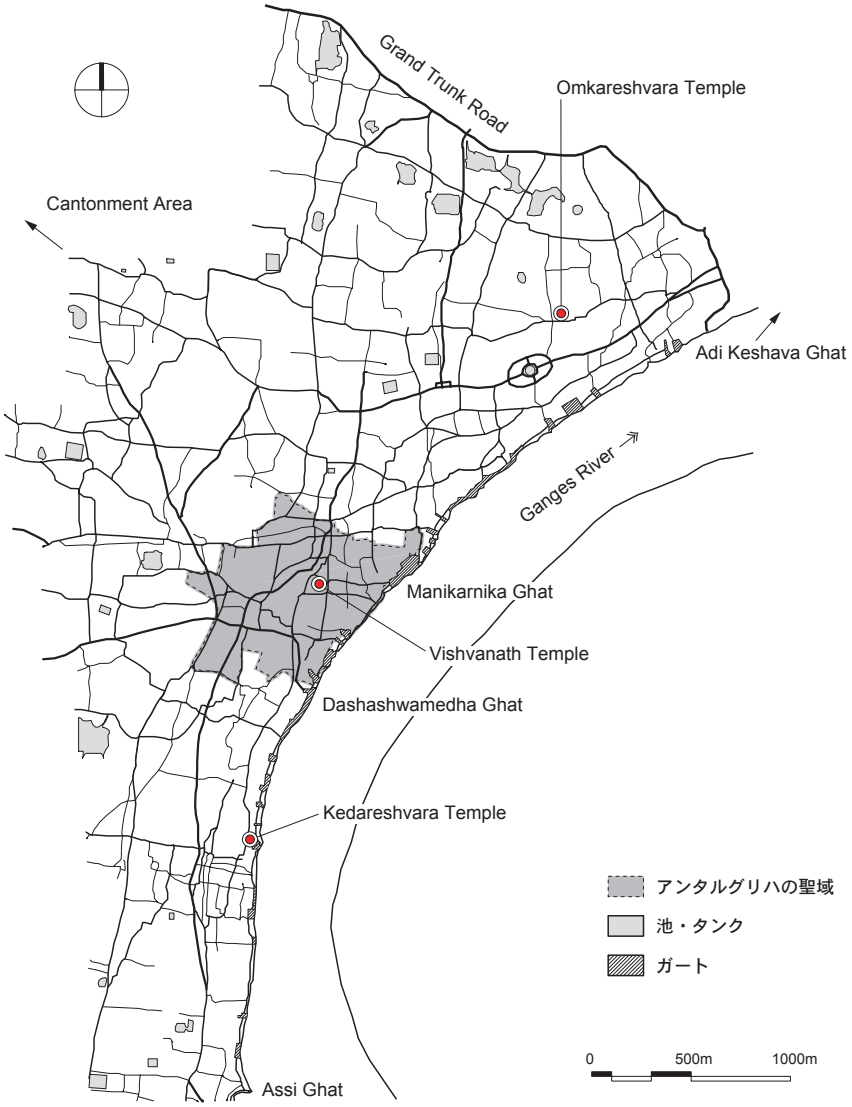


図 1-1　ヴァーラーナシ旧市街概要図
1929年の都市地図 "Benares Map"（16葉）にもとづき作成。

て都市が計画、建設される事例が多い[3)]。しかし一方で、ヴァーラーナシーは三千年の歴史をもつインド最古の都市の一つであり、今なお活発に「生きられ」ている都市である。したがって都市の形態・構成を、単純に宗教的理念の反映とみなすことはできず、同時に住民の生活に根ざした機能的な論理や他民族の移入や政治的支配状況の変化が、その空間構成には大きく作用していると考えられる。

本章ではこうした観点から、まず既往研究に基づき、ヴァーラーナシーの歴史的形成過程をふまえた上で、都市とコスモロジーとの理念的対応関係をまとめた上で、現地調査に基づき巡礼路および寺院・祠と都市空間構成との関係について考察する。ここでいう「ヴァーラーナシー旧市街」とは、一般に都市北部を流れるヴァルナ Varna 川とアッシー Assi 川に挟まれた川沿いの領域をいう。本研究では、具体的には 1929 年の都市地図において市街化されていた範囲（図 1-1）を主な対象とする。より詳細な検討は、都市の中心寺院であるヴィシュワナート寺院周辺のアンタルグリハ地区に注目して行うことになる。

ヴァーラーナシーに関する研究は少なくない。都市史、特に宗教的側面を中心にヴァーラーナシーを概括したものに、シェリング M.A.Sherring（1868）やハヴェル E.B.Havell（1905）、近年ではエック D.L.Eck（1983）による著作があり、いわゆる「聖地・ヴァーラーナシー」に関する今日の一般的認識はこれらをもとに成立しているといってよい。都市地理学の立場から都市の発生や初期の街路形態について論じたものには、R.L. シン Singh（1955, 1973, 1976）の優れた研究がある。考古学的発掘をもとにこれを跡づけているのがナレイン A.K.Narain（1976）、B.P. シン Singh（1985）等である。

ヒンドゥー教における巡礼の概念に関しては、バルドワージ S.M.Bhardwaj（1973）によるサンスクリット文献とヒアリング調査にもとづく論考がある。巡礼地の重要度の歴史的変遷や巡礼路の循環構造が指摘されている。ヴァーラーナシーにおける巡礼路のコスモロジーとの関係については多くの文献がふれているが、それらを包括的に論じているのが、R.P.B. シン Singh（1993）である。マーハートミヤ mahatmya[4)] に記載された巡礼地を現在の寺院・祠と照合・同定し、多くの巡礼路の経路を推定している。彼はヴァーラーナシーがヴィシュワナート Vishvanath 寺院[5)] を中心とした同心円構造を有し、ヒンドゥー教理念に厳密に基づいて作られた都市であるとする。しかしその考察は巡礼路の理念的構造化にとどまり、物理的な都市空間との関連や巡礼路の成立過程については及んでいない。個々の寺院に関してはヴィディヤルティ L.P. Vidyarhti（1979）がヒアリング調査をもとに所有や運営の状況を論じている。

以上のようにヴァーラーナシーの都市研究は個別の分野については検討がなされているが、それらを相互に関連づけるような論考は少ない。特に、巡礼路および寺院・祠を都市形成の要因と位置づけて考察する視点は、本研究が初めて提示するものである。

1-2　ヴァーラーナシーの都市構造の形成

1-2-1　都市形成史の概要

ヴァーラーナシーはガンジス Ganges 川中流域に位置し、古代より同地域の政治・経済・文化・宗教の中心都市として栄えてきた。一般にヴァーラーナシーの歴史は以下の三段階に分けられる[6)]。

（1）古代〜ヒンドゥー教時代（前 10 世紀〜後 12 世紀末）

前 6〜5 世紀頃、ヴァーラーナシーは十六大国[7)]の一つ、カーシー Kashi 国の首都として、ガンジス川中流域における政治・経済・文化・宗教の中心都市であった。ヴァーラーナシーという都市の名称はこの頃から使用されており、それは市街地北部を東流しガンジス川に合流するヴァルナ川と南部を東流する小河川アッシー川に挟まれた町を意味するといわれる。前 6 世紀頃には、ヴァーラーナシーの北郊のサールナート Sarnath で、ブッダによる初の説法（初転法輪）が行われ、以後周辺に仏教徒による市街地が形成された。後 1〜3 世紀、仏教が支配者により厚く保護された時代には、ヴァーラーナシーにも多くの僧院や仏塔が建設されたといわれるが、後のヒンドゥー教徒、ムスリムによる破壊のため、その痕跡はほとんど残っていない。

4 世紀以降は主にヒンドゥー教を保護する王朝が続く。ヴァーラーナシーにおけるシヴァ崇拝の優勢

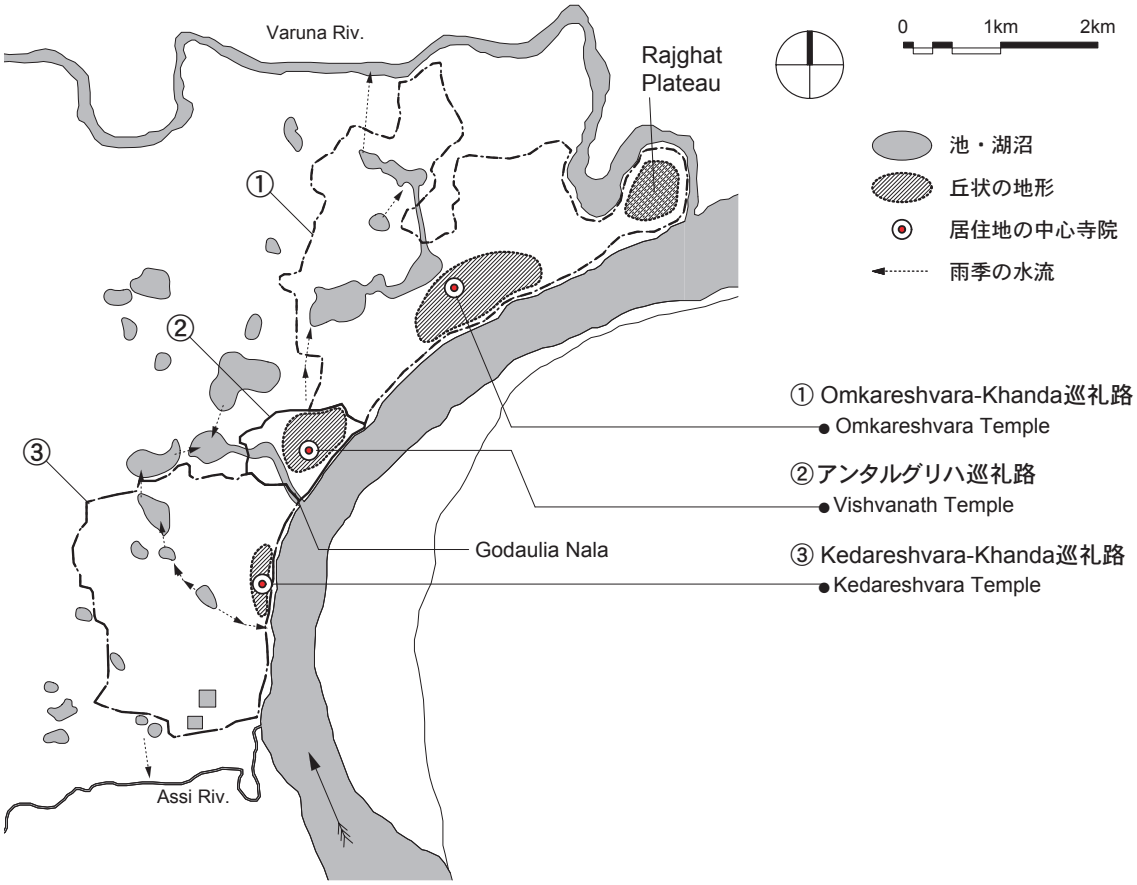


図 1-2　都市の発生と初期の展開

Singh,R.L.:1955 および Singh, R.P.B.:1993 所収の図より作成。

が決定的となった時期であり、数多くの寺院や祠が建設された。428年には最初のヴィシュワナート寺院が建設されている。この時代、都市は貿易により繁栄し居住地が大幅に拡張された。成熟した市街地を背景にオームカレシュワラ Omkareshvara、ヴィシュワナート、ケダレシュワラ Kedareshvara の寺院を中心とする三つの聖域が成立したのもこの時代である（図 1-2）。

635年には中国僧・玄奘三蔵がヴァーラーナシーを訪れ、「大唐西域記」にヒンドゥー教と仏教の共存する宗教都市、貿易で富み栄える豊かな商業都市としてのヴァーラーナシーの様子を記述している。玄奘によれば当時のヴァーラーナシーの市街は、「長さ十八、九里、広さ五、六里」であった[8)]。一里＝440m として、「長さ」を川沿い方向の広がり、「広さ」を川岸から内陸への広がりと考えると、南北がちょうどヴァルナ川とアッシー川の間におさまる、南北に細長い市街地であったことになり、現在の旧市街の範囲とほぼ重なっている。

シヴァ崇拝の興隆は、シヴァ神の聖地としてのヴァーラーナシーの全インド的重要性を高め、インド各地からの移住者による人口増加と市街地の拡大に伴い、多くの大寺院や祠、聖地が設立された。12世紀までにはそれらを結び付ける、あるいは包含する各種の聖域および巡礼路が体系的に整備され、ヴァーラーナシーは北インド世界における最も重要な聖地としての地位を確立していたとされる。都市の基本となる構造はこの時代に形成されている。

(2) イスラーム支配時代（12世紀末～ 18世紀後期）

1194年のゴール Ghor 朝の武将・アイバク Qutb-ud-din Aibak の侵入に始まり、その後 16世紀に至るまで、ムスリム勢力による侵略と破壊が度々繰り返される。ムスリムの支配者は意図的にヒンドゥー教の重要寺院や宗教的中心地を占領したため、数多くのヒンドゥー寺院が破壊され（特に 1494年の侵攻の際にはほぼ全ての寺院が破壊されたといわれる）、その跡地にモスクが建設された。多くのムスリムがヴァーラーナシーに移住し、特に旧市街北部にモスクを中心として居住した。また貧しいヒンドゥー教徒の多くがイスラムに改宗し、森林を開拓して新たな市街地を形成した。ムスリムによる占領・破壊の結果、元の住民（ヒンドゥー教徒）は主に南・西部へと移動したが、それとともに破壊された寺院や聖域もまたその地に再建されたため、都市の居住地構成と宗教的な空間分布はこの時代に大きく変化した。

16世紀、ヒンドゥー教に対して寛容な政策をとったムガール帝国のアクバル Akbar の治世には、ヴィシュワナート寺院をはじめとする寺院が修復・再建された。しかし、その後のアウラングゼーブ Aurangzeb の時代には再び寺院の破壊政策がとられ、寺院の破壊およびモスクの建設が多数行われた。この時ヴィシュワナート寺院は三度目の破壊を受け、その廃墟上に現在の大モスク Masjid-e-Alamgiri が建設された。

この時代は、イスラーム支配のもとムスリムが大量に移住し、都市域の拡大、居住地の再編、重要寺院の移設など、都市の構成上大きな変化が起こった時代である。

(3) イギリス植民地時代（18世紀後半～ 20世紀）

17世紀末のムガール帝国衰退とともに、ヴァーラーナシーはヒンドゥー教徒の支配の下に帰する。

1738年にはバルワント・シン Balwant Singh によりヴァーラーナシー藩王国が成立し、ガンジス川対岸にラムナガル Ramnagar 城が建設された。18世紀はヒンドゥー文化の復興期であり、インド各地の有力者、特にマラーター Maratha 同盟の諸侯によって数多くの重要な宗教施設が建設・再建された。インドール Indore の女王アヒリャバーイ Ahilyabai は、現在あるヴィシュワナート寺院の再建（1777年）をはじめ、ダサシュワメーダ・ガート Dasashwamedh Ghat の拡張（1785年）など、多数の寺院・宗教施設の再建を行っている。現在見られる主要な寺院やガート ghat[9] は、ほとんどこの時代に建設されたものである。

1794年、ヴァーラーナシーはイギリス東インド会社の支配下に入る。1862年には鉄道が開設、ガンジス川に鉄橋が架設され、旧市街北西部に建設された駅を中心として軍用地、イギリス人居住区としてのカントメント Cantonment 地区が整備された。旧市街における大きな変化は、このカントメント地区と旧市街を結ぶ広幅道路の建設である。これらの道路は旧市街の既存街区を分断しながら、新たな商業地として整備され、現在のヴァーラーナシーのメインストリートとなっている。また、旧市街内外に残っていた多くの池や湖沼は（その多くは寺院を伴う聖地であったが）ほとんど全て干拓・整備され、跡地に住宅や公園、西洋風の庭園などがつくられた。

1-2-2　都市構造の形成

（1）都市の発生と地形

ヴァーラーナシーの起源は現在の市街北部、ラージガート Raj-ghat 台地一帯である。ラージガート台地はヴァーラーナシー一帯で地形的に最も高い位置を占めており[10]、考古学調査による住居跡や貨幣の発掘から、遅くとも前8世紀には集落が存在したことが明らかとなっている[11]。ガンジス川の氾濫から逃れ、また川の屈曲の性質上水流による浸食がこの一帯で最小となることが、ここに最初の居住地が成立した理由である[12]。ここから都市は、雨季の増水を避ける形でガンガーの自然堤防上を川に沿って南部へと展開していく。ガンジス川の増水レベルよりも高い河岸の自然堤防は、ヴァルナ川河口から南へと伸び、ゴドウリヤー・ナーラー Godaulia Nala でいったん途切れる。このゴドウリヤー・ナーラーとヴァルナ川に挟まれた地域が、古代ヴァーラーナシーの中心部であり、その核は現在の都市北部オームカレシュワラ周辺であった。

その後も都市は南へ進展し、やがて三つの小高い丘を中心とする居住地が形成された。以後ここを起点に、より内陸の水はけの良い土地を選びつつ都市は拡大していく。丘の頂点すなわち居住地の中心には、それぞれ寺院が建設され、文化的成熟とともにやがて聖域と見なされるようになり、後述する巡礼路＝聖域の中心として機能することになる。この水流によってお互いに隔てられた三つの領域が、ヴァーラーナシーにおいて最も古くから都市化されたエリアであり、以後の歴史における都市発展の焦点となる。川の後背地に散在した池や湖沼、森林は行者の隠遁所として好まれ、ヴァーラーナシーが宗教都市として発展する一因となった。

以上のように、古代ヴァーラーナシーはヴァルナ川河口付近に発生し、時代とともに南へそして内

陸へと展開していった。その発展形態を規定した最大の要因は、洪水から逃れると同時に川の利用が可能であり、しかも良好な地盤と後背に肥沃な土地を有するガンジス川左岸の自然堤防である。三つの主要な居住地の内、最も早くから成立したのは北部のオームカレシュワラ寺院一帯であり、続いて中部のヴィシュワナート寺院周辺である。南部のケダレシュヴァラ寺院一帯は、都市化の密度からも住民の構成からも、より後代の成立とされている。

(2) 街路構造の形成

R.L. シン (1973) によれば、古代ヴァーラーナシーの幹線道路は、三日月型に曲がるガンジス川に並行して上記の三つのエリアを結び付ける形で形成された。この幹線沿いに居住地が発展し、同時に河岸へと通じる路地がそれに直行して形成され、その端部にガートが作られた。そして都市がさらに拡大するにともない、新たな街路がより内陸部に、幹線道路と並行して形成され、それに直行する街路もまた両者を繋ぐ形でより内陸へと伸びていった。したがって古代ヴァーラーナシーの街路パターンは、川にそって多少歪んでおり、また当然ながら微地形の起伏による変形はありながらも、基本的にグリッド状の構造であったと考えられている[13] (図 1-3)。このような初期の街路構造の痕跡は現在も都市のいくつかの部分で確認することができる[14]。都市の基本的な構造は、主に地理的要因によって決定されたとみてよいだろう。

近年の変化としては、19世紀以降に多くの池や湖沼が干拓された際に、それらの湖沼からガンジス川あるいは他の川への排水路であった水流のいくつかは、そのまま街路へと変化した。その代表的な例は、ゴドウリヤー・ナーラーを排水して造られたダサシュワメーダ通である。

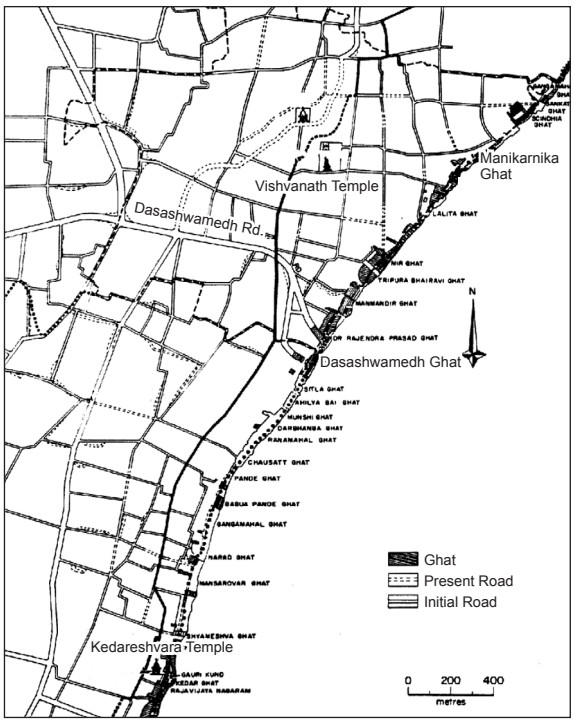


図 1-3　ヴィシュワナート寺院周辺の街路パターンの変化
Singh,R.L. (1973) 所収の図に加筆

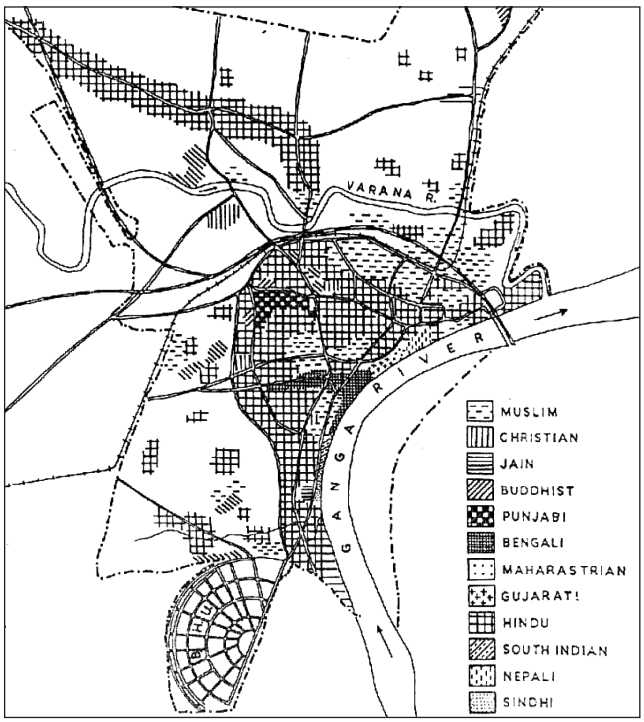


図 1-4　エスニック・グループの分布
出典：Singh, Shashi B. (1973)

1-2-3　都市の発展とエスニック・グループの分布

ヴァーラーナシーの神聖さに引きつけられ各地からやってきた人々、あるいは侵略により住みついた人々、それら各種の移民は都市の各地に変化に富んだ地域的特徴を作り出している（図 1-4）。移住者は基本的に集団となって定着したため、現在のエスニック・グループの分布実態と移住の歴史的な時期を検討することで、都市の発展経緯をある程度把握することができる。ヴァーラーナシーのエスニック・グループの分布と定着過程を論じる S.B. シン（1996）によれば、これらのうち最も重要なものは、12 世紀から始まるムスリム勢力の侵入と定着である。この結果、都市域が大幅に拡大されるとともに、住民の居住地が再編成された。ムスリムは北部一帯を占拠したが、これは当時の都市の中心が北部であったことを意味する。そのためヒンドゥー教徒の居住地は主に中部＝現在の都市中心部へと移ることになったのである。南部域は主に南インドとベンガルからの移民によって、その発展が促進された[15]。これらのエスニック・グループの分布は、先に述べた都市の発達過程を裏書きするものである。具体的な居住地の展開については次章で触れることになるが、都市の発展・変化に外部からの集団的移住が大きな影響を与えていたことは、あらかじめ指摘しておきたい。

1-3　ヴァーラーナシーの理念的モデル

ヴァーラーナシーは全インド的なスケールにおける巡礼地、すなわち巡礼の対象としての都市[16]であると同時に、都市そのものの内部に複数の巡礼路を有している。都市には数千の寺院・祠があるといわれるが、これらはマーハートミヤの定める巡礼路群によって複雑に関連づけられている。これらの巡礼路群のうち主要なものは、ヴィシュワナート寺院を中心とした同心円状の構成をなしており、総体として古代インドのコスモロジー、すなわちメール山を中心とするマンダラ状の宇宙を都市レベルで具現化したものとされている。

本章の目的は、この巡礼路とそれによって結びつけられる寺院・祠が、都市空間とどのような関係を持っているかを検討することにある。本節では既往研究に基づきながら、次節以降の現地調査に基づく具体的な考察の前提として、まずヒンドゥー教における「聖地」と「巡礼」の概念を整理した上で、ヴァーラーナシーの巡礼路の理念的な構造、およびその成立と変容プロセスについて検討を行う。

1-3-1　ヒンドゥー教における聖地と巡礼

（1）「聖地」の概念

ヒンディー語において聖地は、一般に「ティールタ tirtha」という語で表されるが、この語は本来サンスクリット語で「水辺」、「川辺」あるいは「水辺の階段（沐浴場）」、「渡し場」等の意味を持つ言葉であった。その語源が示すように、ヒンドゥー教において主に聖なる地と見なされるのは、河岸、海岸、湖沼と

いった場所であり、川の合流点はとりわけ重要視される。この事実は、水あるいは水辺との関わりを神聖視するというヒンドゥー教の特徴を端的に示している。

では何故、水辺が聖なる場所となるのかといえば、まず第一に水そのものが聖なる力を有するという観念がある。すなわち水は物理的な汚れだけではなく、罪や穢れをも浄化する力を持つという観念である。その直接的な利用法である沐浴という行為は、ヒンドゥー教に限らず世界的に様々な宗教の儀礼として取り入れられてきた。第二にヒンドゥー教において特に重要なのは、水辺が死の概念と深い関わりを持っているという点である。南アジアで広く行われている葬制は火葬であるが、これは残った遺灰は川に流すという水葬儀礼をともなう。遺灰は川を流れ下りやがてはヒマラヤの懐に至ると考えられている[17]。つまり水辺や川辺は死者の他界への出発点であり、その意味で水辺は神聖な場所なのである。

この観念が最も顕著に表れているのが、ガンジス川に対する信仰である。ガンジスの水はあらゆる罪を滅し、死者を必ず解脱へと導くものとされ、その卓越した聖性が信じられている。ヴァーラーナシーにおいて最も神聖な場所の一つとされる、ガンジス川河岸の火葬場マニカルニカ・ガート Manikarnika Ghat は、火葬という肉体の処理と解脱という魂の処理がひとつづきの儀礼過程を通して実現される場所であり[18]、聖地の原点としての風景を劇的に表現しているのである。

「ティールタ」という語は、このような水辺＝他界あるいは解脱へと通じる場という観念を通じ、やがて神あるいは超越的世界との媒介をなす場所、すなわち「聖地一般」というようにその意味を拡大され、水辺を離れた山岳や神々や英雄の事跡と関連づけられた場所をも含むようになる。つまりヒンドゥー教における聖地の概念は、当初は沐浴・葬送の場としての水辺といったその場所固有の空間的特

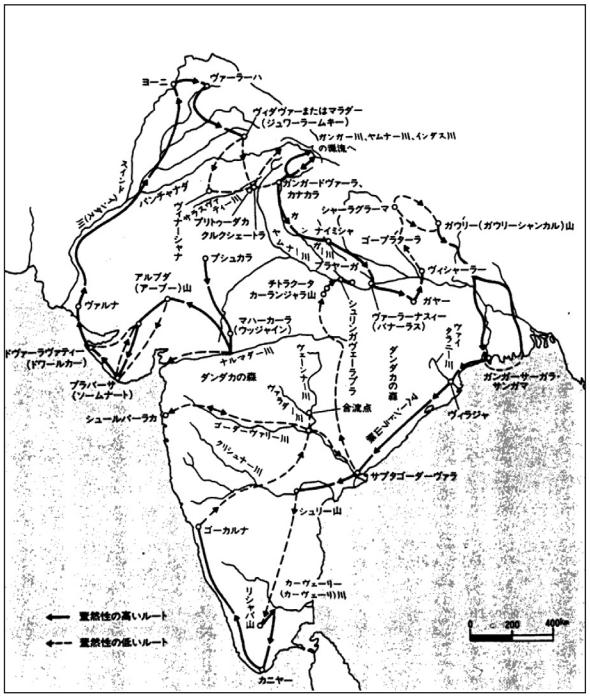


図 1-5 『マハーバーラタ』に説かれる巡礼路の想定図
出典：宮本（1995）

図 1-6 チャウラシークローシー・ヤートラ
1875年に Kailasnah Sukul 氏がプラーナ文献に基づき描いた版画による絵図
出典：Pieper（1979）

性に基づいたものであったが、次第に超越的世界＝宇宙・神（マクロコスモス）と人間（ミクロコスモス）とを媒介する場所（メソコスモス）が聖地であるという、より一般化された概念に発展していったのである。

(2) 聖地巡礼のメカニズム

ヒンディー語で巡礼行為を示す語には、ヤートラ yatra（巡礼）、パリクラマー parikrama、プラダクシナー pradakshina（円環路）等があるが、これらのうちヤートラが最も一般的に用いられ、聖地巡礼はティールタ・ヤートラ thirtha-yatra と呼ばれる。インドの聖地巡礼の歴史は古く、『マハーバーラタ Mahabharata[19)]』には、インド全土にわたる多数の聖地が列挙されており、それらをめぐる巡礼路が示されている（図 1-5）。この巡礼路はプシュカル Pushkar を出発点とし、右回りにインド亜大陸を一周して、プラヤーガ Prayaga（現在のアラーハーバード Allahabad）に終わるものである。また現在のインドには、一説に約 1820 カ所の聖地が存在するといわれるが[20)]、これらのうちいくつかの重要な聖地が組み合わされて、「七聖都」、「三祖霊供養所」、「四大神領」といった聖地グループが形成されている[21)]。そして、これらのグループ化された聖地には、必ずそれらを一筆書きの円環状に結ぶ巡礼路が設定されているのである[23)]。

このように、インドの聖地巡礼に共通する重要な特徴は、それらが基本的に右回りの円運動という循環のメカニズムを有しているという点である。複数存在する聖地を円環状に循環するという運動については、一神教の直線往復的な巡礼に対し、多神教的な文化風土を反映したものであるという指摘もなされているが[24)]、ここでは円環状の巡礼路をめぐることが、その中心に位置する聖なる存在に敬意を払うと同時に、円環の示す全体性、つまり世界そのものを自己の内に取り込むことを意味しているという点に注意したい。前述した聖地の概念と同様に、ここでも巡礼という行為を通じて、人間と世界が結び付けられるという構図が成立しているのである。このような円環状の循環メカニズムは、ヴァーラーナシーの都市内巡礼路にも共通している。

しかし一方で、『マハーバーラタ』に記された聖地巡礼に関しては、これらの聖地の分布は当時のヒンドゥー文化圏の広がっていく様相を反映している、すなわち巡礼路は当時の主要交易路であって、それゆえ非ヒンドゥー教部族民との接触をさけるように設定されていたという指摘がなされている[25)]。この事は、巡礼地としての聖地が必ずしも宗教的由来から「誕生」あるいは「発見」されるものではなく、その時々の現実的諸条件に基づき、「設定」されるものでもあるという事実を示唆している。

1-3-2　巡礼路の理念的構造

R.P.B. シンによれば、ヴァーラーナシーのにある巡礼路の数は 42 を数えるという。その中でも最も重要視されており、都市の理念的構造に関わるものが、ヴィシュワナート寺院を中心とした同心円をなす五つの巡礼路である（図 1-7：下記①～⑤）。五つの巡礼路それぞれのもつ意味と機能を、R.P.B. シン（1993）および宮本（1995）によりながらまとめると、以下のようである。

(1) 主要な巡礼路の概要

①チャウラシークローシー Chaurasikrosi 巡礼路（図 1-6）

名称は「84 クローシャ krosha[27] の」を意味し、全ての巡礼路の中で最外縁に位置する巡礼路。元来の「カーシー Kashi[28]」の聖域を画す境界とされ、巡礼路の外は不浄の地とされる。マディヤメシュワラ Madhyameshvawa 寺院[29] を中心として、都市西部のデーヘリー・ヴィナーヤカ Dehli-Vinayaka 寺院に接する、半径 5 クローシャのほぼ完全な円形を描くとされる。プラーナ文献には、144 の寺院・祠を巡ること、巡礼の時期などに関する詳細な記述があるが、管見の限りそれらに対応する実際の道や寺院・祠は確認されていない。また完全な正円という形態も現実的には考えにくいため、チャウラシークローシー巡礼路は、都市の全体性を正円の形態によって象徴的に示す、理念上の巡礼路であると考えられる。

②パンチャクローシー Panchakroshi 巡礼路

「5 クローシャの巡礼路」の意。この巡礼路は五つの部分にわかれ、毎日 5 クローシャずつ進み、五日間で 108 の寺院・祠を巡るものである。108 の巡礼地の立地は、都市の西郊外に位置するものが 66、ガンガーの土手沿いに 34、ヴァルナ川沿いに 7、アッシー川とガンガーの合流点に 1 つである。これらの寺院・祠はシヴァ神の様々な諸相およびその眷属神を祀っている。現在巡礼者に最も人気の高い巡礼路であり、経路沿いには巡礼宿のある五ヶ所の宿泊地が存在する。巡礼の対象となる寺院・祠は巡礼路の内側に位置するが、それに対し宿泊施設は全て外側に配置されており[30]、巡礼路の境界としての性質が強く意識されていることがわかる。16 世紀頃までには、①にかわり、この巡礼路に囲まれた領域が「カーシー」であると解釈されるようになったという[31]。

③ナガラ・プラダクシナー Nagara Pradakshina 巡礼路

ナガラ Nagara は「町」を意味し、聖都としての「ヴァーラーナシー」の領域を画す巡礼路される。東

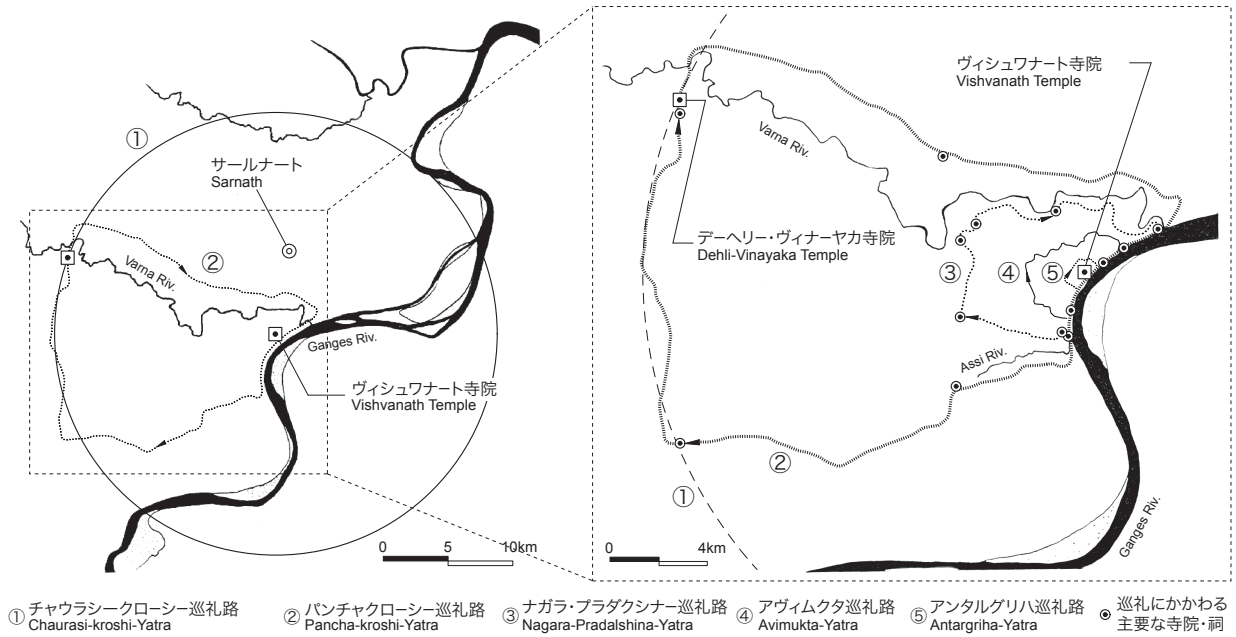


図 1-7　同心円をなす 5 つの巡礼路

Gutschow（1994）所収の図をもとに作成

をガンジス川、南北をアッシー川、ヴァルナ川によって明確に区切られる。川沿いの部分ではパンチャクローシー巡礼路と一致しており、全体はそれよりひとまわり小さな円環を描いている。全長約25㎞、二日間で72の寺院・祠を巡る。パンチャクローシーの巡礼を行うことが必ずしも全ての巡礼者にとって可能ではなかったため、この巡礼路はその縮小版として成立したと考えられている[32)]。

④アヴィムクタ Avimukuta 巡礼路

「アヴィムクタ Avimukuta」の聖域を示すとされる巡礼路。アヴィムクタはヴァーラーナシーの別称の一つであり、「見捨てられない都」を意味する。世界還滅の時にもシヴァ神はこの地を見捨ないという神話に基づいた呼び名である。巡礼路は中心のヴィシュワナート寺院に向かい、右回りの螺旋状に四周しながら72の寺院・祠を巡るものである。

⑤アンタルグリハ Antargriha 巡礼路

この巡礼路は、ヴィシュワナート寺院の「内陣」、すなわち「アンタルグリハ Antargriha」の聖域を画すものである[33)]。その宗教的重要性は、『カーシー・カンダ Kashi Khanda[34)]』をはじめとする数多くのマーハートミヤにおいて指摘されており、J. プリンセプ Prinsep による1822年の地図にも、この巡礼路が示されている。現在でもパンチャクローシー巡礼路についで、巡礼者に人気の高い巡礼路である。

巡礼路は、火葬場であるマニカルニカ・ガートを始点、中心のヴィシュワナート寺院を終点として、右回りの螺旋状に七周しながら72の寺院・祠を巡るものである（図1-10）。螺旋状の経路は、巡礼者が中心に位置する聖なる存在へ向けて、聖性のヒエラルキーを段階的に登っていく状態を表現しており、巡礼終了時にはその道程＝巡礼路がシヴァ神の象徴であるリンガを描くこととなる[35)]。また「7」という数字は世界の全体性（四つの方位、中心、天、地）を象徴すると同時に、身体に存在する七つのチャクラ Chakra[36)] に対応するとされ、先に述べた聖地巡礼行為による世界と身体の統合作用が、さらに数字のシンボリズムによって補強されている[37)]。アンタルグリハ巡礼路は他の巡礼路と異なり、『カーシー・カンダ』に巡礼地として記述されている寺院・祠が、現在もほぼ全て残り、かつ日常生活の中で信仰されている巡礼路であり、その意味において、今なお「生きている」巡礼路といえる（次節にて詳述）。

(2) 巡礼路のマンダラ構造

以上の①～⑤の巡礼路は、図1-7に見られるように、ヴィシュワナート寺院を中心として共有した、同心円構造をなしていることは、様々な文献で指摘されてきた。これらの巡礼路は、先に述べた円環状の右回りの循環メカニズムという特徴の他に、以下のような特質を有している。

A) 結界性：円環を描く巡礼路は線的な経路であるだけではなく、領域を画す境界を意味しており、巡礼路の内側は外部と峻別された聖域とみなされる。特に最外縁のチャウラシークローシー巡礼路の外側は、人の住むべきでない不浄の地と見なされている。

B) 求心的階層性：これらの同心円状の巡礼路は、外周部から中心に向かうにつれて、次第に聖性が高まっていく。すなわち内側の巡礼路ほど、それを実行することにより得られる宗教的功徳が高いとされる。ある領域で犯した罪は、より内側の巡礼路を巡ることで浄められるといったように、同心円をなす五つの巡礼路＝聖域は、中心として共有するヴィシュワナート寺院を頂点とした聖性のヒエラ

ルキーを有するのである[38)]。

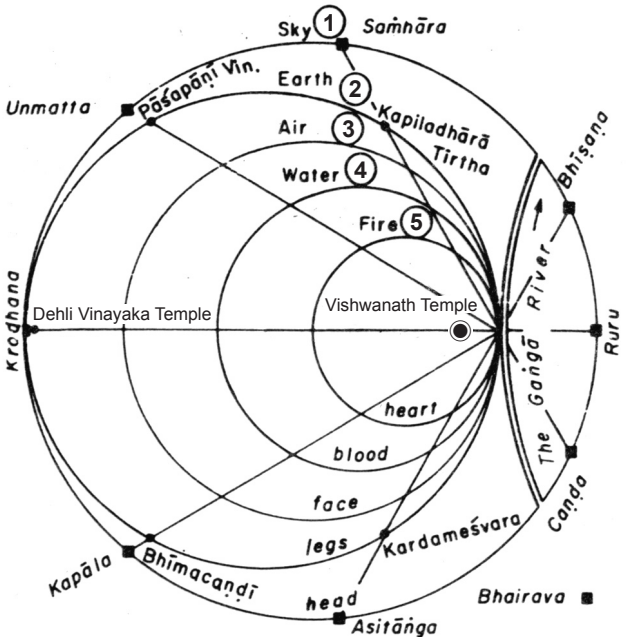
C) 神々の曼荼羅：巡礼地となる寺院・祠に祀られる神々は、ヒンドゥー教における方位、数のシンボリズムに即して配置されており、それぞれの巡礼路がヒンドゥー諸神のパンテオンを形成している[39)]。

R.P.B. シンによれば、つまりこれらの巡礼路＝聖域群は、総体として古代インドのコスモロジー、すなわちメール山を中心とするマンダラ的空間構造を都市レベルで具現化したものである（図 1-8）。それゆえ巡礼者（ミクロコスモス）は都市内の巡礼路をめぐることで、同時に世界全体（マクロコスモス）をもめぐる巡礼をも成し遂げることになり、都市は両者を媒介するメソコスモスとして機能するというメカニズムがここに実現する。以上のような精緻に構造化された巡礼路の体系は、ヴァーラーナシーがインド第一の聖地であることの有力な根拠とみなされている。

ただし巡礼路の形状に注目すれば、図 1-7 のスケールからもわかるように、最外縁の①を除き、その道筋は大きく歪んでいる。巡礼路の成立に際しては、上記のようなマンダラ状の理念的モデルが単純に図式的に投影されたのではなく、様々な現実的諸条件を反映しながら形成されたことが伺われるのである。以下ではその点について検討していきたい。

1-3-3　巡礼路の成立と変容

各巡礼路の詳細な成立年代は明らかではないが、巡礼路に言及するマーハートミヤの推定成立年代が一つの手がかりとなる（表 1-1）。時代の幅はあるが概ね 12 世紀頃を境として、それ以前に成立したと考えられる巡礼路（①、③）と、それ以後のもの（②、⑤）とに大別することができる。これらのうち、



① チャウラシークローシー巡礼路
② パンチャクローシー巡礼路
③ ナガラ・プラダクシナー巡礼路
④ アヴィムクタ巡礼路
⑤ アンタルグリハ巡礼路

図 1-8　同心円をなす五つの巡礼路のマンダラ構造
Singh, R.P.B. (1993) 所収の図に加筆

表 1-1　巡礼路について言及する主なマーハートミヤ
文献の推定成立年代は Hazra (1940) にもとづく。

巡礼路		主なマーハートミヤ（推定成立年代）
①	チャウラーシークローシー	Linga Purana (7-11c) Padma Purana (10c 頃)
②	パンチャクローシー	Kashi Khanda (-13c 頃) Kashi Rahasya (比較的後代)
③	ナガラ・プラダクシナー	Matsya Purana (7c 頃) Padma Purana (10c 頃)
④	アヴィムクタ	Matsya Purana (7c 頃) Kashi Khanda (-13c 頃)
⑤	アンタルグリハ	Kashi Khanda (-13c 頃)

より精密な記述がなされているのは、イスラーム勢力の侵入以降となる後者であることは指摘しておきたい。

巡礼路の成立過程については、先述した『マハーバーラタ』の大巡礼路に関するバルドワージの指摘に、一つの手がかりを求めることができる。それは、『マハーバーラタ』に記された大巡礼路の経路や範囲は、単純に宗教的に重要な地を結んだものではなく、5世紀当時におけるヒンドゥー文化圏の拡大する様相を反映したものとする指摘である。つまり、巡礼路は同時に交易路でもあったため、その経路はインド各地の重要都市を結ぶと同時に、当時まだヒンドゥー化されていない土地を回避するかたちで形成されたのだという。巡礼路の成立過程に社会的・経済的要因を考慮する指摘であるが、これと類似した事例はヴァーラーナシーにおいても見い出すことができる。すなわち、ガンジス川沿いには南北に並んだ三つの巡礼路＝聖域が存在するが、これらは前述したように、古代における三つの居住地の核に対応したものである（図 1-2）。これらの巡礼路は、主に 4〜6世紀頃から成熟した市街地の境界を画するように成立したと考えられており、その後も居住地の拡大に応じて、巡礼路も新たな市街域を組み込みながら拡大していったとされているのである [40)]。

これとは反対に、巡礼路や聖域が現実的諸条件に対応して縮小したと考えられる事例も見られる。先に述べたように、シヴァ神の聖地とされる「カーシー」の聖域を画するのは、元々は最外縁のチャウラシークローシー巡礼路であったが、16世紀頃までには、その内側のパンチャクローシー巡礼路が「カーシー」を画す境界であると考えられるようになった。つまり「カーシー」の聖域およびそれを画す巡礼路が、時代と共に部分的に縮小しているのである。両者の関係を見ると、二つの巡礼路が接する西側部分に「カーシーの西門」と呼ばれるデーヘリー・ヴィナーヤカ Dehli-Vinayaka 寺院があり、二つの巡礼路はその前後においてほぼ一致している。完全な正円状のチャウラシークローシー巡礼路が理念上の巡礼路と考えられること、また前述した巡礼路の推定成立年代区分もあわせて考えると、パンチャクローシー巡礼路は、チャウラシークローシー巡礼路（＝理念型）の縮小版あるいは現実版として成立したと考えられるのである。具体的には東限がガンジス川により定められ、北限と南限がそれぞれヴァルナ川とアッシー川付近まで後退している。この領域はパンチャクローシー巡礼路が成立した時代における、都市の現実的な勢力圏を反映したものと考えられる [41)]。

これらの事例は、巡礼路＝聖域とは必ずしも宗教的概念や聖跡に基づいて成立するものではなく、むしろ地形や文化的・政治的状況などの現実的な諸条件に適応しながら柔軟に設定・修正されるものであることを示している。そこには、自らの勢力圏を理念的に構造化することにより、その存在を既成事実化し、さらに宗教的に権威付けるという、一種の政治的意図を見て取ることができる[42]。つまり巡礼路は単純に宗教的儀式上の装置であるほかに、その宗教の依拠する勢力（文明・都市など）の勢力圏の反映あるいは意図的な明示、という側面をもつものと捉えることができる。先に見たような、巡礼路＝聖域の複雑なシステムは、その意図をより強化するための手段と解釈ですることができよう。

都市と理念型との一般的関係からすれば、都市の成熟に先立って理念型として巡礼路＝聖域が設定され、それに沿って都市が発展するというケースも想定しうるが、ヴァーラーナシーに関しては上に述べた経緯や現在の街路形態と巡礼路の関係からみて、巡礼路＝聖域は明らかに都市発展を跡付けるかたちで設定されたものである。したがってヴァーラーナシーでは、巡礼路が都市構造を形成するアプリオリな要因として作用していたとはいいがたい。

1-4　アンタルグリハ巡礼路と寺院・祠

本節では、同心円をなす巡礼路のうち最奥のアンタルグリハ巡礼路とその内側の聖域を対象として、巡礼路および寺院・祠と都市空間との関係性について、寺院・祠の立地や分布、その物理的特性に関する現地調査に基づきながら、よりミクロなスケールで検討を行う。アンタルグリハ巡礼路とその内側の領域を対象として選定した理由は、第一には、先述したようにアンタルグリハ巡礼路が今なお生きた巡礼路であることがある。第二には、他の巡礼路は（アヴィムクタ巡礼路を除き）その経路の大部分が市街地の外を通るものであるのに対して、アンタルグリハ巡礼路は全体が市街地内に含まれており、また、歴史的にも都市の三つの核の一つとして最も古くから発展し、かつイスラーム勢力の侵入による破壊を比較的免れたため歴史的連続性を保持していること、さらに現在も都心として重要な施設が集中する領域であることから、都市空間との関係の考察に際して様々な観点からの検討が可能であると考えるためである。

アンタルグリハ巡礼路は、パンチャクローシー巡礼路とならんで、現在巡礼者に最も人気の高い巡礼路である[43]。巡礼者の多くは都市外から訪れる人々であり、祭礼の日を除けば一般の住民で巡礼を行う者は今日では少ないが、マーハートミヤには巡礼の頻度に関する規定があり、もともとはヴァーラナシーの住民を対象として設定された巡礼路である[44]。

1-4-1　アンタルグリハの巡礼地

アンタルグリハ巡礼路はヴィシュワナート寺院を中心として、七周の螺旋を描きながら72（72番目は5つの祠からなり、最初と最後に訪れるヴィシュワナート寺院を含めると、正確には77）の寺院・祠

などを巡るものである（図 1-9）。

ヒンドゥー教において崇拝の対象とされるものは多様である。最もポピュラーな崇拝対象は、シヴァ神やヴィシュヌ神などの強大な神格を祀る寺院であるが、川や池、井戸といった水に関わる場所、大樹などもまた崇拝対象である。後者はそれ自体が熱心に信仰されると同時に、多くの場合その周囲に様々な神格を祀る寺院・祠を伴っている。アンタルグリハ巡礼路の巡礼地のうち、今回の調査で聞き取り等によって同定できたのは 71 であった（表 1-1）[45]。これらの巡礼対象寺院・祠の空間的特質として、以下の三つの点が注目される。

（1）場所性

巡礼地のうち 8 は小規模な祠である。その宗教的重要性にもかかわらず、多くは道ばたや大樹の根本に置かれた質素なものである。巡礼地の中には建築物を伴わないものもある。リンガや神像がむき出しのまま設置された事例が 3 ある。また、池（#1：図 1-9 の番号に対応。以下同）、井戸（#63）そのものが巡礼対象となっているものがある。極端な例では、#8 は元々川辺にあったリンガが、年々の氾濫により完全に川に水没し、今やまったく存在しないものである。しかしそれにもかかわらず、依然このリンガは巡礼地である。

14 の巡礼地は、現在の地表面より下に位置している。寺院や住宅あるいは街路の下の地下室に神体が置かれているものである（図 1-10）[46]。#25 は小広場下の地下空間にあり、地上にはのぞき穴が空け

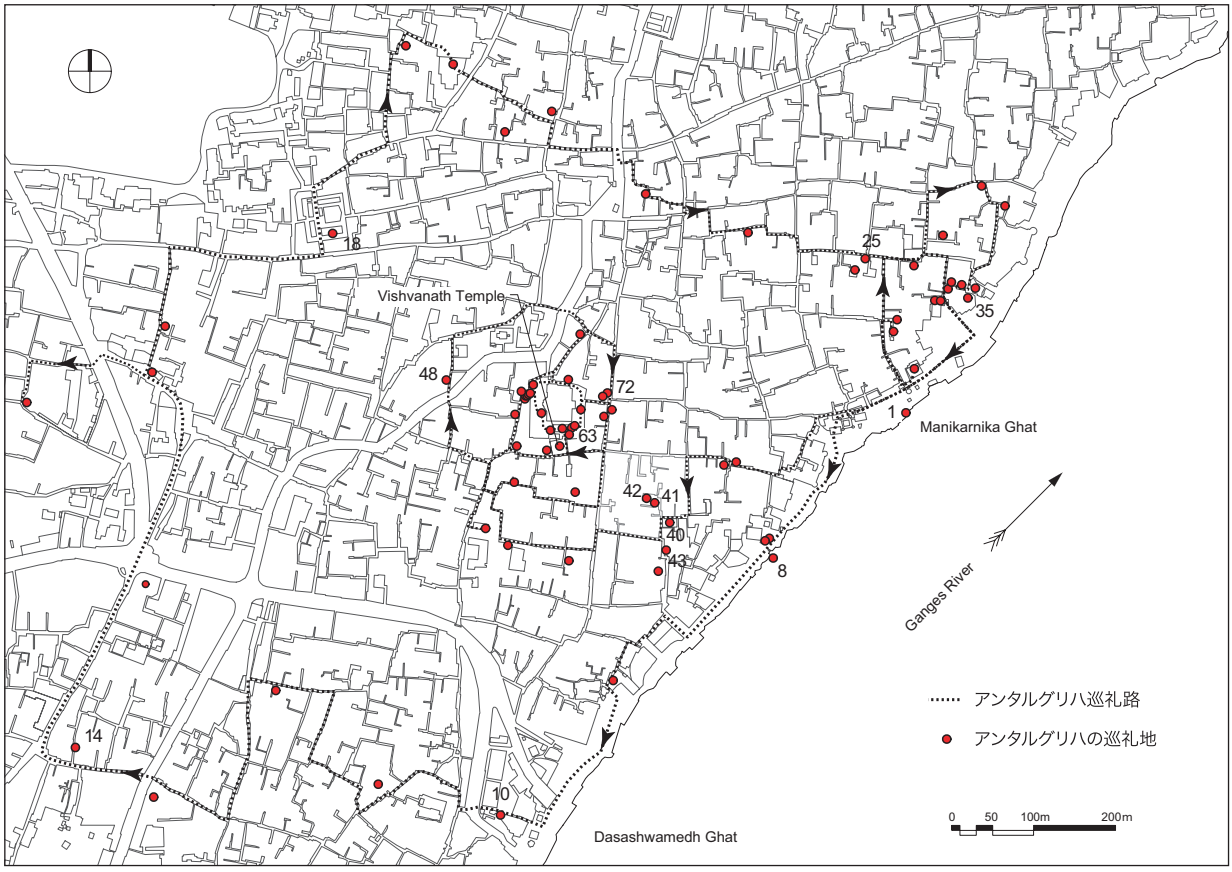


図 1-9　アンタルグリハ巡礼路とその巡礼地

1929 年の都市地図 "Benares Map" および Singh, R.P.B.（1993）所収の図にもとづき作成。

られているのみで建築物はまったくない。一般に神体が設置された地盤の深さは、その寺院が設立された当時の地表面を示すものと理解されている。その真偽は明らかではないが、地下深くに位置することが、「その神体がはるか昔からその場所から動かずにあった」とされている点は注目に値する。

これらの状況は、重要なのはリンガ（あるいは他の神体）の象徴する「場所」であり、ゆえにリンガはほとんど移動せず、そして時に建築物あるいはリンガの存在すら必要としないという事実を示している。場所の元来の性質は不変であると考えられるため、リンガ＝聖地は容易に移動されることはない。たとえ何らか環境的な変化（異教徒による破壊、自然現象など）が生じた結果そのリンガが失われたとしても、その「場所」の記憶は残り信仰を集め続けるのである[47]。

(2) 建築的非独立性

ヴァーラーナシーの寺院の特徴として、建築的に独立した形状をもつものが比較的少ないという点がある。巡礼地のうち寺院は 57 あるが、固有の入口と構造体をもち周囲の建築から独立して建っているものは、その半数以下の 26 である。ただし、そのうち 6 には周壁に店舗等が付属している。建築的に非独立の寺院は、本尊を覆う固有の建築物をもたず他の建築内の一部が寺院となっているもので、18 ある。その多くは住宅内の一室が寺院となっているものであり、もともとその地にあった祠やリンガを新しい建築の一部に組み込んだ結果である。当初は独立した寺院であったものが周囲の建築物に取り込まれた、「半独立」の寺院が 8 ある。取り込まれ方には、全体が包み込まれてしまう場合と一部が他の建築にめり込む場合とがあるが、いずれにせよ元の寺院建築の形態をとどめているのが特徴である（図 1-11）。

明らかなことは、一度建った寺院は原則として破壊されないということである。住民は既存寺院をいわば地形と同様の前提条件とみなした上で、各々の増改築の要求を実現しているのである。寺院としての機能を失い完全にコンバートされたり[48]、住居内の一祭壇化する場合もあるが、基本的に寺院機能は維持され参拝者にも開放されている。

図 1-10　寺院の地下にあるリンガ

図 1-11　増改築により取り込まれた寺院

(3) 住宅との関係

25の巡礼地が何らかのかたちで住宅の内部に存在している。住宅建築に包み込まれたもの、中庭に寺院・祠が建てられたもの、一室が寺院として扱われているものなどである。巡礼地として信者一般に共有されるべき寺院が、個人住宅の内部にある理由としては二つが考えられる。第一には寺院・祠

表 1-2　アンタルグリハ巡礼路の巡礼地の特徴

Singh, R.P.B. (1993, pp.49-54) および現地調査をもとに作成

No.	巡礼地名称	タイプ	独立性	立地	
				地下	住宅
1	Manikarnika	池			
2	Manikarnikeshvara	寺院	I	○	
3	Kambalashvatareshvara	寺院	NI		
4	Vasukishvara	寺院	I		
5	Parvateshvara	寺院	I		
6	Ganga Keshava	寺院	NI	○	
7	Lalita Devi	寺院	NI	○	
8	Jarasandheshvara	川			
9	Someshvara	寺院	NI		○
10	Adi Varaheshvara	（未確認）			
11	Brahmeshvara	寺院	I	○	○
12	Agastishvara	寺院	HI		○
13	Kashyapeshvara	寺院	I		○
14	Harikesheshvara	寺院	I		○
15	Vaidyanathshvara	寺院	NI		○
16	Dhruveshvara	寺院	I		
17	Gokarneshvara	祠	I		
18	Hatakeshvara	寺院	HI	○	
19	Asthitaksepatadagshvara	（未確認）			
20	Kikaseshvara	寺院	I		
21	Bharabhuteshvara	寺院	I	○	
22	Chitrageupteshvara	寺院	NI		○
23	Chitraghanta Devi	寺院	HI		
24	Pashupatishvara	寺院	I		
25	Prapitamaheshvara	寺院	I	○	
26	Kalasheshvara	寺院	I		○
27	Chandreshvara	寺院	NI	○	
28	Vireshvara	寺院	NI		
29	Vidhishvara	寺院	I	○	○
30	Agnishvara	寺院	NI		○
31	Nageshvara	寺院	I		
32	Harishchandeshvara	寺院	HI	○	○
33	Chintamani Vinayaka	祠	HI		
34	Sena Vinayaka	祠	HI		
35	Vasishtheshvara	寺院	NI		○
36	Vamadeveshvara	寺院	NI	○	○
37	Sima Vinayaka	祠	I		
38	Karuneshvara	寺院	NI		○
39	Trisandhyeshvara	寺院	I		
40	Visalaksi Devi	寺院	I		
41	Dharmeshvara	寺院	I		
42	Vishvabahuka Devi	寺院	I		
43	Asha Vinayaka	寺院	NI		○
44	Vriddhaditya	寺院	NI		○
45	Chaturbakresvara	寺院	NI	○	○
46	Brahmishvara	寺院	I		
47	Manahprakameshvara	寺院	I		
48	Ishaneshvara	寺院	NI		○
49	Chandi Devi	（未確認）			
50	Chandishvara	（未確認）			
51	Bhanvani Shankara	祠	I		
52	Dhundhiraja	寺院	I		
53	Raja Rajeshvara	寺院	HI		
54	Langlishvara	寺院	NI		○
55	Nakulishvara	祠	I		
56	Paranneshvara	寺院	I		
57	Paradravyeshvara	寺院	I		
58	Pratigraheshvara	寺院	I		
59	Nishkalankeshvara	寺院	I		
60	Markandeshvara	寺院	I		
61	Apsareshvara	寺院	HI		○
62	Gangeshvara	像			
63	Jnanavapi	井戸			
64	Nandikeshvara	像			
65	Tarakeshvara	寺院	HI		○
66	Mahakaleshvara	像			
67	Dhandapani	寺院	I		
68	Maheshvara	祠	I		
69	Moksheshvaa	（未確認）			
70	Virabhadreshvara	（未確認）			
71	Avimkuteshvara	寺院	HI		○
72a	Moda Vinayaka	寺院	NI	○	
72b	Pramoda Vinayaka	寺院	NI		○
72c	Sumukha Vinayaka	寺院	NI		○
72d	Durmukha Vinayaka	寺院	NI	○	○
72e	Gananatha Vinayaka	祠	I		
	Vishveshvanath	寺院	I		

■ 独立性

I　：独　立… 固有の入口・構造体をもち建築が独立しているもの

HI　：半独立…以前独立であったが今は別の建物に取り込まれているもの

NI　：非独立…固有の入口・構造体をもたず、他の建築の一室に存在するもの
あるいは他の建築に付属しているもの

■ 立地

地下　：リンガなどの神体が地表面下に位置するもの

住宅　：住宅内部にあるもの、または住宅が付属しているもの

を異教徒から守るという防衛上の理由である。12世紀以降、ムスリムの支配者はヒンドゥー教の宗教的中心を重点的に破壊する政策をとっており、巡礼地となるような重要な寺院はその格好の標的とされた。それゆえ破壊を免れた寺院あるいは新たに再建された寺院は、外部から容易に発見されないように住宅の内部に取り込まれたのである[49)]。第二には、寺院・祠のほとんどが個人的所有物であるという事情がある。ヴァーラーナシーの寺院・祠の半数以上はマハント mahant と呼ばれる個人の所有であり、巡礼地となっているものも例外ではない[50)]。したがって寺院・祠の立地は所有者の意図に大きく依存しており、住宅の中庭に建設されたり一室が寺院にあてがわれたりするという事態は、この点からも理解される。しかしこれらの寺院が、個人の所有物であると同時に都市全体の共有物と認識され、巡礼者が訪れたときは快く迎えられるという事実は注記したい。

本項での検討は、アンタルグリハ巡礼路の巡礼地となっている寺院・祠のみを対象としているが、同様の傾向はヴァーラーナシーの寺院・祠一般についても少なからず観察することができる。ヴァーラーナシーにおける寺院・祠をめぐるこれらの状況は、都市全体が寺院・祠との複合体であるような独特の都市景観を形成する一因となっている。

1-4-2　寺院・祠の分布と巡礼路

1929年の地図にはヒンドゥーの寺院・祠をはじめ、モスクや井戸などがプロットされている。現地調査により、宗教施設についてはほぼ全てが同じ位置にあることを確認した。加えて地図にはプロットされていない小規模な祠が住居壁面、路傍、大樹の下などに多数存在する。その数はアンタルグリハ内で寺院・祠が約700、モスク29、キリスト教会1を数える（図1-12）。

まずモスクを含む宗教施設の分布は、ヒンドゥー教徒とムスリムの住み分け状況を明快に示している。またムスリム居住地以外では、寺院・祠は一見まんべんなく分布しているようであるが、地区・街路により分布密度にかなりの差があることがわかる（図1-9）。宗教施設の分布密度が比較的高い地区・街路はその性質から次のように分類できる。

A：全インド的重要性をもつ寺院・祠クラスター

B：Aを結ぶ街路沿い

C：ローカルな寺院・祠クラスター

Aに分類される地区は三つあり、その核となるのはヴィシュワナート寺院やマニカルニカ・ガート（火葬ガート）、ダサシュワメーダ・ガートといった、全インド的な宗教的重要性を有する、聖地ヴァーラーナシーの根拠ともいうべき施設群である。それらの周囲には極めて高い密度で寺院・祠が集積し大規模なクラスターを形成している。卓越して重要な寺院の周囲に大小の宗教施設が集まる傾向は明らかである。続いて分布密度の高いBは、Aのクラスター三つを結ぶ二つの街路沿いである。これらの街路自体はもともと神話や伝説に彩られた「聖なる場所」ではなく、傑出して重要な寺院も少ない。しかし最も重要な巡礼地を結ぶ最短の経路であり、ヴァーラーナシーを訪れる巡礼者のほぼ全員が通行する街路である。特にヴィシュワナート寺院とマニカルニカ・ガートを繋ぐ街路は、都市外部から

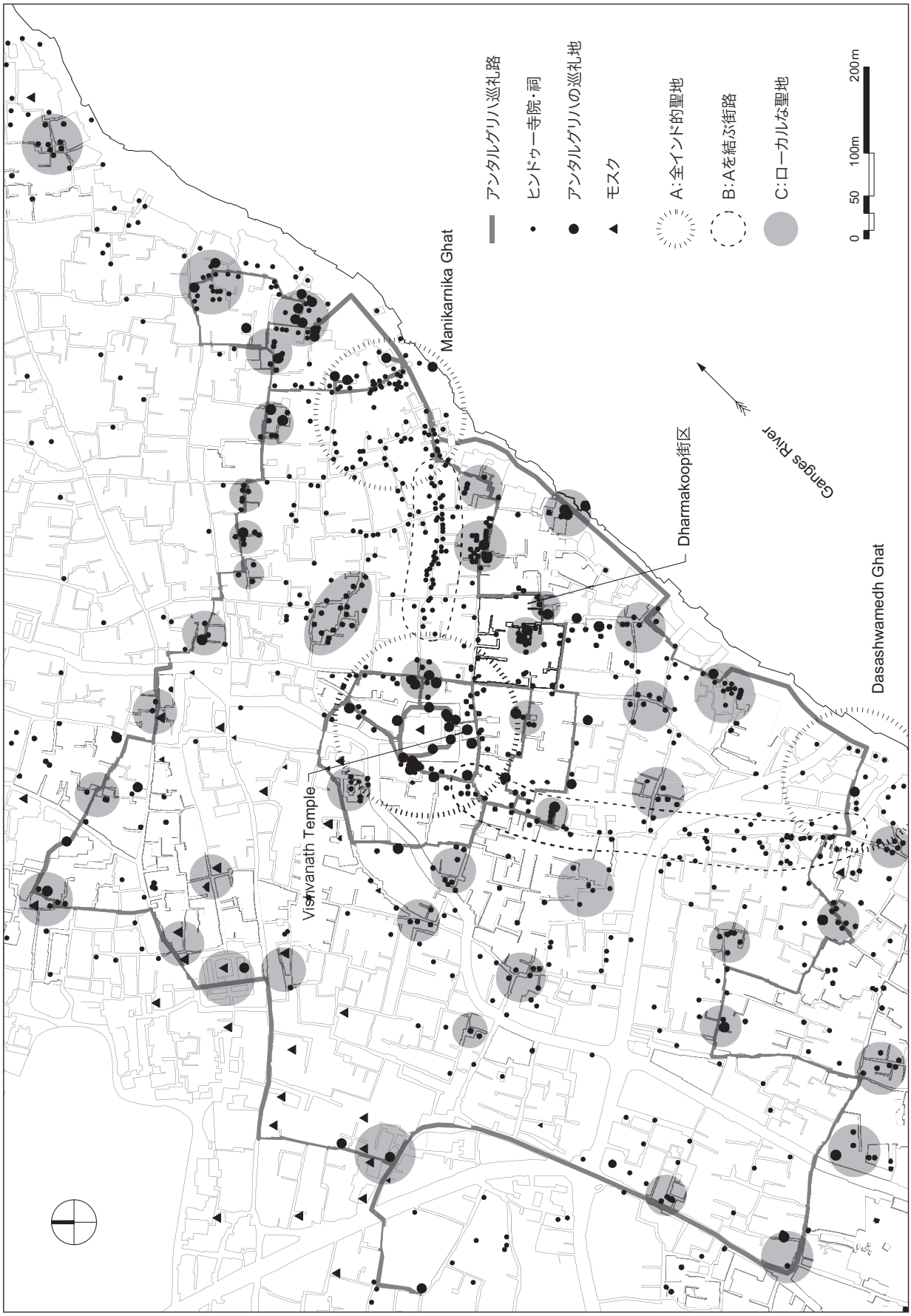


図 1-12　アンタルグリハ地区における宗教施設の分布

巡礼路の経路および巡礼順序（数字）は Singh, R.P.B.:1993 に準ずる

運ばれてきた死体と葬送の行列の主要な経路でもある。つまりBの示す高密度の分布からは、巡礼という人の通過交通がこれらの街路に宗教的重要性を付加し、新たな寺院・祠の建設に際してこの街路沿いを敷地として選択させる要因となった可能性が指摘できる。それに対してCに分類されるものは、井戸や大樹、小規模なガートなど、その場所にある物理的要素に根ざしたローカルな聖地を中心に形成された寺院・祠群である[51]。それらの寺院・祠はコミュニティの守護神であり、近隣コミュニティの核として機能している。

以上の宗教施設分布とアンタルグリハ巡礼路を重ね合わせることにより、巡礼路が全インド的レベルで重要な聖地とローカルな聖地とを結合し構造化する役割を果たしていることが推察される。前述したように巡礼路＝聖域とは、居住地の範囲を反映して設定されたものである。アンタルグリハ巡礼路に関するマーハートミヤ、『カーシー・カンダ』は13世紀頃の成立とされ、この巡礼路＝聖域は当時の主要な市街域を示唆するものと考えてよい。その際、当時すでに全インド的な重要性を獲得していた聖地・寺院（A）が聖性の根拠として巡礼路の核とされ[52]、またその他の巡礼地として、居住地内各部に散在するローカルな聖地＝地域コミュニティの中心（C）が選択されたと考えるのは自然である。したがってそこを巡礼するという行為は、1-3で述べたような壮大なコスモロジーを体現する宗教実践であると同時に、都市住民の生活圏である各コミュニティを実際に訪れるという都市空間体験を伴っている。つまり巡礼路とは、成長・拡大する居住域の各部分をある段階で理念的に組織だてるとともに、住民が身をもってそれを確認する手段であり、その意味においても、都市の構造化およびその維持・

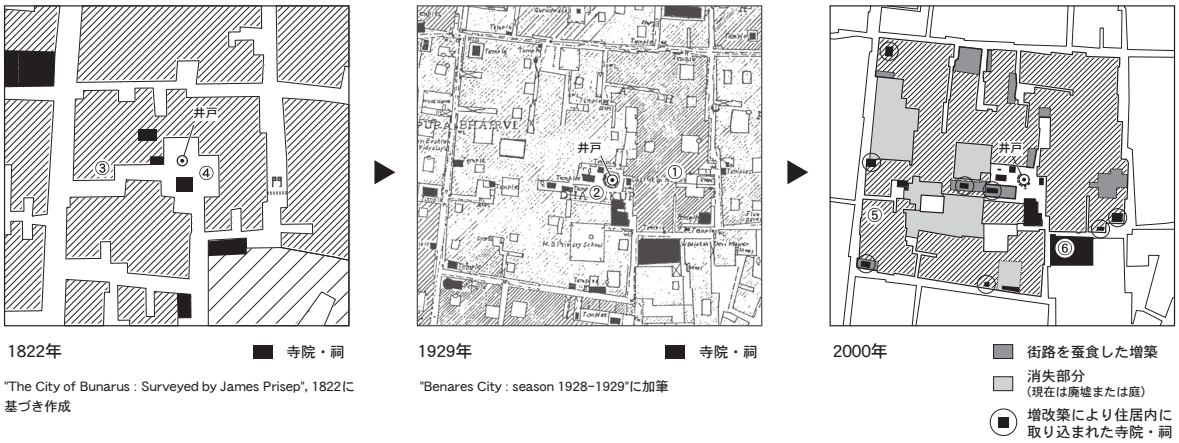


図 1-13　ダルマクープ街区の変遷

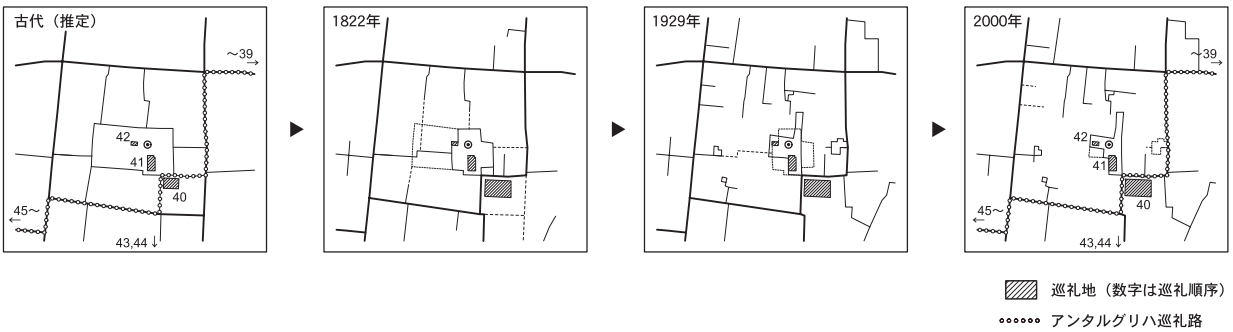


図 1-14　巡礼路と街路の関係（模式図）

再認識を保証するシステムとみることができるだろう。

1-5　街区形態の変容と巡礼路

ダルマクープ Dharmakoop と呼ばれる一街区（図 1-12 に位置を示す）を対象として、1822 年[53]、1929 年の地図および現況の比較を通じて街路形態の変容過程のトレースを試み、その中で巡礼路が及ぼした作用について一仮説を提示したい。対象街区は内部に井戸のある小広場を有し、東南隅が欠けた矩形状である（図 1-13）。アンタルグリハの領域中でも歴史的に早くから都市化された地区であること、古代の街路パターンを残していること、巡礼路に組み込まれている（巡礼地が街区内を通る）ことが同街区を選定した理由である。

まず 1929 年の街区構成は基本的に現在とほぼ変わらない。主な相違点は街区東部の袋小路の存在（①：図 1-13 中の数字に対応）、井戸周囲の小広場が現在よりもやや広かったという点である（②）。1822 年と 1929 年の地図との比較からは、街区中心の小広場から西側の街路へと通り抜ける路地が存在したこと（③）、小広場がさらに広かったことがわかる（④）。小広場から西へ抜ける路地の痕跡は、現在も袋小路として残っている（⑤）。

前述したように古代ヴァーラーナシーの街路パターンは基本的に格子状であった。特にこのエリアでは現状が示すように、方位軸に沿った正確なグリッドが適用されている。井戸は街路の形成された初期から存在していたと考えられる[54]。居住密度が低い段階で街区中央の空き地に共有井戸を設けることは、しばしば見られる事例である。1822 年から現況への変化からみて、街区形成の初期段階では井戸周囲の広場は今よりもずっと広く、現在袋小路となっている路地は主要街路と広場を繋いでいたと考えてよい。その後次第に街区の密度が高くなるにつれて、広場へ通じる路地は私有化され住居が建設された結果袋小路となった。東南部の角は隣接街区の寺院が増築されてふさがったため、当初主要街路と広場を結んでいた２つの路地がつながり、現在の鍵型の街路が形成されたと考えられる（⑥）。周囲の街路から広場へのアプローチは、最終的に東南部の一カ所のみとなっている。

以上の推測が正しいとすると、なぜ数本あった広場へ続く路地のうち東南部のものだけが残ったのかが疑問となる。その要因としてアンタルグリハ巡礼路の存在を考慮したい。この付近の巡礼地は図 1-7 に示すとおりであるが、これらを定められた順序通りにまわる最短のルートは、広場へ抜ける道が他にあったとしても、現在残っている鍵型の街路と重なっている。つまりこの街路は、巡礼路であるがゆえに維持されてきたのではないか。たとえ付近住民に住居の増築・新築の必要が生じた場合も、巡礼者の頻繁に通過する巡礼路を塞ぐことは意識的に避けられてきた結果と考えられるのである（図 1-7）。したがって街区の骨格や初期段階での街区形成は基本的に地形的条件や生活上の機能的要求に基づくものであるが、その後の変遷―増築により袋小路とする街路の取捨選択―については、巡礼路が一定の要因として作用していた、というのが仮説である。

1-6　まとめ

本章で行った考察をまとめると以下のようになる。

① 古代における居住地の発生および発展過程、街路パターンの形成は主として地理的要因に基づく。

② ヴァーラーナシーの巡礼路＝聖域は、宗教的理念だけでなく地理的・社会的条件に基づき、既存の都市や居住地の境界を画すため設定・修正されたものである。

③ 信仰において重要なのはまず「場所」である。また一度建設された寺院・祠は、地形と同様に新規の建設に際しての前提条件と見なされる。寺院・祠の多くが防衛上の理由や個人所有であることから、住宅の内部に設置されたり増改築によって取り込まれたりする事例が多い。これらの事情により、都市全体が寺院・祠との複合体であるようなヴァーラーナシー特有の景観が生み出されている。

④ 宗教的に重要な施設の存在や巡礼者の通行は、新たな寺院・祠の建設を促す傾向がある。巡礼路は都市各部のローカルな聖地＝近隣コミュニティの中心を組織化する側面を有する。

⑤ 1822年、1929年および現況の街区構成の比較に基づき、「巡礼路が街区構成の変容過程において一定の要因（取捨選択の判断基準）として作用していた」という仮説を提示した。

本章では、従来「聖地」として宗教的側面からのみ語られることの多い都市・ヴァーラーナシーを論じるにあたり、宗教的要素をあくまで都市形成の一要因と位置づけた上で、それが都市構造の形成と変容過程に対して、どのように影響したのかを視点とする考察を行った。その結果、都市の基本構造はまず地理的条件により決定されたものであり、巡礼路＝聖域とその理念的体系は成熟した都市を背景として、後から設定されたものであることを指摘した。その意味では、これらの宗教的要素は都市構造を規定するアプリオリな要因とはいいがたい。しかしそのようにして設定された巡礼路は、寺院・祠、住宅など個々の建築や街路形態の変容など、よりミクロなスケールにおいては一定の決定要因として作用していることを明らかにした。以上の考察からは、都市の物理的存在に基づきこれを構造化する宗教的理念が設定され、それに基づき都市が変容し、さらに宗教的理念が再定義されるという、一種の循環・螺旋状の都市形成プロセスが予見される。

第 1 章　注釈

1) ヴァーラーナシーは時代毎に異なる名前によって表わされてきた。サンスクリット文献を基にすると “Varanasi” という表記となり、現在の公式の都市名もこの名であるため、本論文ではこれを用いる。“バナーラス Banaras” という呼称も一般的である（英語名 “ベナレス Benares” はこれが転訛したもの）。“Varanasi” および “Banaras” は地理的な要因に基づく呼称であり、その由来は都市の南北に流れるヴァルナ Varuna 川とアッシー Assi 川であるとされる。

2) 本論文で使用する「寺院・祠」はすべてヒンドゥー教の寺院および祠をさす。ヴァーラーナシーにおける「寺院」と「祠」の峻別は困難であるが、本論文ではその規模に応じて人が入り祭儀を行うことの可能な内部空間（内陣）を有するものを「寺院」、人の入れない小規模なものを「祠」と呼ぶ。

3) 代表的なものとして、古代インドの建築書「マナサラ Manasara」に記されたプラスタラ Prastara に基づくとされるラージャスタン州の州都ジャイプル Jaipur、タミルナードゥ州のマドゥライ Madurai、シュリーランガム Srirangam、カンボジアのアンコール Angkor などがあげられる。

4) ヒンドゥー教にまつわるサンスクリット文献のうち、特に聖地に関連した伝説や儀式作法、功徳などを説く一連の文献群の呼称。マーハートミヤは「威光書」の意。ヴァーラーナシー（カーシー）にまつわるものはカーシー・マーハートミヤ Kashi Mahatmya と呼ばれる。

5) ヴィシュワナート寺院はヴィシュウェシュワラ Vishveshvara 寺院とも呼ばれる。ヴィシュワナートはシヴァ神の一形態であり、ヴァーラーナシーの主神とされる神。どちらの呼称も「世界の主」を意味する。

6) 都市史に関しては、主に以下の文献を参考にまとめた。Altekar（1947）, Eck（1983）, Havell（1905）, Sherring（1868）, Singh,R. L.（1955, 1976, 1973）, Singh,S.B.（1996）, Sukul（1977）。

7) 仏教経典に記された、ブッダ時代の古代インド都市国家の総称。国名は経典によって若干の相違があるが、一般には以下の 16国とされ、ガンジス川中流域の諸国が大部分を占める。アンガ Anga、マガダ Magadha、カーシー Kashi、コーサラ Kosala、ヴァッジ Vajji、マッラ Malla、チェーティ Cheti、ヴァンサ Vamsa、クル Kuru、パンチャーラ Pancala、マッチャ Maccha、スーラセーナ Surasena、アッサカ Assaka、アヴァンティ Avanti、ガンダーラ Gandhara、カンボージャ Kamboja。

8) 「バーラーナシー国は周囲四千余里ある。国の大都城は…長さ十八、九里、広さ五、六里ある。民家は櫛の歯のごとくならび、住民は盛大に、家ごとに巨万の富を蓄え、部屋ごとに珍しい品物で満ちている。人の性質は温順で、ならいとして芸に努力することを重んじている。多くは外道を信じ、少数のものが仏法を敬っている。気候は穏和で、農業は盛んである。果樹は枝を交え、茂った草は風になびいている。伽藍は三十余カ所、僧徒は三千余人おり、みな小乗の正量部の法を学んでいる。天祠は百余カ所、外道（引用者註：ヒンドゥー教徒）は一万余人おり、みな大自在天（引用者註：シヴァ神）を信奉しており、或るものは断髪しており、或るものは髻を高く結う。露形で服を着けぬもの、身に灰を塗るものなど。苦行に精励し、生死の境より出離することを求めている。」（水谷 : 1999 (2), p.327）。唐代における「里」の長さについては諸説あるが、水谷真成はそれらをまとめて、玄奘の言う一里はほぼ 400 ～ 440m であるとしている（水谷 : 1999 (1), p.265）。

9) 河岸に建設された階段（または斜面）状の施設の総称。沐浴や火葬といった宗教儀式のほか、炊事・洗濯など生活全般に利用される。ヴァーラーナシーにはガンジス川沿いに約 80のガートが存在する。

10) 台地は海抜約 83m であり周囲の平野とは 15m、川面とは約 18m の高低差がある（Singh,R.L.:1955, p.18）。ガンジス川は雨季に 7m 前後増水する。

11) Singh,B.P.: 1985, p.3

12) Singh, R.L.: 1955

13) Singh, R.L.: 1973, pp.23-27

14) ヴィシュワナート寺院東部や市街南部の Awadh-Sivala 地区などに、方位に沿った直交グリッド状の街路が残っている。

15) Singh, S.B.: 1996

16) 現在インドには一説に約 1820カ所の聖地が存在するといわれる（橋本ほか : 2005, p.236）。これらのうちいくつかの重要な聖地が組み合わされて、各種の聖地巡礼が設定されている。バナーラスはそのうち七聖都（サプタ・プリー Sapta puri）、三祖霊供養所（トリスタリー Tristali）に名を連ねる。

17) 宮本 : 1995, p.121

18) 山折 : 1981

19) 古代インドの大叙事詩。バラタ族に属するクル族の 100人の兄弟とパーンドゥ族の 5人の兄弟との間に起った戦争物語。現存のものは四世紀ごろ成る。ヒンドゥー教における宗教・哲学・倫理・政治・法律その他ああらゆる方面の根本聖典として

尊崇される。

20) 橋本ほか : 2005, p.236。

22) 七聖都（サプタ・プリー Sapta puri）：カーシー（ヴァーラーナシー）、ハルドワール Hardwar（マーヤープリー Mayapuri）、アヨーディヤ Ayodhya、マトゥラー Mathura、ドゥワールカ Dwarka、ウッジャイン Ujjain（アヴァンティカー Avantika）、カーンチープラム Kanchipuram。七聖都はドゥワールカが海岸にあるのを除きいずれも河岸に立地している。そこに住む人、訪れた人は解脱できるといわれる。三祖霊供養所（トリスタリー Tristali）：ガヤー Gaya、プラヤーガ Purayaga（アラーハーバード Allahabad）、カーシー（ヴァーラーナシー）。いずれも北インドにあり、ここで供養を受けた祖霊は解脱できるとされる。四大神領（チャトル・ダーマ Catur dhama）：東のプリー Puri、西のドゥワールカ Dwarka、南のラーメシュワラム Rameshvaram、北のバドリナート Badrinath。これらの聖地は、ヴィシュヌ神の化身によりインド世界の四囲を固める形をとっている。

23) Bhardwaj: 1973

24) 山折 : 1981, p.338

25) Bhardwaj :1973, pp.32-33

26) Singh,R.P.B.: 1987。それらは性質により、毎日行うべきもの、聖域を画するもの、方位に関係するもの、水辺に関するもの、特定の神を巡るもの等に分類することができる。

27) クローシャは距離の単位で、諸説あるが R.P.B. シン（1993）は 1krosha ≒ 3.5km とする。「84 クローシャ」は、R.P.B. シンによれば巡礼路の円周距離を表すが、半径が 5 クローシャという記述とは齟齬がある。この名称の解釈についての検討はいまだ行われていない。

28) ヴァーラナシーの別称の一つで「光輝く地」の意。都市を含むより広い領域を指し、特にシヴァ神の聖地としての性質を強調する際に使用される。

29) マディヤメシュワラ寺院は「中心の主」を意味し、ヴィシュワナート寺院が中心寺院と見なされる以前の都市の中心であったとされる。現在もヴィシュワナート寺院の北 1㎞に遺構が残るが（Eke:1993, p.351）、マディヤメシュワラ寺院については、ヴィシュワナート寺院との関係も含め不明な点が多い。

30) Coute: 1989

31) Singh, R.P.B.:1993, p.43

32) Singh, R.P.B.:1993, p.156

33) アンタルグリハは「至聖所」「内陣」を意味する一般的な語である。例えば、図 1-2 に示す三つの巡礼路に囲まれた聖域は、それぞれが中心寺院のアンタルグリハとされる。しかし、ヴァーラナシーにおいて一般に「アンタルグリハ」といえば、中央のヴィシュワナート寺院を囲む最奥の巡礼路とその内側の聖域（ヴィシュヴェシュワラ・カンダ Vishveshvara Khanda。カンダは「領域」の意）を指すため、本論文ではこれを「アンタルグリハ」と呼ぶ。他の二つのアンタルグリハについては、それぞれオームカレシュワラ・カンダ Omkareshvara Khanda、ケダレシュワラ・カンダ Kedareshvara Khanda と呼び区別する。

34)『スカンダ・プラーナ Skanda Purana』の一部であり、カーシー・マーハートミヤの中で最も知られたものの一つ。パンチャクローシーやアンタルグリハなど数多くの巡礼路についての詳細な記述を含む。成立年代には諸説あるが、現在伝わる形に編纂されたのは 12 世紀頃以降という説が有力である（Eck:1980, pp.81-83）。

35) 近藤 :1999, p.59

36)「輪」の意。インドの身体観で、会陰部から頭頂部までの各所に存在するエネルギーの集結部。

37) Singh, R.P.B.:1993, p.54

38) マーハートミヤの一つ、『カーシー・ラハスヤ Kashi Rahasya』の記述に基づく。最内縁の領域で犯した罪は最外縁の巡礼により浄化されるという循環構造をも有する（宮本 : 2007）。

39) Singh, R.P.B.:1993, pp.189-199。

40) Singh, R.L.: 1977, pp.18。

41) スカル Sukul（1977, ch.3）は、パンチャクローシー巡礼路の範囲にガンジス川東岸部が含まれないのは、前 6 ～ 4 世紀頃にその地がカーシー国と敵対するマガダ国の支配下にあったためとする。また同様に、古くから市街地が形成されていたサールナートを含む都市北郊が除かれているのは、北にあったコーサラ国の存在や、サールナートにおける仏教徒の増大等が原因と推測している。パンチャクローシー巡礼路の推定成立年代は、スカルの論じる年代より後代の 13 世紀頃であるが、都市の実質的な勢力範囲は大きく異ならなかったと考えられる。

42) 宮本（1995, p.115）が指摘しているように、巡礼路に言及するマーハートミヤの多くが、12～16世紀というイスラーム支配時代に編纂されていることは注目に値する。現実における危機と観念における肥大は表裏一体であり、マーハートミヤにみる聖地縁起や巡礼作法に関する記述の充実は、イスラーム支配下におけるヒンドゥー教徒の、特にバラモン階層の精神的抵抗運動の一環と見なしうるだろう。各種マーハートミヤの推定成立年代については Hazra（1940）および Eck（1980）に詳しい。

43) 具体的な数値を示す資料は無いものの、ヒアリング調査でも多数の巡礼者がこの２つの巡礼を行なっていることが確認された。チャウラーシークローシー巡礼路は現在、実際に巡礼を行う者はいない。他の巡礼路は修行者や僧をのぞき、巡礼を行う者は稀である。

44) アンタルグリハ巡礼は、「原則として毎日行うべきであるが、それが不可能ならば月に一度新月の晩に、少なくとも年に一度は必ず行うべき」とされている（Singh,R.P.B.: 1993, pp.50）。アンタルグリハ巡礼路に限らず他の巡礼路も、マーハートミヤにより巡礼の頻度や時期が定められている。現地での聞き取りによれば、アンタルグリハ巡礼はシヴァラーティ Shivarathi 祭の日に最も多く行われるという。シヴァラーティ祭は、ヒンドゥー暦 Phalguna（2～3月）の新月の夜に催される、シヴァ神を祀る最大の祭りである。「シヴァラーティ」は「シヴァの夜」を意味する（Eck:1983, p.377）。

45) 本章で扱うアンタルグリハの巡礼地は、Singh, R.P.B.（1993）の記述に基づく。

46) 地下寺院の数はヴァーラーナシー全体の寺院のうち 2.1％を占めるという（Vidyarti: 1979, p.31）。

47) 失われたリンガや神像の代わりにレプリカが設置されることも多いが、事情は変わらない（Gutschow:1994, p.203）。このような「場所性の重視」はヒンディー語でスターナプラダーム sthanapradham と呼ばれ、南アジアに広くみられる現象である。

48) 寺院建築の住居・商店への転用は、しかし宗教的にはタブーとされる（Vidyarti: 1979, p.44）。

49) Sukul: 1977, ch.6。

50) Vidyarti: 1979, p.34。

51) ヴァーラーナシーのモスクは 12c 以降に、ヒンドゥー寺院からコンバートされた事例が多く、コミュニティセンターとしての機能は連続していると考えられるため、図 1-12 では近隣コミュニティの中心となっているモスクも C に分類している。

52) ヴィシュワナート寺院は聖域の中心として巡礼の始点・終点であり、マニカルニカ・ガートは第 1 番目の巡礼地である。ダサシュワメーダ・ガートは聖域の南限を示す。

53) "The City of Bunarus : Surveyed by James Prinsep, 1822" に基づく。主要街路と寺院などの施設、さらにアンタルグリハ巡礼路が記されている。縮刷版が Prinsep（1833）に所収。

54) 街区の名称である「ダルマクープ」は中央の井戸の名に由来する（クープ koop は「井戸」の意）。伝説によればこの井戸は、仏教徒の増大に対抗してカーシーを守っディヴォダーサ Divodasa 王が掘ったものである（Eck:1983, p.155）。ダルマ Dharma という名称から仏教徒によるものという説もあるが（Sherring: 1868, p.85）、どちらも仏教勢力の強かった時代（1～3世紀頃か）に作られたという点で一致しており、井戸の周辺にはかなり早期の段階から居住地が形成されていたと推測される。

第２章
ヴァーラーナシーの居住空間構成とその変容

2-1　はじめに

本章では、ヴァーラーナシーの旧市街中心部を対象として、居住空間の構成と変容に関して考察を行う。前章では、都市に投影されるコスモロジーを表象する巡礼路やヒンドゥー寺院・祠の存在と都市空間との関係について検討を行った。しかし、ヴァーラーナシーは三千年にわたり生きられ続けてきた都市であり、特に12～18世紀には長くイスラーム勢力の支配下におかれた歴史を有している。そのため都市空間を単純にヒンドゥー的宗教理念の反映という視点からのみ解釈することは適切ではない。そこで本章では、都市住民の生活者の側からの視点として、都市の伝統的近隣単位であるモハッラ mohalla[1] と、都市空間の基本構成単位としての住居に注目することにより、ヴァーラーナシーにおける居住空間の構成と変容過程について論じたい。

モハッラは北インド都市に共通して見られる伝統的な近隣単位である。元々は西方イスラーム世界に起源をもつ概念であるが、少なくともムガル帝国時代からイギリス植民地時代まで、モハッラは徴税単位であると同時に住民の自治組織であり、制度的にも日常生活の上でも都市を構成する基本単位であった。都市はモハッラの集合体として捉えられ、市街地拡大は直接的にはモハッラの設立を通じて行われた。その意味でモハッラの空間構成の解明は、ヴァーラーナシーに止まらず、北インド都市の基層構造を把握するにあたって重要な課題である。しかし現在ではモハッラの制度上の意味は失われ、また近年の伝統的社会構造の崩壊にともない、住民活動の組織単位としての機能も薄れつつある。制度上の意味が失われたため、モハッラの範囲や境界を示す図は行政当局も作成していない。本章ではこのような背景のもと、まず既往研究をもとにモハッラの歴史的・社会的背景を整理した上で、ヴァーラーナシーにおけるモハッラの空間的特質を臨地調査に基づき明らかにする。続いて、上記の作業により明らかとなったモハッラの特徴を典型的に表す地区を対象として、実測調査に基づく住居平面の類型化をふまえた上で、より微視的な視点から街区構成を検討するとともに、19世紀および20世紀初頭の地図との比較を通じて街区空間の変容を具体的に明らかにしていきたい[2]。

本章に関連する類似研究としては、まずヴァーラーナシーにおける都市スケールでの宗教・民族グループの居住地配置について論じた S.B. シン Singh（1996）があげられる。考察は断片的ではあるが、都市各部のモハッラの歴史的背景に関する具体的な記述を含んでいる。北インド都市におけるモハッラに関する研究は少ない[3]。社会学・歴史学分野では、ベイリー Bayly（1983）やフライターグ Freitag（1980, 1989）が、18世紀末から20世紀初頭にかけての北インド社会の構造変動を論じる中でモハッラの社会的機能について若干触れている。クマル Kumar（1989）はヴァーラーナシーのモハッラの文化的性格を概括する小論である。これらはモハッラの社会的・文化的背景をある程度描写しうる知見を提供しており、本稿はこれらの成果を前提とするが、いずれも具体的な都市空間との関連では論じられていない。そのような中で注目されるのはブレイク Blake（2002）である。文献史料の分析が中心ではあるが、18世紀のシャージャハナバード Shahjahanabad[4] を事例に、モハッラの形成パターンが時代とともに変化したことを論じている。北インド都市の街区構成については、ジャイプル Jaipur・ラホール Lahore・

アーメダバード Ahmedabad 等について一定の研究蓄積があり、カーストや職業を同じくする集団が街路を軸として近隣単位を構成すること等が共通して指摘されている[5]。本研究はこれらの都市と比較することで、インド都市の空間構成におけるヒンドゥー原理とイスラーム原理の相違に関して考察する知見を提供することも視野にいれている[6]。ヴァーラーナシーの住居に関する研究はきわめて少ないが、いくつかの都市住居の居住実態を図面とともに論じるドゥジョルジュ Degeorges（1989）や弘中（1996）が参考となる。

調査対象とする範囲は、前章で論じたアンタルグリハ巡礼路の内側の領域である（以下「アンタルグリハ地区」とする）。アンタルグリハ地区は、前述のように 12 世紀以降ヒンドゥー教徒の中心的居住地となった地区である。旧市街の中でも最も古くから発展した地区の一つであり、かつイスラーム勢力侵入時の破壊を比較的免れたため歴史的連続性を保持していること、また現在も都心として重要な宗教施設が集中するため居住空間の構成について様々な側面からの検討が可能であることが、調査対象地区として選定した理由である。

2-2　近隣単位・モハッラ

2-2-1　北インド都市におけるモハッラの形成パターン

モハッラの語源は、「幕営地」や「宮殿」を意味するアラビア語の「マハッル mahall」とされる[7]。北インドを含むイスラーム圏で広く用いられ、ヒンディー語では英語の "quarter"、"neighborhood" 等に対応する一般的用語でもある。モハッラという概念／制度は、イスラーム文化のインドへの本格的に流入、すなわちデリー・スルタン朝[8]の確立にともない北インドに導入されたと考えられ、遅くともムガル帝国時代には都市を構成する基本単位として定着していた[9]。既往研究から描くことのできるモハッラの概観は以下のようなものである。

ムガル帝国期のモハッラは、都市行政における公式の徴税単位であるとともに、治安維持・清掃・下水処理・街灯の設置などを独自に行う自治単位であった[10]。モハッラはモハッラダール mohalladar と呼ばれる長に率いられ、祝祭行事や当局との交渉など、公式・非公式を問わず社会活動の組織単位として機能していた[11]。このような社会的機能はイギリス植民地期にも基本的に継承された[12]。しかし、現代では行政単位としての公的側面は完全に失われており、また近年のカースト的分業体制の崩壊にともないモハッラ内の人的結束も弱体化、社会的組織単位としての役割も次第に薄れつつある。

モハッラはその形成要因にもとづいて、いくつかのパターンに分類することができる。ムガル帝国初期には、廷臣や大商人などの有力者の邸宅「ハヴェリ haveli」の周囲に形成されたモハッラ（①）が主要なものであった[13]。モハッラ内には有力者の親族や様々なサービスに従事する多様な階層の人々が集住しており、一種の拡大家族のような構成と結束力を有していた。しかし 18 世紀に帝国が衰退するとこの形式のモハッラは崩壊し、カーストや職業を同じくする集団によるモハッラ（②）へと再編成さ

表 2-1　モハッラの形成パターンと特徴

	①ハヴェリ型	②カースト・職業型	③移住型
時代区分	ムガル帝国初期	ムガル帝国後期〜	—
住民構成	有力者と一族・従者	カースト・職業を同じくする人々	出身地・使用言語を同じくする人々
人的紐帯	パトロン=クライアント関係	同族意識	同族意識
設立経緯	ハヴェリの建設	ハヴェリ型の再編 漸次的都市内移住	都市外からの移住
	未利用地の開発	既存市街地を基盤	未利用地の開発

れていった[14]。以上はブレイク(2002)の挙げるモハッラの分類であるが、これに第三のパターンとして、移住者により設立されたモハッラ(③)を加えることができるだろう。各時代を通じた一般的現象として、近郊村落や他地方からの都市への断続的人口流入があるが、移住者達はその当時の都市外縁部や都市内の未利用地を集団的に占拠しながら新たな市街地を展開し、出身地域や使用言語を同じくする人々により構成されるモハッラを形成していったのである[15]。

これら三種のモハッラは内部の人的構成や設立経緯がそれぞれ異なっており、したがってその空間的構成もまたある程度性質の異なったものであったと考えられるため、ここではこれらを、①「ハヴェリ型」、②「カースト・職業型」、③「移住型」として区別しておきたい。「ハヴェリ型」モハッラは、有力者のハヴェリの建設と並行して形成されたであろうから、「移住型」と同じく、都市内外の未利用地を一定の規模で囲い取り開発する形で行われたであろう。それに対して「カースト・職業型」モハッラは、「ハヴェリ型」の分割・再編[16]、あるいは漸次的な都市内移住を通じて形成されたことが推測され、いずれにせよ既存市街地をベースとして成立したと考えられる。人的構成としては②③が類似し、設立にともなう都市空間の変化は①③が類似する(表 2-1)。

モハッラの空間的特徴に関する史料は乏しい。前述のように「ハヴェリ型」は石造の立派なハヴェリの周囲に形成されていた。その他のモハッラが具体的にどのような空間的特徴を有していたかは明らかではないが、少なくも一般にモハッラは防衛のための門を備えていたとされる[17]。また、北インドの諸都市において近隣単位が街路を軸とした両側町的構成をとることは指摘されており[18]、これは後述するようにヴァーラーナシーにおいても確認された。

2-2-2　ヴァーラーナシーのモハッラ

ヴァーラーナシーの都市形成過程については前章で論じたが、モハッラの形成との関わりいう観点から、ここでもう一度ふりかえっておきたい。

都市形成史上の大きな変化は、12世紀に始まるイスラーム勢力の侵入である。都市に大量移入したムスリムは、当時都市の中心であった北部一帯(オームカレシュワラ寺院周辺)を占拠し市街の大部分が破壊された。それに押し出される形でヒンドゥー教徒は中部(ヴィシュワナート寺院周辺)へと移り、都市域が大幅に拡大した。南部(ケダレシュワラ寺院周辺)はより後代に、主に南インドとベンガルからの移民によって都市化が進んだ[19]。16〜18世紀にはムガル帝国の版図拡大にともない、北インドの

文化・交易センターであったヴァーラーナシーには、他地方や周辺村落から多くの人口が流入し、これらの移住者とムスリムが都市形成に大きな役割を果たした[20]。市街地の拡大は都市外からの移住や大規模な都市内移動を主たる契機として引き起こされ、直接的には既存市街の周縁部に新たなモハッラが設立されることによって進行したのである。

1738年にはヴァーラーナシーを首都とするヒンドゥー系藩王国が成立するが、ほどなくイギリスの支配下におかれる。18世紀以降はイギリス植民地時代であると同時にヒンドゥー文化の復興期であり、都市はヴィシュワナート寺院一帯を中心に大きく発達した。新市街（カントメント地区）の建設や鉄道の敷設、旧市街を貫く広幅道路の整備、当時まだ都市内に散在していた湖沼の干拓と市街化などの変化がもたらされた。

1828年のセンサスによれば、都市部人口181,482人に対し369のモハッラが存在した[21]。平均すると1モハッラに約500人となる。現在の最小行政単位はより広域の「区 ward」であり、モハッラは公式の単位ではないため統計資料には表れてこないが、クマルは警察署資料を元に8つの警察管区毎に人口1,000人程度のモハッラが約50あるとする[22]。クマルの数字は大まかではあるが、1828年の記録と単純に比較すれば（対象範囲は概ね一致する）、人口密度は約2倍になったが、モハッラの数は1割程度の増加ということになる。

他都市と同様に、近隣単位としてのモハッラの弱体化という一般的傾向は見られるものの、ヴァーラーナシーはモハッラの伝統が今なお根強い都市である。現在でもほとんどの祝祭行事はモハッラを組織単位として行われており、祝祭は各モハッラが激しい対抗意識を燃やしながら熱狂的に催される。またムスリムの間では同一モハッラ内での婚姻が奨励される事例が今も見られるという[23]。モハッラには通常二、三の支配的なカーストが存在するとされ[24]、大通り沿いの新興商業地は別であるが、旧市街の店舗や工房を見ると、同一職業が街路毎に集中する傾向は明白である。

2-2-3　アンタルグリハ地区の構成

次節以降の考察の前提として、調査対象とする地区の市街化プロセスと宗教別の住み分け、街路構造について、大まかに整理しておきたい。

(1) 1822年の状況

図2-1は1822年の地図に示されたアンタルグリハ地区の様子である。1822年の地図では街区毎にパッカ pukka（石造・レンガ造）／カッチャ kachcha（土造・日干しレンガ造）という建物の構造区分が示されている。現在では全域にわたって、2～5階建ての石造・レンガ造またはRC造の建物によってほとんど隙間無く埋め尽くされているが、1822年にはアンタルグリハ地区内でも、場所によって市街化の度合いには差があったことがわかる。パッカの街区には複層の建物が建て込み、現在見られる高密な市街地がすでに形成されていた一方で、カッチャの街区は低層の建物からなる比較的疎らな市街化の遅い部分であったと考えられる。主にヴィシュワナート寺院周辺から東・北部にかけてパッカの領域が広がり、西・南部の街区は大部分がカッチャである。調査地区西南部には大きな池と空地があり、

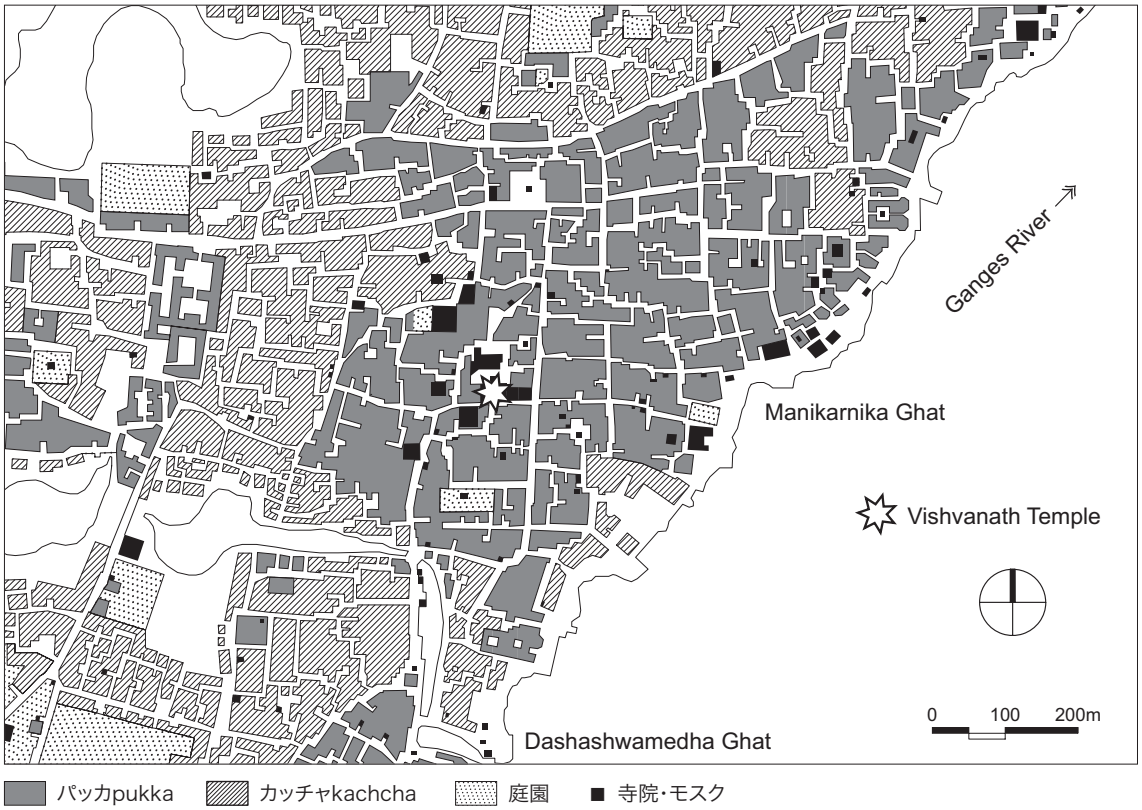


図 2-1　アンタルグリハ地区の 1822 年の状況

"The City of Bunarus : Surveyed by James Prisep", 1822 に基づき作成

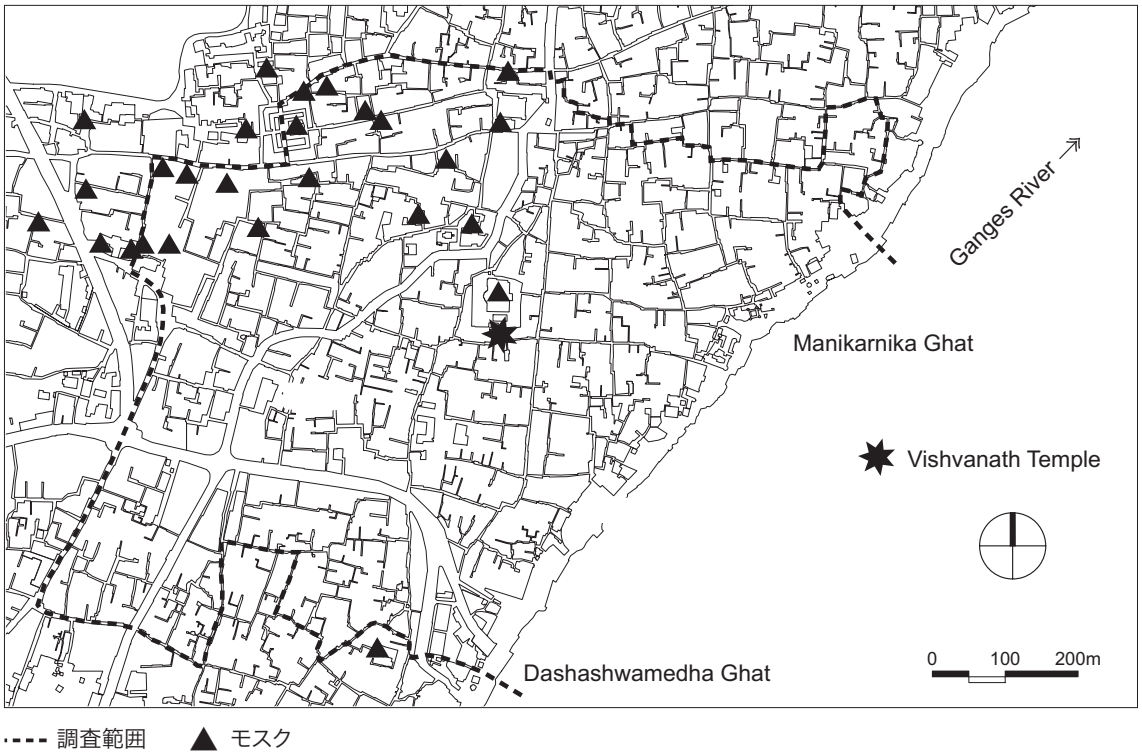


図 2-2　アンタルグリハ地区の現況

そこからガンジス川へと注ぐ水流がみられるが、この池と水流は19世紀末から20世紀初頭にかけて埋め立てられ、現在では旧市街で最も繁華な大通りとなっている。

(2) 宗教別の住み分け

ヴァーラーナシーではヒンドゥー教徒とムスリムは基本的に居住地を別としており、モハッラは大きくヒンドゥー教徒とムスリムのモハッラに分かれる。この住み分けの状況は、宗教施設の分布によって把握することができる[25)]。調査地区内では、モスクの分布する西北部一帯がムスリム住民の支配的な居住地であり、その他の大部分はヒンドゥー教徒の住民によって占められている(図2-2)。

(3) 街路構造

調査地区の街路は極めて複雑に入り組んでいる。19世紀末から20世紀初頭に建設された車両の通行可能な広幅道路(幅15m前後)を除けば、街路幅員は1.5〜5m程度である。しかし、終日交通のたえない2m幅の路地がある一方で、周辺住民以外ほとんど利用しない5m幅の街路もある。街路幅の局部的な変化も多く、また街路幅員を狭めるような沿道住居の増改築もしばしば見られるため、本稿では幅員に基づく街路の階層化は避け、以下のような図式的操作により、調査地区の歴史的な街路構造の把握を試みる。

① 19世紀末以降に街区を貫いて建設された広幅道路を消去し、

② 袋小路(①の結果、袋小路となるものも含む)を消去する。

③ 残った街路の内、便宜的に150m以上の長さで連続する街路[26)]を、相対的に重要度の高い一次街路と見なし、それ以外を二次街路とする。

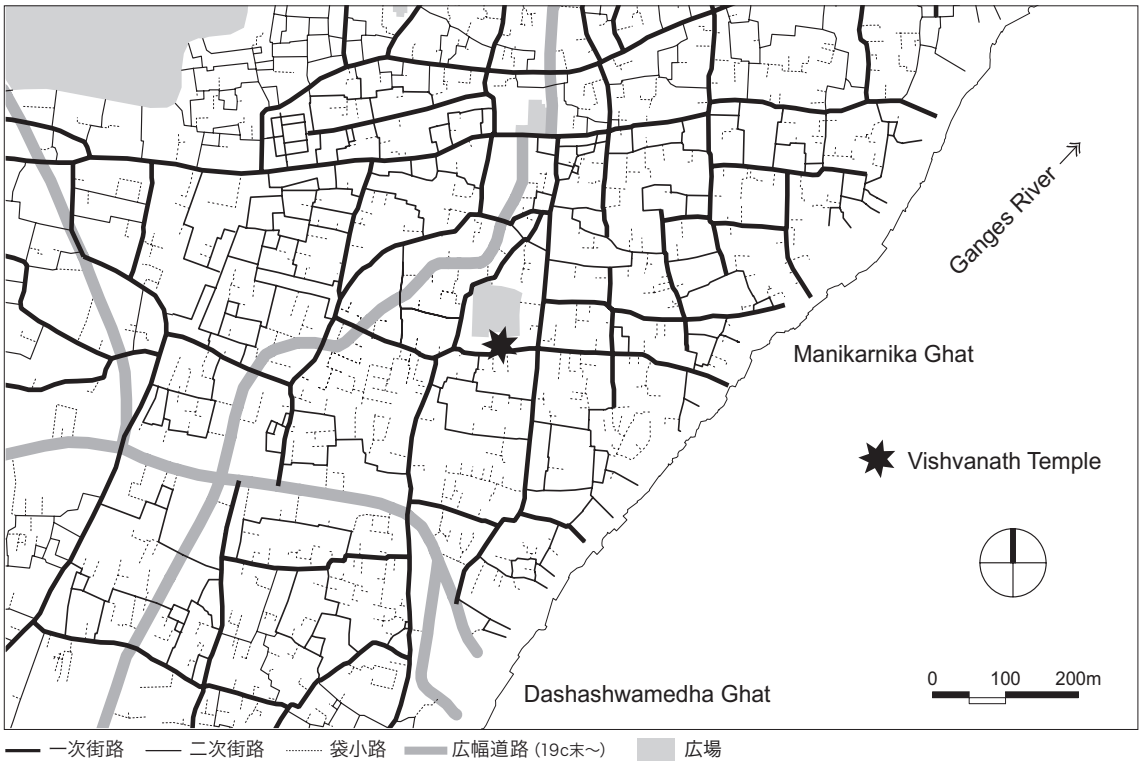


図2-3　アンタルグリハ地区の街路構造

こうして得られた街路図（図 2-3）からは、古くから市街化の進んだヴィシュワナート寺院東部では地形に沿って歪みつつも比較的整った一次街路の構造が見られる一方、南部と特に北・西部のムスリム居住地では、複雑に屈曲した二次街路によって街区が細分されていることがわかる。

2-3　モハッラの空間構成

一般に、ある住居の属するモハッラはその主入口が面する街路によって決定され、街路はモハッラの名称で呼ばれる [27]。逆に言えば、あるモハッラは一定の範囲の街路を共有する住居群によって構成されている。

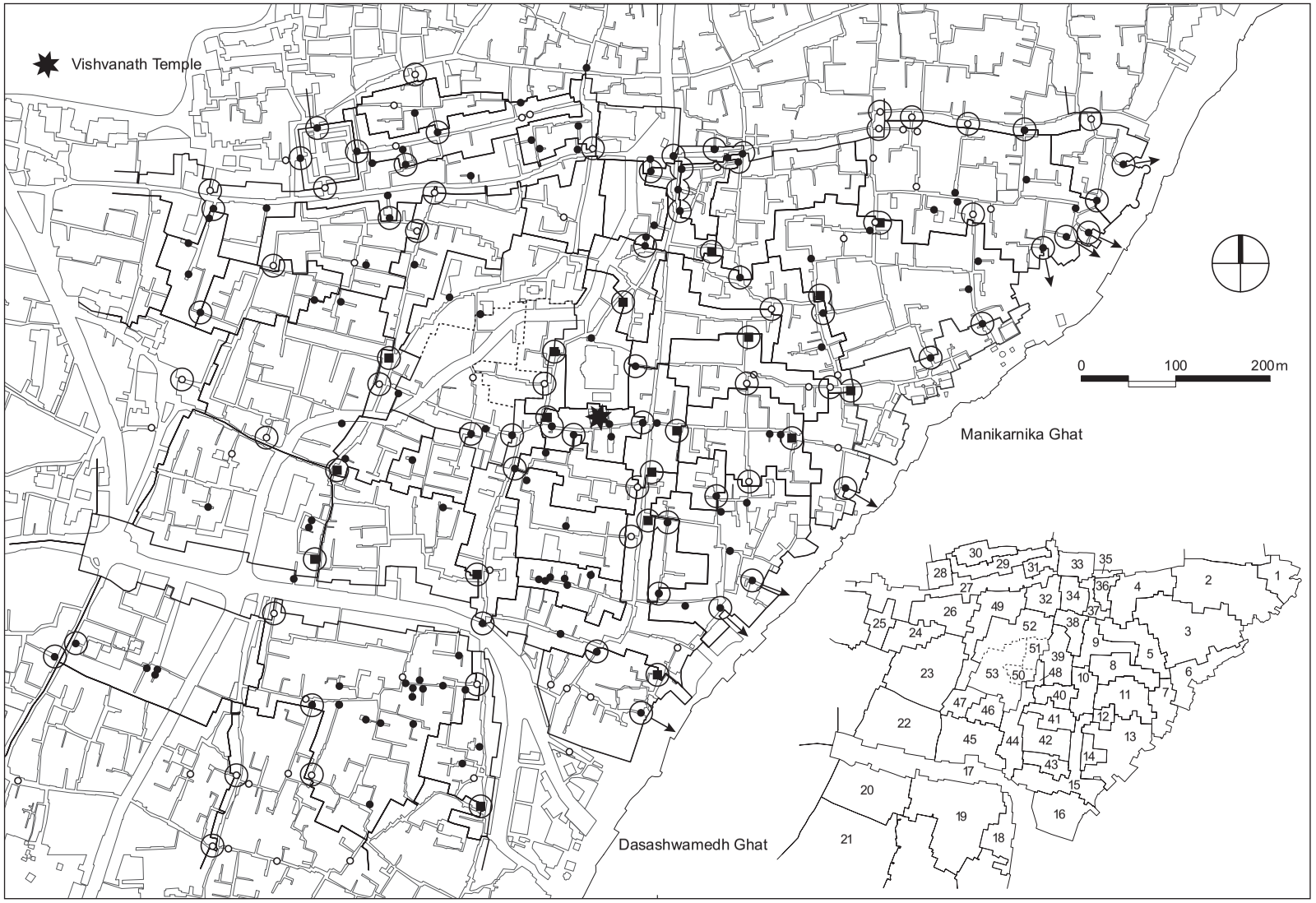
臨地調査では、モハッラの名称とその範囲・境界を明らかにする作業を行った（図 2-4）。具体的にはまず各街路について、その街路の属するモハッラ名称を周辺住民にヒアリングで確認するとともに、隣接するモハッラとの境界の位置およびその境界を示す要素の有無について確認を行った。モハッラの占める面的な範囲は、そのモハッラに属する住居群の敷地境界線をつなげる形で描くことができる。したがってモハッラの境界線の大部分は、住居の奥つまり街区 [28] 内部に引かれることになる。しかし、そのような街区内の敷地境界は街路上から視認することができないため、1929 年の地図および航空写真 [29] を基に街区内の敷地境界線を推定し、それを繋げる形でモハッラの境界線を描いている [30]。

調査の結果、調査対象地区内で 53 のモハッラが確認された（図 2-4）。1929 年の地図では同地区で 52 のモハッラ名が確認でき、そのうち 47 は現在のものと一致している [31]。モハッラの数と規模に大きな変化はないと考えてよい。

2-3-1　境界の形式

街区内の境界は視認できないため日常生活で意識されることはほとんどなく、モハッラの境界は実質的には全て街路上において認識される。境界の形式として、最もよく見られるのは街路の交差点が境界となるケースである。モハッラは原則として街路を軸とした両側町的構成をとるため、街路そのものがモハッラの境界となることは稀である。しかし街路がモハッラ境界となっている事例が、西・南部においていくつか確認された（図 2-4：#22/23、#22/45、#20, 21 西側の各境界。# 数字は図中のモハッラ番号に対応。以下同）。

モハッラの境界部にはしばしば門（図 2-5：左）が設置されており、文献の記述と一致することが確認されたが、門の分布には一定の偏りが見られる（図 2-4）。東・北部には比較的数多く分布し、そのほとんどがモハッラの境界を示すものである。他の門の多くはモハッラ内のより私的な袋小路の入口に設けられたものである。西北部のムスリム居住区と南部にはこの種の門が多い。かつてほとんどのモハッラにあったという門は、治安維持業務が行政に移行した結果、次第に撤去されつつある。現在残る門にも扉の無い門構えのみを残すものが多いが、19 世紀には多くのモハッラに門が備えられ、モハッラ



—— モハッラの境界　■ 境界を示す寺院・祠　● 境界を示す門 (現存)　○ 境界を示す門 (1822年)　● 門 (現存)　○ 門 (1822年)　↘ 河岸への門

図 2-4　モハッラの分布と境界形式

No	モハッラ名	面積 *
1	Patni Tola	72
2	Siddheshwari	277
3	Garbasi Tola	284
4	Sukh Lal Sahu	123
5	Brahmanal	105
6	Manikarnika	98
7	Lalita Ghat	66
8	Neel Kanth	87
9	Nepali Khapra	78
10	Saraswati Phatak	61
11	Lahori Tola	107
12	Dharmakoop	24
13	Meer Ghat	174
14	Gali Derh Mall	33
15	Tripura Bhairvi	143
16	Man Mandir	120
17	Dasashwamedh	420
18	Bhuteshwar Gali	80
19	Agast Kunda	343
20	Lachhman Pura	213
21	Jangambari	-
22	Baradeo	234
23	Hauz Katora	242
24	Pathar Gali	76
25	Purani Adalat	52
26	Chahmehman	113
27	Dal Mandi	-
28	Naya Chauk Bazar	37
29	Chattatala	78
30	Bandi Tola	55
31	Naryal Bazar	38
32	Kundigar Tola	61
33	Chauk	52
34	Chaparia Gali	51
35	Rani Kuan	11
36	Kunj Gali	30
37	Kachauri Gali	30
38	Rajgir Tola	50
39	Gyan Bapi	83
40	Vishwanath Gali	47
41	Kalika Gali	56
42	Shakarkand Gali	89
43	Rani Bhawani	45
44	Shakshi Binayak	92
45	Terhi Neem	155
46	Nichi Brahma Puri	50
47	Bhandari Gali	47
48	Dhondhi Raj Binayak	16
49	Ghughrana Gali	135
	Bansphatak	
50	Aparnath Gali	24
51	Gali Nandu Pharia	32
52	Adi Bisheshwar	115
53	Kotwal Pura	130

* 図 2-5 を元に算定。単位：100 ㎡

毎に雇われた門番が毎夜門を閉鎖していたという[32]。1822年の地図には街路上に設けられた門が図示されており、その位置を現在の地図上にプロットすると、大半が臨地調査により得られたモハッラ境界と一致することがわかった（図2-4）。このことは調査結果の妥当性を一定程度裏付けるとともに、門が失われてもモハッラの境界は変わらず意識されていることを意味する。また門については、川沿いでは市街から河岸へ至る境界に多く設けられている点は注目される。これは第一には川からの侵入に対する防衛上の理由が考えられるが、それに加えて、川岸の場所が特定のモハッラに属していないこと、すなわち都市全体に共有される公的な場として意識されていたことを示すと考えられるからである。

門が無いところでは寺院・祠が境界を示す場合が少なからずあり、門による物理的な境界に対し、象徴的な境界を示すものと考えられる（図2-4、図2-5：右）。これらの寺院や祠が「境界神」としての性格をもつかは確認できていないが、モハッラの中心的寺院・祠が境界部に位置するケースもあり（図2-6）、近郊村落で一般に祀られている境界守護神との関連が伺われる[33]。

19世紀末に建設された広幅道路との関係には二通りのパターンが見られる。#50～53一帯は現在では広くBhansphatakとも呼ばれている。これは広幅道路が街区を貫通する形で建設された結果、従前のモハッラが統合された事例と考えられる[34]。その一方で#20～23においては、広幅道路がモハッラ内を横切っているにもかかわらず、モハッラの範囲にはほとんど影響を与えていない[35]。

2-3-2　名称の由来

モハッラの名称の由来は様々であるが、モハッラの特徴や設立経緯ひいては都市の歴史的変遷を推測する手がかりとなるものとして、①人物名、②地形・自然要素、③施設、④住民の来歴、等がある。

①人物名：そのモハッラの設立に関わった人物や主要なパトロンであることが多い。#4 Sukh Lal Sahu（18～19世紀の著名な貿易家）、#16 Man Mandir（16～17世紀のアンベール Amber 王マン・シン Man Singh）、#43 Rani Bhawani（18世紀のナトール Natore の有力地主）等があり、そのモハッラの

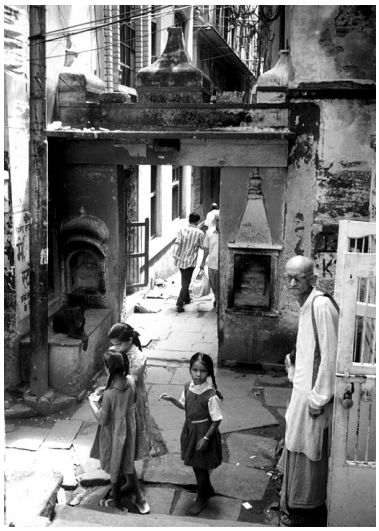


図2-5　モハッラの境界を示す門と祠

設立年代や住民構成をはかる一つの目安となる。

②地形・自然要素：かつてその場所にあった池や川がモハッラ名に残ったもので、モハッラの設立経緯をより直接的に示唆している。#5 Brahmanal、#19 Agast Kund、#23 Hauz Katra 等がある[36]。これらのモハッラは 18～20 世紀初頭に池や川を埋め立てた上に形成されたものである。名称には表れていないが #17 Dasashwamedh もまた、19 世紀まで池と水流であった場所が市街化されたものである。

③施設名：最も多いのはモハッラ内にある寺院・祠である（#2, 8, 15, 18, 21, 22, 40, 41, 44, 47, 48, 49, 50, 52）。名称の由来となる寺院・祠はモハッラの中心的施設と見なされており、近隣住民により日常的に参拝される。この他にモハッラ内にあるガート[37]（#7, 13）や井戸（#12, 26, 35, 39）、門（#10）、市場（#28, 31, 36）などに由来するものがあり、それぞれモハッラの核となる重要施設を示している。また②に類似した事例として #24 Purani Adalat（「古い法廷」の意）がある。1822 年の地図では対応する範囲全体が中庭をもつ大規模な石造の建物によって占められており、かつて法廷であった敷地が細分され、モハッラが形成された事例と考えられる。現在は住宅地であるが、かつての中庭へ通じる巨大な門状の構造が今も残っている。

④：住民の来歴：#3 Garbasi（「砦の住人」の意）Tola の名称は、12 世紀にムスリム勢力が侵入し都市北部ラージガートにあった砦が破壊された際、そこに住んでいた人々がこの一帯に移り住んだことに由来するとされる[38]。

2-3-3　モハッラ内の諸施設

住民の多くが日常的に参拝しモハッラの中心と見なされる寺院・祠（ムスリム居住地ではモスク）の存在は、28 のモハッラで確認された（図 2-6）。中心的宗教施設が複数あるモハッラもあり（#4, 9, 52）、住民の宗教生活が必ずしも一様ではないことを伺わせる。

大半のモハッラでは、狭隘な路地の入り組んだ奥に小規模な広場があり、モハッラの中心的宗教施設がしばしばそこに隣接する。小広場はモハッラ共有の公的空間であり、日常的には周辺住民の交流の場として、また祝祭時には仮設の舞台やテントが設置される野外アリーナとして活用される。

生活用水の供給源は 20 世紀初頭までは井戸が主であり、このような小広場あるいは袋小路奥に設置されていた。1828 年と 1929 年の地図で確認できる井戸の数は多いが、その分布は一様ではない（図 2-7）。特に地区東部では、街路に面した井戸が比較的少なく、街区内の井戸が多い。これは歴史の古いパッカの領域では住宅内に井戸を備えた裕福な家庭が多かったことを意味し[39]、住民の階層差を伺うことができる。

調査地区のモハッラの全てが必ずしも上記要素を欠かさず備えているわけではないが、これらの要素が近隣単位としてのモハッラを支える標準的な施設セットであったといってよいだろう。

2-3-4　規模と形状

一本の街路沿いの 1,000 ㎡程度のもの（#35）から、多数の街路からなる 30,000 ㎡を超える巨大なも

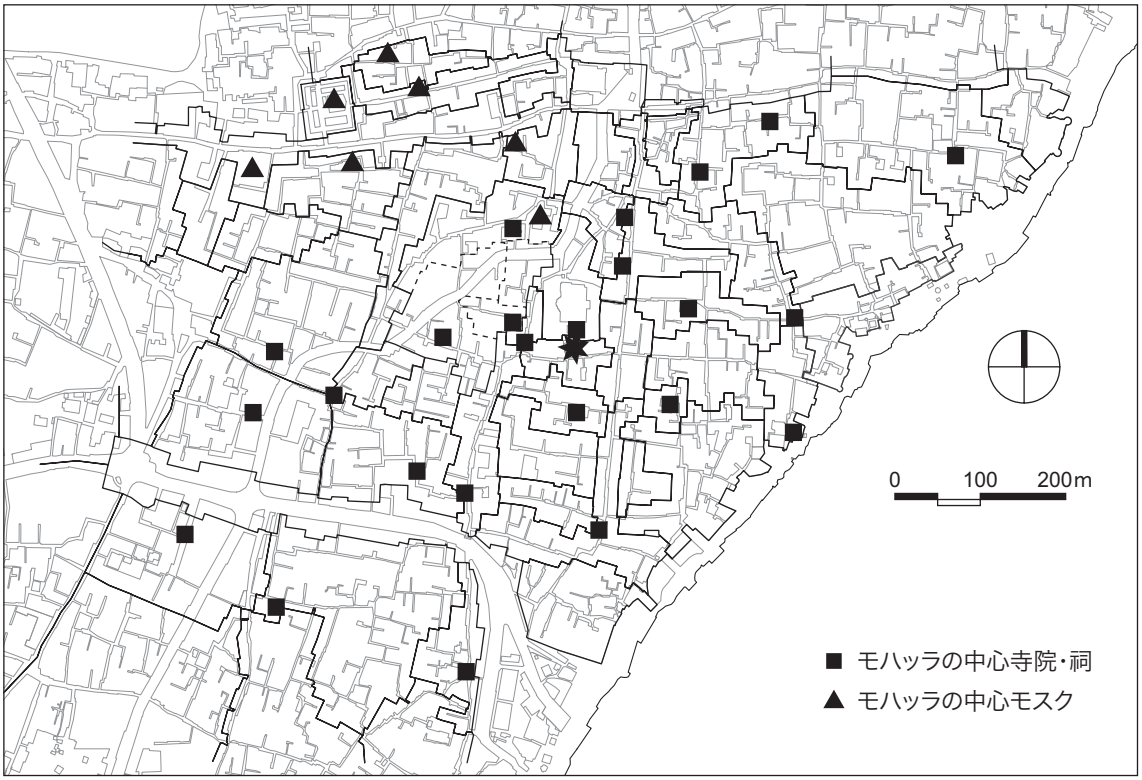


図 2-6　モハッラの中心的宗教施設の分布

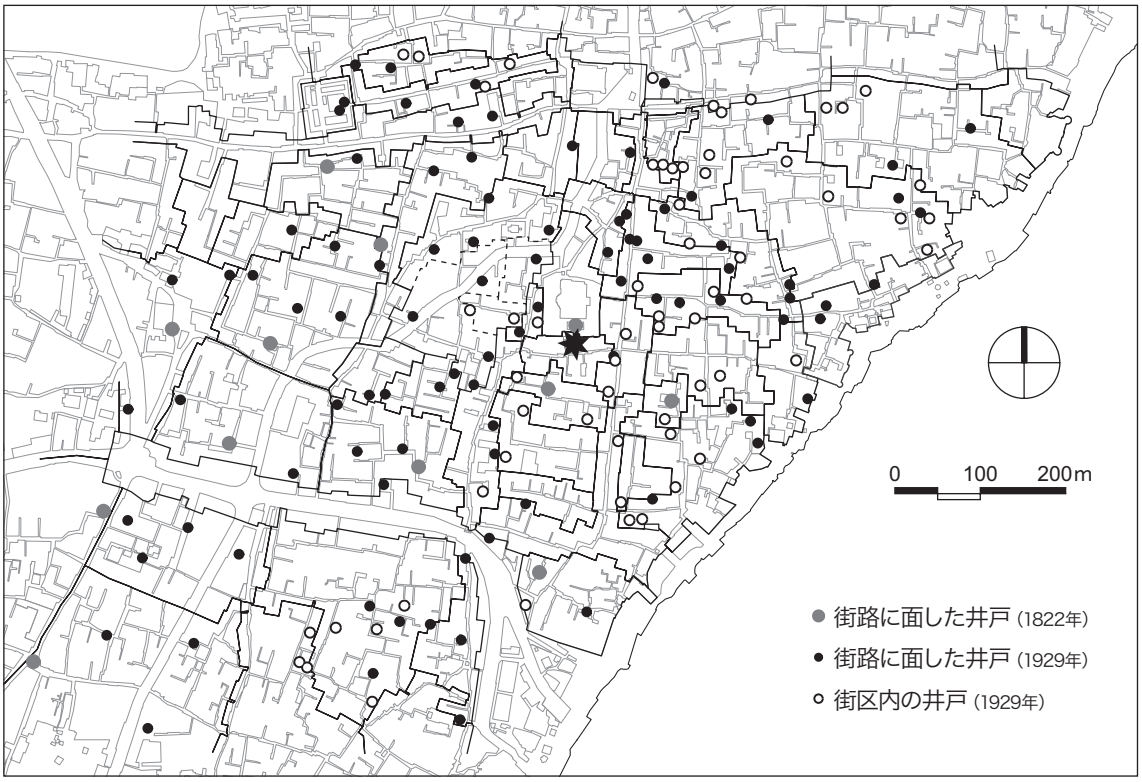


図 2-7　アンタルグリハ地区における井戸の分布

の（#19）まで、モハッラの規模にはかなりの幅がある。図 2-5 からは、調査地区中心部のヴィシュワナート寺院近傍では規模が小さく、周縁部（特に西・南部）において規模が大きくなる基本的傾向が見てとれる。また、モハッラの形状と街路構造に注目すると、中心部では主軸となる一次街路とそこから分岐した袋小路沿いに構成された線状（あるいはツリー状）のモハッラが多いのに対し、周縁部では複雑に交錯する二次街路を覆う面的広がりを有するモハッラが多い。ここで、線状（ツリー状）の比較的小規模のモハッラを「街路型」、面的形状をもつ中規模以上のモハッラを「領域型」とすると、前者が中心部に後者が周縁部に集まる構図は明瞭である（図 2-8）。

2-3-5　モハッラの二類型

このような「街路型／領域型」モハッラの分布状況は、図 2-1 に示したパッカ／カッチャ区分と概ね一致しており、モハッラの設立経緯やその当時の市街化の度合いを反映したものと考えられる。調査地区一帯はヴィシュワナート寺院を中心として市街化が進行してきた。モハッラの範囲・境界は時代

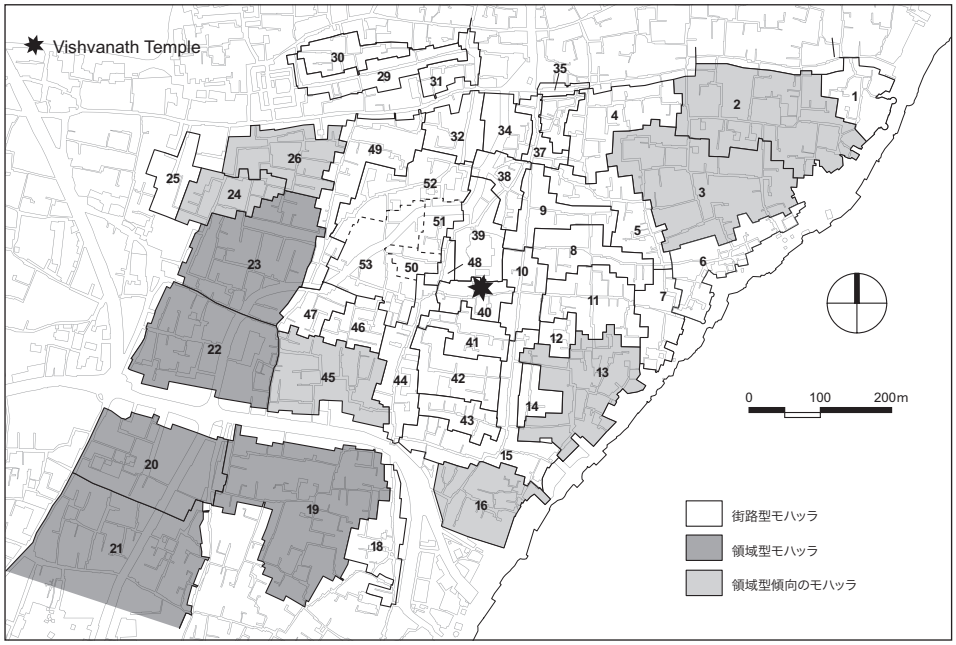


図 2-8　街路型モハッラと領域型モハッラの分布

表 2-2　街路型モハッラと領域型モハッラの特徴

	街路型	領域型
モハッラの規模*	比較的小規模（68）	中規模以上（203）
モハッラの形状	線状／ツリー状	面的形状
街路構造	一次街路とそこから分岐する袋小路	複雑に屈曲する二次街路
境界の特徴	主に街路交差点	街路が境界となることがある
市街化の歴史	比較的古い	比較的新しい
推定形成過程	既存街路沿いに形成	移住者により新規開拓地に形成

*（）内は類型毎のモハッラの平均面積（単位：100 ㎡）。「領域型」には「領域型傾向」も含め算出。

の中で様々に変遷してきたであろうが、少なくとも現在あるモハッラが成立した際に、すでに高度に市街化し街路が発達していた場所では、その街路を軸としてモハッラが形成されたと考えられる。寺院近傍に集中する「街路型」モハッラはこのような経緯に対応するであろう。それに対して「領域型」モハッラは、歴史的に市街化の遅かった地域に分布する。#19, 20, 22, 23また45の一部は、池や水流を埋め立てて開発された場所である。#2, 3は1822年のパッカ領域に含まれ市街化は比較的早かったと思われるが、#3の名称の由来から都市内移住者による設立経緯が伺われる。つまり「領域型」モハッラは、既存市街地外の森や池の開発と並行して集団的移住による市街化が行われたケースに対応したものと考えたい。そのような場合、まず新居住地の大まかな領域が設定され、その後内部の街路や住居を発達させていったというプロセスが推測されるからである。2-4-1で述べた街路が境界線となる事例が「領域型」モハッラでのみ見られること、広幅道路建設に対する関係が「街路型／領域型」で異なることも、上記の推論を支持するものと考えられる。

以上のように、モハッラの規模や形状、門・井戸の分布、街路構造など、調査地区で見られる各モハッラの空間的特徴の相違点の多くは、1822年の地図に示されたパッカ／カッチャ区分と関連づけて解釈することができる。早くから高度に市街化の進んでいたパッカの領域と、比較的近年に市街化の進んだカッチャの領域とでは、都市の成り立ちが基本的に異なっており、それがモハッラの空間構成にも色濃く反映されているといってよい。各モハッラのカースト・職業構成や住民の来歴に関する詳細なデータがないため、2-2-1で示したモハッラの三つの形成パターンと、本項で論じた「街路型／領域型」の類型とを単純に結びつけることはできないが、その設立経緯の類似から「カースト・職業型」と「街路型」、「移住型」と「領域型」とが対応する可能性は指摘できるだろう。

2-4　住居の基本構成と住居類型

本節では、都市空間の基本的構成単位としての住居に注目する。まず、ヴァーラーナシー近郊村落における住居を検討することによって地方的特色と都市住居の原型の把握を行なう。続いて、ヴァーラーナシー旧市街中心部で18～19世紀に建設された大規模住宅ハヴェリの典型例の構成を検討しながら、住居の基本的構成を抽出する。それらをふまえた上で、次節に検討する街区空間の変容プロセスに関する考察の前提として、ヴァーラーナシー旧市街における住居平面の類型について論じたい。

2-4-1　近郊村落の住居

先に見たように、1822年の地図には街区毎にパッカとカッチャの構造区分が領域的に示されている。パッカの領域には石造あるいはレンガ造の複層の建物が建て込み、高密な市街地が形成されていた一方で、カッチャの領域は都市化があまり進んでおらず、日干しレンガと土でできた低層の建物が疎らに建ち並ぶ半村落的なものであったと考えられる。19世紀初頭の段階では、ヴィシュワナート寺院周

辺と東・北部のガンジス川沿いを除いた大部分がカッチャであった。そのカッチャの家屋群が19世紀後半以降、次第にカッチャへと建て代わりながら、現在の市街地が形成されてきたのであるから、都市住居成立の背景に、原型としての村落住居の存在を考慮する必要があるだろう。以下に、ガンジス川中下流域の農村住宅に言及する数少ない著作の一つである米倉二郎の『インド集落の変貌』[40]、および事例は少ないながらもヴァーラーナシー近郊の村落住居を実測図面に基づき論じる弘中（1996）[41]によりながら、同地方の村落住居の基本構成を概括したい。

ヴァーラーナシーの位置するウッタル・プラデーシュ州東部、ガンジス川中流域の村落では、厚い土壁でできた家屋で囲い込まれた「アンガン angan」と呼ばれる中庭をもつ住居が一般的である。住居の形態は矩形で、瓦葺きあるいは草葺きの一階建てが主である。土壁の厚さは1m近くに及び、防犯と家族のプライバシーに対する配慮から、外部に面して窓はほとんど設けられない。内部は必要に応じて室に区切られるが、各室のサイズは概ね短辺で3mを越えることはない。長大な建築材料が少なくまた高価であることが影響している。特徴的な建築的要素は、瓦葺きまたは草葺きの庇がかかった半屋外スペース「ヴェランダ（ヒンディー語ではバラーンダー baramda）」である。通常、玄関の前に「外側」のヴェランダがあり、男性達の居場所や作業場、接客の場として用いられる。また、中庭に面して「内側」のヴェランダが設けられることがある。こちらは女性の居場所、寝室、炊事の場となり、その付近が食事の場となる。この他にも大部分の家事はこの内側ヴェランダで営まれる。このような中庭式住

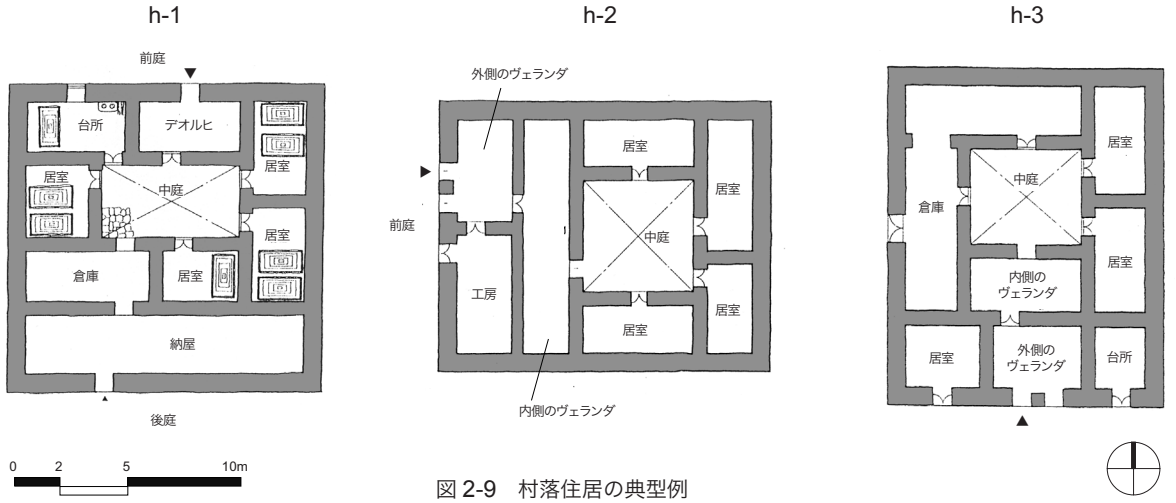


図 2-9　村落住居の典型例

弘中（1996）所収の図に加筆

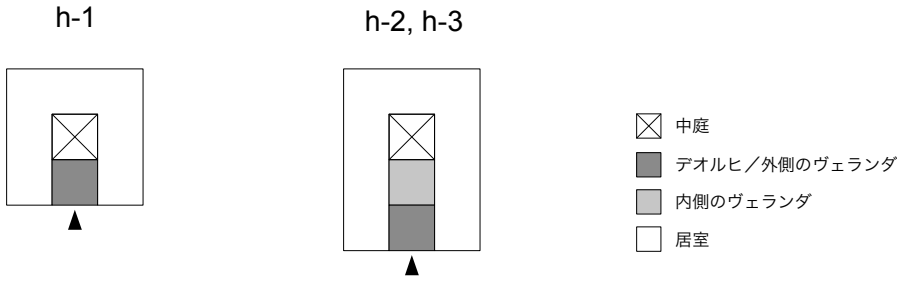


図 2-10　村落住居の空間構成モデル

居の成立過程を、米倉は部屋数の増加から以下のような五段階にわけて発達史的に論じている[42)]。

①最初は矩形の単室で、長辺 4.9～7.3m、短辺 1.8～2.4m、住居の前面には盛り土で地上げしたプラットフォームが設けられる。これに屋根がかけられ、ヴェランダになっていることもある。

②次段階では、横にもう一室加わり二室住居となる。

③三室になるとL字型になる。室数の増加に従って室の機能分化が生じ、第三室は男性の居間や客間となる。

④四室住居ではU字型となる。開いた庭は三方が室で囲まれ、残る一方も壁によって外部と仕切られる。完全な中庭が生じる。入口は北または東にある第四の壁に設けられる。

⑤五室住居では先の第四の壁の場所が室となる。「デオルヒ deorhi」と呼ばれる住居の入口の室である。デオルヒには、家の外部と中庭に通じる二つの扉があり、外に通じる玄関扉と中庭に通じる内側の扉はずらして配置され、二つの扉を開け放った状態でも、外部から中庭を見通すことができず、住居内部のプライバシーを保つことのできる仕掛けとなっている。

このロ字型の第五段階の形式が、ガンジス川中流域の農村地帯に見られる一般的な住居である。これを基本型として、周囲に室が付け足されて住居規模が拡大していくのであるが[43)]、その典型事例は図 2-9のようである。h-1は基本型の後部に納屋が付属した事例である。半屋外空間であるヴェランダはなく、デオルヒが男性の作業場兼居間となり、中庭が女性の作業場である。家の前庭も農作業や家畜の飼育の場として活用される。いくつかの居室には、パタン patan またはコッタ kotha と呼ばれるロフト状の収納空間が設けられており、これは二階造りの原型といわれている。h-2と h-3では、デオルヒが見られない代わりに、前庭と中庭の間に扉で区切られた「外側」と「内側」の二つのヴェランダが設けられている。前述したように、前者が男性の空間として作業や接客の場となり、後者が女性の空間となる。

住居の諸要素の配置ついては、方位の指向性も指摘されている。図 2-9の事例はそれぞれ北・西・南向きであるが、米倉は、一般に家の向きは北あるいは東が喜ばれ、南または西向きは避けられるとする。また大規模な住居では、中庭内に井戸や便所が設けられることがあるが、井戸の位置も家の西側・南側は不吉とされ、中庭の東北隅か西北隅に設けられる。便所は南西隅である。同様に家畜小屋も家の前面、すなわち北か東側におかれるという[44)]。

村落住居について注目されるのは、外部からヴェランダあるはデオルヒを経て私的な中庭へと至る、公／私と外／内の段階的構成である。また、それと対応した男女の空間的分離である。窓がほとんどなく狭い居室内は、主に家財の保管や暑季以外の睡眠に用いられるのみで、日常生活のほとんどは、中庭や前庭といった屋外、あるいは両者に面した半屋外空間のヴェランダで営まれるのが大きな特徴である。村落住居の空間構成は、中庭・デオルヒ・ヴェランダ・居室の要素に分けて、図 2-10のように図式的に表すことができる。今日のヴァーラーナシー都市部で見られる住居の基本型もこのような中庭式住居であり、村落住居と同様に中庭に面した半屋外空間が重要な役割を果たしている。

2-4-2　ハヴェリ

都市部にある住居のうち、インド各地の王侯貴族や豪商によって建設された大規模な邸宅は「ハヴェリ」と呼ばれる。これらのハヴェリは中庭を中心とした極めて明快な平面をもち、ヴァーラーナシー都市部の中庭式住居の典型的な空間構成を見ることができる。ハヴェリは18～19世紀にかけて多く建設され、現在もいくつかが旧市街の各地に残っている。文献から平面および断面構成を確認できるハヴェリの典型例を示すと図2-11、表2-3のようである。諸室の機能については不明な部分も多いため、ここでは中庭を中心とした室の配置構成に焦点を絞って共通する特徴を整理すると、以下のような点があげられる。

①建物の輪郭は基本的に矩形であり、石造またはレンガ造の3～4階建てである（塔屋を除く）。

②中軸線を有し、方形の中庭を中心とした基本的に左右対称の室構成である。

③街路からは、エントランスとなる小さな部屋（デオルヒ）を経て中庭にアプローチする。

④中庭は中軸線上に位置するが、若干エントランス側に偏って配置され、その結果狭くなった側に階段やトイレが集中して設けられる。

⑤中庭に面して「ダラン dalan」と呼ばれる列柱と段差で区切られた半屋外的な広間が設けられる。

⑥上層階では中庭に面して庇のかかったオープンな回廊が設けられる。

⑦屋根は陸屋根であり、最上階あるいは屋上にテラス状のオープンスペースが設けられる。

外部に対しては、全体サイズに比して小規模なデオルヒのみでつながるという、基本的に閉じた形をとっている。高密な市街地の中で安静な私的空間を確保するためであろう。その一方で、内部では中庭を中心にダランや回廊といった半屋外空間を設けることにより、可能な限り諸室を屋外スペースと連続させ、光や通風を得ようとする工夫を見て取ることができる。ダランは村落住居における「内側」のヴェランダに対応する要素であるが、より大規模かつ開放的である。数は二つの場合もあるが、エントランス側を除く三方に設けるのが基本型であろう。平面構成を図式化すると図2-12となる。中庭の四方にダランとデオルヒが配され、その周囲を諸室が取り囲むという明快な構成である。全体の中でダランの占める割合が大きいのは、ハヴェリが貴族階級の邸宅であり、接客の場としての公的な性格を備えていたためであろう。次項以降で見るように、一般の住居はハヴェリよりもずっと規模が小さく、中にはダランやデオルヒを欠くものもあるが、その基本的構成はハヴェリとほぼ一致する。広い敷地に余裕をもって整然と計画されたこのようなハヴェリは、ヴァーラーナシーの都市住居の理想

表2-3　図2-11で示したハヴェリの概要

No.	階数	建築面積	所在地	建設年代	建設者・備考
c-1	3	512㎡	Ahilyabai Ghat	1778年	インドール Indore の女王、アヒリャバーイ Ahilya Bai。
c-2	3	364㎡ *	Gyanbapi	18世紀後半	ヴァーラーナシーの豪商。"Lala Kashmiri Mal Haveli" と呼ばれる。
h-3	4	259㎡	Tripura Bhairvi	19世紀	ヴァーラーナシー藩王 Ishvari Narayan Singh。現在は48人が居住。
h-4	3	328㎡	Chaukhamba Gali	19世紀半ば	グワーリヤル Gwalior 藩王国の王妃。現在は13家族、100人超が居住。

* Coute（1989）には縮尺が示されていないため、階高が c-1 と同じと考えた時の概算値

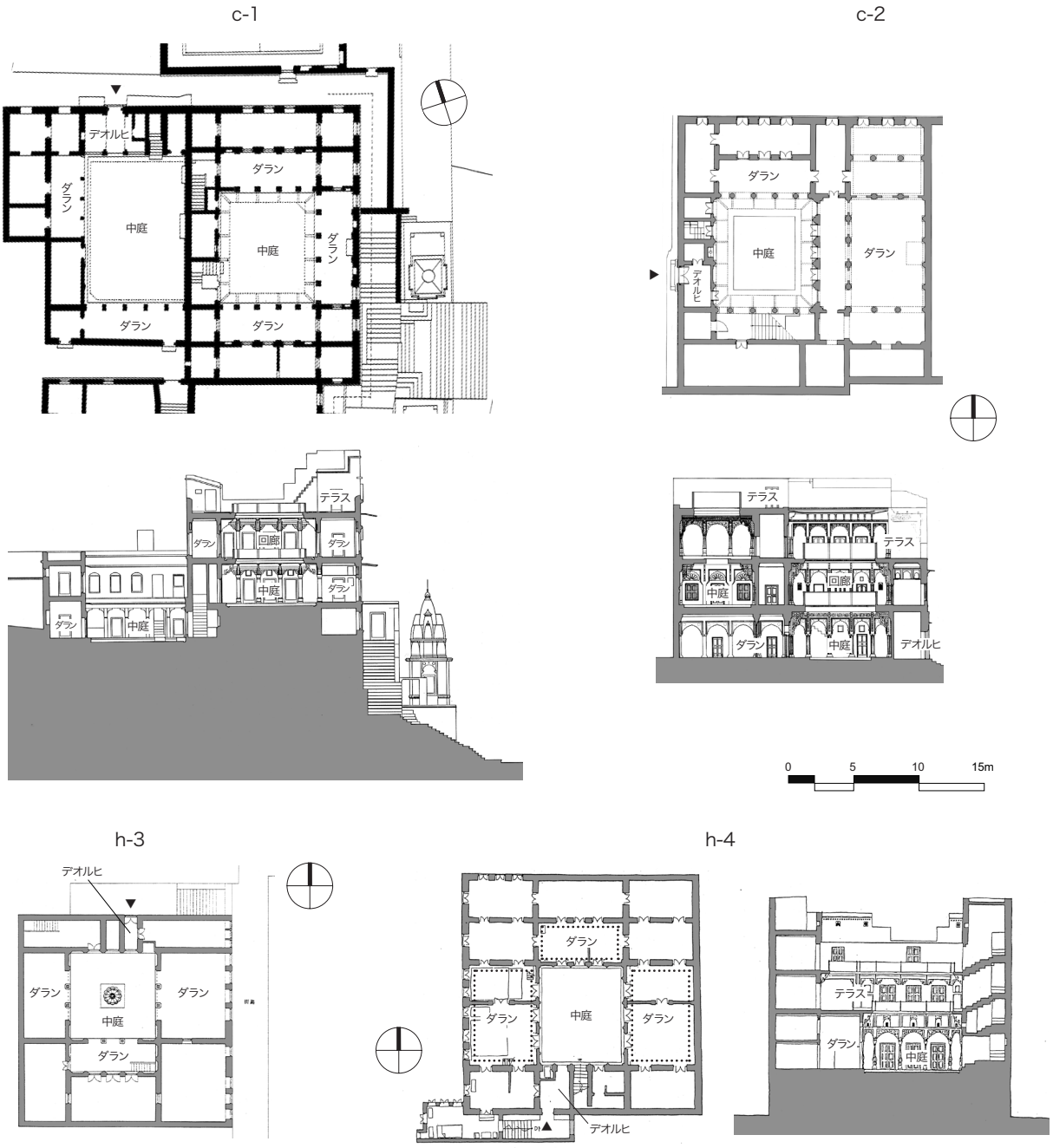


図 2-11　ハヴェリの典型例

c-1, c-2：Coute（1989）、h-3, h-4：弘中（1996）所収の図に加筆

図 2-12　ハヴェリの空間構成モデル

的なモデルを示すものと考えられる、

2-4-3　住居の構成要素

調査地区において3地区、計158の住居について簡易な実測調査を行い、また建築年代、居住人数等に関するヒアリングを行った（実測調査対象住居の分布と全平面図は付録に示す）。以下、調査結果および文献に基づきながら、ヴァーラーナシー旧市街における住居の基本的構成を整理したい。

ヴァーラーナシー旧市街では、街路沿いにほぼ隙間無く住居が建ち並んでいる。街路はきわめて複雑に迷路状に入り組んでいるにもかかわらず、住居平面の輪郭はほぼ全てが矩形であることは注目される。現在見られる住居は最も古いもので18世紀末、多くは19世紀～20世紀前半のイギリス植民地時代に建設されたものである。特に古い大規模な住居は石造であるが、多くはレンガ造である[45)]。近年新築される住居ではRC造が増えている。石造およびレンガ造の住居では、壁厚は40～50cmと厚く、隣家と壁を共有しながら連棟する形式よって外壁の面積を減らすこととあわせて、暑季の熱が室内に伝わることを防いでいる。上層階の床は、各室の短辺方向に架けられた木材の梁で支えられる[46)]。伝統的な住居のファサードは石灰モルタル（ヒンディー語で「チュナ chuna」）で塗られ、入口や開口部の周囲などに彫刻的な装飾が施される。軒蛇腹や装飾の施されたパラペット、持ち送りで支えられたバルコニーなどは、イギリス時代以前に建設された住居に特徴的な要素である。近年新築されたものにはこれらの要素がなく、外観から概ねその建設年代を判断することができる。

規模に関する実測事例のデータをまとめると、表2-4、図2-13のようになる。面積は最小で20㎡以下のものから最大で470㎡まであるが、平均すると約100㎡である。50～100㎡のものが全体の四割を占めており、これがヴァーラーナシーの都市住居の標準的な規模といってよい。階数は2～4階建てが主であるが（平均2.9階）、近年建設されたものでは、5～8階建てのものも見られる。元々は2～3階建てであった住居の上部に建て増されて、5～6階に変化している事例も少なくない。居住人数は規模や地区により様々であるが、一般に拡大家族で10～30人が居住するものが多い。中には部屋単位で貸し出しを行い、十数家族で50～100人が居住するものも見られる。

住居を構成する基本的な要素は、以下の四つにわけて考えることができる。図2-14から分かるように、屋上を除く各階の平面構成は基本的に同じである。

①デオルヒ

街路と住居の中心である中庭を繋ぐ、住居の入口の空間はデオルヒと呼ばれる。公私の緩衝空間であり、中庭に入る前の簡易的な接客の場ともなる。訪問者は玄関扉からデオルヒ通って、つまり二つの扉を経て中庭へアプローチすることになるが、その形式には住居と街路、すなわち住民と都市との距離のとり方がよく表れている。デオルヒはおしなべて狭く暗い空間であり、その雰囲気によってすでに部外者の侵入を拒んでいる。それに加えて、A：距離、B：クランク、C：高低差の変化、といった空間的操作によって、外部からの部外者の視線や侵入が制御される（図2-15）。Aは奥行きの長い廊下となるケースである。Bは中庭へ通じる扉を玄関扉の正面からずらして配置するケースと、鍵型に折

れた廊下となるケースがある。Cの高低差は階段によってつくられるが、これは視線の制御の他に地形の起伏を調整する役割もはたしている。多くの場合これらが複合して住居の入口空間を形成しており、たとえ通風のために玄関扉を開け放していても、中庭のプライバシーを安定した状態に保つことができるように工夫されている。

住居の前面には、住居の基壇が張り出す形で、ヴェランダと呼ばれるプラットフォームが設けられることも多い。村落住居の「外側」のヴェランダに対応するものと考えられるが、奥行きは60cm程度と狭く、屋根は架けられない。街路沿いの腰掛けとして機能し、また屋台の出される場となり、近隣

表 2-4　住居平面類型別の規模

	C3型	C2型	C1型	C0型	N型	全体
平均面積（㎡）	140	113	108	95	74	101
最小面積（㎡）	81	44	20	28	17	17
最大面積（㎡）	226	281	230	271	473	473
平均間口（m）	10.1	10.1	9.7	8.7	7.9	9.2
平均奥行き（m）	14.6	11.9	12.4	11.1	8.7	11.3
平均階数	3.0	3.0	2.9	3.0	3.0	2.9

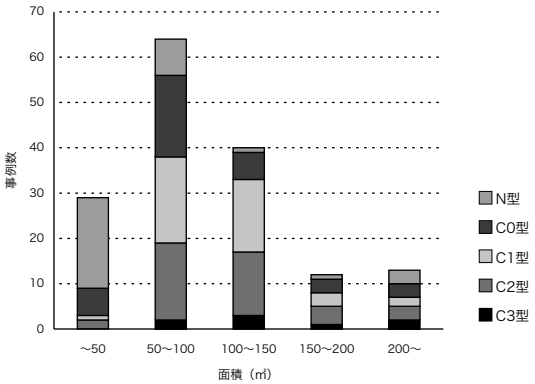
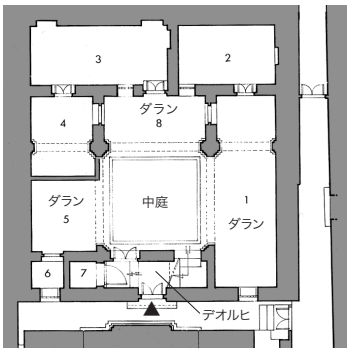
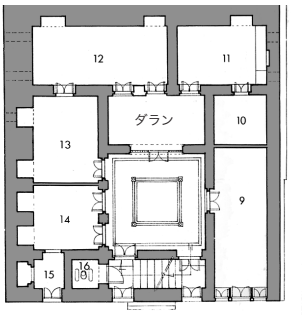


図 2-13　住居規模分布図



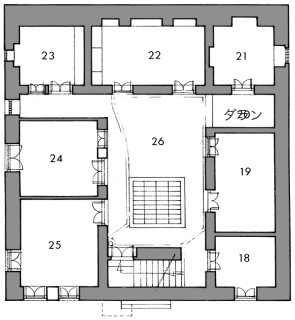
PLAN 1F



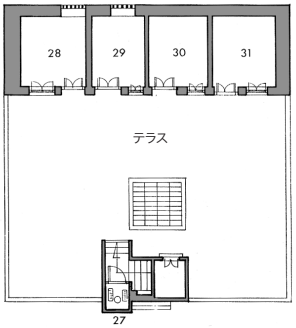
PLAN 2F

1,2,12　倉庫
3,4　「遠縁の一家」が賃借
5,6　「若い夫婦」が賃借
7,16,27　トイレ
8　洗濯等の作業場
9　居間
10　金庫室
11,19　台所
13,14,15　2家族が賃借
18　子供部屋
21,22,24　3家族が賃借
23　食品倉庫
25　長女一家の部屋
20,26　女性の作業場
28　作業部屋
29　2人の息子の部屋
30,31　独身男性2人が賃借

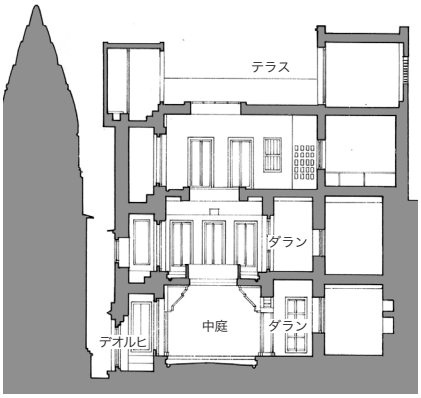
家主一家の拡大家族とあわせて、全体で10世帯42人が居住する。



PLAN 3F



PLAN 4F



SECTION

図 2-14　ヴァーラーナシーの都市住居の典型例
Coute (1989) 所収の図をもとに作製

住民のコミュニケーションに活用される。住居の構成要素であると同時に、街路の構成する要素でもある。ヴェランダが無い場合でも、雨水の流入をさけるために一階部分の床は街路から最低数十cmは上がっている。

②中庭

都市住居の中庭は「チョウク chauk」と呼ばれる[47]。高密度な街区内にある住居に環境的要素をとりこむ吹き抜けの屋外（または半屋外）空間である。住居平面のほぼ中心に位置し、周囲に他の諸要素が配される。室内の床はタタキあるいはモルタル仕上げであるが、チョウクの床は周囲のダランや諸室から一段下がっており、石が敷き詰められ水勾配がとられる。炊事や洗濯などの家事全般、家業の作業場あるいは牛の飼育場としても用いられる。住居内で祭祀が行われる際には、チョウクが主要な舞台となる。

形状は住居の規模や間口と奥行きの比率にかかわらず、基本的に正方形となる傾向にあり（図 2-16）、これは中庭の持つ象徴的な意味と関連すると考えられる[48]。サイズは住居規模に応じて様々であり、サイズによって用途や断面形状が異なってくる。すなわちサイズの大きい場合は、前述したように多様な用途に使用されるオープンスペースであるが、小さいものでは採光・換気といった環境装置とし

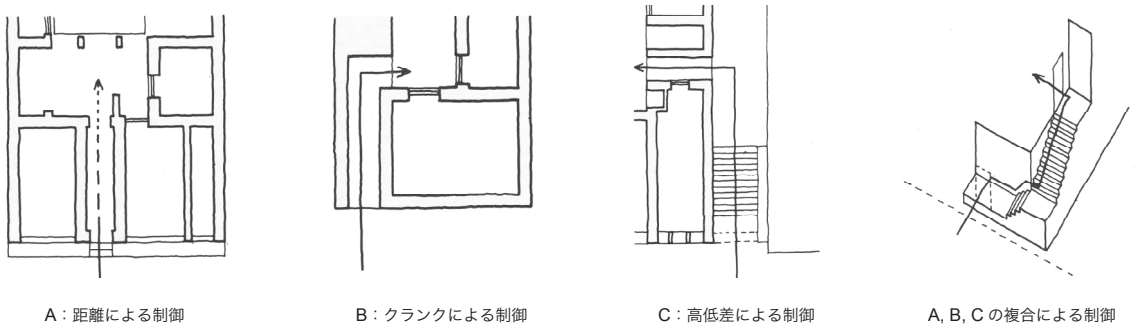


図 2-15　住居へのアプローチにおける視線の制御
弘中（1996）より

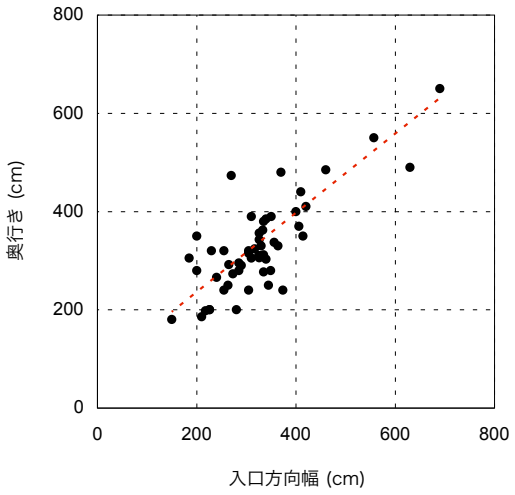


図 2-16　中庭のサイズ分布
ダルマクープ地区における住居実測調査をもとに作製

ての意味合いが強く、上層階の床に開けられた吹き抜けを介して空とつながる、図 2-13のような井戸状の空間となる。調査では約八割の住居が、いずれかの形で中庭を有していることが確認された。

③ダラン

ダランは、ハヴェリに見られたものと同様に、中庭に連続する半屋外空間である。中庭からの日射を避けるため屋根または天井が架けられているが、中庭との間には壁が無く、床の段差や列柱によってのみ仕切られている。ハヴェリについて見たように、ダランは中庭の三面に配されるのが基本と考えられるが、実際には住居の規模により一・二面に配されているものが多い。ダランは室内化された屋外空間として、炊事・洗濯・食事・様々な作業等に利用されるが、特に入口に対して奥のダランは、格式が高い場所となる。また上層階に設けられたダランは、住居の中で最良の空間として、家族の居間や客間、家長の居室となる。

ダランは様々な意味で中間的な領域であるため、生活上の変化を反映しやすい。多くの住居で中庭との境に仕切りを設置することによって、ダランを半ば個室化している例が見られるのである。その背景として、居住者数の増加にともなう必要居室の増加のほかに、住居が複数の非血縁家族により住まわれる一種の集合住宅となっている状況があり、住居内の共有空間としての中庭とダランの意味が失われつつあることが考えられる。それでも調査対象住居では、中庭をもつ住居の七割がダランを備えている。

④室（寝室・居間・倉庫・店舗等）

諸室は中庭およびダランの周囲に配されるが、室の用途は基本的に流動的である。特に中庭の規模や前面街路の性質に影響される[49]。狭い路地に面する小規模な住居では、十分なサイズの中庭がとれないため、一階は作業場や倉庫となり、生活の中心は二階以上に設けられる。寝室や居間などの居室は光と風を求めて街路側に配される。中庭が十分に広ければ奥の部屋もまた居室として利用される。人通りの多い幹線街路に面する住居では、居室はプライバシーと静寂を求めて中庭の奥へと配される一方で、街路に面した室には入口とは別の開口部が設けられ、家業あるいはテナント用の店舗として利用される。台所は中庭に面して配されるが、排煙上の理由と女性を外部の者の視線にさらさない慣習から、上層部に設けられる傾向がある[50]。以上は、一家族あるい血縁の拡大家族が住まう場合の用途別室配置の傾向であるが、多数の非血縁家族が集住するような住居では、一家族あたりのスペースは 1 ～ 2 部屋であり、上記のような機能分化が起こる余地はない。

垂直動線となる階段（室）、トイレ・浴室、井戸等のサービス的要素は、他の居住空間をより広く確保するために、中庭を配した平面上で最も幅の狭くなる一面にコンパクトに集中する。階段下の空間を利用してトイレと浴室、井戸がまとめて配されるのは、最もよく見られる手法である。

2-4-4　住居平面の類型

実測した 158 の都市住居の一階部平面について、中心となる中庭とそれに付属するダランの配置に着目して分類すると以下のようである[51]。まず、中庭を有するもの（C 型）と、中庭を持たないもの（N 型）

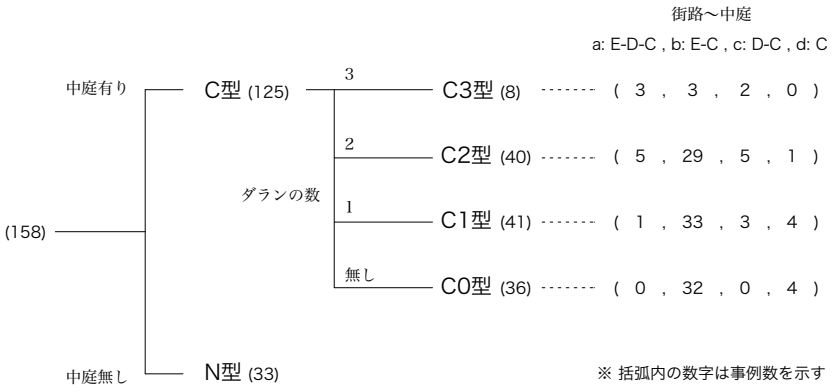


図 2-17　ヴァーラーナシーの住居平面類型と事例数

に大別することができる。C型は、中庭に付属するダランの数(0〜3)によって、C0〜C3型が区別される。上記の構成要素のうち、特にダランに注目して分類するのは、その位置と数が住居の規模と関係が深く、またハヴェリに見られる理想的モデルからの変化の度合いを計りやすいと考えられるからである。また、街路から中庭へ至るアプローチの段階的構成に注目すると、その段階の多い順に、a：街路―デオルヒ―ダラン―中庭(E-D-C)、b：街路―デオルヒ―中庭(E-C)、c：街路―ダラン―中庭(D-C)、d：街路―中庭(C)という形式が見られる。これは街路と住居の距離を示すものである。類型別の事例数とその典型例を整理したものが、図 2-17、図 2-18 である。

C3型は、間口・奥行きともに広く、最も規模が大きいタイプの住居である。事例数は 8 と少ないものの、三つのダランを備えており、構成モデルからわかるようにハヴェリに見られる理想的構成をよく残しており、ヴァーラーナシーにおける都市住居の基本型といってよい。アプローチについては、ハヴェリと異なりダランを経由して中庭に至るものがいくつか見られる(C3a 型、C2c 型)。C2 型は、間口か奥行きがやや狭まり、ダランの数が二つとなる。ダランの配置には L 字型のものと対面型のものがあるが、対面型の数は L 字型の半分程度である。基本的に入口に対して奥の側の 2 面が用いられる。C1 型は、間口が狭く細長い平面のものが多く、デオルヒ―中庭―ダランという軸線が明快となる。C0 型は、ダランが失われた最も単純な形式である。村落住居に見られる中庭式住居の原型に近い。中庭のない N 型の住居では、中庭を設ける余裕のない極小のもの、中庭の代わりに外庭をもつものが特徴的である。また比較的近年建設された新しいものには中庭のないものが多い。

中庭をもつ C 型が全体の 8 割を占め、C 型の中では C3 型が 8 件、C0〜2 型がそれぞれ 40 件前後である(図 2-17)。個々の住居規模には幅があるが類型別に見ると、C3 型が最も大きく、ダランが減り中庭がなくなるにつれて規模が小さくなる傾向が確認できる(表 2-4)。アプローチの形式については、いずれの類型においても b の E-C 型が圧倒的に多い。矩形の敷地に、規模が小さくとも中庭を設け、また中庭と街路の間には内外・公私の緩衝空間となるデオルヒを設けるのが、ヴァーラーナシーの都市住居の基本的構成である。

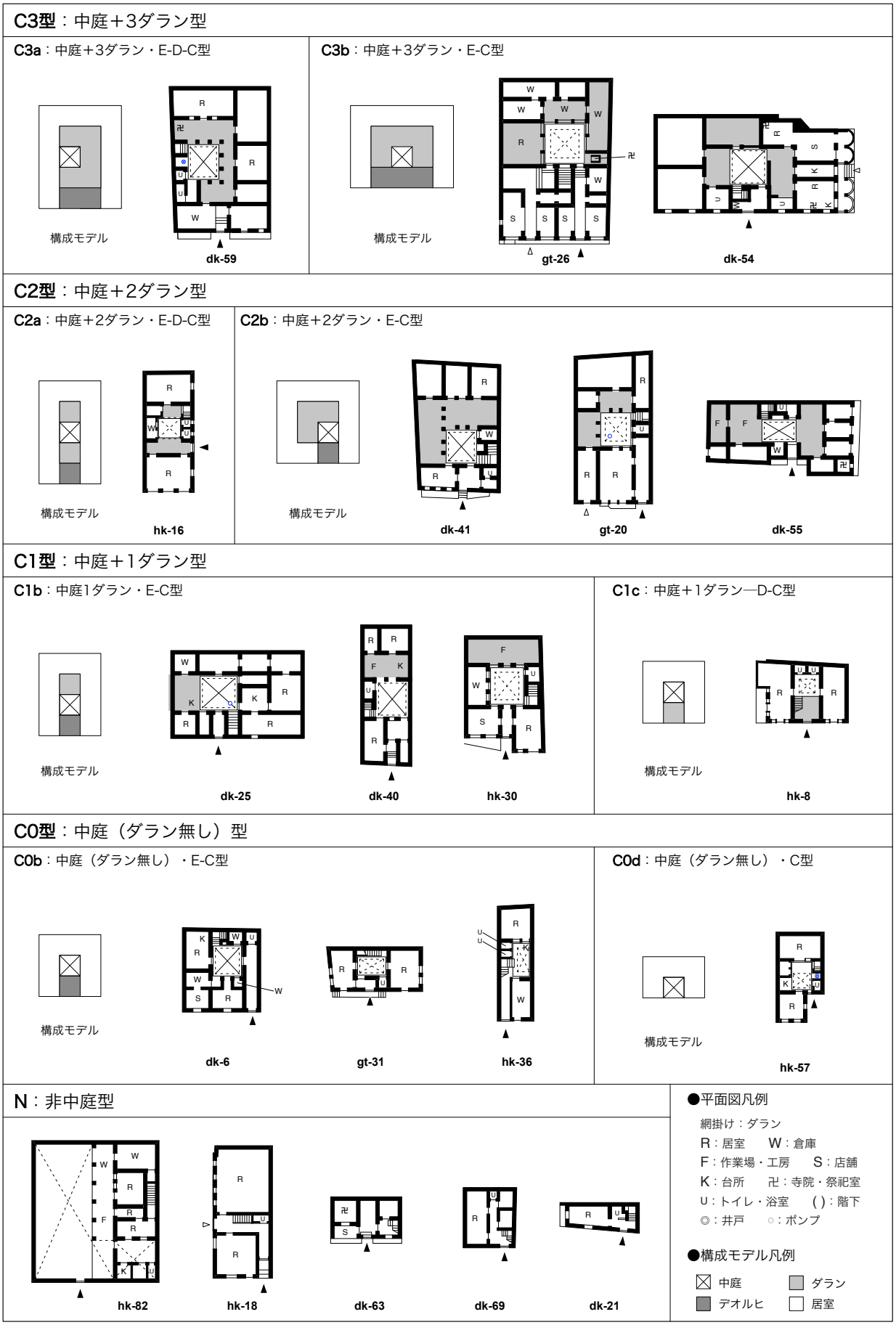


図 2-18　ヴァーラーナシーの住居平面類型図（1/600）

2-5　街区空間の構成とその変容

本節では、2-4で明らかにした「街路型／領域型」モハッラの二類型の特徴を典型的に示す地区を対象に、上述の住居類型をふまえて現在の街区単位での居住空間構成について考察するとともに、1822年および1929年の地図と現況との比較により、街区構成の変容を具体的に明らかにしたい。対象とする地区は、「街路型」モハッラについては、#41：カリカ・ガリー Kalika Gali 周辺の街区（以下、「カリカ・ガリー地区」）、「領域型」モハッラについては、#23：ハウズ・カトラ Hauz Katora 周辺の街区（以下、「ハウズ・カトラ地区」）である（図 2-19）。

2-5-1　カリカ・ガリー地区

（1）街区構成

図 2-20 はカリカ・ガリー地区の街区構成を示したものである。#40 のモハッラにはヴァーラーナシーの中心寺院・ヴィシュワナート寺院が位置しており、一帯は都市の宗教的センターとなっている。住民はほぼ全てがヒンドゥー教徒であり、各街区に多数のヒンドゥー寺院・祠が存在する。ヴィシュワナート寺院前面の路地およびその両側を南北に走る街路沿いには、小規模な土産物店や儀礼用品店が軒を連ねており終日人が絶えることがないが、その他の路地沿いは店舗の少ない居住空間である。また、店舗の入った建物も一階部分の街路側が小さな店舗用スペースとなっているのみであり、寺院をのぞけば、基本的に建物は全て職住共存の住居である。

モハッラと街路の関係をみると、比較的幅の広い街路とそこから分岐する狭隘な袋小路からなるツリー状の街路構造を軸として、そこに面した住居が両側町的にまとまりながらモハッラが形成されていることがよくわかる。モハッラの境界はいずれも街路の交差点であり、1822年の地図で確認できる門（現在は失われている）を含めれば、大部分のモハッラ境界に門が設置されている。表 2-2 で示した「街路型」モハッラの特徴を典型的に示している地区といえよう。この他にも街区スケールでは、後述するハウズ・カトラ地区と比較して、以下のような特徴が観察される（表 2-5）。①各モハッラを構成する街区の規模が大きく、個々の敷地面積もまた比較的大きい。②街区奥へ至るための袋小路が多い。袋小路には小広場や井戸・ポンプが設けられており、袋小路毎の生活単位の存在が伺われる。特に #12 と #43 はモハッラ全体が、奥に井戸と小広場を備えた袋小路を単位として形成されたものである。敷地形状については、一部 #14, 15 にまたがる街区に背割りが見られるものの、全体として奥行き、間口幅と

表 2-5　カリカ・ガリー地区における街区・敷地の平均面積および袋小路の比率

街区数	敷地数	6	230	街路総長 (r)	1838 m
平均街区面積		4686 ㎡		袋小路総長 (b)	564 m
平均敷地面積		131 ㎡		袋小路比 (b/r)	0.31

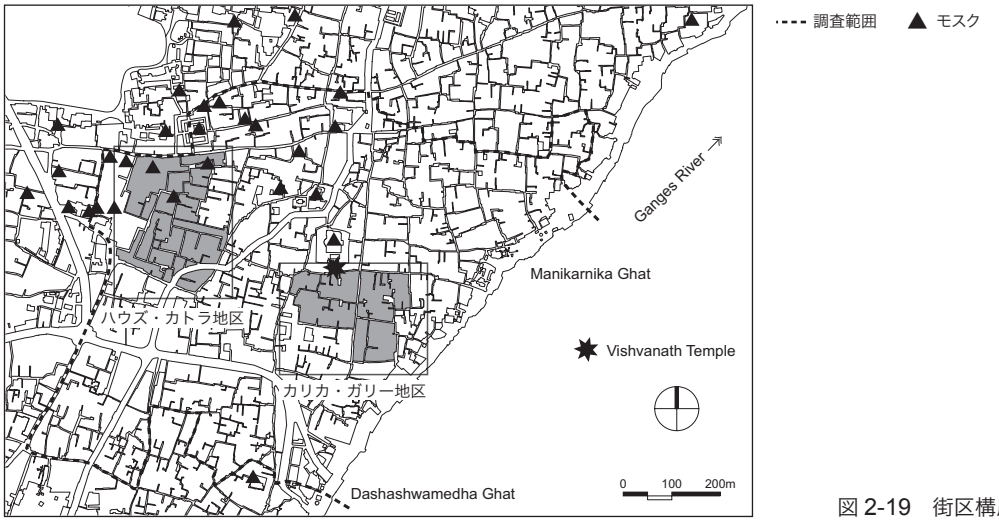


図 2-19　街区構成の調査対象地区

図 2-20　カリカ・ガリー地区 (#41 周辺) の街区構成

表 2-6　カリカ・ガリー地区における住居入口の方位別分布

接道数	接道方位	件数	入口の設置可能な方位の延べ数				入口の方位			
			東	西	南	北	東	西	南	北
1	東 / 西 / 南 / 北	127	33	25	36	33	33	25	36	33
2	東北	17	17	-	-	17	8	-	-	9
	東南	16	16	-	16	-	12	-	4	-
	西南	17	-	17	17	-	-	13	4	-
	西北	20	-	20		20	-	9	-	11
	南北	3	-	-	3	3	-	-	0	3
	東西	3	3	3	-	-	1	2	-	-
3	東北西	3	3	3	-	3	2	1	-	0
	東北南	4	4	-	4	4	1	-	0	3
	東西南	2	2	2	2	-	1	1	0	-
	北西南	3	-	3	3	3	-	1	0	2
接道数 2,3 の小計		88	45	48	45	50	25	27	8	28
合計		215	78	73	81	83	58	52	44	61
			315				215			

もにばらつきが大きく、多数の袋小路が存在することとあわせて、街区が徐々に建て詰まっていったことを示唆するものと推測される。

街路と住居の関係については、住居の入口[52]を手がかりに見ることができる。以下、総敷地数 230 のうち、廃墟や空き地であるため入口の判別のつかないものと寺院を除いた、215 件を分析対象とする。

まず、袋小路と通り抜け可能な街路のそれぞれに入口を向ける住居の数をみると、袋小路に向いたものが 39%（84 件）、通り抜け可能な街路に向いたものが 61%（131 件）である。この数字は、表 2-5 に示した袋小路比（街区内の街路総長に対する袋小路長の比）の 31% に近い。つまり、特に袋小路や通り抜け可能な街路のどちらかに入口を向けるという傾向は見られないといえる。

住居の入口の設けられた方位に注目し、その分布をまとめると表 2-6 のようである。まず、入口の設置可能な方位毎の延べ数[53]の合計は、73 ～ 83 件（25% 前後）と大きな差は見られない。つまり、特定の方位に住居が面するように街路が形作られているわけではない。実際に入口の設けられている方位の合計も、東：58（27%）、西：52（24%）、南：44（20%）、北：61（28%）と、東と北がやや多く南がやや少ないが、大きな差とはいえない。しかし、対象を複数の方位で街路に接する敷地（表 2-6 のうち接道 2, 3 の項目：88 件）に限定すると、その入口の設けられる方位の分布は、東：25、西：27、北：28 に対し、南：8 と、明確な偏りが見られる。これらの住居における入口の設置可能な方位毎の延べ数はほぼ等しい（東：45、西：48、南：45、北：50）ので、特に南面した敷地が少ないわけではない。つまり、特に南を避けるようにして住居が集合して街区が形成されているわけではないが、ある住居が南を含む複数の方位で街路に接している場合は、南向きに入口を設けることは意図的に避けられているといえるだろう。

(2) 街区構成の変容

以下、モハッラ #12：ダルマクープ Dharmakoop を含む街区（以下、「ダルマクープ地区」）を対象として、

1822年および1929年の地図と現況の比較と、臨地調査で得られた情報をもとに、住居レベルまでを視野にいれながら、街区構成の変化を詳細に追っていきたい。

①現況

ダルマクープ地区の現況は図2-21のようである。四周をほぼ南北に直交して走る街路によって囲まれている（以下この周囲の街路を主要街路と呼ぶ）。東南部では街路が鍵型に折れており、全体として一辺約100 m（102 m× 96 m）の正方形の東南角を切り欠いた形状である。主要街路から袋小路が伸び、街区奥の住宅へのアプローチとなる。東南隅の街路角には門が設置されており、その奥に井戸を中心とする小広場が広がっている。小広場には数本のバニヤン樹ともに、小規模な寺院・祠が多数集まっており、そのうち二つはアンタルグリハ巡礼の巡礼地ともなっている。

ダルマクープ地区には現在、住居が70ある。主要街路に接した住居では、街路側の部屋が店舗スペースとして貸し出されている。特殊な施設としては、未亡人の住む修道場（No.53）、学生寮（No.58）、オープンスペースをともなう牛小屋（No.13, 18）がある。独立した構造体をもつ寺院・祠[54]は大小36あるが、このうち11は住居建築の内部に存在していることが注目される。敷地形状は、街路に沿って

図2-21　ダルマクープ地区の一階平面図（1/1000）

多少歪んでいるものも見られるが、ほとんどは直角をベースとした矩形である。住居類型別に見ると（図2-22）、中庭の無いN型が11ある他は、すべて中庭をもったC型である（C3型：3、C2型：22、C1型：17、C0型：17）。N型の住居は、No.53を除きごく小規模なものであり、街路沿いにはりつくようにして建てられている。中庭を有した矩形の住居を単位として街区が構成されていることがわかる。

② 1929年～現在の変容

1929年（図2-23）以降、現在にいたるまでの街区構成の変化を図示すると図2-24のようである。

まず、1929年時点で存在した建物が取り壊されて、広い空き地となっている事例が二例みられる。

図2-22　ダルマクープ地区の住居類型分布図

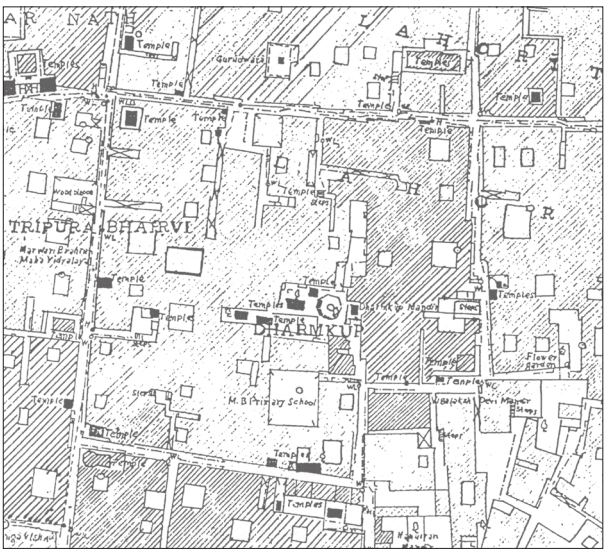


図2-23　1929年のダルマクープ地区

"Benares City : season 1928-1929"（部分）

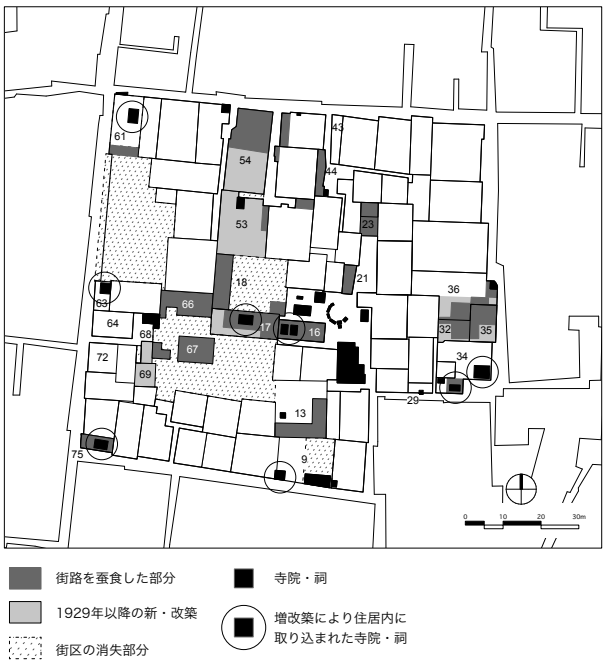


図2-24　ダルマクープ地区の1929年～現在の変化

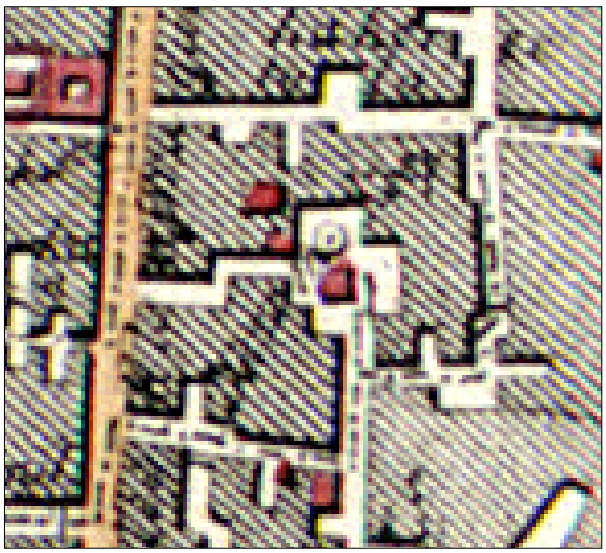


図2-25　1822年のダルマクープ地区

"The City of Bunarus : Surveyed by James Prisep", 1822（部分）

（所蔵：大英図書館・資料番号：53345(6)）

一つは街区西部の現在グラウンドとなっている場所であり、もう一つは南西部にある空き地である。No.66～69はこの空き地の一角に近年建設された住居である。No.66, 67のある場所は、1929年の地図ではやや大きめの中庭が見られるため、元々はNo.66と67をあわせた敷地に大規模な中庭型の住居が建っていたものと推測される。二つの家は西側の小広場を一部狭めながら、外庭を設ける新しいスタイルで建設されている。No.68, 69の間には新たな袋小路が生まれている。No.13, 18の牛小屋もまた、以前あった建物が失われた後に建設されたものである。寺院・祠が失われた事例は見られない点は、注記したい。1929年に記された寺院・祠は、いずれも現在の位置に残っている。No.9東側の寺院では、背後の住居は失われたものの、寺院はそのまま残存している。

住居の平面的な増築は街路を蚕食する形でなされるため、街区形状に変化を与える。そのような増築は、小規模なものでは外壁に居室や店舗、トイレ・浴室などを付加する形で行われる（No.50, 51, 52, 61）。より大規模な蚕食の例は、No.35周辺で見ることができる。1929年にこの場所にあった袋小路と小広場は、周囲のNo.35、36の増改築およびNo.32の新築により、完全に埋め尽くされている。No.34南側では、街路沿いに建っていた寺院を住居内に包み込む増築が見られる。

新築には、既存の敷地内で行われるものと街区構成に変化を与えるものがあるが、ここでは後者のみに注目する。街区構成に影響を与える新築は既存の街路上に建設されたもので、No.16, 17, 21, 23, 44, 53, 54, 75がある。結果として袋小路が建て詰まり、また街路幅が狭められている。中庭をもたないN型の住居の多くは、これらの新築された住居である。街路幅を狭めて建設された住居は、No.44のように街路沿いに薄く張り付いたような特徴的な形状をとるため、同様の形状をもつNo.29, 43もまた、1929年以前に街路を狭める形で建設されたものと推測される。注目されるのは、街路上に独立して建っていた寺院を、そのまま内部に含むかたちで新築されたNo.16, 17, 75である。No.9, 34, 61, 63もまた、内部に独立した構造体をもつ寺院を抱え込んでおり、またそれらの寺院がいずれも街路側に立地していることから、1929年以前に同様の形で建設されたものと考えられる。

1929年から現在への変化は、街区内部での大規模な建物の消失とそれにともなう敷地割りの再編が起こる一方で、街路幅や小広場を狭める、あるいは袋小路を建て詰める変化が各所で起こり、高密化が進んできたといえる。街区を構成するのは基本的に矩形の中庭式住居であるが、上述のような変化の中で、中庭を持たないタイプの住居が建設されつつある。

③ 1828年～1929年の変容

1822年の地図は縮尺が大きく、道幅や細かな街区形状については参考にならないが、街路の有無については重要なことがわかる（図2-25）。1822年～1929年間の最大の変化は、街区中央の小広場から西の主要街路へと抜ける街路が存在したことである。小広場から西へ抜ける道筋は、井戸と寺院との位置関係から、現在の住居No.16、17付近を通り、No.66, 67の辺りで二度屈曲し、No.64, 72に挟まれた街路（現在の袋小路）へと至るものであったと考えられる。上述したようにNo.16、17がどちらも寺院を包み込む形で建設されたものであることから、これらの寺院はかつてこの小広場から西へ抜ける街路の路傍に建っていたものであろう。

このように約200年にわたる街区構成の変化を見ると、主要街路に囲われた街区形状に大きな変化はないものの、個々の住居の新設や増改築、およびそれを一旦白紙に戻す消失などの変遷を繰り返しながら、街路の幅や形状、敷地割りは時代とともに複雑に変化してきたことがわかる。そのような変化の中で注目されるのが、定点としての寺院・祠の存在である。第1章で巡礼対象となっている寺院・祠にみられた、一度建設された寺院・祠は基本的に破壊されないという原則が、一般の寺院・祠についてもあてはまることが確認された。

2-5-2　ハウズ・カトラ地区

(1) 街区構成

図2-26はハウズ・カトラ地区の街区構成を示したものである。この一帯は、1822年のカッチャの領域に含まれる。ハウズ・カトラというモハッラ名称は「市場に囲まれた貯水池」を意味しており、この地にあった池が18世紀末に干拓され市街化された地区である[55)]。この一帯はアンタルグリハ地区の中では数少ないムスリム住民が支配的な地域として知られる。都市形成史について見たように、ムスリムの移住者あるいはヒンドゥー教の下層カーストから改宗したムスリムは、16世紀以来市街地の新規開拓の担い手として大きな位置を占めてきた。アンタルグリハ地区ではムスリムの割合は少ないものの、都市全体としてはムスリムによる市街地開拓は一般的な事象であった。「領域型」モハッラの街区構成を検討するにあたって、当地区を選定するのはそのためである。

ハウズ・カトラ地区はその名が示すように、北と東、南の三方を商店街に囲まれている。北端を東西に走る街路はダール・マンディー Dal Mandi と呼ばれる古くからの市場であり、金物やプラスチック製品を中心とした商店がたちならぶ[56)]。南端を東西に走る街路には、宝石・貴金属・アクセサリーを扱う店が集中する。東南部を曲行する広幅道路（19世紀末に敷設）ではヴァーラーナシー名産のサリー

表2-8　ハウズ・カトラ地区における住居入口の方位別分布

接道数	接道方位	件数	入口の設置可能な方位の延べ数				入口の方位			
			東	西	南	北	東	西	南	北
1	東 / 西 / 南 / 北	204	50	46	53	55	50	46	53	55
2	東北	26	26	-	-	26	13	-	-	13
	東南	27	27	-	27	-	23	-	4	-
	西南	26	-	26	26	-	-	17	9	-
	西北	25	-	25		25	-	13	-	12
	南北	15	-	-	15	15	-	-	6	9
	東西	8	8	8	-	-	7	1	-	-
3	東北西	5	5	5	-	5	1	1	-	3
	東北南	6	6	-	6	6	4	-	1	1
	東西南	4	4	4	4	-	4	0	0	-
	北西南	3	-	3	3	3	-	1	1	1
接道数2,3の小計		145	76	71	81	80	52	33	21	39
合計		349	126	117	134	135	102	79	74	94
			512				349			

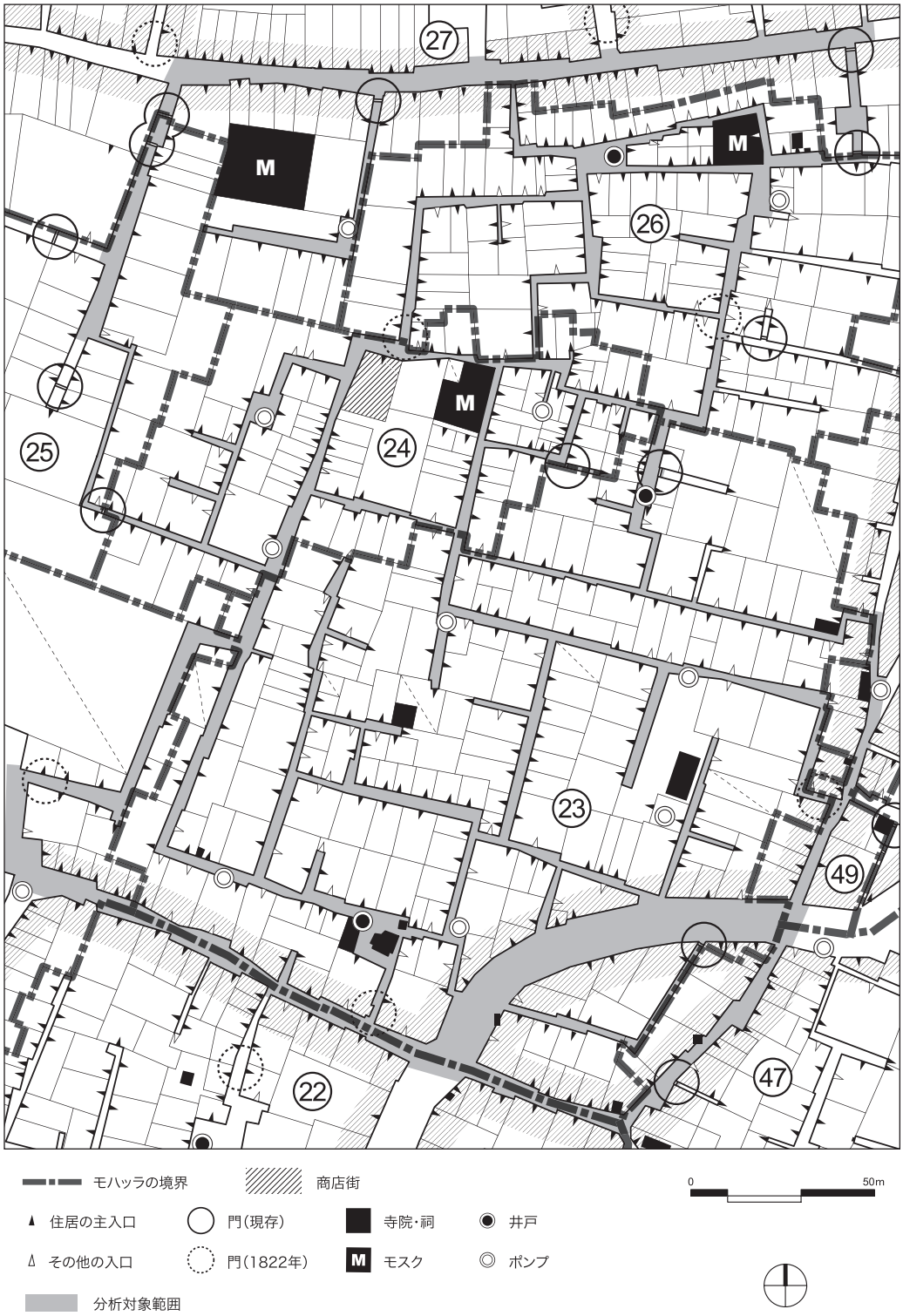


図 2-26　ハウズ・カトラ地区 (#23 周辺) の街区構成

表 2-7　ハウズ・カトラ地区の街区・敷地の平均面積および袋小路の比率

街区数	敷地数	21	390	街路総長 (r)	3007 m
平均街区面積		1747 ㎡		袋小路総長 (b)	490 m
平均敷地面積		91 ㎡		袋小路比 (b/r)	0.16

や電器店、東部を南北に走る街路では衣料品を扱う店が目立つ。これらの商店街の内側には、肉市場や小規模な日常雑貨店もあるが、大多数は住居である。商業空間と居住空間の区分は明快である。また、商店業種の集中傾向も指摘できる。商店街沿いの店舗も二階以上は住居となっており、ほぼ全ての建物が職住共存の住居であることは、先に見たカリカ・ガリー地区と同様である。宗教施設は住民構成を反映して、#24, 26, 27のモハッラにモスクが見られる一方で、ヒンドゥーの寺院・祠は少ない（4件）。

モハッラと街路の関係をみると、街路を共有する住居群によってモハッラが形成されている点はカリカ・ガリー地区と同様である。しかし、街路構造はツリー状というよりは、むしろネットワーク状に相互に連鎖しながら展開しているため、それを覆うモハッラの形状もまた面的に広がっている。モハッラの境界は街路の交差点が主であるが、境界に門が設置されている（設置されていた）場所は少ない。#22と23の境界は街路となっており、「領域型」モハッラの特徴を典型的に示している。

街区スケールでは、前述したカリカ・ガリー地区と比較して、以下のような特徴が観察される（表2-7）。①街区は小さく細分化されており、個々の敷地面積も比較的小規模である。②街路にはクランクやT字路が目立ち、袋小路は少ない。小広場や井戸・ポンプの多くは通り抜け可能な街路上に位置している。敷地形状については、街区を背割りした敷地割りや、間口や規模の比較的揃った敷地が並んでいる場所が多く見られ、一定の期間の間に市街化が進んだことが推測される。

街路と住居の関係について、カリカ・ガリー地区と同様に住居の入口を手がかりとして見ると、以下のようである。分析対象とするのは、総敷地数390のうち廃墟や空き地、主入口の判別のつかないものと寺院・モスクを除いた、349件である。袋小路と通り抜け可能な街路のそれぞれに入口を向ける住居の数をみると、袋小路に向いたものが15%（57件）、通り抜け可能な街路に向いたものが85%（333件）である。この数字は、表2-7に示した袋小路比の16%とほぼ一致しており、袋小路か通り抜け可能な街路のどちらかに入口を向けるという傾向は、ここでも見られない。

住居の入口の設けられた方位についても、カリカ・ガリー地区と近い結果が得られた（表2-8）。入口の設置可能な方位毎の延べ数、実際に入口の設けられている方位には、大きな差は見られない。複数の方位で街路に接する敷地（表2-8のうち接道2, 3の項目：145件）における入口の方位分布には、東：52、西：33、南：21、北：39と、東が多く南が少ないという明確な偏りが見られる。したがって、カリカ・ガリー地区と同じく、特に南を避けるようにして住居が集合して街区が形成されているわけではないが、ある住居が南を含む複数の方位で街路に接している場合は、南向きに入口を向けることは避けているとみてよい。

(2) 街区構成の変容

以下、モハッラ#26：チャフメフマン Chahmehman[57] を中心とする数街区（以下、チャフメフマン地区）を対象として、1822年および1929年の地図と現況の比較と、臨地調査で得られた情報をもとに、街区構成の変化を見ていきたい。同地区を調査対象として選定したのは、ハウズ・カトラ地区の中でもムスリムの居住者が特に多いためである。

①現況

図 2-27　チャフメフマン地区の一階平面図

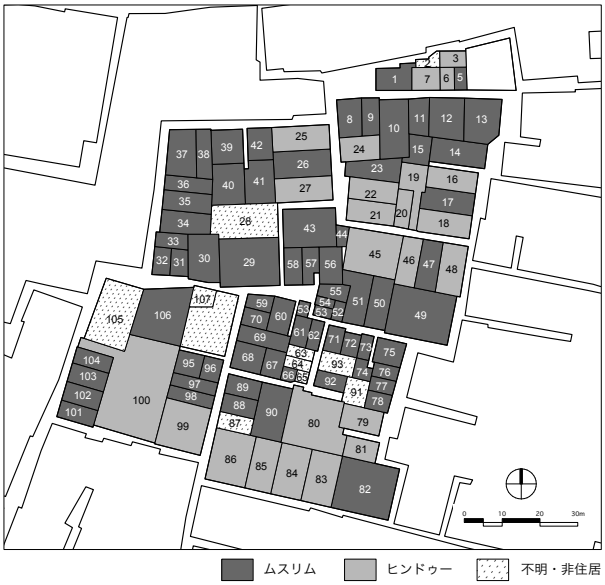


図 2-28　チャフメフマン地区の住民構成図

図 2-29　チャフメフマン地区の住居類型分布図

チャフメフマン地区の現況は図 2-27のようである。屈曲した街路によって街区が細かく分割されていることが特徴的である。街路形態は複雑であるが、曲がり角は基本的には直角である。

商業施設は肉市場（No.105）と中央の小広場周辺に生活雑貨店が 4つあるのみで、残りの 103件はすべて住居である。そのうち 75% はムスリムが居住する（図 2-28）。ムスリムとヒンドゥー教徒の住居は若干混在しているが、個々の住居レベルでは、複数の非血縁家族が集住する場合でも、両者が同居することは決してない。この地区のムスリムには家具製作や建設業、機械業に従事するものが多いため、彼らの住居の多くに工房や倉庫が設けられている。

住居については 103の住居のうち 55について、一階部分の実測調査を行うことができた。住居類型別に見ると（図 2-29）、中庭をもつ C 型が 37（C3型：3、C2型：10、C1型：10、C0型：24）、中庭の

図 2-30　1929年のチャフメフマン地区
"Benares City : season 1928-1929"（部分）

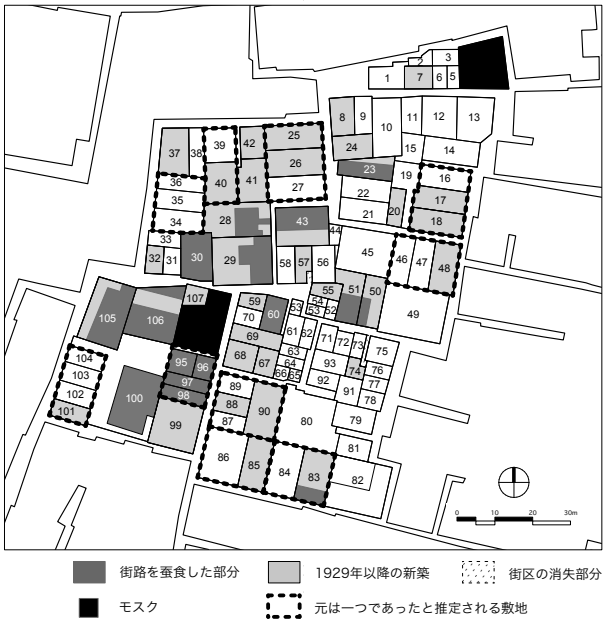


図 2-31　チャフメフマン地区の 1929年～現在の変化

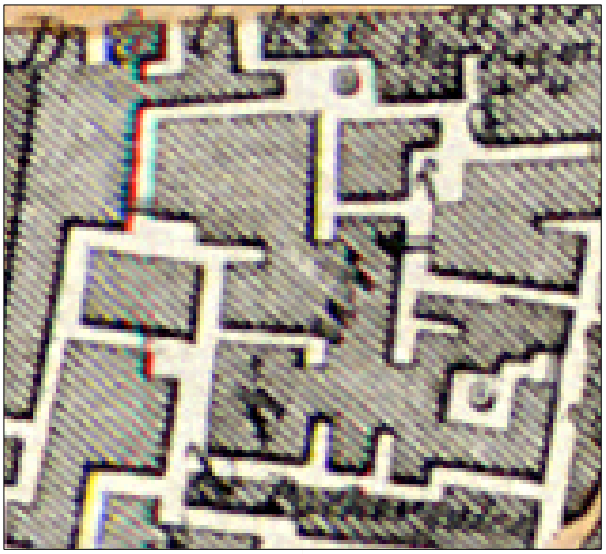


図 2-32　1822年のチャフメフマン地区
"The City of Bunarus : Surveyed by James Prisep", 1822（部分）
（所蔵：大英図書館・資料番号：53345 (6)）

無いN型が18となる。小規模な敷地が多いことを反映して、ダランの無いC0型とN型の住居が半数以上を占めている点が、特徴の一つである。特に地区中心部（No.62周辺）には狭小な住居が集中しており、今回調査できなかった住居も多いが、その規模から判断して、この一帯の住居はほとんどがN型と推測される。敷地サイズは概してヒンドゥー教徒よりもムスリムの方が小規模な傾向があり[58]、両者のおかれた経済的状況を反映していると考えられる。その一方でNo.29, 45, 49, 80, 82など、比較的大規模な敷地の住居も混在している。

② 1929年～現在の変容

1929年の時点では、今では住居が建て込んでいる場所に多くの空地が見られ、かつてカッチャの領域であった頃の低密度な街区の様子を伺うことができる（図2-30）。また、確認できただけでも43の住居は、1929年以降に建設されたものである（図2-31）。街区の変化・更新の度合いは大きい。

現在No.100の敷地となっているオープンスペースは西の街路へ路地で通じていた。現在は塀によって囲い込まれているが、その路地の形跡は敷地形状に残っている。No.100の住民はパンジャブ地方の出身のヒンドゥー教徒であり、インド・パキスタン分離独立時にヴァーラーナシーへ移住、この土地を購入し住居を建設したという。その東の空地は、四分割されNo.95～98が建設されるとともに袋小路が新設されている。No.28, 29の敷地にも木の生えたオープンスペースが見られ、周囲を低層の住居が囲んでいたと推測されるが、現在ではどちらも3～4階建てのレンガ造の建物となっている。小広場を大きく蚕食し住居が建設された例（No.43）、袋小路が建て詰まった例（No.23）も確認できる。

注目されるのは、現在の街区の中に奥行き・間口がほぼ等しい住居が連棟している箇所が複数見られることである。このことは、これらの住居が、一つの敷地が分割された際に同時期に建設されたであろうことを示唆する。No.34～36については、所有者が同じでありまたファサードも連続しているため、一つの建物が三棟に分割されたものであることは明らかである。1929年の地図では三住居の中心に中庭が見られる。No.39, 40も同様の事例であるが、No.95～98で見られた袋小路の新設事例をあわせて考えると、元は袋小路を挟んだNo.40, 41も含めて一つの敷地であったと考えられる。四棟を合わせると、丁度No.25～27と同規模の正方形の敷地となる。No.46～48については、三棟をあわせたサイズが隣接するNo.45, 49とほぼ等しいこともあり、以前はそれらと同規模の一つの敷地であったと推測できる。No.25～27やNo.83～84、No.85～86についても同様である。このような元々一つの敷地を分割して建てられたと思われる住居群を図に示すと、図2-31点線のようになる。推測の域は出ないが、街区形成の当初には、各街区は一辺およそ15mの矩形の敷地に整然と区画されていたことが予想される。

③ 1828年～1929年の変容

チャフメフマン地区の1822年の状況を見ると、街区形状は1929年と大きく異なっている（図2-32）。西北部から東南部にかけて、1929年以降は四つの街区に分かれている部分が、一つの街区にまとまっており、さらに東の街区とつながっているのが大きな違いである。1929年以降の街区間の路地は、袋小路として記されている。地図のスケールが大きいため、これらの「袋小路」が実際には袋小路ではな

く街区の奥で繋がっていた可能性は否定できない。しかし、②で見たような、元々は大きく区画されていた敷地が次第に細分されてきたという変化傾向を考慮すれば、敷地の細分化と並行して街区の奥へアプローチするために袋小路が生じ、やがてそれらが相互に連結し、現在見られるような細かく分割された街区とネットワーク状の街路網という街区形態が形成されたというプロセスを描くことができる。

2-6　まとめ

本章ではヴァーラーナシーの居住空間構成について、まずアンタルグリハ地区全体を対象に、伝統的近隣単位であるモハッラの基本的構成を検討した。続いて、都市住居の基本的空間構成をふまえた上で、モハッラ内の街区レベルでの居住空間構成とその経年変化の傾向に関する検討を行った。それぞれについての論旨をまとめると以下のようである。

(1) 近隣単位・モハッラの空間構成

① 既往研究をもとに、モハッラの形成パターンには「ハヴェリ型」、「カースト・職業型」、「移住型」の三つがあったことを指摘した。「ハヴェリ型」と「移住型」は都市内外の未利用地を一定の規模で囲い取り開発する形で、「カースト・職業型」は既存市街地をベースとして形成されたと考えられ、それぞれの空間構成はある程度異なるものであったと考えられる。

② 現地調査により、ヴァーラーナシー旧市街において53のモハッラを確認し、その範囲と境界を明らかにした。ヴァーラーナシーのモハッラは、他の北インド諸都市と同様に、基本的に街路を共有する住居により構成されている。

③ モハッラの境界は主として街路の交差点であり、しばしば門によって境界が明示される。門は調査地区の東・北部に比較的多く分布する。1822年の地図に記された門の大半は現在のモハッラ境界と一致しており、門が失われてもモハッラの境界は変わらず意識されていることがわかった。街路がモハッラ境界となる事例も、調査地区西・南部においていくつか確認された。

④ モハッラの名称は人物名、地形・自然要素、施設、住民の来歴などに由来しており、そこからモハッラの設立経緯や市街化の過程をある程度追うことができる。

⑤ 各モハッラは、寺院・祠あるいはモスクなどの中心的宗教施設、小広場、井戸を標準的施設として有している。寺院東部では街路に面した井戸は少なく、街区内の井戸が多い。

⑥ モハッラは規模と形状、街路構造から、大きく「街路型」と「領域型」に分類することができる。「街路型」はヴィシュワナート寺院近傍の市街化の歴史が古いエリアに、「領域型」は周縁部の歴史の浅いエリアに分布しており、前者は既存市街地の街路を軸として形成され、後者は移住者による新規居住地開発と並行して形成されたと考えられる。

モハッラの規模や形状、門・井戸の分布、街路構造など、調査地区で見られる各モハッラの空間的

特徴の相違点の多くは、1822年の地図に示されたパッカ／カッチャ区分と関連づけて解釈することができる。早くから高度に市街化の進んでいたパッカの領域と、比較的近年に市街化の進んだカッチャの領域とでは、都市の成り立ちが基本的に異なっており、それがモハッラの空間構成にも色濃く反映されているといってよい。各モハッラのカースト・職業構成や住民の来歴に関する詳細なデータがないため、①で示したモハッラの三つの形成パターンと⑥で論じた「街路型／領域型」モハッラの類型とを単純に結びつけることはできないが、その設立経緯の類似から「カースト・職業型」と「街路型」、「移住型」と「領域型」とが対応する可能性は指摘できるだろう。

(2) 都市住居の空間構成

① 現在ある市街地の大部分が、カッチャという半村落的な形態を経て形成されてきたことをふまえ、近郊村落住居の空間構成について検討した。ヴァーラーナシー近郊の村落住居はデオルヒ、ヴェランダという中間的領域を備えた矩形の中庭式住居であり、都市住居の原型と位置づけられる。

② 大規模な敷地に整然と計画された邸宅ハヴェリは、デオルヒ―中庭―ダランという、都市住居に共通する平面構成をきわめて明快な形で示しており、都市住居のモデルを示すものと考えられる。

③ 住居はデオルヒ・中庭・ダランおよび諸室という構成要素の組み合わせからなり、中庭に面する半屋外空間のダランが住居の中で重要な位置を占めている。デオルヒには外部からの視線を制御する様々な仕掛けが施される。中庭は正方形となる傾向があり、複雑な街路形状にかかわら住居は基本的に矩形の輪郭をもつ。

④ 都市住居は要素の配置構成から、中庭式住居と中庭を持たない住居に分類でき、前者はダランの数によって4つの型に分けられる。ヴァーラーナシーの住居は規模にかかわらず、ほとんどが中庭式住居である。住居規模はダランの数に反映される。また最小規模の住居であっても、中庭と街路の間には、村落住居やハヴェリと共通した、内外の緩衝空間となるデオルヒが設けられている。

(3) 街区構成とその変容

「街路型」モハッラと「領域型」モハッラの代表的事例として、カリカ・ガリー地区とハウズ・カトラ地区を取り上げ、街区単位での居住空間構成について考察するとともに、1822年および1929年の地図と現況との比較により、街区構成の変容を検討した。その特質は以下のようになる。

① カリカ・ガリー地区では、ハウズ・カトラ地区に比して街区面積・敷地面積ともに大きく、住居はほとんどが中庭式住居である。街路は主要街路とそこから分岐する袋小路というツリー状の階層的構成を有している。また、敷地割りは複雑で間口・奥行きともにばらつきが大きく、袋小路の存在とあわせて、街区が徐々に建て詰まっていったことを示唆する。

②ハウズ・カトラ地区では、それに比して街区は小さく細分化され、敷地面積も小規模であり、住居は中庭を持たないものが半数以上を占める。街路はネットワーク状に連鎖し、袋小路は少なく並列的な構成をとる。背割りや間口・奥行きの揃った敷地割りが多く見られ、一定期間の間に市街化が進んだことが伺われる。

③ 上記のような相違点がある一方で、住居の入口が設けられる方位には、南向きを避けるという傾

向が、両地区に共通して見られる。

④ カリカ・ガリー地区では、1822年以降、個々の住居の変化に伴い街路の幅や形状、敷地割りが複雑に変化しつながら、全体として街路の建て詰まりと敷地の細分化による高密化が進行してきた。中庭を持たない住居の多くは、この過程で建設されたものである。

⑤ このような変化の中で注目されるのが、定点としての寺院・祠の存在である。街路上に建っていた多くの寺院・祠が住居内部に取り込まれており、第1章で巡礼対象となっている寺院・祠にみられた、一度建設された寺院・祠は基本的に破壊されないという原則が、一般の寺院・祠についてもあてはまることが確認された。

⑥ ハウズ・カトラ地区の街区でも同様の細分化・高密化傾向が見られるが、大規模な敷地が分割された考えられる事例が多く見られ、街区形成の当初には、各街区は大規模な敷地に整然と区画されていたことが推測される。

第2章　注釈

1）英語文献では mohalla, mohullla, muhalla, mahalla, mahallah など様々な綴りが見られ、日本語表記もそれらに対応してマハッラ、ムハッラ、マハッラーなどが混在するが、本稿では Kumar（1989）および山根（1998）に準拠してモハッラ mohalla を用いる。

2）本章の考察は、主として以下の三次にわたる臨地調査によって得られたデータに基づいている。① 2000年10月：調査地区全域にわたるモハッラの名称・境界調査および諸施設の分布調査。② 2007年6月：カリカ・ガリー地区およびハウズ・カトラ地区における敷地割・建物の入口・階数・施設分布調査、③ 2007年8～9月：ダルマクープ地区およびチャフメフマン地区における住居の実測調査。

3）アラブ・イスラーム圏における街区構成に関する研究については山根（1998）にまとめられている。しかし「モハッラ」という呼称は一部に共通するものの、山根が指摘するように、その街区構成にはアラブ・イスラーム圏内においても大きな地方差があり、これらの知見を北インド都市について適用することは難しい。

4）17世紀に第5代皇帝シャー・ジャハーン Shah Jahan によって建設されたムガル帝国の王都。現在のデリー旧市街にあたる。

5）ジャイプル：布野（1998）、ラホール：山根（1998）、アーメダバード：山根（2000）など。

6）ジャイプルはヒンドゥーの計画都市であり、ラホールとアーメダバードはムガル皇帝によって建設されたインド・イスラーム都市の典型例である。これらに対してヴァーラーナシーは、ヒンドゥー教の聖地としてヒンドゥー的伝統を社会・文化・生活の全般にわたり色濃く保持しながらも、フライターグが18世紀のヴァーラーナシーは「ムガル化された都市であった」（Freitag:1989, p.8）と指摘するように、イスラーム都市文化の影響を強く受けた都市である。そのため都市空間においてはヒンドゥー的原理とイスラーム的原理が有機的に重層していると考えられ、両者の相互関係を考察するにあたって様々な示唆を含んでいると予想される。ヴァーラーナシーの住民の圧倒的多数はヒンドゥー教徒でありながら、モハッラを社会の基本構成単位とすることも、このような文脈で理解される。一般に北インドの都市の大多数は、程度の差はあるが、このようなヒンドゥーとイスラームの混淆を経て成立したものである。

7）ハキーム :1990, p.75、大塚 :2002, p.923

8）13～16世紀にかけてデリーを拠点に北インド一帯を支配したイスラーム諸王朝（奴隷王朝、ハルジー朝、トゥグルク朝、サイイド朝、ローディー朝）の総称。ムスリムの君主（スルタン）が支配したためこう呼ばれる。より後代のスール朝、ムガル帝国を含む場合もある。

9）Blake:2002, pp.83-84

10）Kumar:1989, pp.29。各モハッラは phatakhbandi という一種の住民税を徴収し、それに基づく独自の自警組織 chaukidari を備えていた（Freitag:1989, p.16）。

11）Blake:2002, p.84、Freitag:1989, p.123、Bayly:2002, p.324

12）Bayly:2002, p.312。ヴァーラーナシーでは19世紀末には治安維持等の諸業務は行政に取って代わられた（Kumar:1989, p.29）

13）Blake:2002, p.83。ムガル帝国の支配構造の基幹である「パトロン＝クライアント関係」に基づくもので、Blake は "Elite Mahallah" と呼ぶ。

14）Blake:2002, p.83。パトロンの多くは都市を去ったため、仕えていた人々は階層・職業毎に分かれ再結合していったのである。Blake は "Caste/Craft Mahallah" と呼ぶ。これらのモハッラには特定のカーストが多数集まっていたが、必ずしも排他的なものではなかったという（Chenoy:1998, pp.155-157）。また、この変化は完全に行われたわけではなく、基本的に両者は19世紀を通じて並存していたことも指摘されている（Freitag:2002, p.18、Bayly:2002, p.182）

15）Freitag:1989, p.118。Singh, S.B.（1996）は主にヴァーラーナシーにおけるこのタイプのモハッラについて論じている。

16）Blake（2002, pp.178-179）は、有力者のハヴェリが占拠されカースト・職業集団によって街区へと細分化された事例を数多く記している。

17）Bayly:2002, p.182、Kumar:1989, p.29、Singh, R.L.:1955, p.37。Blake（2002, p.179）は、イギリス植民地政府が治安維持の目的でモハッラの境界に門や柵を設置した事例をあげている。

18）布野 :1998, p.125、山根 :1998, p.230、山根 :2000, p.145

19）Singh, R.L.: 1973, pp.16-17

20）Freitag 1989: pp.13-14、Singh, S.B.: 1996, pp.121-124

21）Prinsep:1833, p.13

22）Kumar:1988, p.65

23）Kumar:1989, p.37。クマルはヴァーラーナシーを「モハッラの都市 City of Mohalla」であるとする。ヴァーラーナシーではモ

ハッラが組織単位となる祝祭は近年増加しているという報告もある（八木 :2006, p.35）。モハッラの伝統がなぜヴァーラーナシーにおいて特に根強いのか、確定的な理由をあげることはできないが、交易拠点であったためインド各地からの移住者が歴史的に多く「移住型」モハッラが数多く設立されたこと、サリー織工等の産業構造と結びついた強固なムスリム職人集団の存在、聖地としての特性からくる一般的な保守性、八木（2006）が論じるドゥルガー・プージャ Durga Puja 等のコミュニティ単位で催される祝祭が豊富なこと等が考えられる。

24) Kumar:1988, p.65-66

25) 本論文 1-4-2、図 1-12 参照。ヒンドゥー教の寺院・祠とモスクは、居住者の宗教を反映して明快に分かれて分布している。

26) 前章において検討したように、ヴィシュワナート寺院東部には、古代の街路構造の名残とされる格子状街路が見られる。この格子状街路間の寸法は東西・南北とも 60m あるいは 100m 前後であるため、これを対象地区における一街区の標準的規模と考え、おおむね二街区相当の距離（約 120 ～ 200m、中間をとって 150m）をもって、一次／二次街路の分別の基準とした。

27) もともと特定の街路を指していたと考えられる「…Gali（Gali は「道」の意）」がモハッラ全体の名称となっている場合も多い。

28) 本章では「街区」という語を、「周囲を道路によって囲われた一区画」という意味において用いる。図 2-20・図 2-26 からわかるように、一つのモハッラは複数の街区の部分（または全体）から構成されている。

29)『Google マップ（http://maps.google.co.jp/maps）』による。

30) 後述するダルマクープ地区とチャフメフマン地区については、ヒアリング調査および住居平面実測調査によって個別に所属モハッラと敷地境界を確認した。

31) アンタルグリハ地区内において、1929 年の地図に名称が記されているが今回の調査では確認できなかったモハッラ名：Govind Pura Kalan（現在の #29 Chattatala 付近）、Kaghzi Tola（#33 Chauk 付近）、Panchu Panda（#39 Gyan Bapi 付近）、Tikait Rai（#8 Neel Kanth 付近）、Phatak Ghasi Ram（#5 Brahmanal 付近）。今回の調査で確認されたが 1929 年地図には見られないモハッラ名：#7 Lalita Ghat、#8 Neel Khant、#29 Chattatala、#33 Chauk、#48 Dhondi Raj Binayak、#50 Aparnath Gali、Bansphatak。

32) Singh, R.L.: 1955, p.37。モハッラ全体が市場となっている #28, 36 には、防犯のために毎日開閉される門が現在でも設置されている。

33) ヒアリングにおいて「この寺院の向こう（手前）が○○モハッラ」という回答を得たケース。Coccari（1989, p.141）は、ヴァーラーナシー近郊村落に見られる境界守護神（「ビール Bir」または「ディー Dih」と呼ばれる）の対応物が、都市部のモハッラにおいても存在するとする。

34) #51 ～ 53 の名称はいずれも 1929 年の地図に記されているが、「Bhansphatak」の名称はみられないためである。

35) 1822 年の地図の当該部分では、#21 ～ 23 のモハッラ名称がその後広幅道路の通る位置をまたいで記されている。そのため広幅道路の建設前後でモハッラの範囲に大きな変化はなかったと考えられる。#20 は 1822 年の地図には示されていないが、周辺の状況からみて同様の事例と判断した。

36) Brahmanal はかつてこの場所に雨季になると生じていた水流の名（Sukul :1977, ch.4。-nal は「水流」の意）。kund は「池」、hauz は「貯水池」の意。

37) 河岸に建設された階段（または斜面）状の施設の総称。沐浴や火葬といった宗教儀式のほか、炊事・洗濯など生活全般に利用される。

38) Sukul: 1977, ch.6、Singh, S.B.: 1996, pp.122。この他に #9：Napali Khapra（Khapra は「瓦」の意）、#11：Lahori Tola（ラホール人街）は、名称に地方名を冠しており、古くは同地の出身者が多く住んでいたという可能性があるが、少なくとも現在の住民構成とは一致せず、文献にも確定的な記述は見られない。

39) Singh, R.L.（1955, p.37）はそのような住宅内の井戸を、井戸をもたない周辺住民も利用していた可能性を指摘している。川に近接しているため井戸を掘る必要性が少なかったことも、街路上の井戸が少ない理由の一つであろう。

40) 米倉 : 1973

41) 弘中 : 1996, ch.3

42) 米倉 : 1973, pp.82-83

43) 家屋の規模は一般的に、五室では 11m × 9m、七室では 15 × 10.6m、十一室になると 16.5m × 13.5m である（米倉 : 1973, p.83）。

44) 米倉はこの理由として「冷涼で雨をもってくる東風や北風」と「暑いそして埃っぽい夏の西風の猛威」との関係を挙げる（米倉 : 1973, p.83）。

45) 使用されているレンガには大きく二種類がある。イギリス時代以前のラコウリー lakhauri と呼ばれる 13× 10× 2cm 程度の手作りの小さなものと、イギリスの影響下に精算された 26× 13× 7cm 程度の大きめのものである。レンガの材料となる粘土はガンジス川流域一帯で豊富であるが、木材が不足しているため、基本的に焼成レンガは高価なものであった。使われなくなった建物があると、そこからレンガが採取され、新しい別の建物建設に利用されることが多かった。そのため建物に使用されているレンガの種類から、建設年代を判断することは難しいとされている (Rotzer：1989, p.114)。

46) 1907年に隣州ビハール Bihar のジャムシェドプル Jamshedpur にターター Tata 鉄鋼工場ができてからは、木製の梁に代わって鉄製の梁を用いることが一般的になった (Rotzer：1989, p.115)。

47) 同じく「中庭」を意味するアンガン angan が、都市住居の中庭を指して用いられる場合もあるが、チョウクという呼称がより一般的である。チョウク chauk という語は、元々「四角い」という原義を持つ語であり、住居の中庭の他にも町中の広場などに対しても用いられる。あくまで印象の域を出ないが、「アンガン」は比較的低層の住居の広く空に開けた、「屋外的」性質の強い中庭を指す場合に用いられるのに対して、「チョウク」は室内諸室との繋がりの強い、より「室内的」な中庭を指して用いられるように思われる。

48) 古代インドの建築計画理念を示すモデル図「ヴァーストゥ・プルシャ・マンダラ Vastu Plurusha Mandala」では、住居・中庭ともに四方位に厳密に即して、かつ正方形に作るべきであることが示されている。ヴァストゥ・プルシャ・マンダラは敷地の各部が人体各部に関連付けられており、中庭は臍の部分として最も重要な場所とされる (Chakarabarti:1999, p.7)。

49) 弘中 : 1996, pp.67-69

50) 弘中 : 1996, pp.67

51) 前述したように、ヴァーラーナシーの高密な市街地においては、生活の中心は環境的要因から主に上層部にとられるため、住居の構成を生活行為との関係からとらえる場合には一階部分の分析のみでは不十分である。しかし、住居の各階平面の構成は基本的に共通しており、また本研究では住居の集合形態および街区空間との関係に主眼をおくため、ここでは対象を一階部の平面に絞って分析を行う。

52) ヴァーラーナシーの住居では、街路と出入りのできる扉が複数設けられることも多いが、ここで対象とするのはそれらのうち最も格式の高い入口 (玄関) である。玄関となる扉には、地番あるいは居住者の氏名を記した標札が掲げられており、それと判断することができる。また、標札が無い場合でも、扉の周囲に設けられたレリーフや、入口の守り神であるガネーシャ Ganesha 神の像の位置などで、判別することができる。

53) 「入口の設置可能な方位の延べ数」とは、例えば、東側のみで街路に接する住居では〈東 =1〉と数え、街区の東南角に立地し東と南に入口を設けることが可能な住居では〈東 =1、南 =1〉と、それぞれの方位について数える。この場合、二軒の住居の「入口の設置可能な方位の延べ数」は、〈東 =2、南 =1〉となる。

54) ヴァーラーナシーには、固有の構造体を持たず、住居内の一室が寺院として扱われているケースが数多く見られるが、ここでは数えていない。

55) Medhasananda (2002, p.36) によれば、ハウズ・カトラというモハッラ名が文献史料に表れるのは 1796年以降である。1822年の地図ではすでに市街化されており、カッチャの領域に含まれていることから、遅くとも 18世紀末には市街地が形成されていたと考えられる。

56) Dal Mandi (Mandi は「市場」の意) は、同地に住んでいたジャイナ教徒の貴族 Raja Daalchand に由来する (Medhasananda: 2002, p.29)。#27のモハッラ名ともなっている。

57) 「チャフメフマン」というモハッラ名は、図 2-27北端の小広場に設けられた井戸の名称である。また広場の東にあるモスクの名称ともなっている。

58) ムスリムの居住する敷地の平均面積は 77㎡、ヒンディー教徒の敷地平均面積は 118㎡である。

第３章
マドゥライの都市構造の形成と理念的モデル

3-1　はじめに

本章では、南インド、タミル・ナードゥ州にあるマドゥライの旧市街域を対象として、都市構造の形成と理念的モデルの関係について、都市の形成プロセスをふまえながら、主に都市で催される巡行祭礼と都市施設の配置を視点とした考察を行なう。考察の対象とする範囲は、19世紀まで町を囲んでいた城壁の跡地に建設されたヴェリ Veli 通の内側の領域である。

南インドのタミル・ナードゥ州一帯には大規模なヒンドゥー寺院を中心とした「寺院都市」が複数存在する。これらの寺院都市群に共通する重要な特徴は、程度の差はあるものの中心寺院を核にした求心的な都市形態を有する点であり、古代インドの建築書「シルパ・シャーストラ Silpasastra[1)]」に記された都市計画理念との関連が指摘されている[2)]。しかし、どのような計画理念がどの程度までこれらの都

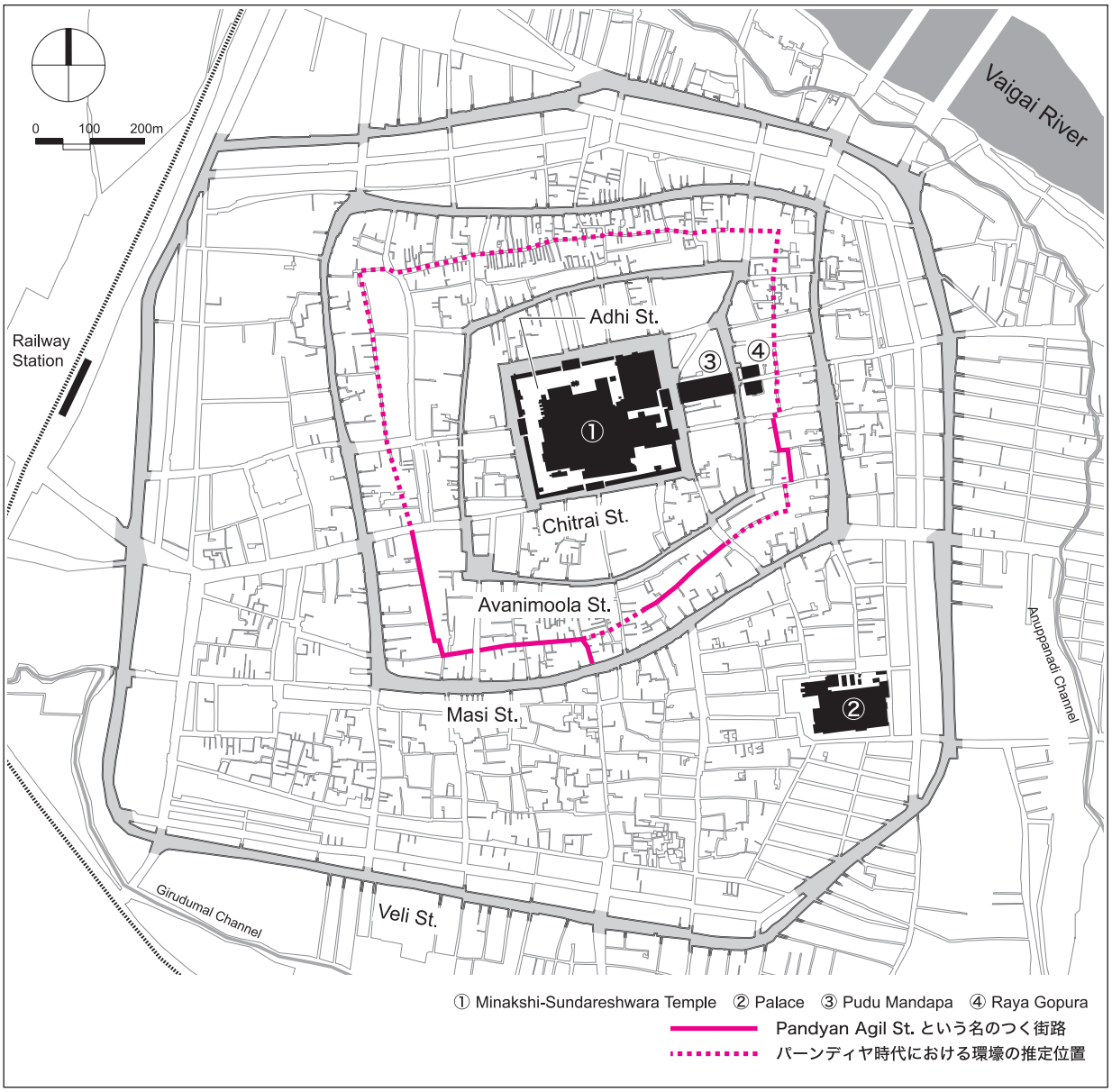


図 3-1　マドゥライ旧市街概要

"Madura District, Madura Town: Revenue Map", 1907（原図縮尺：1/792および1/1584、全178葉）にもとづき作成。

市に適用されたかという具体的な検証は、これまでほとんどなされていない[3)]。

マドゥライを対象とする理由は、他の寺院都市が門前町を拡大した程度の小規模なものであるのに対し、南インド最大の巡礼寺院であるミーナークシー・スンダレシュワラ Minaksi-Sundareshvara 寺院[4)]（以下、ミーナークシー寺院）を擁するタミル地方南部の中心的な大都市であるとともに、計画理念の反映と考えられる同心方格囲帯状の都市形態を明快に残しているためである。また、古代よりパーンディヤ Pandya 朝をはじめとする諸王朝の首都として整備され、特に 17 世紀のナーヤカ Nayak 朝時代には、計画的な都市再建が行われたという歴史的背景を有している。王権の表現としての都市という観点からも、マドゥライは極めて興味深い都市の一つである。

マドゥライは、中心にあるミーナクシー寺院を矩形の街路が四重に取り囲むという、極めて明快な構造を有しているが、実際の街路や街区形態は少なからず歪んでいる。都市建設にあたって何らかの理念的モデルが採用されていたとしても、必ずしも理念通りに実現されるとは限らない。また、仮に理念通りに建設されたとしても、その後の歴史の中で様々に変容していったであろうことが予想される。本研究の主要な関心は、その理念的モデルと変容の距離にある。本章では、まず既往研究を基に都市の歴史的形成過程を整理した上で、都市構造と密接に関わる祭礼の機能、施設配置を視点とした検討を通じて、都市の理念的モデルについて考察する。

マドゥライの都市形成史については、タミル語古文献や碑文を基に 19 世紀までを概括するデヴァクンジャリ Devakunjari（1979）、ナーヤカ時代を中心とするラージャラム Rajaram（1982）などが基本文献となる。また古代の都市計画について、サンガム文学やプラーナ文献を渉猟して論じるアヤール C.P.V. Ayyar（1916）がある。ミーナークシー寺院や祭礼に焦点をあて寺院都市としての側面を論じる著作は少なくない。代表的なものはレイノルズ Reynolds（1987）、スミス Smith（1976）、フラー Fuller（1993）などである。ナーヤカ朝時代のマドゥライ再建がシルパ・シャーストラに基づくとする記述は、シェノイ Shenoy（1937）が初出と考えられる。レイノルズとバラスブラマニアン Balasubramanian（1997）はこれに若干の考察を与えているが、街路形態や居住地配置などの具体的な都市空間との関係では論じられていない。

3-2　南インドにおける寺院都市の成立

3-2-1　寺院から寺院都市への発展

インドのタミル・ナードゥ周辺には、大規模なヒンドゥー寺院を中心とする同心方格囲帯状の構造を有する「寺院都市」が複数存在している。それらは一般に、マンダラに表象されるインドの宇宙観、直接には『マーナサーラ Manasara[5)]』や『マヤマタ Mayamata[6)]』に代表される一連の「シルパ・シャーストラ」に記されている理想都市の計画理念に基づいて建設されたものとして理解されている。その代表例が、本章および次章で取り上げるマドゥライである。他にシュリーランガム Srirangam（図 3-2）、チ

ダンバラム Chidambaram、スチンドラム Schindram、ティルバンナーマライ Tiruvannamalai、カーンチープラム Kanchipuram などがあげられるが（図 0-1）、マドゥライとシュリーランガム以外の都市は門前町の拡大した程度の比較的小規模なものである。

寺院都市の形成の契機としてまず指摘されるのは、南インドにおける寺院の巨大化現象である。南インドの寺院建築の発展は、以下のような秩序だった単線的な展開を遂げてきた[7)]。まず、7世紀のパッラヴァ Pallava 朝の石彫の事業から始まり、11世紀のチョーラ Chola 朝の壮大な建設事業をへて、南インドの寺院はパーンディヤ朝、ヴィジャヤナガル Vijayanagar 王国、そしてナーヤカ朝の保護の元、発展を続けることになる。寺院の巨大で都市的な伽藍への成長は、都市生活における寺院の指導的役割の増大を反映しており、それは 15、16世紀のヴィジャヤナガル王国の寄進のもとで巨大な寺院都市とも呼ぶべき複合体へと発達し、最高潮に達する。チョーラ朝時代の大きな特徴であったガルバ・グリハ（聖室）への関心が、徐々に巨大なプラーカーラ prakara（周壁）[8)] とゴープラ（楼門）[9)] に移っていく（図 3-2）。そしてヴィジャヤナガル王国、ナーヤカ朝においては、高くそびえるゴープラが寺院の外観上の決定的な要素となる。ゴープラがより高く大きく建設されるにつれて、中心部の本殿は比例して見劣りするようになり、本殿の上部構造は視界から失われてしまうことが多かった。そしてプラーカーラという要素が、寺院が寺院都市へと成長する決定的な要因となった。

ジョージ・ミッチェル（1993）は、プラーカーラとゴープラの発達、寺院から寺院都市への発展の要因を、以下のように機能主義的に説明する[10)]。

「寺院建築を特徴づけたのは、当初の神聖な建物に次々と外周壁を付け加えて、いくつもの楼門を通って参詣されるような姿に拡大しようとする欲求であった。そのようにして作られた環状の境内は、聖室の周りの回繞を何重にも可能とし、また互いに調和のとれた伽藍の多くの増設建物を結び合わせるのである。実際、神聖なものはやたらに移動させてはならないという信念を守って、新しい寺院を建立するよりも既存の寺院に増築していくことが習慣となった。…ゴープラは増え続ける外周壁のいずれにおいても、東西南北の定位置に建設された。…雄大な楼門のある巨大な伽藍を発展させていっ

撮影地：シュリーランガム

撮影地：マドゥライ

図 3-2　プラーカーラ（周壁）とゴープラ（楼門）

た原動力には、寺院の役割の変化が反映しているのであって、ヴィジャヤナガル朝時代に寺院は都市生活と、それまで以上に密接に関わりあうようになったのである。実際シュリーランガムの場合のように、拡張していく境内はしばしば町自体を形成するようにもなった。寺院の成長につれて典礼のプログラムがますます複雑になるために、寺院は地域社会の人々をより多く雇うようになった。マドゥライの町をはじめとして、寺院の境内の中に数多くの列柱ホールや人造のタンクをかかえることを説明するのは、寺院に与えられた副次的な機能―市民の集会や教育、舞踏や演劇―なのである。」

寺院から寺院都市への発展プロセスは、以下のように要約することができる。

①まず宗教儀礼上の要求から寺院境内が拡大・複雑化し、それに伴いプラーカーラとゴープラが既存寺院の外周へ建設されていく。

②寺院の成長に伴って寺院の副次的機能が増大し、また地域社会との結合が深められ、次第に寺院境内は都市的な様相を帯びてくる。

③上記の変化が連鎖することによって、さらに寺院が都市としての性格を強めながら拡張するというプロセスを経て、寺院都市が形成される。

都市的様相を帯びた寺院境内が、単なる寺院とその付属施設の集合体にとどまらず、一つの「寺院都市」という複合体を形成しえたのには、プラーカーラという建築的要素の存在が決定的な役割を果たしていたと考えられる。プラーカーラという矩形の周壁は、寺院境内の拡張に応じて既存境内を囲い込む形で次々と外周に建設することができたため、寺院を中核とした全体性を維持しつつ、その中に一般の居住地を含む様々な都市的要素を内包することを可能としたからである。

以上は、寺院都市の成立プロセスに関する建築的な発達史的視点からの解釈であり、その典型的な

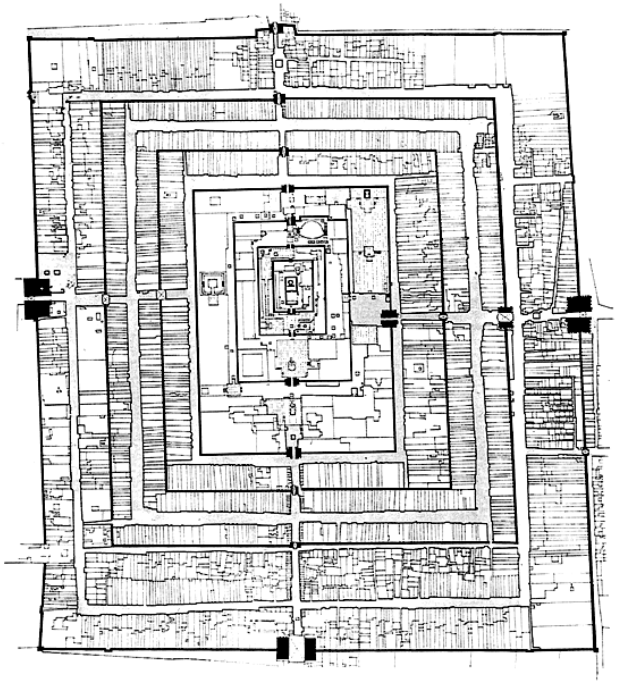


図 3-3　シュリーランガム
出典：Fischer (1987)

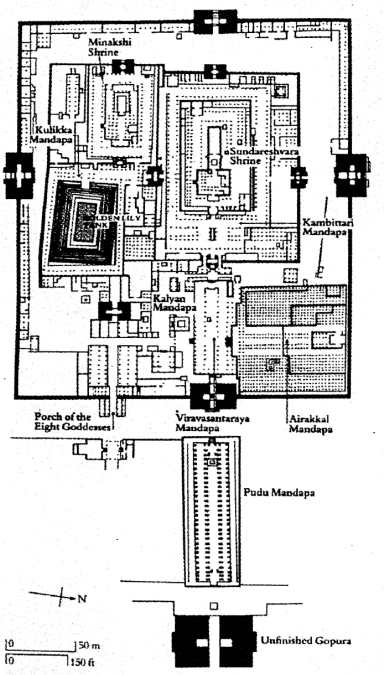


図 3-4　ミーナクシー・スンダレシュワラ寺院平面図
出典：Michell (1993)

例はシュリーランガムに見ることができる（図 3-3）。マドゥライにおいても、ミーナクシー寺院の発達に同様の展開が見られ[11]（図 3-4）、また後述するように、ティルマナイ・ナーヤカによる寺院境内の既存市街地への拡張という試みが見られる。しかしながら、現在のような同心方格囲帯状の都市構造は、単純に寺院境内の拡大の結果として生まれたわけではない。後に詳しく見るように、プラーナなどの古文献によれば、都市全体の姿はあらかじめ計画され、建設されているのである。ミッチェルは触れていないが、注目されるのは寺院を中心として重層するプラーカーラが、寺院都市に重層的な同心方格囲帯からなるマンダラ状の形態を付与するという点である。マドゥライではプラーカーラの代わりに、寺院を取り巻く同心方形状の街路がこの役割を担っている。このような寺院都市のマンダラ的形態に着目し、その展開を同時期の南インドにおける在地王権とバラモンの結びつきという観点から捉えようとするのが小倉泰（1999）である。

3-2-2　都市空間のマンダラ化と王権

小倉（1999）によれば、南インドのヒンドゥー寺院の規模が拡大し、全体として明らかにマンダラの建築的表現の様相を呈するようになる、すなわち「都市空間のマンダラ化」が進行する時期は、タミル・ナードゥにおける都市化の時期と密接に並行しているという。

前近代の南インドの都市化は、二つの時期に起こったとされている。第一は 1 ～ 3 世紀のサンガム Sangam 時代[12]である。北インドのガンジス川流域を中心に起こった第一期の都市化の影響を受けた全インド的現象の一貫であり、この時代の南インドの都市は、パーンディヤ朝やチェーラ Chera 朝の支配の下、ローマや西アジアとの海上貿易によって栄えるが、北インドにおける第一期都市の衰退と並行して、3 世紀頃には衰退する。第二の都市化の時期は、6 ～ 14 世紀にかけてであり、ヒンドゥー寺院の発展とブラフマデーヤ Brahmadeya の拡大によって引き起こされたと言われている[13]。10 世紀末にチョーラ朝に大帝国を築いたラージャラージャ RajaRaja 一世（在位 985-1012）以降、歴代の王たちは自らの首都の中心に大寺院を建立し、そこに莫大な寄進を行い、同時に寺院の運営にも度重なる干渉を行った。これらの寺院にはしばしば建設者である王の名前が冠されており、この時代に寺院が担うことになった政治的重要性を物語っている。寺院は従来分散していた権力・交易・儀礼などの機能を集約し、王朝の統合に不可欠の在地統合の核となるべき有力な政治的装置として、権力者たちに認識されていったのである[14]。前述したような、寺院の巨大化と副次的機能の増大、さらにはマンダラ的形態をとりながら寺院都市へと発達するという現象が顕著になるのが、この第二の都市化の時期である。こうした寺院都市の発展は、交易センターとして発展を始める他の都市の役割をしのぐ、この時期の南インドの都市化の進行における第一の立役者であったとされる[15]。

一方で、バラモンにより編纂された古文献に見られる建築・都市計画理念の成熟も、この二つの都市化と期を同じくするという。まず、2 世紀から 3 世紀にかけて編纂されたと考えられる『アルタシャーストラ』には、都市建設に関する規定が詳細に論じられている。しかしその後の時代の建築書には、都市に関する記述がほとんど見られなくなる[16]。ところが、6 ～ 7 世紀からチョーラ朝期にかけて、南

インドで編纂されたという『マーナサーラ』や『マヤマタ』には、都市に関する『アルタシャーストラ』以上の詳細な記述が見られる。小倉は、このような各種文献における都市に関する記述の粗密が、それぞれの文献が編纂された時期の都市の状況と密接に関係していると指摘する。すなわち、『アルタシャーストラ』の編纂された時代は、第一期の都市化の時代に対応し、『マーナサーラ』や『マヤマタ』の編纂された時代が、第二期の都市化の時代に対応するというのである。特に後者の文献群で見られる、元々は寺院や家屋などの単体建築に適用されるものであった「ヴァーストゥ・プルシャ・マンダラ」を都市や村落の計画においても適用し、ブラフマー Brahma・ダイヴァカ Daivaka・マーヌシャ Manusha・パイシャーチャ Paishacha という四層の同心方格囲帯状区画に、それぞれヴァルナ毎の居住区分を定めるという記述は、この時期に加えられた新たな要素である。小倉は、このような「ヴァーストゥ・プルシャ・マンダラ」の拡大解釈は、家屋から寺院・宮殿・村落・都市ひいては王国全土という全ての空間が、統一的に聖なる宇宙的秩序に結びつけられるという観念的構造の成立を意味すると指摘し、これを南インドの寺院の巨大化および都市化という現象に対する、バラモン階層の理論的対応の現れと捉える。つまり「都市空間のマンダラ化」という現象は、寺院を在地的統合の核として中央集権的国家秩序の形成を目指す王権の論理と、宗教的秩序を巨大な寺院や都市のレイアウトを通じて現実世界に実現しようとするバラモン側の論理との、重層あるいは相互依存によって推し進められたというのが小倉の説である。

古文献に記された都市理念の記述にのみ注目すれば、南インドの寺院都市の形態は、単にマンダラの建築的表現、あるいはマンダラを通じたコスモロジー（宇宙的秩序）の具現として、宗教論的または宇宙論的に理解されるのみである。しかしながら上記のような歴史的文脈に照らしてみると、その意味はきわめて世俗的かつ現実的な様相を帯びてくるのである。以上の点をふまえて、以下の節では、マドゥライにおける「マンダラ的都市空間」の形成過程を見ていきたい。

3-3　マドゥライの都市形成

3-3-1　都市形成史の概要

マドゥライは歴史的にタミル民族の王朝パーンディヤ朝の首都として知られる。パーンディヤの名はアショーカ Ashoka 王の磨崖詔勅（前 3c）に記されており、その起源は前 6 世紀頃まで遡るとされる [17]。パーンディヤ朝は 14 世紀まで幾度かの盛衰を繰り返しつつ、断続的ではあるが南インド南端部を支配しつづけたが、14 世紀初頭のデリー・スルタン朝の侵入によって事実上滅亡する。イスラーム勢力による支配は短期間であったが都市の大部分が破壊された。1370 年イスラーム勢力を駆逐したヴィジャヤナガル王国がマドゥライを支配下におさめる。16 世紀にはヴィシュワナータ・ナーヤカ Vishvanatha Nayaka（在位 1529-64）が独立政権（マドゥライ・ナーヤカ朝）を確立し [18]、都市を再建した。ナーヤカ朝はティルマライ・ナーヤカ Thirumalai Nayaka（在位 1623-59）の治世に最盛期を迎えるが、18c に入

ると衰える。1736年にマドゥライはムガル Mughal 帝国の支配下に入り、1801年にはイギリスへ割譲される。

マドゥライの都市形成過程は、以上のような歴史に即して、大きく以下の三期に分類することができる。

(1) パーンディヤ朝時代(前6〜後14世紀)

この期間の建築遺構や都市地図は残されていないが、いくつかのサンガム文学やプラーナ文献[19]の中に都市構成に関する手がかりを見ることができる。これらの記述に共通するのは、3〜5世紀頃のマドゥライが中心に王宮を備えたパーンディヤの王都であり、城壁と堀に囲まれた内部には広大な街路が走り、カースト毎に住区が設定されるなど入念に計画された都市であったという点である[20]。後年確立するシルパ・シャーストラの基となったであろう計画理念の存在が既にうかがわれる。プラーナ文献の一つ『マドゥライ・スシャラ・プラーナ Madurai Sthala Purana』には、当時の都市において住区や諸施設の配置などがシャーストラに則り計画されていた様子が描かれており、寺院を中心として城壁に囲まれた都市は「とぐろを巻いた蛇(アーラヴァーイ Alavay)」に例えられている[21]。

パーンディヤ朝時代の建築や都市地図は残されていないが、この時代の都市について、現在の都市の中に全く手がかりがないわけではない。1907年の地図および現地で確認された街路にパーンディヤン・アギル Pandyan Agil 通がある。アギルはタミル語で「堀」を意味し、考古学的裏付けはないものの、後期パーンディヤ朝時代の堀の位置を示すものと考えられる。地図上でこの街路をたどると、当時の都市がミーナークシー寺院を中心とした正方形に近い形であったことが推測される(図3-1)。

(2) ナーヤカ朝時代(16〜18世紀)

16世紀にナーヤカ朝を創始したヴィシュワナータは、イスラーム勢力によって破壊された都市を大々的に再建する。パーンディヤ朝時代の古い城壁を取り壊し、72の稜堡を備えたより大きな二重の城壁を建設、その内部に寺院を中心とする同心方形状の街路、現在のアディ Adhi 通・チッタレイ Chittrai 通・アヴァニムーラ Avanimoola 通・マシ Masi 通を整備した[22]。現在ある都市の基本的形態はこの時代に形成されたものである。ナーヤカ朝の初期の首都はティルチラパッリ Tiruchirapalli であったが、ティ

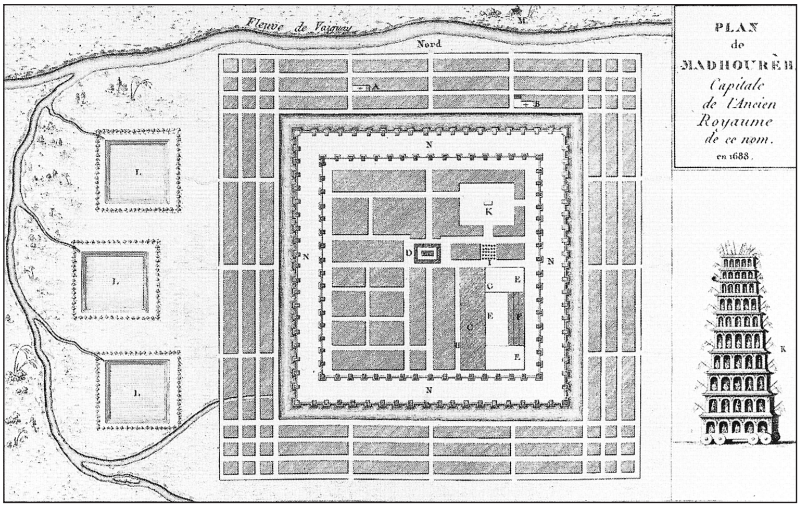


図3-5　1688年のマドゥライ古地図
出典：Howes: 2003

ルマライの時代にマドゥライへの遷都が行われた[23]。ティルマライは王宮の建設をはじめとする大規模な建設活動を行った。彼はミーナークシー寺院を囲むプラーカーラを建て、アディ通を寺院境内に取り込んだ。寺院東門前にはプドゥ・マンダパ Pudu Mandapa を建設し、さらにその東に巨大な塔門ラヤ・ゴープラ Raya Gopura の建設を試みる[24]。シェノイ（1937）によればラヤ・ゴープラは、その後建設が予定されていた 72 の同規模のゴープラの一つに過ぎないという[25]。意図していたのはアディ通と同様にアヴァニムーラ通を包含するような、寺院境内の拡張であろう。17 世紀末に実権を握った女王ラニ・マンガマル Rani Mangammal はチッタレイ通北東角に宮殿を建設した。1688 年のマドゥライを描いたとされる古地図を見ると、中央の寺院、その東北の王宮とともに、二重の城壁が強調して描かれている（図 3-5）。この地図では、都市の形状をきわめて整然と区画された正方形として描かれており、実態に即したものとは考えがたいが、何らかの理念的モデルの存在を暗示している。

18c 後半のムガル帝国の支配期には、城壁周辺とヴァイガイ Vaigai 川の北にムスリムの居住地が発達し、モスクの建設が進んだ。1755 年の地図（図 3-6, 7）からは当時の都市の様子をある程度うかがうことができる。城壁内では、主にマシ通の内側が居住区として発展していたこと、その外側は主に農地であったことが確認できる。また、住居が建ち並んでいるのは街路沿いのみであり、街区の奥は空地として描かれていることから、都市の高密化はいまだ進行していなかったことが伺われる。城壁の外側では、都市の東から北にかけて市街が形成されている。

(3) イギリス植民地時代〜現代（19 世紀〜）

1840 年、イギリス人収税官ブラックバーン Blackburn により城壁と堀が撤去され、市街の拡大が始まる。城壁跡には最外縁の同心方形状街路であるヴェリ通[26]が整備された。マシ通とヴェリ通の間にも、ペルマール・マイストリー Perumal Maistry 通とマレット Marret 通という新たな同心方形状の街路が建設された。前者はこの時代にマイストリー（道路の責任者）の地位にあったペルマール・ピレイ Perumal Pillai にちなみ、後者は都市の道路計画を考案したイギリスの技術者マレットの名にちなんで名付けられたものである[27]。

時期は定かではないが、イスラム勢力による破壊を被ったティルマライ・ナーヤカ宮殿は、イギリス時代に当初の 1/5 の規模まで縮小され、その跡地はイギリス人居住地として整備された。現在ではイギリス人は居住しておらず、現地住民の居住地へと変化している。

1875 年には鉄道が開通、駅はヴェリ通りの西側に設けられ、マドゥライ旧市街の西と南を鉄道が横切るかたちとなった。城壁の撤去、鉄道の開通、そして 1866 年にタウンシップの地位を獲得したことで、マドゥライの産業は発達し、鉄道駅の西側にコロニーの建設が進んだ。1889 年にはヴァイガイ川にアルバート・ヴィクター Albert Victor 橋が架設され、河岸北部の開発につながった。1906 年には、建物の輪郭と敷地割りまで記された詳細な地籍図（図 3-8）が作成されている。

この時代は城壁と堀の撤去に起因する都市の拡大と近代化の時代といえるが、旧城壁内（現ヴェリ通内側）においては、ナーヤカ朝時代に形成された都市構成に大きな影響を及ぼす変化は起こっていない。

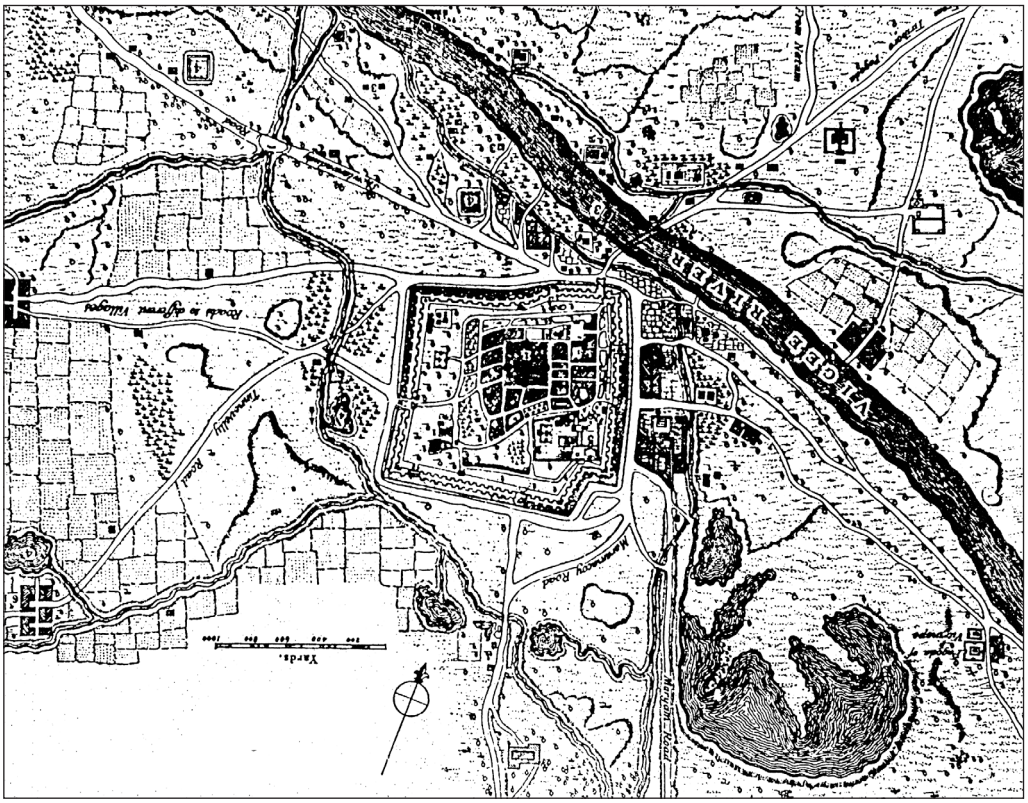


図 3-6　1755年のマドゥライ

* 元図は南を上に描かれているが、ここでは他の図との比較のため北を上としている。

出展：Cambridge: 1761, Plate VII

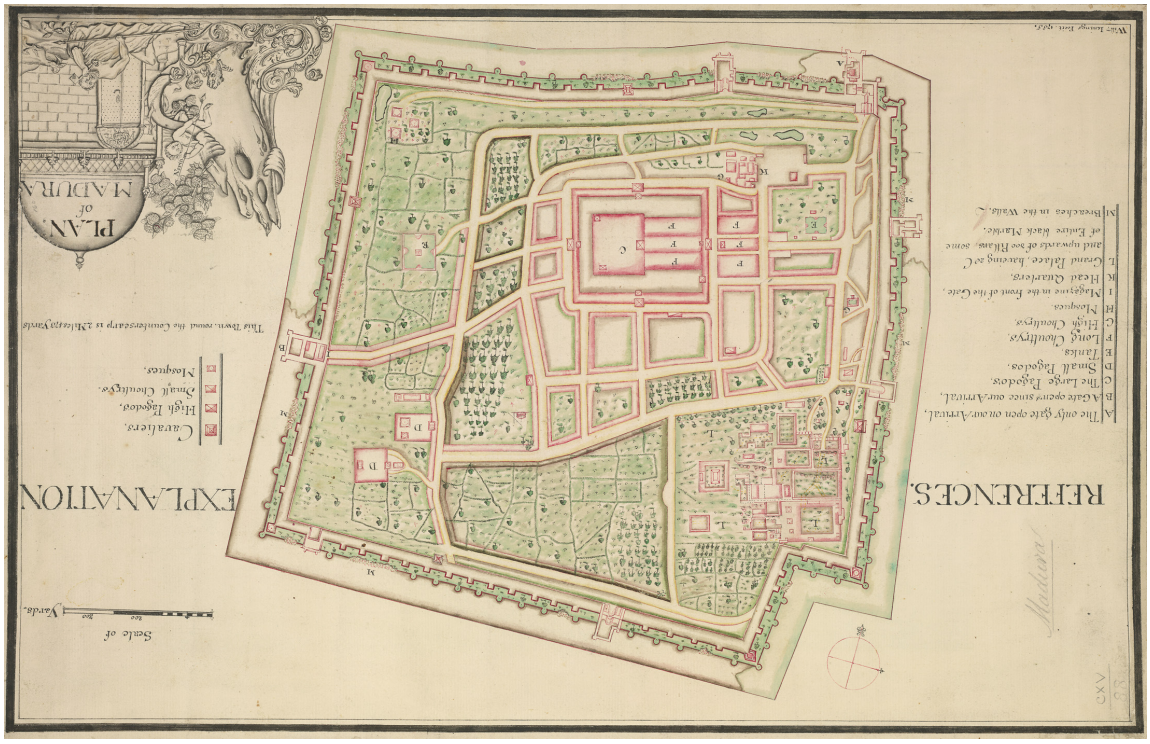


図 3-7　1755年のマドゥライ（詳細図）

元図は南を上に描かれているが、ここでは他の図との比較のため北を上としている。

出典："A plan of Madura: drawn by William Jenings"、Madura: Madras Presidency, 1755

（所蔵：大英図書館・資料番号：Maps K.Top.115.88）

3-3-2　古文献中のマドゥライ

前節で、プラーナ文献の中で記述されるマドゥライの姿について概観したが、以下にアヤール（1916）[28] に即しながら、より詳しく見ていきたい。注目されるのは古代のマドゥライが計画的に建設された都市であったという点である。古代マドゥライの都市計画は、アヤールにより、またプラーナ文献の記述からも、明確に「最初の計画」と「第二の計画」の二期に分けられる。

（1）最初の計画

「最初の計画」をアヤール（1916）に従い要約すると以下のようである。

①敷地の選定：マナヴール Manavur[29] の商人が西方に旅をした際に、カダンバの森で金色の光に輝き、美しい蓮の花に満ちた貯水池を発見した。商人がマナヴールに帰って王にこのことを告げると、王は森に出かけ調査を行ない、そこに王都を建設することを決定した。

②神殿群の建設：森を拓き整地を行うと、王は助言者に最良の計画案を求め、計画を決定した。まず中央に主神殿を建設した後、周囲に小神殿を順次建設した。王は壮大なゴープラ（塔門）を建てて神

図 3-8　1907 年のマドゥライ旧市街

"Madura District, Madura Town: Revenue Map", 1907（原図縮尺：1/792 および 1/1584）、全 178 葉を貼り合わせたもの。

殿を壮麗化した。

③街路の計画：続いて、市場、車道、住民の居住区のための道の計画を行った。主神殿の周りを巡る街路および主要な祭礼路が計画された後、それらに交差する小街路が配置された。

④公共施設の建設：そして、広場が作られ、集会所、庭園が設けられた。川・池など自然の要素は全て生かされた。貯水池が新しく掘られ、城壁と堀は古来のシャーストラの規定に従って計画された。

⑤宮殿の建設：王はほぼ完成した都市の北東部分に宮殿を建設した。完成した都市は、人々の繁栄と健康、安寧を願ってマドゥライと名付けられた[30)]。

プラーナ文献によれば、以上にようにマドゥライは極めて入念に計画された都市であることがわかる。アヤールは、都市建設は部分毎に徐々に行われたのではなく、あらかじめ森を拓いて用意した土地に、空地などを十分考慮して計画されたことを強調する。都市建設の原点となった金色の蓮の池は、ミーナクシー寺院境内の沐浴池として伝えられており[31)]、「主神殿」がミーナクシー寺院を指していることは疑いない。注目されるのは、主神殿の周囲を巡回する街路構造が既に示されている点である。それに東西に直行するであろう街路は「小街路」とされ、巡回街路が優位に置かれている点も重要である。また王宮が、『アルタシャーストラ』のいう北東の位置に建設されている点が注目される。

(2) 第二の計画

こうして計画されたマドゥライは長い年月繁栄したが、やがて巨大な洪水により壊滅的な破壊を被ったと伝えられる。中心部だけが存続したが、都市の成長・発展には不十分な規模であり、時の王は人口過密への対応を迫られることになった。そこで王は臣下に命じ、古代都市の限界を調査させ、現在の人口需要を満足し、さらに将来の拡張にも対応できる新しい「第二の計画」を立案する。

⑥アーラヴァイの形態：新たな都市計画も、「最初の計画」と同様、主神殿とその周辺を出発点として開始される。計画図は、増加する住民に合わせ、また自然地形に沿った形で新たに引かれた。都市の計画線は主神殿の右側から始まり、自然地形に沿って主神殿を取り囲ように巡って左側で完結するという、「とぐろを巻いた蛇（アーラヴァーイ Alavay）」に例えられる形であった。

⑦規模：都市全体は9×9マイルの大きさであった[32)]。

⑧都市の門：南門が主要な入口となり、北にやや小さい裏門が設けられた。北はヴァイガイ川が自然の境界となり、都市は南に発展することになった。他に東西にも門が設けられていた。

⑨城壁の形：城壁は土地の形状に従って建設された。一方が川であるため、機械的に左右対称にするのは費用がかかるし、快適ではない。そのため王は、正確な正方形や円・直線の適用をあきらめ、周辺環境にあわせて建設することにした。その結果、城壁の形態は部分的に歪むことになり、以降マドゥライは、ティルムダンガル Tirumudangal（「ジグザグな壁で囲われた美しい都市」の意）と呼ばれるようになった。

⑩宮殿と居住地の配置：城壁で市域を囲むと、宮殿の場所が型通りに決められ、残りの土地が住民の階層毎に割り当てられた。これらはすべてシャーストラに従って行われた。

⑪街路：主神殿は都市の中心に位置した。街路の形は数学的には正確ではない。新たな計画は、大

きく広い直線の通りだけではなく、湾曲した小さな路地によっても構成される。大通りは川幅ほどもあり、両側に川堤に立つ木々のように住居が建ち並ぶ。

⑫市場：市場は昼間の通常の市場と夜の市場がある。二つは近接しているが分かれている。一般に二つの大通りが市場となる。通常の市場には屋台が並ぶ。

⑬王宮周辺の居住地：王宮の周りの四つの通りには、大臣・裕福な商人・バラモン・王宮に使える人々が居住する。また、四つの異なったカーストが住む。

⑭個々の建築：王宮および住居はシャーストラの規定に従って建設された。王宮の入口・門・東西南北各方位に位置する神々には特別の注意が払われた。住居・王宮・都市を正しく四方位に即して建設することは、古代には基本的原理であった[33)]。住居には中庭が設けられた。

⑮堀：城壁の周囲には深い堀が掘られ、下水が流れ込んでいた。

「第二の計画」は以上のように、洪水により破壊された既存の都市を前提に計画されたという。主神殿を中核として、古来のシャーストラに基づいて計画されたこと、また同心方格囲帯状の構成が採用されている点は、「最初の計画」と同様である。「第二の計画」における大きな課題は、「最初の計画」の限界、洪水による居住域の変化、人口増加などへの対応であった。都市の輪郭や街路形態は、幾何学的形態を追求するのではなく、自然地形や既存市街の存在、あるいは経済性などを考慮して決定されたため、結果としてある程度歪んだ形となった。北がヴァイガイ川で境界付けられたため、その後の展開が南へ向いて広がったという点も注目される。

アヤールが典拠として用いるプラーナ文献の推定成立年代には、2〜13世紀頃と幅があるため、「最初の計画」と「第二の計画」が、具体的にいつ頃の年代のマドゥライを描いたものであるかは、必ずしも明確ではない。しかし、二つの計画に関する記述の多くが2〜6世紀頃の文献に基づいていることから、パーンディヤ朝時代の初期まで遡ると推定することはできる。また、これらの記述がどれほど都市の実態に即して描かれたものかという点には、当然一定の疑問が残される。特に「最初の計画」の記述は、敷地の選定を除けば、非常に一般的な書き方がなされているため、具体的な都市の姿の描写というよりは、都市のあるべき理想像について規範的に述べたものであろう。

それに対して「第二の計画」の記述は、はるかに具体的である。様々な現実的諸条件に対応した結果、都市が理想的な姿から逸脱したことが率直に描かれている。とりわけ地形にあわせて歪むことになった城壁や街路の形態や、その後の都市の南への進展に関するくだりは、1755年のマドゥライ地図にも共通する点が多いため、14世紀のムスリム勢力の侵入により破壊される以前の、パーンディヤ朝時代のマドゥライの姿を、かなりの程度まで反映したものと考えられる。先に見たパーンディヤ時代の堀の形態をあわせて考えれば、ヴィシュワナータ・ナーヤカによる都市再建に先立って、すでにパーンディヤ朝時代には、現在見られるような同心方形状の都市構造を有した都市が形成されていたと考えてよいだろう。

3-4　マドゥライの都市空間構造

3-4-1　街路形態と理念的モデル

現在のマドゥライは、プラーカーラに囲われたミーナークシー寺院の周りを、多少歪んでいるものの方位軸にほぼ沿った矩形の街路が四重に囲っており、プラーカーラのすぐ内側のアディ通と合わせれば、寺院を中心とした五重の同心方形の入れ子構造を形成している。しかし、これらの街路は完全な矩形・直線ではなく、少なからず歪んでいる。

寺院の東西南北の門からは、概ね方位軸に沿った街路が四方に延びるが、これらの軸線街路は同心方形状街路に比べると明確ではない。同心方形状街路と交差する地点で折れ曲がることが多く、直線的な動線や視線は確保されておらず、道幅も同心方形状街路に比して狭い。同心方格形状街路と軸線街路については、現地での実測による確認を行った[34)]。それぞれの平均街路幅は、同心方形状街路については、チッタレイ通：12.1m、アヴァニムーラ通：10.5m、マシ通：13.8m となり、いずれも 10m を越す幅である。それに対して軸線街路は、北：8.9m、東：7.8m、南：5.7m、西：9.9m となり、軸線街路はいずれも 10m に満たず、特に南の軸線街路の幅は狭い。1755年のマドゥライ都市地図を見ても、当時から軸線街路はあまり意識されていなかったようである。同心方形状街路と軸線街路以外にも、何本かの東西・南北方向に走る街路が見られるが、1755年の地図と照らし合わせると、中でも当時の城門に通じていた街路が、現在でも幹線街路として機能していることがわかる[35)]。

ヴィシュワナータ・ナーヤカは都市再建にあたって、シルパ・シャーストラに記された原理に従い計画させたと伝えられるが[36)]、具体的にどの文献のどのモデルが参照されたかを示す資料はない。レイノルズ（1987）は断定を避けるが、『マーナサーラ』に記される都市類型「ラージャダーニーヤ・ナガラ Rajadhaniya-Nagara」が最も近いとする。中心に王宮（現ミーナークシー寺院）をもつ点が主な根拠である[37)]。同じく「ラージャダーニーヤ・ナガラ」をあげるバラスブラマニアン（1997）は、アチャルヤ Acharya（1934）の復原図に依拠する[38)]。しかし『マーナサーラ』の本文に「ラージャダーニーヤ・ナガラ」についての具体的な記述は少なく、アチャルヤは詳細な図を提示しているが根拠は明らかではない[39)]。

現在ある資料から都市の理念的モデルを特定することは困難であるが、少なくともマドゥライにつ

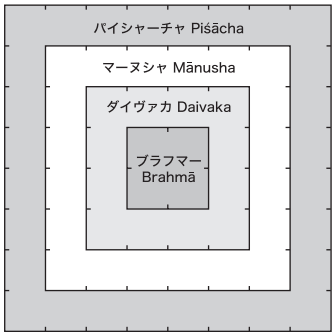


図 3-9　ナンディヤーヴァルタの同心方格囲帯状構成
（8×8＝64区画の場合）

いて第一に注目されるべきは、重層する同心方形状街路により区切られた、同心方格囲帯状の空間構造をもつ点である。ティルマライが寺院境内を拡張し、シュリーランガムに見られるようなプラーカーラの積層した都市空間を企図したことも、これを支持するものと考えられる。求心的階層性はシルパ・シャーストラの示す都市類型一般に共通する特徴であるが、『マーナサーラ』に示された類型の中からあえてマドゥライの都市構造に最も近いものを指摘するとすれば、ブラフマー Brahma（梵の）、ダイヴァカ Daivaka（神の）、マーヌシャ Manusha（人間の）、パイシャーチャ Paishacha（鬼の）という同心方格囲帯状の求心的階層構造（図 3-9）を明示した「ナンディヤーヴァルタ Nandyavarta」である[40]。マドゥライの都市空間について論じるにあたり、理念的モデルとして念頭におくべきは、ラージャダーニーヤよりもむしろこの類型であると考える。

そして以上のようなマンダラ状の都市空間を象徴的に構造化しているのが、以下に述べる、同心方形状街路で催される巡行祭礼である。

3-4-2　巡行祭礼の構造と機能

マドゥライではタミル暦に従って月に一度、神像を乗せた山車（タミル語で「テル Ther」）や神輿の巡行をともなう祭礼がミーナークシー寺院によって催される。インドにおいて山車の巡行を伴う祭礼の歴史は古く、紀元前まで遡ることができる。南インドでは 4〜6世紀にかけて盛んになり、15世紀のヴィジャヤナガル朝時代に最盛を迎える。マドゥライでも、すでにサンガム文学に巡行を伴う祭礼についての記述がある[41]。巡行祭礼は、現在でも豊作祈念や疫病除けなどを目的としてタミル地方一帯の都市・村落で広く行なわれているが、その中でもマドゥライにおける一連の祭礼は、都市祭礼とも呼ぶべき規模と複雑な体系を有している。ナーヤカ朝時代においては、王であるナーヤカがミーナクシー寺院の運営を直接手がけたことが知られており[42]、祭礼もまたにナーヤカによって運営されていた。今日見られる祭礼は 17c にティルマライにより再編・体系化されたものであり[43]、以下の二点において注目すべきものである。

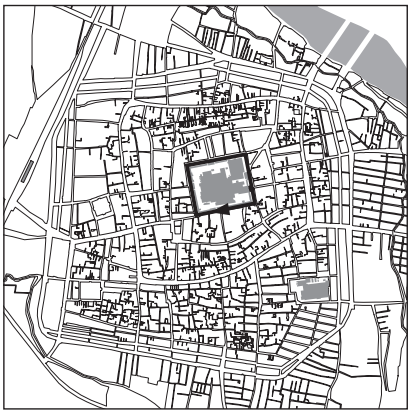
(1) 都市構造との関係

第一は、祭礼で行なわれる巡行が都市構造と密接な関連をもつ点である。

ヒンドゥー寺院の祭礼は、毎日行われる祭礼、毎月行われる祭礼、毎年行われる祭礼に分類される[44]。マドゥライにおける山車の巡行を伴う主要な祭礼は、タミル暦に従って月に一度ミーナクシー・スンダレーシュワラ寺院によって催される祭礼である。祭礼の体系は極めて複雑であるが、一年をサイクルとして神々の神話を都市において再現するという全体像をもつ。基になるのは『マドゥライ・スシャラ・プラーナ』に記されているシヴァとミーナクシーに関する神話である。それぞれの月に神話を再現する様々な儀礼が行われるが、最も重要な祭礼は、ミーナクシーの戴冠式とミーナクシーとスンダレーシュワラの結婚を祝うチッタレイ祭（4〜5月）で、ティルマライの建造した巨大な山車の巡行が行われる。続いて重要な祭礼が、スンダレーシュワラの戴冠式を祝うアヴァニムーラ祭（8〜9月）、ティルマライ・ナーヤカの誕生を祝うテッパ祭（1〜2月）である。

表 3-1　月毎の祭礼と巡行路

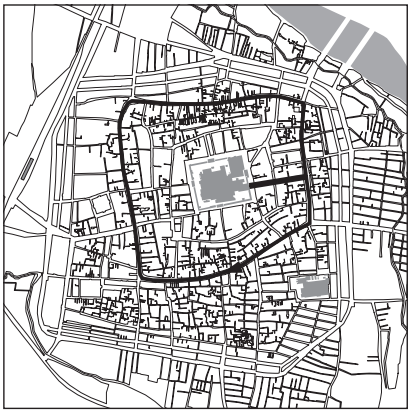
	タミル暦の月	太陽暦	巡行路
①	**チッタレイ Chittrai**	4-5月	**マシ通**
②	ヴァイカシ Vailkasi	5-6月	チッタレイ通
③	アニ Aani	6-7月	-
④	**アディ Aadi**	**7-8月**	**アディ通**
⑤	**アヴァニ Avani**	**8-9月**	**アヴァニムーラ通**
⑥	プラタシ Purattasi	9-10月	-
⑦	アイパシ Aippasi	10-11月	アディ通
⑧	カルティカイ Karthikai	11-12月	アディ通
⑨	マルカジ Markazhi	12-1月	チッタレイ通
⑩	タイ Thai	1-2月	チッタレイ通 + テッパクラム
⑪	**マシ Masi**	**2-3月**	**チッタレイ通**
⑫	パングニ Panguni	3-4月	チッタレイ通 .



巡行路：チッタレイ通　祭礼：②、⑨、⑪、⑫

巡行路：チッタレイ通＋テッパクラム　祭礼：⑩

巡行路：アヴァニムーラ通　祭礼：⑤



巡行路：マシ通　祭礼：①

図 3-10　マドゥライにおける巡行祭礼のルート

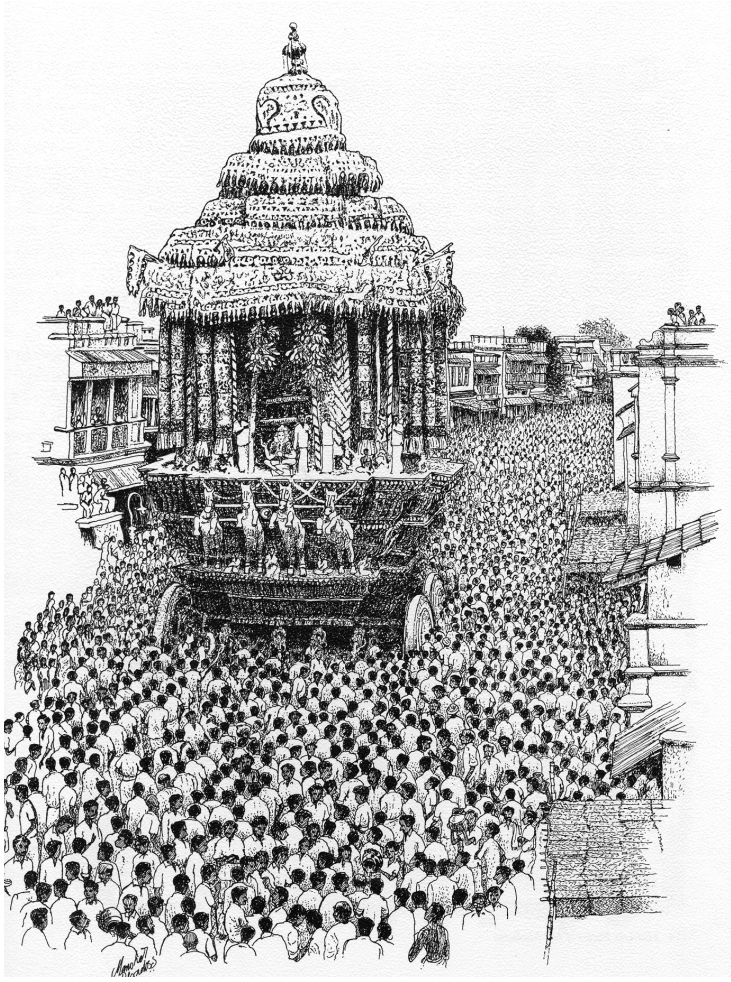


図 3-11　チッタレイ祭での山車の巡行

出典：Devadoss (2007)

山車の巡行路は、基本的にミーナークシー寺院を始点として四つの同心方形状街路（アディ、チッタレイ、アヴァニムーラ、マシ）のいずれかを右回りにまわるものであり[45]、街路の呼称はそれぞれ、その街路で主要な巡行祭礼が行われるタミル暦の月名に由来する（図 3-10、表 3-1：ただしチッタレイ月とマシ月に催される祭礼の巡行路は互いに入れ替わっているが、この点は後述する）。図 3-10 に示されるように、巡行の軌跡は一年をかけてマンダラ状の都市構造をトレースすることになる。とりわけ最大規模のチッタレイ祭は、当時の市街地の最外縁であるマシ通を巡行することによって、都市を包括する役割を果たしていた。そこには、神々が宇宙＝王国（マクロコスモス）の縮図であるマンダラ状の都市（ミクロコスモス）を幾重にも巡ることで、領土全体に対する神＝王の支配権が象徴的に表現されるという構図が成立しているのである[46]。

また巡行祭礼が、上記のような象徴的レベルにとどまらず、都市の物理的な形態にも一定の影響を与えた可能性についても言及しておきたい。先に見たように、同心方形状街路のうち特にマシ通は、大きな歪みを見せている。特に大きい南東部の変形については、後述するティルマライ・ナーヤカ宮殿建設の影響が大きい。しかし他の部分については、それだけでは説明ができない。歪みは具体的には、マシ通の四辺が緩やかな S 字カーブを描いていることにより生じているのであるが、これはマシ通の四つの角が直角ではなく、やや丸みを帯びた鈍角となっていることに起因する。そして、四隅が鈍角であるにもかかわらず、全体の輪郭を概ね矩形に整えるために、四辺の街路が S 字に変形しているのである。ここで、街路の S 字の変形が四辺においていずれも回転対称形に揃っている点に注意したい。これは街路の変形が、局所地形等の影響によるものではなく、意図的なものである可能性を示唆するからである。その変形の要因として推定されるのが、祭礼における山車の巡行である。マシ通はチッタレイ祭で最大規模の山車[47]の巡行（図 3-11）が行われるルートであり、平均街路幅が 13.8m と同心方形状街路の中でも最も広いのは、そのためである。これと同様に、マシ通の四隅の角が鈍角であることも、この大規模な山車の巡行を可能にするため、とりわけコーナーでの引き回しによる方向転換をスムーズにするための方策と考えられるのである。この推測を裏付ける材料の一つとして、北西部の角の内側に、山車の方向転換をより円滑にするための円弧状の縁石が 100 年前に設置されていることがあげられる[48]。

(2) 寺院と住民の統合機能

第二には、祭礼がミーナークシー寺院を基点にマドゥライ内外の寺院やその門徒である都市住民を統合するという機能をもつ点である。

このことは一連の祭礼中で最重要視されるチッタレイ祭の成立経緯から読みとることができる。この祭の開催時期はもともとマシ月であったが、それをティルマライがチッタレイ月に変更した。チッタレイ祭の巡行はマシ通、逆にマシ祭の巡行はチッタレイ通という名称の食い違いはこれに起因する。この変更の目的は、マドゥライの北東約 20km に位置する大規模なヴィシュヌ派寺院、アラガー Alagar 寺院の祭礼（チッタレイ月に開催）とミーナークシー寺院の最大の祭礼とを合併することであったとされる[49]。つまりティルマライは、シヴァ派の中心寺院であるミーナークシー寺院と有力なヴィ

シュヌ派寺院を結びつけることで、支配民の宗教的融合を図ったというのである。アラガー祭は、アラガー寺院のヴィシュヌ神がヴァイガイ川の北岸まで巡行する祭礼である。アラガー祭では、マドゥライのマシ通りの南西角に位置する市街最大のヴィシュヌ派の寺院・クーダルアラガー寺院 Arulmigu Koodalakagar Thiru Koil の巡行も行われており、多くのヴィシュヌ派の民衆が参加していたという[50]。ティルマライが、ヴィシュヌ派にとって重要な祭礼とミーナクシー寺院最大の祭礼を結びつけた結果、チッタレイ祭は城壁内の市街地にとどまらず、周辺を広く巻き込んだ盛大な祭礼となっていくのである。チッタレイ祭には、この他にもマドゥライ内外の様々な寺院が組み込まれている[51]。

祭礼でのプージャー（ヒンドゥー教の神像礼拝儀礼）そのものは、バラモン階級に属するパター Pattar という司祭によって担われていたが、巨大な山車の巡行時には、普段寺院に近づくことも許されない不可触民を含む、すべてのカーストの人々が山車を曳くことを許されていた[52]。また、チッタレイ祭ではムスリムとの宗教的融合も図られており、祭りには多くのムスリムが参加していたという[53]。

以上に見てきたように、マドゥライのマンダラ状の都市構造の骨格形成はヴィシュワナータによるものであるが、ティルマライは主に政治的目的から、それに祭礼による象徴的意味を付与し、都市をいわば王権に奉仕する巨大な儀礼装置に作りあげたといってよい。その中でマンダラ状の都市構造は王国の統一の象徴として、繰り返し強調・再確認されているのである。

3-5　都市施設の配置とその特性

3-5-1　王宮

王宮の位置は、寺院・神殿群の配置や住民階層別の居住地配置と並んで、ヒンドゥーの都市計画理念における重要な要素である。プラーナ文献の記述に見たように、古代から14世紀までのパーンディヤ朝時代の王宮は都市の東北部にあったと考えられるが、その考古学的な遺構は残されていない。現在の都市南東にある王宮は、ティルチラパッリからマドゥライに遷都したティルマライによって、1636年に建設されたものである[54]。1755年の地図に見られるように王宮は当初、南東部の広大な一角を占めていたが、18世紀半ばのムスリム勢力の侵入によって、部分的に破壊され、19世紀イギリス支配期には当初の1/5の規模まで縮小されている。縮小された王宮の跡地はイギリス人居住区として整備され、後にサウラシュトラ[55]の人々の居住地となった。旧王宮跡地が他のエリアとは異なる非常に整然とした街路構成となっているのは、このような経緯を反映したものである。17世紀末には、上述したように、ラニ・マンガマル女王によって再び都市北東部に王宮が建設される。この王宮はティルマライの王宮に比較すると小規模であり、街路構成に影響を与えるほどではなかった。この場所は19c末以降、王宮の構造が一部そのまま利用されながら、野菜市場および行政オフィスに転化されている。

王宮のあるべき位置は、『アルタシャーストラ』では北東と明示されている。『マーナサーラ』の記述にはばらつきがあるが、中心から見て西／北東／北西の方角あるいは中心寺院に隣接した区画[56]となり、

『マヤマタ』では西の方角とされる[57]。パーンディヤ朝時代には北東部に王宮が位置していたという点は『アルタシャーストラ』の記述と合致しているが、ティルマライの王宮の位置はいずれにも一致しない。この王宮が南東部外縁に建設された直接的な理由は、都市の北側にはヴァイガイ川が迫っているため、当時そこが城壁内で唯一の広大な空地であったためと説明されているが[58]、この巨大な王宮建設が都市空間構成に与えた影響は大きい。シャーストラの秩序からはずれているだけではなく、同心方形状の街路を歪めた可能性が指摘できる。具体的には、マシ通の南側が王宮の周辺で大きく北に押し上げられているのである。また王宮建設に伴って、その地に居住していたヤーダヴァの人々が都市北西部に移住させられているのである[59]。

3-5-2　宗教施設

現地調査によりヴェリ通沿いおよびその内側で確認された宗教施設は、ヒンドゥー寺院 97、ジャイナ寺院 4、モスク 10、キリスト教会 7である。ヒンドゥー寺院は全域にわたって分布しているが、大半がマシ通沿いとその内側に立地しており、居住地の歴史の長さを反映している。寺院・祠の向けられた方位には、東あるいは北が多いという傾向が見られる。モスクの分布はムスリム居住区に関わるが、1907年以前に建設されたモスクは、すべてマシ通沿いかその外側に位置している。キリスト教会はいずれも 16～ 19世紀に建設されたものであり、1881年と比較的遅い時期に創立された一つ以外は、旧城壁内の外縁部もしくは城壁外に位置している。ヒンドゥー教徒と異教徒、とりわけキリスト教徒との住み分けがあったことが推察される。

以下、宗教別に施設の分布と特徴を詳しく見ていきたい。

(1) ヒンドゥー寺院・祠

ヴェリ通沿いおよびその内側の領域で、計 97のヒンドゥー寺院を確認した[60] (図 3-12)。寺院は旧市街全域にわたって分布しているが、その分布密度はエリアによって差がある。同心方形状街路間の分布数は表 3-2のようになり、数字上は内側の方が少ないが、面積あたりの分布密度はマシ通の内側では、マシ通の外側の二倍以上の密度である。特にアヴァニムーラ通～マシ通間の寺院分布密度が高い。マシ通～ヴェリ通間は 18世紀までは宮殿を除けばほとんど農地であったため、居住地としての歴史の長さが寺院の数に表れていると考えられる。99のうち 67の寺院は、マシ通沿いとその内側に立地するのである。北アヴァニムーラ通～北マシ通間に比較的高い密度の分布が見られる点は注目される。これはその地区の主要な住民カーストと関係があり、詳しくは次章で触れたい。

これらのヒンドゥー寺院が都市空間の中でどのような性質を持っているのかを探るため、同心方形状街路 (チッタレイ通、アヴァニムーラ通、マシ通) に面する 31のヒンドゥー寺院[61]を対象として、以下の項目に関する調査を行った (表 3-3)。

①物理的構成：寺院の構造は大半が石造である。ミーナクシー寺院と同様にゴープラ・プラーカーラ・回廊・聖室などを備えた大規模な境内を持つ寺院が 3あるが、その他の寺院は、列柱に天井が支えられた前室とその奥の聖室からなる比較的小さなものである。最も小規模な寺院は、箱状の建物の内部に

図 3-12　ヒンドゥー寺院の分布

表 3-2　マドゥライ旧市街におけるヒンドゥー寺院の分布状況

領域	面積 (10,000㎡)	寺院の数	比率	分布密度 (/10,000㎡)
チッタレイ通〜アヴァニム–ラ通	17.6	12	13%	0.68
アヴァニム–ラ通〜マシ通	45.3	41	43%	0.91
マシ通〜ヴェリ通	132.6	43	45%	0.32
計	195.5*	96	100%	0.49

* 合計面積はミーナクシー寺院境内を除く

表 3-3　同心方形状街路に面するヒンドゥー寺院の分類とその割合

		寺院数	比率
同心方形状街路に面する寺院		31	
聖室の向き	東	11	35%
	西	5	16%
	南	2	6%
	北	13	42%
本尊	シヴァ	7	23%
	ヴィシュヌ	6	19%
	ガネーシャ	8	26%
	アンマン	6	19%
	その他	4	13%
所有形態	タミル・ナードゥ州政府	5	16%
	ミーナクシー寺院	1	3%
	カースト・コミュニティ	15	48%
	個人	10	32%

神像が安置されただけの簡素なものである。寺院入口の上部には、小規模なゴープラや神々の像の彫刻が設けられていることが多い。

②本尊の種類と方位：寺院の本尊は、寺院の名称や奉られている神像から判断することができる。本尊がシヴァ Shiva である寺院[62]：7、ヴィシュヌ Vishnu：6、ガネーシャ Ganesha[63]：8、アンマン Anman[64]：6、その他：4である。ミーナクシー寺院の本尊はシヴァ神であり、マドゥライはシヴァ神の聖地とされているが、その都市の中に点在する寺院には様々な神が祭られていることになる。安置されている神像の向きをみると、東 11、北 13、西 5、南 2である。東向きと北向きが 8割を占めている。ヒンドゥー教では東または北東が吉なる方向とされるが、多数はそれに従っていることになる。寺院の入口と神像の向きは 31寺院中、27寺院が一致している。入口と神像の向きが一致しない 4寺院では、神像はすべて東を向いて安置されており、方位への意識の強さがわかる。

③所有者：寺院の所有者については、タミル・ナードゥ州政府：5、ミーナクシー寺院：1、カースト・コミュニティ：15、個人：10である。私的所有の寺院が 8割を越える。カースト・コミュニティ所有の寺院とは、同じカーストに属する人々による共同体の基金によって運営されているものである。寺院周辺にはそのカーストの住民が集まっているケースが多く、しばしば寺院に近接して集会所が設けられている。これら私有の 25寺院は、三つの寺院を除きミーナクシー寺院とは特別な関係をもっていない[65]。マドゥライはミーナクシー寺院を核として構成された都市ではあるが、様々なカーストが各々の寺院を所有しながら居住区を構成していることが伺われる。

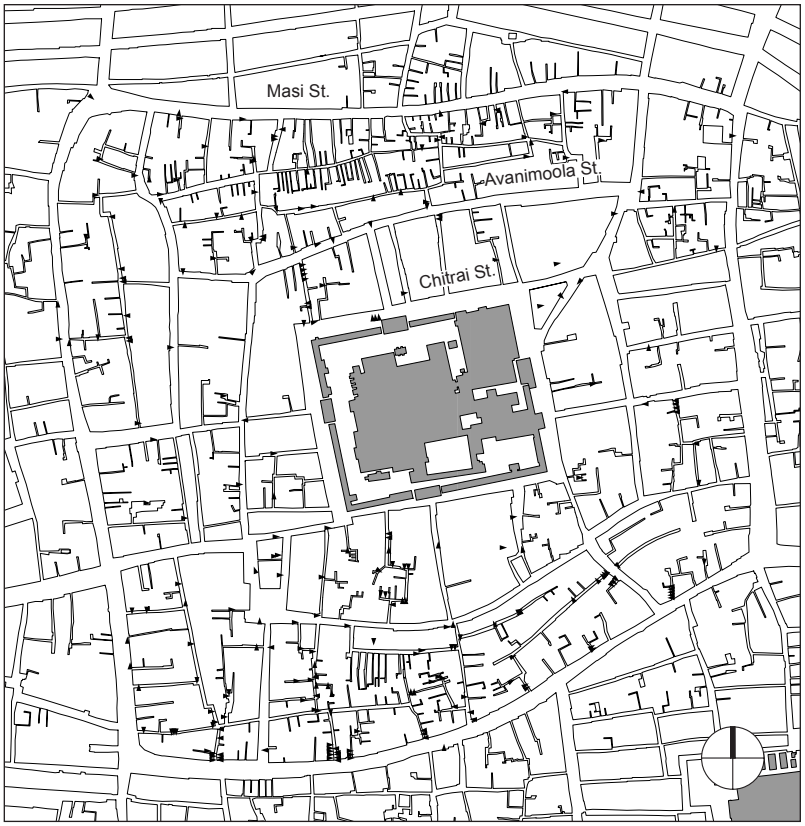


図 3-13　マシ通内側における祠の分布

④祭礼：ほとんどの寺院で、各々の本尊を祝う祭礼が行われている[66]。御輿や山車を所有し、それらの祭礼時に寺院外で巡行を行う寺院が 11 あり、そのうち 7 寺院は寺院の面する同心方形状街路での巡行を行っている[67]。個々の寺院においても、マンダラ状の都市構造との関係づけが行われているのである。

⑤祠：寺院の他にも街路上に夥しい数の祠[68]が存在する。祠については、マシ通の内側の領域で調査を行った結果、239 の祠を確認した（図 3-13）。祠は通りの守り神として、街路の交差点や曲がり角に建設されているものが多い。祠の分布密度（10,000 ㎡あたり）は、チッタレイ通〜アヴァニムーラ通間で 2.9、アヴァニムーラ通〜マシ通間では 4.2 となる。後者に祠が多いのは、一つには街区内の街路構成が複雑で交差点や曲がり角が多いためであろう。また寺院の分布と同様に、周辺に居住するカーストの慣習との関係があると思われるが、詳しくは次章で検討したい。祠の向きは、東向き 100、南向き 40、西向き 55、北向き 44 であり、東向きが 4 割を越える。

(2) ジャイナ寺院

ジャイナ教寺院は 4 が確認された。ジャイナ寺院は外観上の特徴を持っておらず、比較的近年に新築されたと思われる RC 造の建物の一部がジャイナ寺院として使用されていた。そのため未確認のジャイナ寺院が存在する可能性はあるが、確認されたものはすべて、ミーナクシー寺院南部のチッタレイ通〜マシ通間に位置する（図 3-14）。

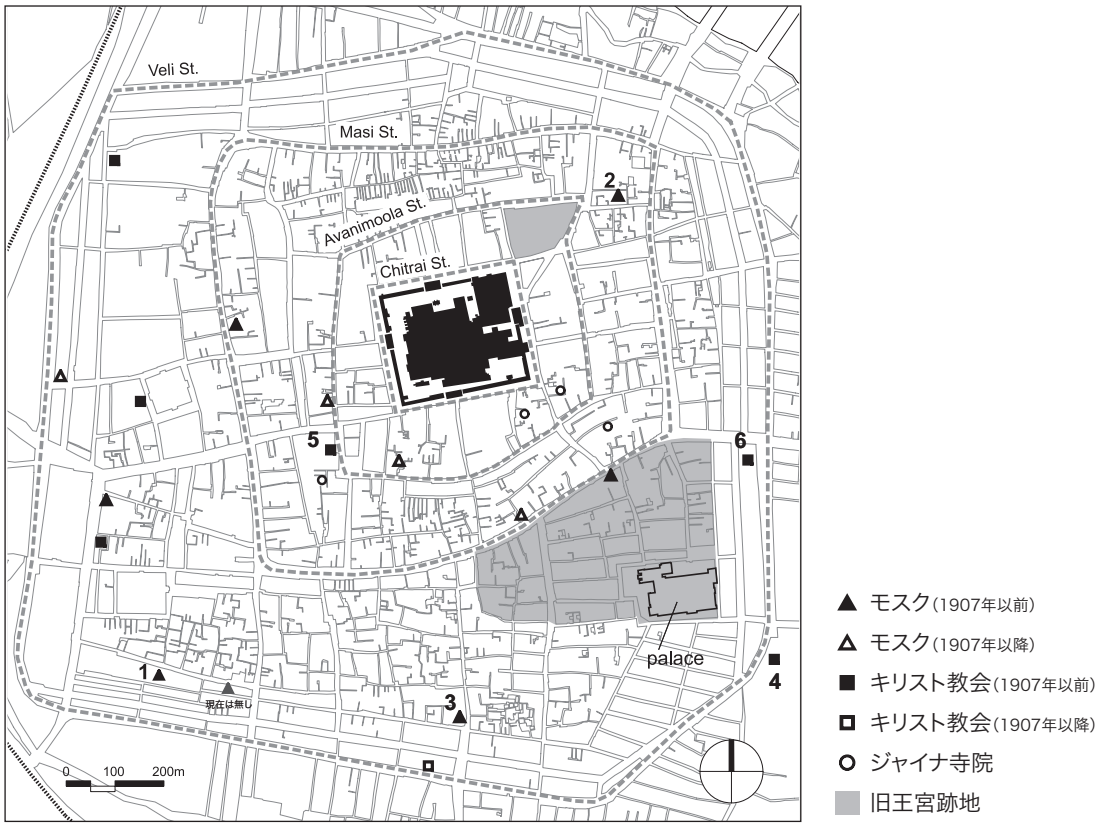


図 3-14　モスク・キリスト教会・ジャイナ寺院の分布

(3) モスク

10のモスクを確認した。その分布を見ると、アヴァニムーラ通の内側：1、アヴァニムーラ通〜マシ通間：4、マシ通〜ヴェリ通間：5である（図 3-14）。各モスクの正確な創立年代は定かではないが、14世紀あるいは18世紀の二度のムスリム勢力侵入がそのきっかけになったことは間違いない。南西隅のカジマール・モスク Kazimar Mosque（#1）とマシ通北東角付近のタシルダー・モスク Tashildhar Mosque（#2）は、文献史料から18世紀のイスラム支配期に建設されたことが分かっている。1907年の地図では、上記の二つを含む7のモスクが確認できる（そのうち一つは現在では失われている）。1907年の地図にない残りの4は、それ以降に建設されたものであろう。1907年以前に建設されたモスクは、すべてマシ通沿いかその外側に位置していることになる。

ムスリムの移住が進んだ18世紀には、マシ通の外側はほとんど農地であった。これらのモスクの分布は、当時の都市の外縁部にモスクと共にムスリムの居住地が形成されたことを示している。旧城壁内で最大規模のカジマール・モスクとモハディーン・アンダバー・モスク Mohaideen Andaver Mosque（#3）が位置する都市最南部には、イスラム都市の特徴である迷路状の街路が形成されており、ムスリムの移住が街区構成に対して影響を与えていた可能性がある。

(4) キリスト教会

ヴェリ通の内側に6のキリスト教会があり（図 3-14）、ヴェリ通の南東角の外側、つまり旧城壁外にゴシック調の大規模な聖メアリー・カテドラル St. Mary's Cathedral（#4）がある。キリスト教の宣教師たちがマドゥライを訪れ、初めて教会を設立したのはナーヤカ朝時代である[69]。1907年の地図を参照すると、上記7つの教会のうち6が当時から存在していたことが確認でき、それらはナーヤカ朝時代からイギリス支配期、つまり16〜19世紀の間に建設されたものであることがわかる。1881年と比較的遅い時期に創立された聖ジョージ教会 St. George's Church（#5）が、唯一マシ通の内側に位置するほかは、残りの教会はすべて旧城壁内の外縁部もしくはその外側に位置している[70]。

以上の宗教施設配置からは、18世紀の市街地の外周であったマシ通を境として、おおむね内側にヒンドゥー寺院、外側にモスクとキリスト教会が立地するという傾向を読み取ることができる。特にキリスト教会は、旧城壁の近傍という周縁部に集中している。歴代ナーヤカはヒンドゥー教徒とムスリムの融和政策をとり、キリスト教を保護したと伝えられる[71]。ムスリムとの融和は一定成功したが、キリスト教徒とヒンドゥー教徒の間にはしばしば衝突が起こっていたという[72]。このような事情を反映して、ヒンドゥー教徒と異教徒、とりわけキリスト教徒との間には、明確な居住地の区分があったと考えられる。

3-6　まとめ

本章で行った考察は以下のようにまとめられる。

① まず南インドにおける寺院都市の展開とその背景をふまえた上で、マドゥライの都市構造の歴史的形成過程をあとづけた。現在の都市は17世紀のナーヤカ朝時代に建設されたものであり、それ以前の都市の姿を示す物的資料は無いが、現在の街路名称を手がかりにパーンディヤ朝時代の都市の範囲を推定すると、ミーナクシー寺院を中心とする同心方形状のエリアとなる。

② 古文献には、古代のマドゥライがシャーストラに従い入念に計画されたこと、また「最初の計画」と「第二の計画」があったことが記されている。「第二の計画」によるマドゥライは、寺院を中心とした環状の形態として描かれており、①とあわせて、ナーヤカ朝時代の都市建設に先立って、現在見られるような同心方形状の都市が存在していたことが推測される。

③ 続いて現在の街路形態の検討から、マドゥライの都市構造は各所に歪みを見せつつも、基本的には重層する街路によって区切られた同心方格囲帯状の空間構造をもつ点を指摘した。これは中心部を最聖の領域とする求心的階層構造を示す、『マーナサーラ』に示される村落類型「ナンディヤーヴァルタ」に近い。この理念的モデルは、ティルマライ・ナーヤカによって創始され現在でも毎年催される巡行祭礼によって、象徴的に再生・補強され続けている。

④ 都市構造の骨格となる同心方形状街路が歪む大きな要因となったのは、シャーストラの規定からはずれる都市南東部に建設された王宮である。また祭礼における巨大な山車の巡行も、同心方形状街路を歪める要因であった。

⑤ 宗教施設の配置・分布構成からは、ヒンドゥー寺院はマシ通の内側に多く集まり、それに対してモスクとキリスト教会はマシ通の外側から旧市街周縁部にかけて位置する顕著な傾向が見られた。ナーヤカ朝時代にはミーナクシー寺院を中心とする市街中心部にヒンドゥー教徒が居住し、周縁部に外来の異教徒が居住するという、都市構造に沿った居住地区分があったと考えられる。

⑥ 個々のヒンドゥー寺院でも、巡行祭礼によって都市構造との関係づけを行っている寺院が少なくない。また寺院の神像や祠の設けられた向きには、ヒンドゥー教の方位観へ従って北と東が多い。

⑦ カースト・コミュニティや個人により所有される寺院が8割を越え、その周辺には同カーストの住民が集まっている傾向があり、カースト単位の住み分けが伺われる。

第3章　注釈

1) 古代サンスクリット語で記された、造形芸術（シルパ）に関する論書（シャーストラ）の総称。建築論・都市計画論を主とし、絵画・彫刻などの諸規定をも含む。建築・都市計画に関わるものは特にヴァーストゥ vastu（「居住の」「住宅の」の意）・シャーストラと呼ばれる。古代インドで活躍したスタパティ sapathi と呼ばれる棟梁やスートラグラヒ sutragraphi と呼ばれる測量士の知識・技術をまとめたもので、5～6世紀頃には集大成されたとされるが、確定しているわけではない。最も完成度の高い代表的なされたものとして『マーナサーラ』『マヤマタ』などがある。

2) 小倉 :1999, pp.147-155、Michell:1993, p.9ほか。南インドの寺院都市はマドゥライの他にシュリーランガム Srirangam、カーンチープラム Kanchipuram、チダンバラム Chidambaram、ティルヴァンナーマライ Tiruvannamalai などがある。

3) そのような中で挙げられるのはシュリーランガムを事例に論じた小倉泰（1999）である。マドゥライに直接の言及はないものの、本研究はここから大きな示唆を得ている。シュリーランガムはタミル・ナードゥ州南部カーヴェーリ Kaveri 川流域に位置する寺院都市。中心寺院本殿の周囲を7重のプラーカーラが同心方形状に巡る、極めて明快な形態を有するが、規模としては門前町の域を出ない。

4) ミーナークシー（「魚の目の女神」の意。元々はタミル地方の土着神）とその夫・スンダレシュワラ（シヴァ神の一形態）を主宰神とするマドゥライの中心寺院。創立年代は定かではないが現在に至る建築群は 14～17c の建造と推定されている。257m × 240m の矩形の境内は四方をプラーカーラ（周壁）に囲まれ、東西南北に巨大なゴープラ gopura（塔門）を備える。

5) 序章：0-3-2参照。本章で触れる『マーナサーラ』の記述および小見出しは Acharya（1934）に基づく。

6) 序章：0-3-2参照。本章で触れる『マヤマタ』の記述および小見出しは Dagenz（1985）に基づく。

7) ミッチェル : 1993, p.176, 209

8) 寺院境内を囲む矩形の周壁。しばしば本殿を中心として幾層もの同心方形状に連なる。中世以降の南インド寺院建築の様式的特徴の一つ。

9) 境内を取り囲む周壁・プラーカーラの四方に設けられる高大な搭状の楼門。断面形状は台形であり、四角錐状に立ち上がり、頂部にワゴン・ヴォールトの屋根を載せるスタイルが一般的。プラーカーラと並び、中世以降の南インド寺院建築の様式的特徴の一つ。

10) ミッチェル : 1993, p.209-214

11) ミーナクシー寺院の空間構成や発達プロセスについては、ミッチェル（1993）のほか、Das（2001）、Jeyechandrun（1985）Fuller（1993）などに詳しい。

12)「サンガム Sangam」とは、主に1～3世紀頃にかけてつくられた現存最古のタミル文学集をいう。恋愛や戦争をテーマにした抒情詩や王に対する賛歌などが主な内容である。宮廷文芸院（サンガム）で編纂されたという伝説に基づき「サンガム文学」と通称される。これらのサンガム文学がつくられた時代を、一般に「サンガム時代」と呼ぶ。

13) 小倉 : 1999, p.148。ブラフマデーヤは、王によってバラモンへ施与された村落の総称。南インドのチョーラ朝時代に多く見られた村落形態で、王朝による地方統治の中心的役割を果たしたとも、あるいはヒンドゥー寺院とともに地方の在地統合の核であったとも考えられている。『マヤマタ』に記された村落のレイアウトが、そこに住むバラモンの数にもとづいた規模毎に分類されていることから、小倉はこれをブラフマデーヤの設計を念頭に置いたものであると推測している（小倉 : 1999, p.156）。

14) 小倉 : 1994, pp.161-162

15) Champakalakshmi: 1979

16) 例えば6世紀に編纂された、『ブリハット・サンヒター』はヴァーストゥ・プルシャ・マンダラを記した最初期の重要文献であるが、都市に関する記述は「家屋の場合と同じように、都市や村落に関してもあらゆる場所に神々が配置されるべきである。そしてバラモンを始めとする四ヴァルナが、それぞれの場所（それぞれの神々の住する区画）に、ふさわしく住するべきである」という1詩節のみである（小倉 : 1999, p.152）。

17) Devakunjari:1979, pp23-25。スリランカの年代記『マハーヴァンサ Mahavamsa』（5-6世紀頃成立）には、釈迦入滅時（前6-5頃）の話としてマドゥライにパーンディヤ王の娘がいたことが記されている。パーンディヤはギリシャ・ローマとの貿易を活発に行っており、メガステネス Megasthenes（前4-3世紀頃）やプトレマイオス Ptolemy（2世紀頃）の著書にもマドゥライに関する記述が見られる。

18) ナーヤカはヴィジャヤナガル王国の地方行政官を示す称号であるが、16世紀頃から在地社会と結びつき封建領主化していった。なかでもシェンジ（ジンジー）、タンジャーヴール（タンジョール）、マドゥライのナーヤカは、17世紀初頭にには強大な

独立的権力を行使するようになった。上記のようなこの時期のナーヤカ勢力を一般に「ナーヤカ朝」と呼ぶ。

19) プラーナ purana とは、サンスクリット語で「古い（物語）」を意味し、サンスクリット語で記された一群のヒンドゥー教聖典となる古文献を総称していう。起源は古く、バラモン教時代に伝えられた神々、聖仙、太古の諸王に関する神話・伝説・説話に発すると考えられている。プラーナの原型は、職業的な語り手集団によって伝承されながら、バラモン教からヒンドゥー教への変化の中、新たな寺廟や巡礼地に集まる身分の低いバラモンに受け継がれた。彼らはヒンドゥー教の諸要素を組み込みながら編集を繰り返し、4～14世紀の間に現形の諸プラーナを定着させた。代表的なプラーナとして18の大プラーナ Mahapurana が知られる。ヒンドゥー諸神の神話や伝説、宗教儀礼、神殿・神像の建立法、巡礼地の縁起、カースト制度、哲学思想、医学、音楽など、ヒンドゥー教のあらゆる諸相を内包した、ヒンドゥー教研究上の重要資料である。

20) "Maduraikkanci"（推定成立年代 2-3c）、"Nedunalvadai"（2-3c）、"Silappadikaram"（5-6c）、"Paripadal"（2-3c）の各プラーナ文献の記述に基づく（Reynolds 1987:pp.14-21、Devakunjari:1979, pp.45-48, 82-85）。

21) "Madurai Sthala Purana" のうち "Tiruvalavayutaiyar Thiruvilaiyatar Purana"（12- 13c）の記述に基づく（Ayyar:1916,pp28-38）。

22) Devakunjari:1979, p.184。Shenoy:1937, p.9。

23) Rajaram: 1982, ch.2-4。ティルチラパッリは、タミル・ナードゥ州中部、マドゥライの北東約 120km に位置する都市。古来より、カーヴェリー川流域とデカン高原を結ぶ戦略的・交通的要地として栄えた。

24) Rajaram:1982, pp.59-60。Pudu Mandapa は「新しい広間」の意。1633年建設。寺院東門の軸線上に位置し、東チッタレイ通から東アヴァニムーラ通の間を占める。Raya Gopura は 1654年に建設に着手し、基壇部のみ完成して中止された。平面 53m × 33m、高さ 18m の基壇跡が残存する。

25) Shenoy:1937, p.12。

26) Shenoy:1937, p.18、Smith:1969, p.58。ヴェリは「外側の」の意。ヴェリ通はかつて城壁の外側を走る小路であったが、城壁の撤去と堀の埋立後に現在のように拡幅された。

27) 街路名の由来・解釈については、ティアガラジャル工科大学建築学科の G. バラジ Balaji 講師（Lecturer, Dept. of Architecture, Thiagarajar College of Engineering, Madurai）へのインタビュー、およびバラジ講師によるタミル語文献 "A Study on Street Names of Madurai City"（著者は郷土史家 D.Devaraj、年代不詳）の英訳に基づく。

28) Ayyar（1916）は、37のプラーナ文献に基づきながら古代南インドの都市形態と計画手法を論じる。マドゥライの他にチョーラ王国の首都ヴァンジ（カルール）、港市カーヴェーリパッティナム、パッラヴァ朝の首都コンジェーヴェラム（カンチープラム）などに言及する。パトリック・ゲデス Patrick Geddes が序文を寄せており、それによれば本著作はマドラスでゲデスが行った講演に触発されたものである。

29) マナヴール Manavur は、マドゥライの建設以前にパーンディヤ朝の都が置かれていたという地の名称。カダンバの森の東にあったという。この伝説から、マドゥライは別名をカダマ・ヴァナ Kadama Vana（「カダンバの樹の森」の意）ともいう。

30) マドゥライという名称については幾つかの説がある（Devakunjari: 1979, Appendix I）。一般には、北インドの聖都の名称・マトゥラー Mathura をタミル語表記したものとされる。プラーナ文献中の伝説に基づいた、タミル語で「甘い」を意味するマドゥラム madhuramu に由来するとする説も有力である。

31) ミーナクシー寺院境内の沐浴池は、タミル語でポラマライ・クラム Porramarai Kulam、「黄金の蓮の池」と呼ばれる。

32) 現在の都市のサイズは、四方のヴェリ通（ナーヤカ朝時代の城壁跡）間で計測すると、東西・南北とも約 1.5km（0.9マイル）である。したがって、9マイル四方という記述は、市街地だけでなく周辺部の田畑や森を広く含んでいることになる。

33) 北西や南東といった中間的な方位は、健康快適のために避けられたという。

34) 計測は 10cm 単位で行った。計測ポイントは、同心方形状街路は最外縁のヴェリ通を除く、チッタレイ通り、アヴァニムーラ通、マシ通のそれぞれ 8箇所（東西南北の軸線街路との交差点の前後）で実測を行った。軸線街路についてはマシ通の内側で、それぞれ 4箇所（同心方形状街路との交差点の前後）で実測を行った。ただし、北方向の軸線街路についてはアヴァニムーラ通と交差する地点までで途切れているため、2箇所での実測である。

35) ミーナクシー寺院南西角から西門へ続く街路、二つの東門へ続く街路、東北の門に続く街路が、現在も市街へ通じる主要な幹線街路となっている。

36) Shenoy:1937, p.6。

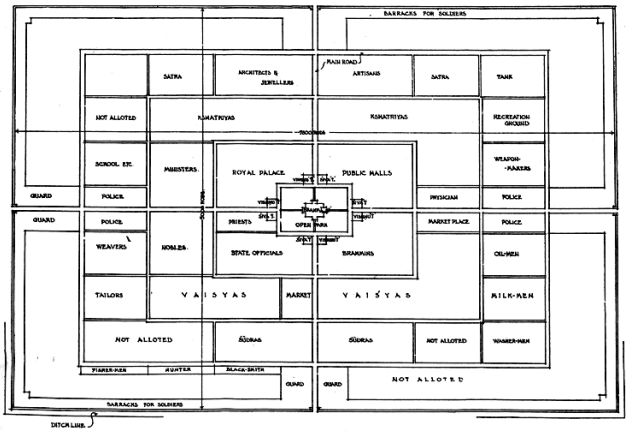
37) Reynolds:1987, pp.23-24。ラージャダニヤ rajadhaniya は「王の」、ナガラ nagara は「都市・町」を意味し、王城あるいは首都に適用されるべき都市レイアウト。。レイノルズは、「寺院」を意味するタミル語 "koyil（kovil）" は、古文献では「王宮」の意としても用いられる点に注目し、パーンディヤ朝初期においてはマドゥライの中心はパーンディヤ王の宮殿であったが、その

後のシヴァ崇拝の興隆に伴い、中世までに寺院へと変化したいう立場をとる。

38) Balasubramanian:1997, p.17。

39) ラージャダーニーヤに関する記述は、①中心に王宮を備え、②川の土手上に位置するのが望ましいこと、③入口あるいは中心にヴィシュヌ神を祀る寺院を設けること、④四方にゴープラが建ち、⑤兵舎や市場に囲まれていること、程度である（X.39-52。右図―アチャルヤ（1934）による復原図）。

40)『マーナサーラ』の挙げる８つの村落類型の一つ。ゾーニングについては「（64区画のグリッドの場合）中心の４区画がブラフマーの領域で、その外周囲12区画はダイヴァカ、さらにその外周囲20区画はマーヌシャ、さらにその外周囲28区画はパイシャーチャの領域」とある。他に各囲帯毎の職業別の住み分けや諸施設の配置に関する詳細な記述がある（IX.163-315）。このようなマンダラ状の同心構成はヒンドゥーの宇宙観の投影であり、『マヤマタ』では同様の構成が類型に関わりなくより一般的に述べられている。「中心にブラーフマ、そしてダイヴァ、マーヌシャ、パイシャーチャの区画が順々に決定されるべきである」（9.61b-63）。Kramrisch（1946, Vol.I p.60）および小倉（1999, p.123）は、この構成が南インドの寺院におけるプラーカーラ建設の背景にあると指摘する。



41) Devakunjari: 1979, p.81。

42) Rajaram: 1982, p.75。現在では、ミーナクシー寺院の運営はタミル・ナードゥ州政府の管理下におかれている（Fuller: 1984, p.112）。

43) ティルマライによる祭礼再編についてはHudson（1982）に詳しい。

44) Kalidos: 1989, p.218

45) アニ月、プラタシ月の祭礼はミーナクシー寺院の中で行われ、巡行を伴わない。タイ月に催されるテッパ祭は、唯一旧市街の外へと巡行する。テッパ祭の巡行は、チッタレイ通を巡った後に、寺院から東に約3kmにある聖なる貯水地・テッパクラムTeppakulamへ向かう。この祭礼はティルマライ・ナーヤカの誕生を祝うものであり、またテッパクラムはティルマライによって建設されたものであるため、この祭礼自体がティルマライによって創始されたものと考えられる。

46) Fuller:1993, p.102、Smith:1976, p.69、Reynolds:1987, p.32。

47) チッタレイ祭では使用される山車は、高さ約15m・幅約6mに及ぶ。祭礼時以外は、上部と下部に分割されて、東マシ通りの中央部（寺院のミーナクシーの門から伸びる街路と交差する地点付近）に設置されている山車蔵に保管されている。祭礼に使用される山車や御輿は木造であり、大小含めて複数存在する、チッタレイ祭で使用される山車以外はミーナクシー寺院内に保管される。

48) Devadoss: 2007, p.112

49) Hudson: 1982、Reynolds: 1987, pp.32-33。

50) Fuller: 1993, p.111

51) Reynolds:1987, p.39, 註69。現地でのヒアリング調査では、市街にある中小寺院の催す祭礼においても同心方形状街路を巡行し、ミーナークシー寺院の祭礼と合同で行う事例が3件確認された。

52) Rajaram: 1982, p.42、Kalidos: 1989, p.218, 233。

53) チッタレイ祭の中には、アラガー寺院のヴィシュヌ神がマドゥライまで巡行してきた際に、ヴァンディユールVandiyur（テッパクラム付近）にある、地元ムスリムの信仰を受けるトゥルカ・ナチャールTuluka Nachiarの祠を訪れるというプログラムが組まれている。Rajaramによれば、これはティルマライがムスリムを祭に組み込むことで、彼らの政治的支援を得ることを狙ったものである。今日でも多くのムスリムが、ヴァンディユールでチッタレイ祭に参加している（Rajaram: 1982, p.77）。トゥルカ・ナチャールとは、文字通りには「ムスリムの王妃」という意味であり、ムスリムであるにも関わらずヴィシュヌ神を熱心に信仰した伝説的な女性である。トゥルカ・ナチャールに言及する文献は少ないが、K.R.Sundararajan（Prof. of St. Bonaventure Univ., New York）, "The Hindu Models of Inter-Religious Dialogue", http://interfaithstudies.org/interfaith/hindumodelsdialogue.html が触れている。

54) Rajaram: 1982, ch.2-4

55) サウラシュトラSourashtraは織工を職業とするカースト。彼らは元々、インド北西部のグジャラートやマハーラーシュトラ

の出身であると言われており、ティルマライ・ナーヤカの時代にマドゥライへ移住させられたという（Rajaram: 1982, ch.7）。第4章において詳述。

56）ナンディヤーヴァルタの項（IX.223-225）およびスワスティカ Svastika の項（IX.366-368）。他の類型に関しては、記述が無いか「前述の通り」とされる。

57）サルヴァトヴァドラ Sarvatobhadra の項（10.71-75a）。

58）Reynolds:1987, p.30。外来の支配者であるナーヤカが、かつてのパーンディヤ王の宮殿に遠慮したためという説もある（Smith:1976, p.53）。

59）ヤーダヴァ Yadhava には乳業に従事するカースト。第4章において詳述。

60）ミーナクシー寺院を除いた数。現地調査においてヒンドゥー寺院と判断したものは、上に行くほど段状に縮小する多層の上部構造（ドラヴィダ式寺院建築の特徴）を持つ建物、神々のレリーフが施された上部構造を持つ建物、もしくは赤と白の縦縞の彩色が施された壁・基壇を持つ建物（赤白の縦縞はヒンドゥー寺院であることを示すサインである）で、かつ内部に聖室もしくは神像を確認した建物である。しかし、外見上はこれらの特徴を持たない、一見普通の住居に見える建物に神像を祀って寺院と称している場合もあるので、実際の寺院数は100以上になると考えられる。

61）各街路の内訳は、チッタレイ通沿い：2、アヴァニムーラ通沿い：5、マシ通り沿い：24。

62）シヴァ Siva 神とヴィシュヌ Vishnu 神は多数の化身を持つため、その化身はすべてシヴァ神、もしくはヴィシュヌ神と分類した。今日のヒンドゥー教で、インド全域に渡って崇拝されている神は、ヴィシュヌとシヴァである。ヒンドゥー教はこの他にブラフマー（梵天）を加えた3つの神格を中軸として発達してきており、ブラフマー神は宇宙の創造を、ヴィシュヌ神は宇宙の維持を、シヴァ神は宇宙の破壊を任務としていると信じられている。ヴィシュヌ神はその10種の化身が名高い。

63）ガネーシャはシヴァの息子とされる人身象頭の神。あらゆる傷害を取り除く力を備えているとされ、門神・商売の神としてインド全土で信仰される。タミル地方では一般にヴィナーヤカと称され、商人カーストを中心に信仰を集めている。

64）アンマンとはタミル語で「女神」を意味する。地域ごとに固有の名前をもった様々なアンマンがおり、人々に篤く信仰されている。シヴァ神の妻とみなされているものが多いが、元来はその地方の土着神である。

65）「ミーナクシー寺院と何らかの関係があるか」という質問に対して、「ない」という回答を得た寺院。ミーナクシー寺院と関係を有すると回答した寺院では、ミーナクシー寺院の月毎の祭礼のいずれかにあわせて、その寺院の神像を載せた山車の巡行が行われている。

66）主な祭礼として、シヴァラトゥリ Sivarathri（シヴァの祭礼、マシ月）、スリ・ジャヤンティ Sri Jayanti（クリシュナの生誕祭、アヴァニ月）、ヴィナーヤカ・チャトゥルティ Vinayaka Chathurthi（ガネーシャの祭礼、アヴァニ月）、ナヴァラトゥリ Navarathri（女神ドゥルガーの祭礼、プラッタニ月）がある。

67）その他の4寺院の巡行祭礼は、その寺院の周囲のみを巡行するものである。御輿や山車は寺院内に保管されているが、ミーナクシー寺院に次ぐ規模であるクーダルアラガー寺院のみは、寺院の正面門から伸びる参道沿いに山車蔵をもっている。

68）寺院と祠はともに神像が安置された構築物であるが、ここでは人が入って儀礼等を行うことのできる内部空間を持つものを寺院、人の入ることのできる内部空間を持たないものを祠としている。祠には、街路上に独立して建設されているものと、建物の壁面に付随する形で建設されているものがある。また、神々の彫刻が施された上部構造を持つ立派なものから、簡素なものまで、外観には様々なヴァリエーションがある。

69）Rajaram: 1982, p.77

70）最も大規模な聖メアリー・カテドラルと CSI 教会（#6）が位置する都市南東部には、クリスチャン・ミッション・ホスピタルという大規模な病院もある。この一帯は、イギリスによる城壁の撤去・王宮の跡地の整備によりイギリス人居住区が建設された地区であり、これらの施設もそれに伴って設立されたものと考えられる。

71）Devakunjari:1979, p.204。

72）Rajaram:1982, p.78。

第４章
マドゥライの居住空間構成とその変容

4-1　はじめに

本章では、マドゥライ旧市街中心部、具体的には四方のマシ通に囲まれた範囲を対象として、居住空間の構成と変容についての考察を行う。

まず着目するのは、カースト[1)]の住み分けの構造である。前章までに見てきたように、各種の「シルパ・シャーストラ」や古文献に示される都市の記述には、必ずカースト別の居住地配置に関する言及があり、カースト別の居住地配置はヒンドゥーの都市計画理念における最重要要素の一つである。南インドの寺院都市については、シャーストラに基づく計画的建設が指摘されているにもかかわらず、具体的な住み分け実態について、施設配置や聞き取り調査によりながら都市空間と関連づけて実証的に示す研究は、管見の限りほとんど見られない[2)]。こうした観点から本章では、マドゥライにおけるカーストの住み分けの現況を、店舗分布・街路名称・寺院の所有者などを手がかりとしながら、具体的に明らかすることを第一の課題とする。その主たる目的は、前章で見た都市の理念的モデルの適用、およびその居住による変容度合いについて検討する材料を提示することであり、また、本章の後半で検討する街区構成と住居に関する調査対象地を選定する基礎作業とすることである。

本章後半部では、上記の住み分け実態の分析の結果得られた、バラモン Brahman、ヤーダヴァ Yadhava、チェッティヤール Chettiyar という主要な三カーストの集住する地区を調査対象として、その居住空間の構成に関する比較考察を行う。支配的な住民カーストの差異が、街区・住居の構成と変容にどのように反映されているかという視点から、各地区の街区構成と約 120 件の住居平面の調査分析を通じて、住居類型および街区構成の経年変化を明らかにしたい。

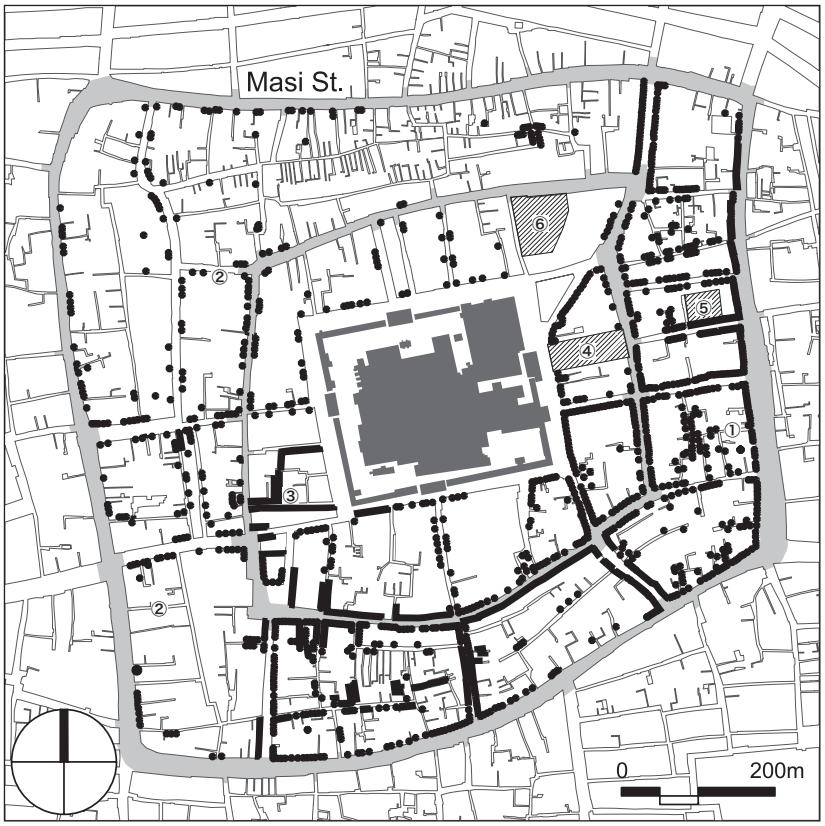
マドゥライにおけるカーストの住み分けについては、バラスブラマニアン（1997）が 20 世紀以降の人口変化と都市発達を論ずる過程で五つのカーストの居住地を大まかではあるが提示しており、参考となる。具体的な居住地の位置に関する記述はないものの、ラージャラーム Rajaram（1982）がナーヤカ朝時代について、バリガ Baliga（1960）が現代について、それぞれマドゥライに居住する主要カーストの名称と職業・来歴などをあげており、本章の考察の資料としている。

4-2　住み分けの構造

4-2-1　店舗分布

マドゥライ中心市街の商業施設として、小規模な店舗と大規模な市場が存在するが、ほとんどが、住居の一階前面もしくは一階すべてが店舗として使用されている店舗併用住宅である。

マシ通の内側領域について調査を行った結果を見ると、店舗の分布にはかなりの偏りが見られる（図 4-1）。ミーナクシー寺院の東と南部が主要な商業地区である。店舗の種類は街路毎に集まる傾向が見られ、特に顕著な集中を見せるのが、南部の貴金属商、西部のプラスチック雑貨商、東部の食料雑貨商、



① Venkala Kadai St.
② Pookara St.
③ Vallayalkara St.
④ Pudu Mandapa
⑤ Elu Kadal Shop Complex
⑥ Old Palace Market

市場・大規模商業施設

● 店舗

図 4-1　商業施設分布図

貴金属商

プラスチック雑貨商

食料雑貨商

衣料品商

図 4-2　主要四業種の店舗分布図

南東部の衣服関連商である(図 4-2)。南インドにおいて職業種とカーストは現在でも概ね一致するので、カーストによる住み分けが存在することは明らかである。

街路名にその街路で売られていたものの名前が用いられている通もあるが、現在の店舗の商品とは一致しない場合がある。ヴェンカラ・カダイ Venkala Kadai 通 (図 4-1：①) は「銀・銅容器通」、ポーカラ Pookara 通 (②) は「花売り通」、ヴァラヤルカラ Vallayalkara 通 (③) は「バングル売り通」を、それぞれタミル語で意味するが、現在店舗で販売されている商品と一致するのは「バングル売り通」のみである (図 4-1)。「花売り通」には現在店舗は存在していないが、「銀・銅容器通」には、にんにくや唐辛子などを中心とした香料・食材を販売する店舗が建ち並んでいる。「銀・銅容器通」の居住カーストが変化したことが読みとれるであろう。

大規模な商業施設としてはプドゥー・マンダパ (④) とエル・カダル Elu Kadal ショップ・コンプレックスがある (⑤)。プドゥー・マンダパは、ティルマライ・ナーヤカによって 17 世紀にミーナクシー寺院の東門前に建設されたホールであり、当初は寺院の様々な儀式に使用されていたが、現在では市場に変化している。内部にはヴィジャヤナガル様式の彫刻が施された列柱の間に、小さな仮設店舗が所狭しと建ち並び、寺院の参拝者や観光客を相手に商売を行っている。店舗種は、ヒンドゥー教の儀式用品・土産物屋・アクセサリー・布・衣服・ランプなど多種にわたる。市場としての利用がいつ頃から始まったかは定かではないが、寺院の運営機関が資金を得るために各店舗に場所を貸し出しており、ミーナクシー寺院内のホールにも同種の店舗が建ち並んでいる。エル・カダル・ショップ・コンプレックスは、プドゥー・マンダパから東に伸びるラヤ・ゴープラ通り沿いに位置する。周辺の建物に比して大規模な RC 造の建物で、内部にはサリー店や雑貨店が並んでいる。「エル・カダル」とはタミル語で「7つの海」という意味で、敷地は近年まであったミーナクシー寺院に属する聖なる貯水池の跡地である。この二例はどちらもミーナクシー寺院の施設が商業利用に転じられたものである。

市場は 1907 年の地図から、ミーナークシー寺院から東・西・南に伸びる軸線街路とヴェリ通 (旧城壁) の交差点の内側と、ラニ・マンガマルの宮殿跡 (⑥) に設けられていたことが確認できた (西部の市場は、現在ではホテルの敷地となり失われている)。ラニ・マンガマルの宮殿跡地が市場に変容した時期はイギリス支配期以降である。ナーヤカ朝時代の市場の位置に関する記述は文献に見られないが、他の三カ所はいずれも市外へ通じる旧城壁の門付近に位置していることになり、城壁の存在したナーヤカ朝時代からこの位置に市場が設けられていたと考えられる。

4-2-2　カースト分布の現況

マドゥライには古代から様々なカーストが居住していたことが、サンガム文学やプラーナに記されている。そして各々のカーストに居住区が与えられていたことも記されている [3)]。ナーヤカ朝時代にマドゥライに居住していたカーストについては、ラージャラーム (1982) が列挙している [4)]。現在マドゥライに居住している主要なカーストについては、『マドゥライ地名辞典 Madras District Gazetters: Madurai』[5)] で確認できる。また、バラスブラマニアン (1997) が、マドゥライ中心市街に居住する主要な五つの

カーストを取り上げている[6)]。

カーストの居住地分布を探る手がかりとなるものは、文献のほかに、前項で見た店舗種分布、街路の名称がある[7)]。また、前章で見た同心方形状街路に面する31のヒンドゥー寺院のうち、所有者が「カースト・コミュニティ」である寺院の位置が手がかりとなる。寺院の所有者が特定のカースト・コミュニティである場合、その寺院周辺に特定のカーストが集まって居住していることが、ヒアリング調査からも確認できた。

これらを手がかりとして各カーストのおおよその居住地分布を推定した上で、各地区住民へのヒアリングによる確認を行った。その結果、現在ある程度まとまった居住地を特定できたのは以下の八つのカーストである（図4-3）。

① バラモン Brahman：最高位の司祭階級であるが、現在では官職や農業、商業などに従事するものも多い。基本的に伝統を重んじる傾向があり、貧困層はいない。ミーナークシー寺院の祭祀はバラモン階級に属するパター Pattar という集団によって担われている[8)]。

文献によると、彼らは中世からミーナクシー寺院の側に居住してきた[9)]。パターへのヒアリングによれば、当初は寺院の東部に居住していたが、17世紀のプドゥ・マンダパ建設に伴い、居住地が寺院北部へ移されたという。寺院北部のメラ・パタマー Mela Pattamar 通（A：図4-3の記号に対応。以下同）とケーラ・パタマー Keela Pattamar 通（B）という街路が、パターの居住区であることを示している。寺院北東部にはアグラハラム Agraharam[10)] という語を名称に含む街路（C, D）があり、現在は両街路とも店舗が建ち並ぶ商業地区であるが、少なくともかつてはバラモンの居住地であったと考えられる。

② ヤーダヴァ Yadhava：主に乳業に従事するカーストで、牛や山羊を飼育してその乳製品で生計を立てている。一般に社会的地位は高く、経済的には中所得層が大半である[11)]。非常に血族関係の強いカーストで、一または複数の家族で小さな寺院を建設・維持する慣習がある[12)]。ヤーダヴァには多くのサブカーストが存在するが、マドゥライではカラクディ・ヤーダヴァ Kallakudi Yadhava とアイラ・ヴェットゥ・ヤーダヴァ Airam Veetu Yahava が確認できた。

現在彼らは主に北アヴァニムーラ通〜北マシ通間に広く居住していおり、この一帯では現在も数多くの牛が街路上に確認される。寺院 #1, 2（図4-3の数字に対応。以下同）はヤーダヴァ・コミュニティの所有である。しかしヒアリングによると、元々彼らの居住地は都市南東部であり、ティルマライが王宮建設のために彼らの居住地を都市北部へ移動させたという。

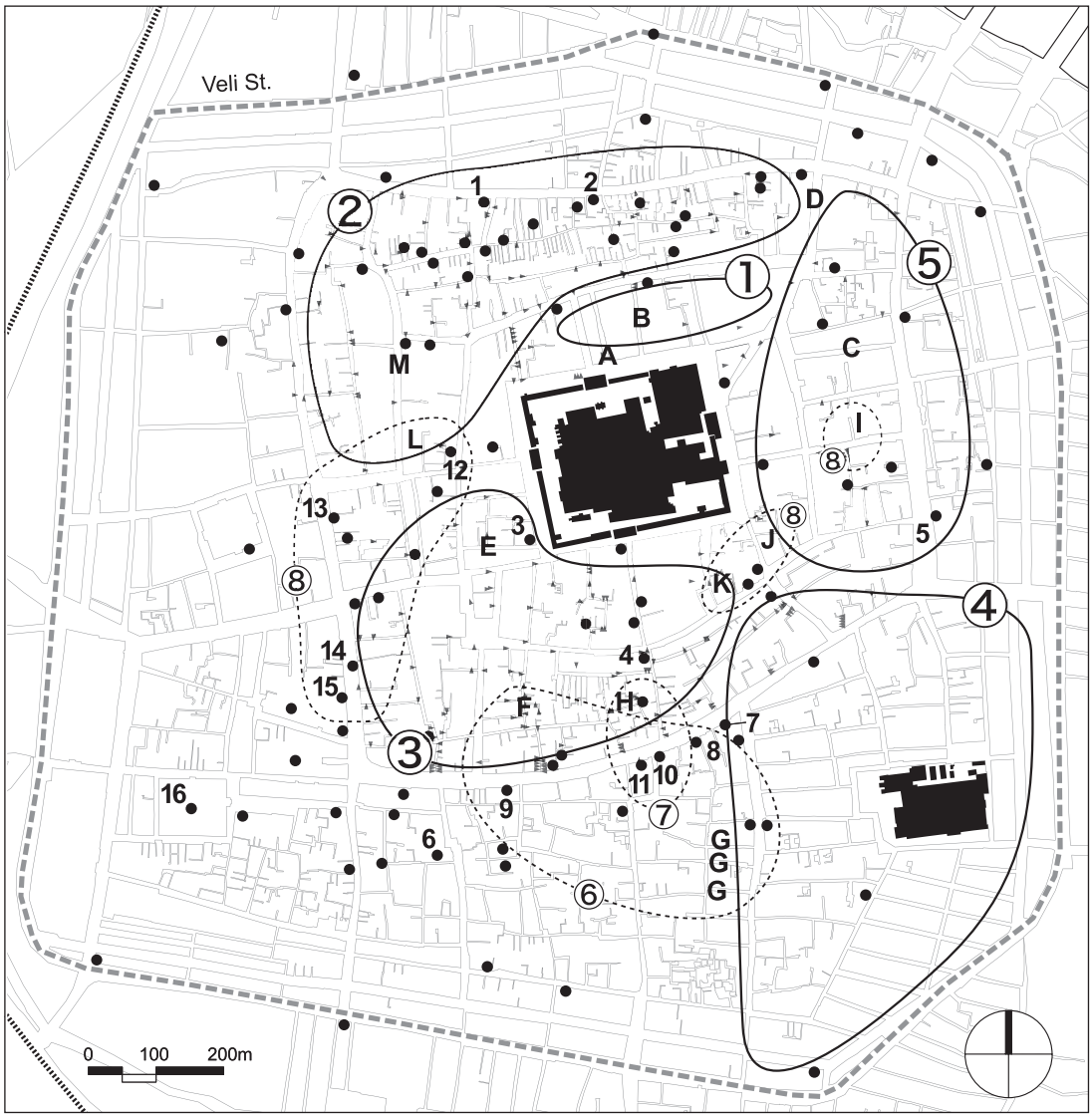
③ チェッティヤール Chettiyar：南インドの有力カーストの一つで主に商業に従事する。インドでは商人の代名詞とされる。多くのサブカーストに分かれ、マドゥライにはカスカラ Kasukkara、カライクディ Karaikudi、マンチャプドゥ Manchapuddu、ナートゥコータイ Nattukottai、ヴァラヤルカラ Vallayalkara という五つのサブカーストが存在する。中でもナートゥコータイ・チェッティヤールは、独自の社会結合組織と商圏を形成し、南インド屈指の商人集団として有名である。

商人カーストであるチェッティヤールの居住地は店舗分布に如実に表れている（図2-2：貴金属商）。南チッタレイ通〜南マシ通間の金・銀を中心とした貴金属店が建ち並ぶ地区には、貴金属を扱うカス

カラ、カライクディ、マンチャプドゥ、ナートゥコータイの各サブ・カーストが居住する。また寺院西部のプラスチック雑貨店が集中した地区は、ヴァラヤルカラ・チェッティヤールの居住区であり、付近の街路はペリヤ・ヴァラヤルカラ Periya Vallayalkara 通（E）と呼ばれる[13]。寺院 #3, 4 はチェッティヤール・コミュニティの所有であり、ミーナークシー寺院南西部の広い範囲がチェッティヤールの居住地と考えられる。

④ サウラシュトラ Sourashtra：織工を職業とするカーストである。元々はインド北西部のグジャラート Gujarat 地方やマハーラーシュトラ Maharashtra 地方の出身と言われ、ティルマライによってマドゥライに居住地を与えられ移住してきた。タミル地方には元々カイコラン Kaikolan という織工カーストいたが、その後カイコランよりも優れた技術をもつサウラシュトラがマドゥライでは有力となったとされる[14]。

移住当初は、都市南西外縁部に位置するプラサナ・ヴェンカテサ・ペルマール Prasanna Venkatesa



① Brahman ② Yadhava ③ Chettiyar ④ Sourashtra ⑤ Nadar ⑥ Kammalar ⑦ Maravar ⑧ Vellala

● ヒンドゥー寺院 ▲ 祠

図 4-3 マドゥライ旧市街におけるカースト分布の現況

Perumal 寺院（#6）周辺に居住地を与えられていたが、後にイギリスによって王宮跡地周辺に居住地を移された[15]。その結果、現在サウラシュトラは都市南東部を一帯に広く居住している。南マシ通に面する寺院 #7 はサウラシュトラ・コミュニティ所有の寺院である。

⑤ ナダール Nadar：にんにくや唐辛子、香辛料などを中心とした食料雑貨類を扱う商人である。ナダールに関する記述は文献の中には見られないが、食料雑貨店の分布（図 2-2：食料雑貨商）を参照すると東部に一帯に分布している。寺院 #5 はナダール・コミュニティの所有であり、周辺が彼らの居住地であることがわかる。寺院後方には彼らの集会所が併設されており、ヒアリングでもミーナクシー寺院東部に広く居住しているという回答を得た。

⑥ カマラー Kammalar：カマラーはタミル語で「職人」を意味し、その名の通り職人カーストである。職業区分に応じて、Tattar（金細工職人）、Kannar（真鍮細工職人）、Tachchar（大工）、Kal Tachchar（石工）、Kollar（鍛冶屋）の五つのサブカーストに分かれ、非常に堅固なカースト集団を保持している。

カマラーは自身が店舗を所有するわけではないので、街路名や寺院が手がかりとなる。南部にメットゥ・カマラー Mettu Kammalar 小路（F）、カマラー Kammalar 通（G）がある。また、寺院 #8, 9 はカマラー・コミュニティ及びカマラーに属する個人の所有であることから、現在でも付近が彼らの居住区であると考えられる。カマラーは自らが製作した商品を扱うチェッティヤールに近接して居住していることになる。

⑦ マラヴァー Maravar：現在は主に農業に従事するカーストである。店舗分布から居住区を判断することはできないが、南マシ通の近くにペリヤ・マラヴァー通 Periya Maravar（H）があり、その南側の寺院 #10, 11 がマラヴァー・コミュニティの所有であることから、周辺が彼らの居住地と考えられる。

⑧ ヴェッラーラ Vellala：タミル地方の有力農業カーストである。社会的地位は高く官職や商業に従事するものも見られる。四つのサブカーストに分かれるが[16]、マドゥライに居住しているのは大半がパーンディヤ・ヴェッラーラ Pandya Vellala（ムダリ Mudali、ピレイ Pillai などの称号をもつ）である。寺院東部と東南部にチンヌ・ピライ Chinnu Pillai 小路（I）、アパヴ・ピライ Appavu Pillai 小路（J）、ガナ・パニサン・ピレイ Gnana Panithan Pillai 小路（K）があり、また寺院西部にはヴェッラーラ Vellala 小路（L）、ダナパ・ムダリ Dhanappa Mudali 通（M）がある。それらの近傍に位置する寺院 #12, 13、やや南に位置する #14, 15 はヴェッラーラの所有である。ヴェッラーラは都市内に点在しているが、ミーナークシー寺院西部にはある程度集中していると見てよい。

4-2-3　住み分けの構図

以上の結果に基づいて、マドゥライ旧市街におけるカーストの居住地分布は図 4-3 のように描くことができる（ただし分布の境界線は明確なものではなく、大まかな範囲を示すものである）。現在、マドゥライ中心市街である程度の規模で集中して居住しているのは、バラモン、ヤーダヴァ、チェッティヤール、サウラシュトラ、ナダールの五つのカーストである。他のカーストは比較的人口が少なく、また点在しているため、居住区を面として表現することはできない。

以上のカーストによる住み分けと、前章で明らかにしたヒンドゥー寺院と祠の分布とを照らし合わせてみると以下の点がわかる。まずヒンドゥー寺院については、ヤーダヴァの居住地で最も密度が高く、サウラシュトラの居住地ではほとんど見られない。先述したように、ヤーダヴァには一家族もしくは複数家族で寺院を所有する慣習があるため、その居住地には寺院の数が多くあると考えられる。また、サウラシュトラの居住地は、イギリス時代に宮殿を破壊した跡地が整備された土地であることが、寺院の少ない原因だと考えられる。祠については、ヤーダヴァとチェッティヤールの居住地に多く分布し、密度では特にチェッティヤールの居住地が圧倒的に高い。商人カーストの商売繁盛、家内安全の信仰の強さと、地区の古さを物語っているといえるだろう。

時間的推移は以下のようにまとめられる。前述した五つのカーストのうち、17世紀初期から確実に同じ場所に居住していたと見られるのはチェッティヤールのみである。ティルマライ・ナーヤカの時代に、王宮とプドゥ・マンダパの建設のため、バラモンの一部とヤーダヴァの居住地が現在の地に移動した。その後年代は定かではないが、寺院東部では商業地区としての発達に伴い、バラモンの移出とナダールの移入が進行したと考えられる。ナーヤカ朝時代にマドゥライへ移住したサウラシュトラは、はじめ南西部外縁に居住区が与えられ、後にイギリスによって王宮跡地に移された。今回の現地調査では確認されなかったが、バラスブラマニアンによれば西南部の寺院 #16周辺には古くからイェンガール Iyyengar と呼ばれるヴィシュヌ派のカーストが多数集住していた[17]。これを加えると、ナーヤカ朝初期におけるカーストの居住地配置は図 4-4のように推定される。

図 4-4　ナーヤカ朝初期のカースト分布推定図

* モスクと境界は 1907 年の地図で確認できるもののみを示す

この配置を、例えば『マーナサーラ』の記述とを比較した場合、チェッティヤール、サウラシュトラ、ヤーダヴァの位置と「南にヴァイシャ vaishya」[18] という記述が対応する。またヤーダヴァ、サウラシュトラの位置と「東と東南の間に搾乳者」「西と南の間に織工」[19] という記述が一致する。バラモンが東から北に位置することも、『アルタシャーストラ』に見られるような、東と北を神聖とするヒンドゥー教の方位観に従ったものと考えてよい。

前章で指摘したムスリム、キリスト教徒との居住地区分をあわせて、同心方形状街路との関連で考えると、寺院周辺（チッタレイ通〜アヴァニムーラ通）がバラモンの居住地を含む最良の住宅地、その外側（アヴァニムーラ通〜マシ通）が主に商人・職人など一般住民の領域、さらにその外側（マシ通〜）が外来者や異教徒などの領域という、大まかな同心状のゾーニングを読みとることができる。『マーナサーラ』の「ナンディヤーヴァルタ」の項およびそれを前提としたと思われる『マヤマタ』にある、「ダイヴァカおよびマーヌシャ区画にバラモン、パイシャーチャ区画にヴァイシャ、シュードラ shudra」[20] という記述に正確に対応するとは言えないが、街路によって区切られた同心方格囲帯状の住み分け理念があった可能性は指摘できるだろう。

4-3　住居の構成要素と住居類型

以降の節では、バラモン、ヤーダヴァ、チェッティヤールの三カーストの集住する地区を対象として、現地調査と 1907 年の地図との比較に基づきながら、マドゥライにおける居住空間の構成・変容に関する具体的な検討を行っていく。支配的な住民カーストの差異が街区と住居のフィジカルな形態にどのように反映されているのか、また都市の同心方格状構造とどのような関係をもちながら街区や住居が形成されているのか、という点が主要な関心である。上記三カーストの居住地を対象とするのは、前節で面的な住み分けを確認した五つの主要カーストのうち、これらの三カーストのみがナーヤカ朝時代から同じ地区に継続して居住していると考えられるためである。

本節では、マドゥライの居住空間構成を検討するにあたって、まず基本的構成単位としての住居に注目し、マドゥライにおける都市住居の基本的構成の把握と類型化を行いたい。

4-3-1　住居の構成要素と基本型

（1）調査地区の概要

本節以降の調査対象地区は、前節で住み分けを確認した五つの主要カーストのうち、バラモン、ヤーダヴァ、チェッティヤールの三カーストの集住する地区である（図 4-5）。調査対象三地区において、計 283 件について構造形式、階数、用途の調査を行った。地区毎の特性については次節にゆずるが、調査地区全体として共通する特徴は以下の通りである。

構造形式は、全体の 81% が伝統的な石造レンガ壁構造またはレンガ造であり、残りは近年に新築さ

れたRC造レンガ壁構造である。壁は基本的に隣家と共有せず、25～60cmと分厚く、その厚みを利用して室内側にはニッチが設けられる。屋根は陸屋根が一般的であるが、特に古いものや小規模な平屋では、瓦葺きの勾配屋根が見られる。マドゥライ周辺の村落部では後者が一般的であり、より古い形式である。伝統的な住居の上階層の床や陸屋根は、チーク製の梁の上に木の厚板または小梁を載せ、その上にレンガを敷き詰めるという「マドラス・テラス Madras Terrace」と呼ばれる工法で作られる[21)]。

用途は、店舗との複合利用を含めれば、全体の80%が住居として利用されている。バラモン地区とチェッティヤール地区において商業利用の比率が比較的高いのは、バラモン地区はチッタレイ通とアヴァニムーラ通という幹線街路に挟まれているためであり、チェッティヤール地区ではそもそもチェッティヤールが商人カーストのためである。

階数については、二階建てが半数以上を占める。調査地区に含まれない中心的商業地域では5～7

図4-5　調査対象地区

			バラモン地区		ヤーダヴァ地区		チェッティヤール地区		3地区合計	
			建物数	比率	建物数	比率	建物数	比率	建物数	比率
独立建物数（比率の母数）			33		95		155		283	
構造形式	石造レンガ壁構造・レンガ造		20	61%	73	77%	136	88%	229	81%
	RC造レンガ壁構造		13	39%	22	23%	19	12%	54	19%
用途	住居利用	専用住居	13	39%	83	87%	83	54%	179	63%
		店舗併用住居	7	21%	4	4%	38	25%	49	17%
	商業利用	店舗・事務所・工場	13	39%	4	4%	31	20%	48	17%
	公共利用	寺院・学校・集会所			4	4%	3	1%	6	2%
階数	1階建て		1	3%	23	24%	33	21%	57	20%
	2階建て		17	52%	53	56%	76	49%	146	52%
	3階建て		13	39%	17	18%	43	28%	73	26%
	4階建て		2	6%	2	2%	3	2%	7	2%
敷地規模	～50㎡				70	74%	92	59%	162	57%
	50～100㎡		8	24%	12	13%	42	27%	62	22%
	100㎡～		28	76%	13	14%	21	14%	59	21%
実測数			18		72		29		119	

表4-1　調査対象三地区における建物の構造・階数・用途

階建てのものも見られるが、全体としては一〜三階建ての低層のものを中心に街区が構成されている。敷地規模については、最小のものでは10㎡に満たないものから、最大で350㎡に至るものまでかなりの幅が見られる。敷地の規模とその分布には地区毎に特徴的な差異があり、住居の平面構成にも関わるため、詳細は次節で地区毎に検討を行うが、大きくは、主要な街路に面した中規模以上のもの（100〜200㎡が多い）と、袋小路に面した小規模なもの（50㎡以下）の二つの系統に分けられる。バラモン地区では前者が、ヤーダヴァ地区とチェッティヤール地区では後者が支配的である[22]。

建設年代については、多くの場合居住者も正確な建設年を把握しておらず不明な点が多いが、ヒアリングにより回答が得られた中では19世紀末から20世紀初頭のイギリス植民地時代に建てられたものが、最も古いものである。この時代の建物は、裕福な大規模なものでは装飾の施されたパラペットや列柱付きの二階バルコニーなどのコロニアル風の装飾を備えている点が特徴的である。

(2) 住居の構成要素

上記283件のうち、119件で一階平面の実測[23]を行った。対象地区の建物の多くは二〜三階建てであるが、実測に際しては一階部分を対象としたのは、二階以上は個々人の居室として使用されていることが多いこと、または他の家族に賃貸されている場合が多いことが理由である。また実測に際して、職業、居住人数、建設年代、カーストについてのヒアリング調査を行った。以下、調査結果および文献に基づきながら、住居の基本的構成を整理したい。

住居を構成する基本的要素は、タミル語で「ティナイ Thinnai」と呼ばれるヴェランダ、「クーダム Koodam」と呼ばれるホール、「ナダイ Nadai」と呼ばれる廊下、バックヤード（裏庭）、台所・寝室・倉庫・祭祀室（プージャー Puja[24]のために使用される部屋）などの諸室である[26]。住居の構成要素それぞれの性質・役割、平面構成上の特徴は、以下のようである。

① ティナイ（ヴェランダ）

ティナイは、住居の前面に街路に面して設けられた、半屋外のヴェランダ空間である。ティナイは街路から数十cm〜1mほど床面が上がっている。二階建て以上の場合は、ティナイに上層階への階段が設けられる。街路との境界は、古いスタイルでは庇を支える柱が並ぶだけのオープンなものであるが、現在のマドゥライでは、柱間に金属製の格子をはめ込み半ば室内化されているものが多い。街路に対して扉が設けられる場合には、格子戸である。列柱には、彫刻や装飾が施されている場合が多い。ティナイは、その階段や段差に座って、外の街路を見ながら休憩したり時間を過ごすする場となる。家族以外の人が訪ねてきた時の接客・団欒の場ともなり、日本でいう玄関としての役割も果たしている。ティナイは格子や段差によって街路とゆるやかに隔てられた、公／私、外／内の変わり目の空間である。

② クーダム（ホール）

クーダムは住居の中心となる多目的なホールである。広さには敷地面積によって差はあるが、一般に建物の間口一杯の幅を占め、奥行きも他の部屋の約二倍の長さがある。天井も他の部屋より高く広々とした空間となっている。天井の中央部が、矩形に並ぶ木もしくは石の列柱によって支えられている場合も多い。列柱に囲まれた部分は折り上げ天井となっており、その側面に採光・換気用のハイサイ

ド窓が設けられるのが伝統的なスタイルである[27]。近年に建てられたRC造の場合は、他の部屋と同じ天井高で上記のような特徴は備えていないが、居間として用いられる最も広い部屋がクーダムと呼ばれる。奥行きの深い大規模な住居では、クーダムが二つ設けられることもある。

クーダムは用途としては家族の居間として用いられることが多い[28]。食事のための部屋があることは少なく、食事はクーダムでとられる。家族数が多く寝室が足りない場合は、寝室としても使用される。タミル語で「ウンジャル Unjal」と呼ばれるブランコ[24]が梁に取り付けられていることもある。現在ウンジャルは取り付けられていないが、ウンジャルを取り付ける金具が梁に残されている住居が多数あり、クーダムにウンジャルを設けることは一般的であったと思われる。クーダムは住居の象徴的な中心であるとともに、居住者の様々な要求に対応する多目的な空間である。

③ ナダイ（廊下）

ナダイは入口からバックヤードまで続く直線的な廊下であり、住居内の中心動線となっている。熱帯気候に対処するために、表と裏の外部空間をつなぐ直線的な廊下を設けることで、換気・通風を得ようとしたものと考えられる。それゆえ日中にナダイに設けられた戸が閉められることはほとんどない。ナダイは住居の中心軸上にもうけられるのが基本である。

④ バックヤード

バックヤードは住居の最奥部に設けられる屋外空間である。床面は石で舗装されているため木などの植物は植えられていない。トイレ、バスルーム（水浴び場）、井戸が設置され、古くは牛を飼うスペースとしても用いられていた。現在では住居の最奥部まで屋根が架けられ室内化されている場合もあるが、平面構成やその部分の屋根が付加的なトタン屋根であることから、以前はバックヤードであったことが推測できる事例が多い。

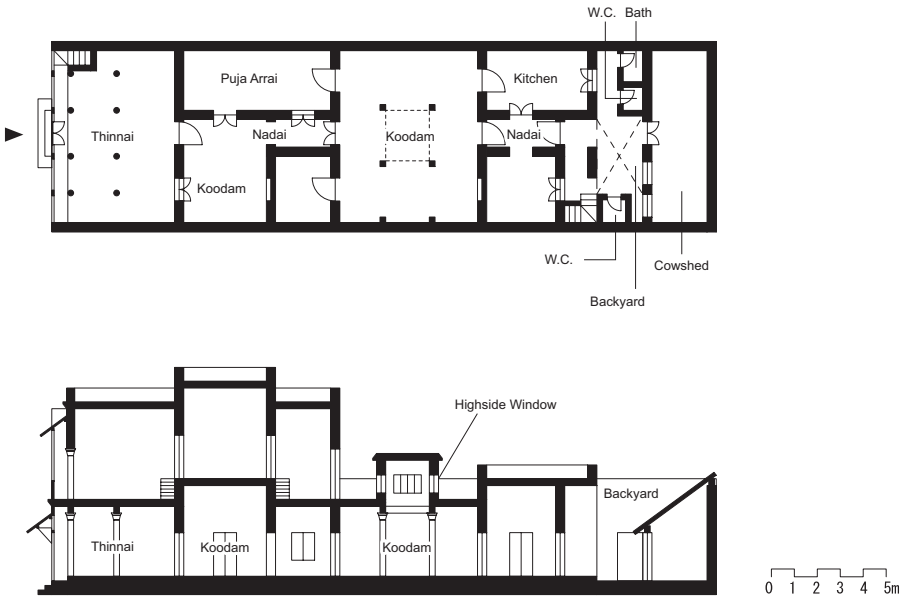


図 4-6　マドゥライの典型的住居の構成

バラモン地区の Keela Pattamar 通に西面するバラモンの住居

⑤ 諸室

住居内の他の諸室は、クーダムの前後、ナダイの両脇もしくは片脇に設けられる。概して窓のない狭い部屋であることが多く、居室として使われる場合も睡眠時のみであり、生活の中心はクーダムである。台所は住居の最奥部にバックヤードに面して、あるいはその一画に設けられる。住居には簡単なプージャーを行うためのヒンドゥー諸神の神像や図像が置かれている。祭祀室（プージャー専用の部屋）が設けられている場合もあるが、大半はクーダムや台所、寝室などの一画に神図像が置かれている。神図像は東向きに設置されるのが原則である。

上記の諸要素を組み合わせた典型的な平面構成は、図 4-6 ようなものである。宅地は奥に細長く、住居の内部空間は直線的である。住居内の動線はナダイにより、ほぼ一本の直線であり、入口から最奥までを見通すことができる。前面にティナイが設けられ、ティナイからナダイを通ってクーダムに続く。クーダムから再びナダイを通ってバックヤードに至る。部屋の入口はクーダムに面する場合とナダイに面する場合の両方がある。台所はクーダムより奥に設けられ、ほとんどはバックヤードに接するように設けられている。トイレ・水場を含むバックヤードと台所というサービスエリアは、住居の中で最も私的な空間であり、住居の最奥に配置される。

4-3-2　住居平面の類型

建築年代の新旧を問わず、マドゥライの住居は以上説明したような基本構成をほぼ共通して有しているが、敷地の規模や形状に応じて、ティナイ・ナダイ・バックヤードのいずれかが省略される。クーダムは住居の規模が小さくなっても、二室以上あれば設けられる。ティナイは前述したように、内外の中間的な領域であるため、規模に関わらず住民の要望に応じてしばしば壁で囲い込まれて室内化する。敷地の形状や立地と関わりが深いのは、ナダイとバックヤードである。ナダイは敷地の間口幅に関係し、バックヤードは立地に関係する。実測を行った 119 件のうち、寺院・学校等を除く 111 件を対象に、バックヤードの有無とナダイの有無および位置を指標として分類すると、以下のようであ

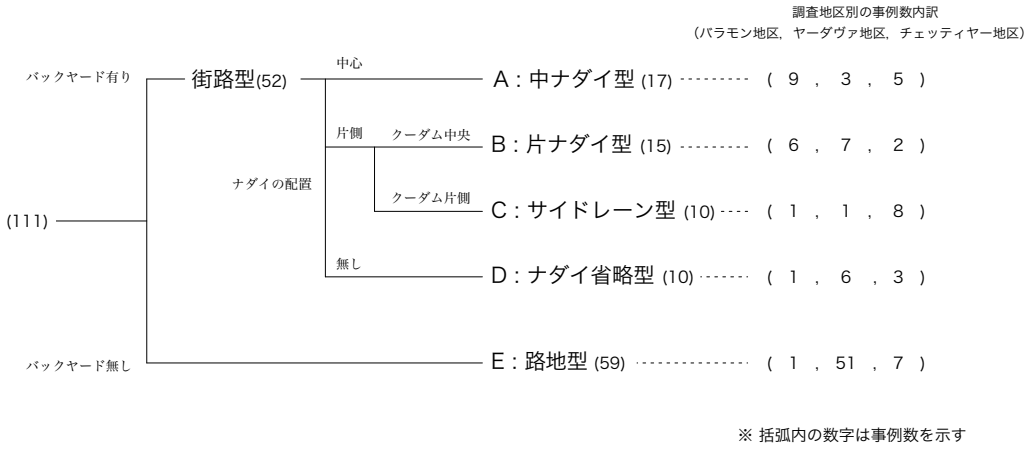


図 4-7　マドゥライの住居平面類型と事例数

図 4-8　マドゥライの住居平面類型図（1/600）

る（図 4-7, 4-8）。

まず、バックヤードの有無によって「街路型」と「路地型」の大きく二つに分けることができる。具体的には次節で詳細に見ていくが、バックヤードを有する（あるいは有していた）住居は全て比較的幅の広い通り抜け可能な街路に面した住居であり、バックヤードの無い住居は、ほぼ全てが狭い袋小路に面したものである。一見するとバックヤードは奥行きの長さに関係するように思われるが、街路に面する住居の場合は、間口に対して奥行きが短い場合でも、細長いバックヤードを片側に寄せるなどの工夫をしながら、バックヤードが設けられている。それに対して路地に面する住居では、間口に対して奥行きが深い場合でも、バックヤードは設けられないのである。この特徴は、袋小路の奥には共同の水場・トイレのあるオープンスペースが設けられるという街区構成上の特徴を反映したものと考えられる。

バックヤードをもつ「街路型」は、ナダイの有無と位置によって細分類される。間口に余裕のある敷地では、ナダイが住居の中心軸に設けられ、諸室がその両脇に配されるという基本構成通りのものとなる（中ナダイ型）。間口が狭い場合、あるいは「中ナダイ型」の住居が間口方向で分割された場合、ナダイが片側に寄せられる（片ナダイ型）。中にはティナイが省略されたり室内化されているものもあるが、この二つの型が構成要素を一通り揃えた基本型といってよい。間口がさらに狭くなると、ナダイが省略され諸要素が層状に連なる構成となる（ナダイ省略型）。

基本型では、ナダイが片側に寄る場合でもクーダムは間口一杯の幅を占めるが、クーダムが無いか、あっても諸室と同様にナダイの脇に配されたものがいくつか見られる。この場合、ナダイは入口からバックヤードまで途切れなく通っており、またナダイの一部が屋根の無い外部空間となっているため、廊下というよりは敷地内路地としての性格が強く、これを「サイドレーン型」として区別する。

「路地型」は、「街路型」に比して規模が格段に小さくなるため、ナダイは設けられず各部屋が一列にならぶのが一般的であり、平面構成としては「ナダイ省略型」の奥行きが縮まったものとなる。比較的奥行きが深い場合（10m 程度）はクーダムを含む三室が縦に連なる形になるが、奥行きが浅い場合（3～5m 程度）は、諸室が横に広がる。最も小さいものは、ティナイと一室からなる住居である。

類型別事例数は地区毎に大きな偏りがあるため、調査地区全体の比率は意味をなさないが、バラモン地区は基本型（中ナダイ型、片ナダイ型）が中心であり、ヤーダヴァ地区は「路地型」が集中した地区である。「サイドレーン型」は、チェッティヤール地区に集中して見られる。

類型別の規模を見ると（表 4-2）、「中ナダイ型」から「片ナダイ型」、「サイドレーン型」、「ナダイ省略型」、

表 4-2　住居平面類型別の規模

	平均面積（㎡）	平均間口（m）	平均奥行き（m）	平均階数
中ナダイ型	198	9.6	20.6	2.2
片ナダイ型	132	6.4	20.9	2.3
サイドレーン型	109	5.4	19.9	2.1
ナダイ省略型	77	5.9	13.0	2.2
路地型	35	5.4	6.8	2.1

「路地型」へと、面積・間口・奥行きのいずれもが小さくなっていく傾向は明快であり、規模と平面類型はほぼ対応すると考えてよい。間口 10m、奥行き 20m 程度の「中ナダイ型」が、マドゥライの都市住居の基本型としてあり、敷地の規模・形状に応じて、構成要素を省略しつつそれぞれの住居平面が形作られているのである。

4-4　街区空間の構成とその変容

本節では、マドゥライ旧市街中心部で有力とされる、バラモン、ヤーダヴァ、チェッティヤールの三カーストの集住する地区を対象として住居の集合形態と街区空間の変容について考察を行う。この三カーストは先に見たように、ナーヤカ朝時代から同地区に居住している。上述の住居類型をふまえて、街路との関係を軸に住居の集合形態と住居類型の成立の要因について検討を行った上で、1907 年の地図と現況との比較により敷地・街路の変容を追いたい。

4-4-1　バラモン地区

(1) 地区の概要

バラモンは寺院北部に集中して居住していることを確認したが、その中から実測調査の対象地区としたのは、東西をケーラ・パタマー Keela Pattamar 通とメラ・パタマー Mela Pattamar 通に、南北を北チッタレイ通と北アヴァニムーラ通という同心方形状街路によって囲われた範囲である（図 4-5、4-9）。バラモン地区内の独立した建物の総数は 33 であり、実測を行ったのはそのうち 18 である。

地区内の各建物の用途は、専用住居 13（39%）、店舗併用住居 7（21%）、店舗・オフィス・工場などの商業利用 13（39%）であり、専用住居と店舗併用住居をあわせた住居利用が 6 割を占める（表 4-1、図 4-10）。店舗併用住居は、いずれも以前は専用住居であったものの一部をそのままあるいは改築して、店舗や事務所として使用しているものであり、居住者と店舗・事務所部分の使用者が一致するのは 1 件のみである。商業利用の建物は、近年店舗として新築されたビルが 6、残る 7 は専用住居が転用されたものである。現在は商業利用の比率が高まりつつあるが、以前は地区内の建物のほとんどが専用住居であったことがわかる。

地区内の各建物利用者のカーストを調査した結果、33 件中 25 件から回答を得た（住居利用 15、商業利用 10）。その内訳は、住居利用 15 のうちバラモン 7、他カースト 8 となり、商業利用 10 は全て他カーストである [29]。この結果ではバラモンの占める割合は 28% にすぎないが、他カーストの住居利用のうち 2[30]、商業利用のうち 5[31] は、近年までバラモンの住居であったことがヒアリングにより確認できた。つまり、以前は 33 のうち少なくとも 14 がバラモンの住居であったことになる。また現在のカーストの割合を見ると、バラモンがすべて住居利用であるのに対し、他カーストは商業利用が半数以上である。建物用途の変化とあわせて考えると、以前この街区の建物のほとんどはバラモンの住居であったと推

測できる。

建物の構造形式は61%が伝統的な石造レンガ壁構造（以下、石造とする）またはレンガ造であり、39%がRC造レンガ壁構造（以下RC造とする）である（表4-1）。建設年代を確認できたものの中では、石造またはレンガ造の建物は、古いものは1898年建設であり（#18）、他もほとんどが築70年以上である。RC造についてはほぼ全て20年以内の建設である。階数は二･三階建てが大半を占める（表4-1）。石造･レンガ造は大半が二階建てであり、RC造は一件を除き全て三・四階建てである。建設年代の古い伝統的な建物は石造・レンガ造の二階建て、近年新築された建物はRC造の三・四階建てといえる。

総合すると、バラモン地区は元々は石造・レンガ造の二階建て住居が建ち並ぶバラモンの住宅地であったが、近年になって他カーストの流入と商業利用が進みつつあり、それと並行してRC造の三・四階建て建物が増加しているという傾向がわかる。

(2) 街区構成と住居の特徴

①街区構成の特徴

バラモン地区は四方を街路に囲まれた、南北に長いほぼ長方形（104×51m）の街区である。建物はすべて街路に面しており、街区の奥に入る路地は形成されていない。

北チッタレイ通と北アヴァニムーラ通に面する敷地は南北方向に入口が設けられ、残りは東西に背割りされるという明快な構成である（図4-11）。敷地形状は、北アヴァニムーラ通沿いの敷地を除き、いずれも間口が狭く奥行きが深い。間口は3.4～22.3m、奥行きは7.3～33.6mとばらつきがあるが、平均すると間口7.6m、奥行21.9mとなる。敷地の面積は55㎡（#14）から351㎡（#24）までかなり幅

表4-3　バラモン地区の実測対象住居の概要

No	類型	ティナイ	敷地面積（㎡）	間口（m）	奥行き（m）	構造	階数	建設年代	用途
3	A	○	184	7.8	23.6	S	2	1900	C
5	A	-	193	10.9	17.7	S	2	-	C
7	A	○	167	9.4	17.8	S	3	1977	H
8	A	○	142	8.0	17.8	S	2	1934	C
10	B	○	108	5.7	18.5	RC	3	1969	H
14	B	○	55	4.0	15.0	RC	3	1988	H
16	C	-	186	5.7	32.6	S	2	-	C
17	A	○	234	7.8	32.8	S	2	1917	C
18	A	○	234	22.3	10.5	S	2	1898	HC
19	E		66	6.3	10.5	S	3	1900	C
21	A	-	97	13.3	7.3	S	2	1902	HC
22	B	-	72	9.5	7.6	S	1	1920	C
23	D	-	112	7.4	15.2	RC	4	-	HC
24	B	-	351	15.8	22.2	S	2	1900	HC
26	A	○	214	8.0	27.1	S	2	-	HC
27	A	○	276	7.4	33.6	S	2	-	HC
28	B	○	213	6.8	31.6	S	2	1900	HC
31	B	○	136	4.6	29.7	RC	3	2001	H

類型：　A - 中ナダイ型、B- 片ナダイ型、C- サイドレーン型、D- ナダイ省略型、E- 路地型
構造：　S- 石造レンガ壁構造またはレンガ造　RC-RC造レンガ壁構造
用途：　H- 専用住居　HC- 店舗併用住居　C- 商業利用

図 4-9　バラモン地区の一階平面図と居住空間構成（1/800）

があるが、平均 159 ㎡と敷地は比較的大規模である。これはバラモンが他のカーストと比較して豊かであることを示している。店舗としての利用は北チッタレイ通と北アヴァニムーラ通という二つの同心方形街路沿いに集まり、とりわけミーナクシー寺院に面した前者に集中している。

②住居の特徴

実測した建物 18 の用途内訳は、専用住居 4、店舗併用住居が 6、商業利用が 8 である。専用住居はいずれも 1970 年頃以降に建設されたものであり、うち 3 は RC 造である。それに対して店舗併用住居と商業利用の建物（いずれも以前は住居として利用されていたものである）は、ほぼ 1900 年代前半の建設であり、より伝統的な平面構成を示していると考えられる。

住居平面の類型は、A：中ナダイ型が 9、B：片ナダイ型が 6 となり、計 15 が「基本型」にあたる。これらのうち若干変形があるものに注目すると、ティナイの無いもの（#5, 21, 22, 24）と奥行きが間口に対して短いもの（#18, 21）がある。

ティナイの無いものでは、入口からナダイへ直接つながる。#21, 22 は奥行きが浅いこともティナイ

図 4-10　バラモン地区の用途分布

の設けられない理由と考えられるが、#5, 24は建設年代も古く、また奥行きが深く軸線も明快であるが、ティナイは設けられていない。注目されるのは、これらはいずれも前面に街路に面して貸店舗が設けられている点である（図4-10）。特に#5, 24においては、平面構成上ティナイの設けられるスペースがそのまま店舗となっている。つまり以前はティナイであった空間に仕切り壁が設けられ、貸店舗に転用された可能性がある。

奥行きが間口に対して短い2例は、いずれも敷地の奥行きの浅い北アヴァニムーラ通沿いに位置する。間口よりも奥行きが短いため、一見すると他の住居と異なる平面構成がなされているように思われる。しかし、#18の平面構成をみると、ティナイからナダイを通ってクーダムに至るところまでは基本型と共通しており、相違点はバックヤードがクーダムの側方に配置されている点のみである。#21も、ティナイは省かれているものの同様の構成である。つまり#18と21は、サービスエリアをクーダムの脇に配置している点では「基本型」とは異なるが、要素の配置順序から見た空間構成は共通している。奥行の浅い敷地に適応した「基本型」の変形と見てよい。

建設年代が1960年代以降およびRC造の比較的新しい建物（#7, 10, 14, 23, 31）を見ると、#7, 10, 14の前面には、伝統的なティナイほど開放的ではないが窓の設けられた公私の変わり目の空間があり、これをティナイと考えると、クーダムやナダイ、バックヤードに至る構成は、伝統的住居とほとんど変わらない。

用途の変化にともない住居内にパーティションが設けられた結果、空間構成が変化した事例が複数見られる（図4-9）。#3, 27では、ティナイの一部にパーティションが設けられ、それぞれショーウィンドウと事務所に使用されている。ティナイが室内化されていく過程を示すものと考えられる。#19, 21はクーダムがパーティションによって二分されている。#19はクーダム全体が事務所として、#21は半分が住居のクーダム、半分は前面店舗の倉庫として使用されている。#26では、クーダムにパーティションが設けられ住居が明確に南北に分割されている。南部分は住居、北部分はオフィスである。ヒアリングによれば、この建物はかつて一つのバラモンの住居であったが、相続の結果15年前に南北に分離されたものである。5年前に北部分が売却されたため、現在のような状態になった。つまり、当初は相続の結果、パーティションが仮設的に設置され住居が分離されたが、後に商業利用への転化のためその分離は決定的となったのである。

(3) 1907年からの変容

①街区構成の変容

1907年の地図と比較すると、複数の敷地への分割は5例（#6/7、#10/11、#13/14、#20/23、#26, #31/32/33）、敷地の統合は3例（#18, 20, 27, 29）ある（図4-11, 12）。分割は相続・売却の結果、統合は買収の結果である。分割事例では、#6は1907年時点の空地に工場が建てられたものであり、#26は前述したように相続と売却の結果、北半分が事務所となったものである。他はいずれも専用住居として分割されている。統合事例では、#29は二つの敷地が統合され大きな工場となったものであり、他は隣接する敷地を統合して既存住居を増築したものである。分割と統合は複合的に起こっているが、全体

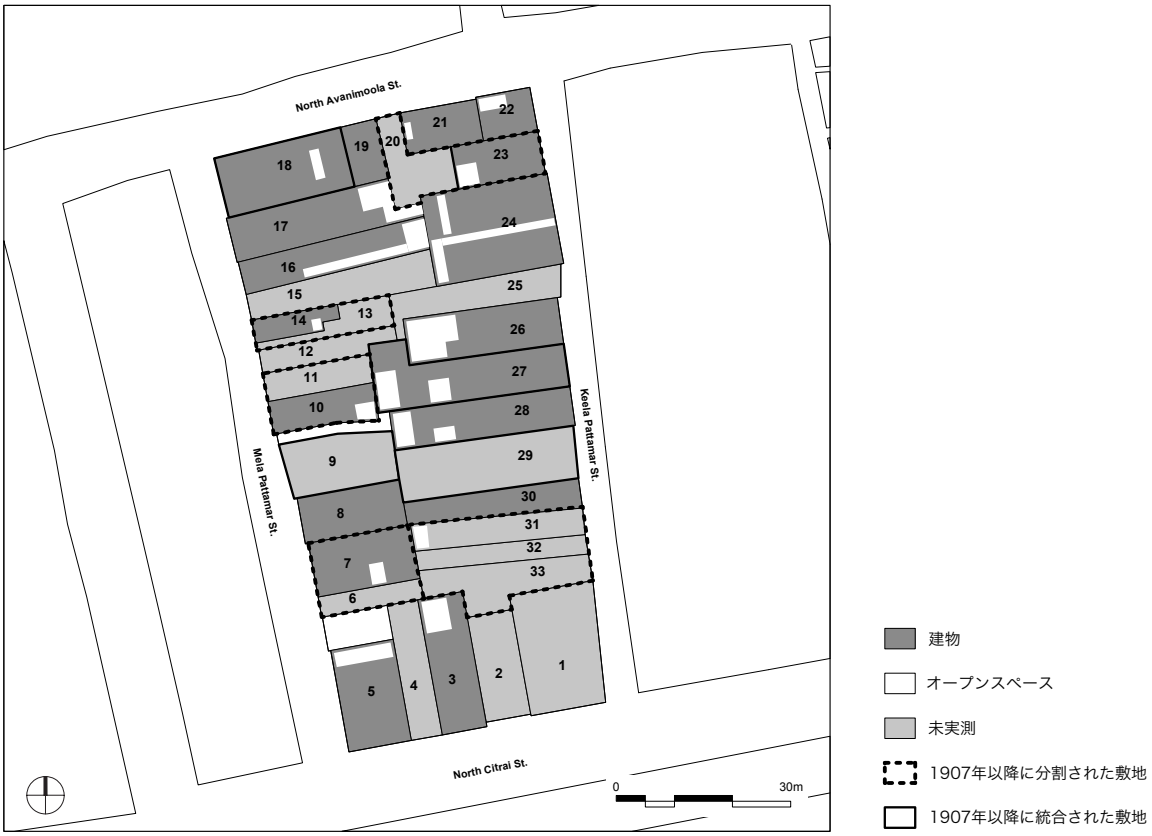


図 4-11　バラモン地区の街区構成（現況）

図 4-12　バラモン地区の街区構成（1907 年）

"Madura District, Madura Town: Revenue Map", 1907 にもとづき作成

として、居住密度を上げるための敷地細分と商業利用の高まりとして理解できる。

1907年の地図は収税用の地積図として作成されているため、そこに記された地番の枝番の存在から、1907年以前の敷地の変化をある程度読み取ることができる。バラモン地区では、1907以前に分筆されたと考えられる土地は1例（#18/19）確認できる（図4-12）。わずかな手がかりではあるが、北アヴァニムーラ通に面した奥行きの浅い敷地群は、元々は他の大部分と同様に、東西に背割りされた二つの土地であったことが推測できる。つまりバラモン地区の街区は、北チッタレイ通に面した南北方向の敷地群と、東西のパタマー通に面した東西方向に背割りされた敷地群の二つの部分からなっていたことになる。

屋外空間に注目すると、街区内の面積に占める割合は1907年から比べるとかなり減少している。1907年時点では、前面部分はほとんど建て詰まっているが、かなりの面積のバックヤードが見られる。また、1907年には#9, 10の間の路地の奥に小広場があったが、現在では#27の所有となり建物が建設され、路地の入口は閉鎖されている。

②クーダムの屋内化

1907年以前に建設されたことが確認できた建物（#3, 18, 19, 21, 24）のプランと、1907年の地図とを照らし合わせると、#21のクーダムの一部が屋外空間として記されていることがわかる。建設年代不明のものや1907年以降の建設のものも含めると、現在のクーダムの位置と1907年の屋外空間の位置が一致する事例は8例ある。先に見たように、比較的近年建設された住居も空間構成は伝統的住居と共通していることを考えれば、現在クーダムが設けられている位置に以前もクーダムがあった可能性は高い。バラスブラマニアン（1997）は、「バラモンの住居にはコートヤードがあり、それは採光窓のある天井によって覆われることもある」[32]としており。臨地調査では確認できなかったが、クーダムの位置は本来コートヤードであったと推測できる。つまりマドゥライの都市住居の原型は中庭式住居であり、現在のクーダムに見られる吹き抜けとハイサイドライトは、その名残と考えられるのである。#21を除く1907年以前の住居（#3, 18, 19, 24）では、クーダムの位置に1907年時点ですでに屋外空間がないこと、1907年以降の住居ではクーダムは全て室内であることを考慮すると、1907年以前からクーダムは徐々に屋外空間から屋内空間に変化していったと考えることができる。

4-4-2　ヤーダヴァ地区

（1）地区の概要

ヤーダヴァは寺院の北部、北アヴァニムーラ通と北マシ通間の一帯に広く居住していることを確認した。実測調査の対象地区としたのは、その一帯のほぼ中心に位置し、北をナッラマーダン・コイル Nallamerdan Koil 通（以下、NK通）、東をセンビ・キナトゥル Sembi Kinatru 通（SK通）、南をヴィドゥバン・ポンヌサミィ・ピレイ Vidhuvan Ponnusamy Pillai 通（VPP通）、西をノース・クリシュナン・コイル North Krishnan Koil 通（NKK通）に囲まれた街区の、西半分のエリア（約53m × 115m）である

(図 4-5, 4-13)。NKK 通は直線状の街路ではないが、北アヴァニムーラ通と北マシ通をつなぐ主要な街路の一つである。独立した建物の総数は 95 であり、実測した建物は 72 である。

ヤーダヴァ地区では、街路形状・住民構成・敷地割り・住居規模にいたるまで、地区の南北および東西で大きく異なっている。そのため以下では便宜的に、南側の VPP 通沿いの #1 〜 15 を「南エリア」、西側の NKK 通を中心とした #16 〜 32 を「西エリア」、北側の NK 通およびそこから伸びる袋小路沿いの #33 〜 95 を「北エリア」として、論述を進める (図 4-15)。

地区内の各建物の用途は、専用住居が 83 (87%)、店舗併用住居、商業利用、寺院がそれぞれ 4 (4%) となり、ヤーダヴァ地区は基本的には居住街区である (表 4-1)。店舗併用住宅は全て、以前は専用住居であったもので、現在は住居の一部が改築されて店舗となっている。商業利用 4 もまた全て以前は専用住居であり、現在は事務所としてほとんど改築なしに使用されている。寺院の所有者は、#33 は #35、#40 は #34 の住人の所有であり (#49, 57 は不明)、それぞれ一家族で一つの寺院を所有している。寺院は基本的に所有者家族あるいは周辺住民を対象としたものであり、地区外の参拝者はほとんど訪れない [33)]。店舗併用住宅は西エリアに、商業利用は南エリアに偏り、寺院はすべて北エリアにある。このことからも各エリアの性質の違いが分かる

建物の構造形式は 77% が伝統的な石造・レンガ造、23% が RC 造である (表 4-1)。壁は南・西エリアでは基本的に共有していないが、北エリアには壁を共有する長屋式の住居も多い。階数は、バラモン街区と同じく二階建てが半数以上を占めるが、比較的平屋が目立つ。これは北エリアに小規模な平屋が多いためである。屋根は二階建て以上ではすべて陸屋根であり、石造レンガ壁構造の場合はマドラス・テラスである。北エリアの平屋の住居は瓦葺きかトタン屋根である。RC 造の建物はここ 30 年以内に新築されたものであり、石造・レンガ造の建物は 1900 年代前半に建設されたものが多い。

地区内の各建物利用者のカーストの内訳は、ヤーダヴァ 60%、バラモン 2%、チェッティヤール 6%、ジャイナ教徒 4%、その他のカースト 28% である [34)]。ジャイナ教徒やその他のカーストの多くは店舗の賃貸利用者である。4-2 でも触れたが、ヤーダヴァには、アイラ・ヴェットゥ・ヤーダヴァ (以下、A ヤーダヴァ) とカラクディ・ヤーダヴァ (以下、K ヤーダヴァ) というサブカーストが存在する。このヤーダヴァ地区では、A ヤーダヴァが 60% 中 55% を、K ヤーダヴァが 5% を占めている。A ヤーダヴァは北エリアと西エリアの北側に、K ヤーダヴァは南エリアに集中している [35)]。ヒアリング調査からも、以前は南エリアが K ヤーダヴァ、北エリアが A ヤーダヴァという居住区分があったという回答を得た。北エリアは現在でも A ヤーダヴァが集住するが、K ヤーダヴァは比較的裕福な人々が多いため [36)]、南エリアに居住していた K ヤーダヴァの多くは都市郊外へ移転したという。その結果、南エリアには様々なカーストが混在している状態となった。住み分けは徐々に崩壊しつつある。

(2) 街区構成と住居の特徴

①街区構成の特徴

ヤーダヴァの居住地では全般にわたり、主要な街路に対して直交する袋小路が並列して多数並ぶという、フィッシュボーン形の特徴的な街路形状が見られるが (図 4-3)、本項の対象とするヤーダヴァ地

Thinnaiベランダ
Koodamホール
Nadai廊下
台所
バックヤード
プージャのための神図像
入口
共同トイレ・水場
牛小屋
旧牛小屋

0 10 20 30m

図 4-13　ヤーダヴァ地区の一階平面図と居住空間構成（1/800）

区では、その特徴がとりわけ顕著である[37]。南の VPP 通から 1 本、北の NK 通から 10 本、計 11 本の袋小路がある（図 4-15：L1 ～ 11）。袋小路の幅は平均 1.2m ときわめて狭い。L1, 11 の入口には門が設けられている。袋小路の奥行きは、L1 を除くとすべて 20m を越えており、特に L2 ～ 11 の平均奥行きは 26.3m と非常に長い。路地の両側には建物が密に建ち並んでいる。

敷地割りを見ると、まず南エリアでは、全て VPP 通に入口が面するように取られ、奥行きの長い大規模な敷地である。敷地面積は平均 140 ㎡、間口平均 6.7m、奥行き平均 21.5m と、面積・間口・奥行ともにバラモン街区と近似している[38]。西エリアでは、#16 ～ 19 を除くと、街路に面するように宅地が取られているが、敷地の面積と形態にはばらつきがある。平均面積 56 ㎡、平均間口 5.5m、平均奥行き 9.7m である。北エリアでは、袋小路と袋小路に挟まれた長方形の区画が短冊状に割られた構成である。平均面積 29 ㎡、平均間口 5.0m、平均奥行き 6.6m であり、規模は南エリアの約 1/5 と非常に小規模である。最も小さい敷地（#41）は 6 ㎡しかない。

ヤーダヴァ街区にはバラモン街区には見られない特徴がある。一つは、住民が共同で使用するトイレ・

図 4-14　ヤーダヴァ地区の用途分布

表 4-4　ヤーダヴァ地区の実測対象住居の概要

	No	類型	ティナイ	敷地面積（㎡）	間口（m）	奥行き（m）	構造	階数	建設年代	用途
南エリア	1	B	-	182	8.3	21.9	S	2	1950	H
	3	D	○	143	7.4	19.5	S	2	1960	H
	4	B	○	150	8.1	19.5	S	3	-	C
	5	B	○	123	6.2	20.7	S	3	1940	C
	6	C	-	119	5.9	20.7	RC	2	1976	H
	7	B	○	95	4.2	22.7	S	2	1999	C
	8	A	○	317	14.9	22.7	S	3	1950	H
	9	A	○	149	7.6	19.8	S	2	1930	HC
	10	B	○	87	3.9	22.3	RC	3	-	H
	14	E	-	190	7.3	26.0	S	2	1928	H
	15	A	○	26	3.5	8.3	S	2	-	H
西エリア	16	E	-	19	5.0	3.5	S	2	-	H
	17	E	-	21	6.7	3.5	S	2	-	H
	18	E	-	25	4.5	2.7	S	2	-	H
	19	E	-	35	10.6	2.9	S	2	-	H
	21	D	○	119	7.9	19.2	S	2	1955	H
	24	D	-	77	6.7	13.8	S	3	-	H
	25	B	-	33	3.4	9.3	S	2	1955	C
	26	D	○	38	5.0	8.2	S	2	1991	H
	28	D	-	28	3.4	8.2	S	1	1965	H
	29	D		27	3.3	8.2	S	2	-	HC
	31	B	○	127	5.3	24.0	S	2	1951	H
北エリア	33	-		45	6.9	6.5	S	1	-	T
	34	E	-	30	6.5	4.6	S	1	1933	H
	35	E	-	46	7.1	7.9	RC	2	1978	H
	36	E	-	12	3.3	3.7	RC	3	1987	H
	37	E	-	7	3.1	2.4	RC	4	-	H
	38	E	-	49	10.7	4.6	RC	3	2000	H
	39	E	-	64	14.0	4.6	RC	3	1982	H
	40	-		18	4.5	4.1	RC	1	-	T
	41	E	○	6	1.6	4.1	S	1	1920	H
	42	E	○	18	4.7	4.1	S	1	1920	H
	43	E	○	19	4.5	4.1	S	1	1920	H
	44	E	○	42	10.4	4.1	S	1	1920	H
	45	E	○	58	4.5	12.8	S	2	-	H
	46	E	-	42	10.1	4.2	RC	2	1999	H
	47	E	-	28	6.6	4.2	RC	2	1999	H
	48	E	-	26	7.9	3.3	RC	2	2001	H
	49	E	○	28	3.4	7.6	S	1	-	T
	50	E	○	24	3.2	7.6	S	1	-	H
	51	E	○	25	3.7	7.6	S	2	-	H
	52	E	△	28	3.5	8.0	S	2	1920	H
	53	E	△	28	3.4	8.2	S	2	1960	H
	54	E	△	25	3.1	8.2	S	2	-	H
	57	-		30	3.1	9.8	S	1	-	T
	58	E	-	83	8.5	9.8	S	2	1911	H
	59	E	○	37	3.8	9.8	S	2	1950	H
	60	E	-	48	4.9	9.8	RC	4	1996	H
	61	E	△	24	2.5	9.8	S	2	1990	H
	63	E	-	17	5.6	3.0	S	1	-	H
	64	E		32	6.2	4.5	S	1	-	H
	65	E	-	28	9.6	2.9	S	2	-	H
	66	E	△	27	2.8	9.6	S	2	1900	H
	67	E	△	28	2.9	9.6	RC	3	2002	H
	68	E	△	29	2.9	10.1	RC	3	2002	H
	69	E	△	28	2.8	10.1	RC	2	-	H
	70	E	○	28	2.8	10.1	S	2	-	H
	72	E	△	20	4.0	5.1	S	2	-	H
	73	E	△	14	2.8	5.1	S	2	-	H
	74	E	-	24	5.4	4.5	RC	3	1988	H
	75	E	-	32	7.9	4.0	S	2	-	H
	77	E	△	21	3.0	7.0	S	3	-	H
	78	E	△	18	2.6	7.0	S	3	-	H
	79	E	-	57	9.2	6.2	RC	2	-	H
	80	E	△	31	3.4	9.2	S	2	-	H
	82	E	△	37	4.0	9.2	S	2	-	H
	85	E	-	19	5.1	3.8	S	2	1950	H
	86	E	-	18	2.3	7.2	S	1	-	H
	87	E	-	21	2.9	7.2	S	1	-	H
	92	E	○	33	5.2	6.4	S	2	-	H
	94	E	-	27	5.7	4.8	RC	2	-	H
	95	E	○	28	5.8	4.8	S	1	1968	H

網掛け：間口＞奥行きの住居

類型：
A- 中ナダイ型
B- 片ナダイ型
C- サイドレーン型
D- ナダイ省略型
E- 路地型

構造：
S- 石造レンガ壁構造またはレンガ造
RC-RC 造レンガ壁構造

用途：
H- 専用住居
HC- 店舗併用住居
C- 商業利用
T- 寺院

水場の存在である。西エリアではL1、北エリアではL4, 6, 8, 11の最奥に設けられている（図4-13）。袋小路に面する住居の共同の施設であり、日常的に使用されている。建築年代の古い小規模な住居にはトイレ・水場が無いため、袋小路の住人が共同で設けることが一般的であったと考えられる。もう一つは、同じく袋小路の奥に設けられる牛小屋である。L9, 10の最奥部に牛小屋がある。牛小屋の所有者はいずれも街区外に居住しており、L9の牛小屋では所有者の牛が飼育されているが、L10の牛小屋は#52に賃貸されている。また#64も14年前までは#58の牛小屋であったことが確認できた。ヤーダヴァは伝統的に牛飼いのカーストであり、袋小路の奥に共同利用の牛小屋を設けていたのである。しかし、人口密度の増大に伴い牛小屋は住居へ転化してきている。

②住居の特徴（図4-14）

実測した建物は72であり、現在住居として使用されていない建物は8（商業利用4、寺院4）あるが、商業利用4はすべて以前は専用住居であったことを確認した。住居の空間構成は、南エリア・西エリア・北エリアによって大きく異なっている。

■南エリア（#1～15）

実測を行った11の住居平面の類型は、A：中ナダイ型が3、B：片ナダイ型が5となり、大半が「基本型」にあたる。敷地の規模・形状とあわせて、バラモン地区の住居によく似ている。特に規模の大きい#8, 14には、クーダムが2つ設けられている。手前のクーダムはティナイに続く接客の場であり、奥のクーダムは私的度合いが高い。#1を除く「基本型」にあたる住居にはティナイが設けられているが、バラモン地区のティナイと異なりやや閉鎖的である。街路との視覚的繋がりは薄い[39]。また4件でプージャー・アライが設けられており、住居の西側の部屋があてられる傾向が見られる。これは神図像を東向きに安置するためと考えられる。南エリアに限らず、神図像のほとんどは東を向いて置かれているからである。北エリアのAヤーダヴァは家族単位で住居の外に寺院を所有する風習があるが、それに対して南エリアのKヤーダヴァは、住居内に立派なプージャー・アライを設ける傾向があるといえよう。

■西エリア（#16～32）

西エリアにおいて実測した住居は11軒である。「基本型」にあたるのは、B：片ナダイ型の#25, 31のみである。#31は南エリアやバラモン地区の住居に類似する。#25とD：一列型にあたる#21, 24にはバックヤードが無いが、敷地奥の突出部は元々はバックヤードであった場所であり、現在は台所となっている。西エリア西南部の敷地は概して歪であるため、プランも変則的である。#16～20は袋小路を囲むE：路地型であり、北エリアに見られる住居に類似する。西側の#26, 28, 29は奥行きが浅く、敷地形状、平面構成とも「路地型」に近いが、いずれもバックヤードが設けられている点が注目される。プージャーのための神図像は専用の部屋には置かれていないが。確認された6件すべてが東向きである。

■北エリア（#33～95）

北エリアにおいて実測した建物は50あるが、いずれも規模が非常に小さく、寺院3件を除き[40]、全てE：路地型である。#45, #58はナダイを有しており、バックヤードを持たない点を除けば「基本型」に近い。

図 4-15　ヤーダヴァ地区の街区構成（現況）

図 4-16　ヤーダヴァ地区の街区構成（1907 年）

"Madura District, Madura Town: Revenue Map", 1907 にもとづき作成

路地型の住居は、規模が小さいためナダイは設けられない。「路地型」には奥行の長いタイプと間口の広いタイプの二種類がある。

奥行の広いタイプは31と大半を占めており、その多くは20世紀前半建設の石造・レンガ造である。#41～44は連棟の長屋形式であり[41]、屋根は瓦葺き、前面には木製の柱が並ぶティナイがある。#41を除けば住居平面は、前面にティナイ、その奥に居室という二層構成である。住居規模が小さいためティナイは台所や物置としても利用されている。建設年代は1920年と古く、#41～44は「路地型」住居の原型と考えられる。路地型の住居で最もよく見られる構成は、この二層構成の住居の奥に1～2室足されたものだからである（#52～54、#66～70、#77～78など）。ティナイの無い住居でも[42]、その規模の小ささにもかかわらずエントランスに独立した空間が当てられているものが多く、平面構成はナダイが無いこと、またバックヤードが無い点を除けば「基本型」と共通している。

間口の広いタイプ（表4-4：網掛け）は、NK通に面した住居（#48, 65, 75, 79）か、近年新築されたRC造の住居（#39, 46-48, 74）が主である。前者は入口をNK通に設けたことによるが、入口の位置を除けば構成は奥行き型と変わらない。後者は数軒の小規模な敷地を統合して建てられたものである。

プージャーのための神図像は、確認された16軒のうち14が東向きである。

北エリアの住居について注目されるのは、63の住居のうち48（76%）の入口が東向きに設けられている点である。袋小路内の住居に限れば、9割り以上が東向きである。つまり一本の袋小路に対して、その西側の住居のみが入口を持つように構成されているのである。例外はL10（#89, 90, 91がこの路地に対して西面している）のみである。

(3) 1907年からの変容

①街区構成の変容（図4-15, 16）

1907年の地図と比較すると、南エリアの宅地割りに大きな変化は見られず、間口の広い敷地の分割が1例（#5/6）、統合が1例（#8）見られるのみである。1907年時点では、南のVPP通に面しては建て詰まっているが、奥には現在よりずっと広いバックヤードが見られる。西エリアでは宅地の分割が多く見られ、合計5例（#16/17, 19/20, 23/24, 25～30）ある。ヤーダヴァ地区の店舗は西エリアに集中していることから、近年の商業的価値増大のために分割が進行したと考えられる。

北エリアの変化は複雑である。まず、1907年に比べて現在では袋小路が増えている（L3, 4）。また袋小路の位置がずれ、袋小路を含む一画が大きく再編成されているものもある（L8, #65～74）。全体的に宅地の細分化が顕著に進み、建物の密度が大きく上がっている。1907年の時点でL2, 5, 6, 9, 10の奥にあった屋外空間（牛小屋があったと考えられる）は現在では建て詰まっており、屋外空間の占める割合もかなり減少している。これは南エリア・西エリアにおいても共通の変化である。

1907以前に分筆された土地は7例確認できる（図4-16）。現在の#52/53の分割のほかは、いずれも南北に長い大規模な敷地が、袋小路の形成とともに細分化されるという変化である。1907年以降の変化とあわせて考えると、現在狭小な住居が建ち並ぶ北・西エリアも、元々は南エリアと同様に南北に背割りされた大きな敷地割りであったことは明白である。

②クーダムの屋内化

コートヤードについて注目すると、#31（1951年建設）のクーダムの位置には1907年の地図で中庭が見られる。現在の#31は典型的な「基本型」の構成であるため、1907年時点でも同じような構成の、しかしクーダム部分が中庭となった住居が建っていた可能性がある。

4-4-3　チェッティヤール地区

（1）地区の概要

ミーナクシー寺院南部一帯に広がるチェッティヤールの居住地の中で、臨地調査の対象としたのは、北を南アヴァニムーラ通、東をトッティアン・キナトゥル Thottian Kinatru 通、南と西を西チェッティ West Chetti 通に囲まれた街区（約 27 × 137m）と、さらにその街区の南側の西チェッティ通に面する地区である（図 4-5, 4-17）。このエリアはミーナクシー寺院の南軸線上に位置している。チェッティヤール地区内の建物は155あり、実測した建物は27である。チェッティヤール地区では、西チェッティ通の南北で街区の様相が大きく異なる。以下、便宜的に西チェッティ通の北側を北エリア、南側および西側を南エリアとして論述を進める。

建物の構造形式は88%が伝統的な石造・レンガ造、12%がRC造である（表 4-1）。RC造は西チェッティ通沿いに集中し、特に地区西部に多い。屋根はほぼ全て陸屋根である。階数は他地区と同じく二階建てが半数を占める。平屋は南エリアの袋小路沿いに集中するが、ここでは三階建ても多く、袋小路にはいると強い圧迫感がある。北エリアはほぼ二階建てに占められている。

チェッティヤール地区の特徴は、街路に建ち並ぶ店舗である。特に南アヴァニムーラ通に面する建物は、通りの北側も含め一階部分はほぼ全て貴金属商店である。用途別の割合は、専用住居54%、店舗併用住居25%、商業利用20%（表 4-1）となる。専用住居はほとんどが西チェッティ通南側の袋小路沿いのものである。それに対して店舗併用住居と商業利用（全て店舗）は、南アヴァニムーラ通と西チェッティ通沿いに集中する。通り抜け可能な街路沿いが商業空間、袋小路内が居住空間という区分は明快である。他に、寺院（#1）・学校（#46）・集会所（#89）が各1ずつあり、いずれも西チェッティ通沿いに位置する。集会所は「マハル Mahal」と呼ばれ、カースト・コミュニティの会合や結婚式に使用されるコミュニティ施設である。

調査街区はカスカラ・チェッティヤールの街区である[43]。カースト・コミュニティの事務所はマハルの二階に設けられている。大規模で組織的な共同体を形成し、同地区にある公共施設は、いずれもチェッティヤール・コミュニティが所有・管理している[44]。

（2）街区構成と住居の特徴

①街区構成の特徴

街路形態を見ると、北エリアには袋小路はないが、南エリアには10本の袋小路が見られる（図 4-19：L1～10）。すべて西チェッティ通に直交して南に伸びており、ヤーダヴァ地区（北）と類似した構成となっている。袋小路の幅は平均1.4m、長さは平均35.6mと非常に細長い。特にL5, 6, 7, 8, 9は

Thinnaiベランダ
Koodamホール
Nadai廊下
台所
バックヤード
プージャのための神図像
入口
共同トイレ・水場
牛小屋
旧牛小屋

0　10　20　30m

図 4-17　チェッティヤール地区の一階平面図と居住空間構成（1/800）

長さが 40m 前後である。L1 ～ 4, 10 には特定の名称はついていないが、L5 ～ 9 はそれぞれ、ウェスト・チェッティ通 1st ～ 5th Lane と呼ばれる。また L2 ～ 5, 9, 10 の入口には門が設けられており、袋小路の狭さ、長さとともに外部の人間の侵入を拒む雰囲気がある。

敷地割りの構成は、北エリアと南エリアで大きく異なる。北エリアにおける敷地割りは、基本的に東西を軸とした背割りである。多くは街路に面してファサードを設けるが、#6, 29 のみ街路から私有の袋小路を経て街区奥にアクセスする形式である。南アヴァニムーラ通と西チェッティ通の両方に面している宅地は 1 つだけある (#13)。間口より奥行の長い宅地が大半で、#47 ～ 61 を除くと [45]、敷地の平均面積 79 ㎡、平均間口 5.9m、平均奥行 12.8m となっている。バラモン地区と比較すると、平均面積は約 1/2 である。間口は大差ないが、奥行きが約 1/2 となっている。

南エリアの東半分は北エリアとほぼ同じ構成である。南エリア西半分の敷地割りはヤーダヴァ地区（北）と同様、長い袋小路に挟まれた敷地が短冊状の宅地に分割されるかたちとなっている。住居の入口が東向きになるように構成されている点も同様である。袋小路に接する敷地の 64％で入口が東向きに設けられている。西チェッティ通に面するものと袋小路の最奥のものは北入口であるが、それを除けばほぼ全て東向きである [46]。特に L5 の最奥部では、路地を分岐させてまで東向きに入口を設けている事例が見られる。袋小路に面する敷地は平均面積は 41 ㎡、平均間口 5.1m、平均奥行き 7.5m となっている。西チェッティ通に面する敷地は、平均面積 96 ㎡、平均間口 5.8m、平均奥行き 15.8m と北エ

表 4-5　チェッティヤール地区の実測対象住居の概要

	No	類型	ティナイ	敷地面積 (㎡)	間口 (m)	奥行き (m)	構造	階数	建設年代	用途
北エリア	13	A	○	319	12.9	25.7	S	2	-	HC
	18	D	○	65	6.9	9.4	S	2	1940	HC
	19	A	-	131	7.4	17.6	S	2	1920	HC
	27	C	-	96	6.8	13.8	S	2	1924	HC
	28	E	-	113	10.2	11.3	S	2	-	HC
	33	A	○	128	7.5	17.0	S	3	-	H
	34	D	○	54	3.0	16.4	S	2	-	H
	36	D	○	102	8.3	12.2	S	2	1965	H
	37	C	-	52	3.7	14.3	S	2	1900	H
	42	A	○	119	6.0	19.7	RC	3	-	H
	43	B	-	133	6.0	22.0	S	2	-	C
	45	C	-	62	3.9	15.3	S	2	-	HC
南エリア	65	C	-	113	6.3	17.8	S	3	-	HC
	66	C	-	104	5.7	17.8	S	2	1900	HC
	69	E	-	15	5.3	2.9	S	1	-	H
	73	C	-	138	4.9	26.0	S	2	1981	H
	74	B	-	113	4.3	26.0	S	2	1920	HC
	83	E	○	68	7.9	8.6	S	2	-	HC
	84	E	-	31	3.9	8.0	S	3	-	H
	88	E	-	27	4.9	5.5	S	3	1950	H
	93	E	-	48	9.3	5.2	S	3	-	H
	117	E	-	31	3.8	8.1	S	1	-	H
	S1	C	-	291	8.6	30.0	S	2	-	HC
	S2	C	-	371	14.0	35.7	S	2	-	HC

網掛け：間口＞奥行きの住居

類型：
A - 中ナダイ型
B- 片ナダイ型
C- サイドレーン型
D- ナダイ省略型
E- 路地型

構造：
S- 石造レンガ壁構造またはレンガ造
RC-RC 造レンガ壁構造

用途：
H- 専用住居
HC- 店舗併用住居
C- 商業利用

リアの敷地構成に近い。

②住居の特徴（図 4-17）

実測した建物は 27 であり、住居として検討対象となる建物は 22 である[47]。また比較のため、南アヴァニムーラ通の北側に位置する住居（S1, S2）も検討対象に加える（表 4-5）。

住居平面の類型は、A：中ナダイ型が 4、B：片ナダイ型が 2 あり、これら 6 の「基本型」はいずれも北エリアに含まれる。特に #42 は、比較的近年に新築されたと思われる RC 造であるが、極めて典型的な「中ナダイ型」を示している。#89 のマハルは住居ではないが、バックヤードが側方に配置されている点を除けば、忠実な「中ナダイ型」の平面構成であることは注目される。この平面構成が、必ずしも住居に限定されないことを示唆するためである。ただしマハルは集会施設であるため、住居とは異なりクーダムが全体の 2/3 を占めている。#19, 43, 74 は「基本型」であるがティナイが省かれている。前面に店舗を設けていることがその理由と考えられるのは、バラモン地区で見たのと同様である。

#18, 34, 36 は D：ナダイ省略型である。間口の狭さもしくは奥行の短さのためにナダイが省かれ、

図 4-18　チェッティヤール地区の用途分布

図 4-19　チェッティヤール地区の街区構成（現況）

図 4-20　チェッティヤール地区の街区構成（1907 年）

"Madura District, Madura Town: Revenue Map", 1907 にもとづき作成

ティナイ―クーダム―バックヤードが直結するが、基本的構成はA・Bに近い。規模の小ささにもかかわらずバックヤードが設けられていることが、「路地型」と区別される点である。

チェッティヤール地区に特徴的な類型がC：サイドレーン型であり、8例ある（#27, 37, 45, 65, 66, 73, S1, S2）。いずれもティナイは設けられず、前面に設けられた店舗の脇からナダイを経て住居内に入る。間口の一方に寄せられたナダイは、街路側の入口から奥のバックヤードまで貫通しており、そこからクーダム・諸室・サービスエリアにアクセスする平面構成である。同様にナダイが端に寄るB：片ナダイ型と異なる点は、片ナダイ型では間口一杯の幅を有するクーダムが動線上に位置するのに対して、サイドレーン型ではクーダムは他の諸室と同等に並置されている点である。多くの場合ナダイの一部が屋外空間となっており、諸室の独立性が高く、ナダイは廊下というよりは敷地内路地というべきものである。このような形式が、何故チェッティヤール地区に多く見られるのだろうか。居住者に対するヒアリングによれば、このサイドレーン型の構成は、商人であるチェッティヤールにとって防犯上有効なためだという。ナダイに面する入口を施錠し、さらに商品等を保管する諸室とナダイ間の扉を施錠することで、二重に盗難を防ぐことができるというのである。「基本型」住居では通風のためにナダイの戸を開放しておくことが一般的であるが、サイドレーン型住居では、防犯上の理由からナダイの戸を閉め、その代わりにナダイを屋外化（ただしナダイの上部には鉄格子がはめられる）することで通風を確保していると考えれば、この説明には一定の有効性がある。平面構成の観点からは、サイドレーン型は一つの敷地の中に、袋小路と路地型住居が納められた形と見ることができ、基本型住居と路地型住居の中間的形態と位置づけることができるだろう。

南エリアの袋小路に面する住居は、いずれも典型的なE：路地型であり、平面構成はヤーダヴァ地区（北）と類似している。袋小路奥に共同のトイレ・水場が設けられている点も共通する。ただし牛小屋は無い。

プージャーのための神図像は、確認された20のうち19が東向きに安置されている。規模の大きな住居では、プージャー・アライが設けられている。

(3) 1907年からの変容

①街区構成の変容（図4-19, 20）

1907年の地図と比較すると、地区全体で敷地の細分化が顕著に進行していることがわかる。敷地の統合事例は3例（#13, 19, 121）のみである。

北エリアで注目されるのは、1907年時点では南アヴァニムーラ通と西チェッティ通の両方に面していた敷地が、南北に分割された事例が多く見られる点である。うち3例（#4/43, 5/42, 15/33）では、北側の住居と南側の店舗が切り離されたことによる。南アヴァニムーラ通沿いは非常に商業的価値が高く、もとは住人自身の店舗として使用されていた部分が貸店舗として住居から分離し、次第に建物自体も分離して建設されていったと推測できる。2例（#16/32, 17/31）は、分割された南北どちらの敷地も店舗となっている。寺院東側の敷地（#47-61）は特に細かく分割されている。

南エリアでは、袋小路奥の住居の細分化と袋小路の建て詰まりが目立つ。袋小路L2～4は、背割り

の大規模な敷地の分割に伴い、1907年以降に設けられたものであることがわかる。1907年時点でL5～9の奥に存在した屋外空間は、増加による住居に対する需要の高まりのため、現在ではすべて宅地化している。

1907年以前に分筆された土地を見ると、ほぼ上記と同様の傾向が見られる（図4-20）。南エリアの袋小路L5～9沿いの敷地は、すでに小規模な敷地に割られており、1907年以前から現在と同様の街区の高密度化・細分化が進んでいたことがわかる。寺院周辺の小規模な敷地は、いずれも元は寺院の敷地であった。

これらの変化を踏まえて初期街区の構成について考察すると、北エリアは本来、南アヴァニムーラ通と西チェッティ通の両方に面する短冊状の敷地割りであり、北側を店舗、南側を居住スペースとする使用区分があったと考えられる。西チェッティ通は、同心方形状街路である南アヴァニムーラ通に並ぶ住居群の、いわばバックレーンとして形成されたと推測できる。南エリアも元々は北エリアと同規模の敷地が並んでいたと見られるが、西チェッティ通は南アヴァニムーラ通に比して商業的価値が低いため、増大する人口を吸収するための新規住居建設は南エリアを中心に行われ、袋小路とそれに面した路地型住居を発達させてきたのであろう。

4-5　まとめ

本章では、マドゥライにおける居住空間構成を検討するにあたり、まず、ヒンドゥーの都市計画理念における重要要素の一つであるカースト別の居住地配置について、店舗分布・街路名称・寺院の所有者などを手がかりとしながら考察を行った。続いて、住居の基本的空間構成をふまえた上で、各カースト居住地における街区レベルでの居住空間構成とその経年変化の特徴について考察を行った。それぞれについて明らかになった諸点は以下のようである。

(1) カーストと住み分けの構造

① 店舗分布については、その分布には大きな偏りがあり、ミーナクシー寺院の東・南部が商業地区となっている。店舗業種毎の集中傾向は明白であり、南部の貴金属商、西部のプラスチック雑貨商、東部の食料雑貨商、南東部の衣服関連商が、特に顕著な集中を見せる。ナーヤカ朝時代の市場は城壁付近に設置されていた。

② 店舗分布、街路名称、寺院所有者およびヒアリング調査により、カーストの住み分けの現況を明らかにした。現在ある程度まとまった居住地を形成しているカーストは８あり、中でもバラモン、ヤーダヴァ、チェッティヤール、サウラシュトラ、ナダールの集住傾向は顕著である。

③ カースト分布と前章で見た宗教施設分布を照らし合わせると、ヒンドゥー寺院はヤーダヴァの居住地で密度が高く、サウラシュトラの居住地ではほとんど見られない。祠の密度はチェッティヤールの居住地で特に高い。いずれもカーストの風習と居住地の歴史の古さを反映している。

④ ナーヤカ朝時代初期から同じ場所に居住していたと見られるのはチェッティヤールのみである。バラモンの一部とヤーダヴァの居住地はティルマライの時代に現在の地に移動した。サウラシュトラは、イギリス時代になって現在の地に移動した。

⑤ 上記変化を元に、ナーヤカ朝時代初期の推定居住地配置を推定した。寺院近傍にバラモン、その外側に一般住民、特に南部には商人と職人階層が居住していたという構図である。前章で明らかにした宗教別の居住地区分を加えると、さらにその外側に外来者や異教徒が居住していたことになる。都市の理念的モデルに沿った、寺院を中心とする同心方格囲帯状の居住地ゾーニングが存在した可能性がある。

(2) 都市住居の空間構成

① マドゥライの住居は、入口からティナイ―クーダム―ナダイ―バックヤードが中心軸に並び、その両脇に諸室が配された左右対称の平面構成を基本とする。

② 住居平面は、構成要素の配置と有無によって、街路型・四種と路地型の、五つの類型に分けることができ、これらは建設年代にかかわず、主として住居規模と面する街路の性質に対応する。

③ そのうち構成要素を欠かさず揃えた「基本型」と見なせるものは、ナダイを有しクーダムが中央に位置する中規模以上の街路型であり、主要な街路沿いに位置する。それに対してバックヤードの無い路地型は、ほぼ全て袋小路に面する小規模な住居である。

(3) 街区構成とその変容

① カーストの住み分けは対象三地区において現在でも残っている。特にヤーダヴァは街路単位での顕著な集住がみられる。チェッティヤールは強固なカースト・コミュニティ組織をもち、学校や集会所、寺院などの公共施設を保有している。しかしながら商業利用の増大や住民の移転に伴い、カースト毎の住み分けは徐々に崩壊しつつある。

② 対象とした三地区に共通するのは、敷地割りの形状が、間口に比して奥行きの長い街区中央で背割りされた比較的大規模な敷地割りと、袋小路に挟まれた区画を短冊状に割った狭小な敷地割りの二種類に分かれる点である。バラモン地区では前者にあてはまり、ヤーダヴァ地区とチェッティヤール地区では、地区の南北に両者が並存する。

② 背割りの敷地割りには街路型住居が、袋小路沿いの敷地割りには路地型住居が対応する。両者は一つの地区内であっても、住民の経済状況を反映しながら明快に分かれて分布している。

③ 路地型住居の建ち並ぶ袋小路の奥には共同の水場・トイレあるいは牛小屋が設けられており、袋小路を共同のサービスヤードとすることで路地型住居の生活は成り立っている。

④奥行きの長い袋小路が並列しているが、一本の袋小路に対しては、その西側の住居のみが入口を持つように構成されている。つまり、路地型住居はそのほとんどが東向きに作られている。

⑤ 街路型住居については、カースト毎の特徴が見られる。バラモン地区においては「基本型」に忠実な住居が多く見られる。ヤーダヴァ地区とチェッティヤール地区では、住居内にプージャー専用の室を設ける傾向がある。またチェッティヤール地区では、商人カーストであることを反映し、店舗併用

住居としての「サイドレーン型」住居が特徴的である。

⑥ 1907年からの街区構成の変化は、各地区に共通して敷地の細分化と高密化が一貫して進行してきたことを示している。特に背割りされた大規模な敷地が分割され、袋小路の形成を伴う路地型住居群へ再編される変化が多く見られる。袋小路と路地型住居は、増大する人口を街区内に吸収する形で形成されてきたものと考えられる。

⑦ さらに1907年の地図に記された地番から推測される1907年以前の敷地割りは、三地区のいずれにおいても、主要街路に囲まれた街区が背割りされた、整然とした敷地割りであったと考えられる。しかしながら、上記と同様の変化は20世紀初頭において既に進行していた。

⑧ 1907年の地図には現在のクーダムの位置が中庭として記されている事例が多くみられる。クーダムは現在屋内の広間であるが、文献の記述とあわせると、クーダムは以前は中庭であり、マドゥライの住居の原型は中庭式住居であったと考えられる。

第4章　注釈

1）いわゆるカースト制度は、ヴァルナ varna（四種姓）と多種多様にわたるジャーティ jati（「生まれを同じくする者」の意。一般に世襲の職業集団を形成する）の両概念からなるが、本論文では「カースト」の語を、主としてジャーティの意で用い、内婚集団であるジャーティに内包される外婚集団をサブ・カーストと呼ぶ。

2）寺院都市を扱う文献では、シャーストラに基づく点を論じる際に、カースト別の居住地の存在が一般的に指摘されることもあるが、その位置や分布については具体的に示されていない。そのような中で、ある程度居住地の位置にまで言及しているのは、管見の限りシュリーランガムを扱う小倉（1999）と、本章の参考としているバラスブラマニアン（1997）のみである。

3）Devakunjari: 1979, pp.45-47, pp82-85。

4）Rajaram,: 1982, pp.81-86。

5）Baliga: 1960。

6）Balasubramanian: 1997, pp.87-106。本文献は、バラモン Brahman、ヤーダヴァ Yadhava、チェッティヤール Chetiyar、サウラシュトラ Sourashtra、イェンガー Iyyengar の五つのカーストについて、街区単位で居住地を示しており、本研究では現地調査の基礎資料として用いている。

7）街路名はその街路で売られていた物品や周辺に居住するカースト名に由来するものがあり、現況と一致しない場合もあるが一つの手がかりとなる。街路名の由来・解釈については、ティアガラジャル工科大学建築学科の G. バラジ Balaji 講師（Lecturer, Dept. of Architecture, Thiagarajar College of Engineering, Madurai）へのインタビュー、および氏によるタミル語文献 "A Study on Street Names of Madurai City"（著者は郷土史家 D.Devaraj、年代不詳）の英訳に基づく。

8）パターにはヴィクラマ・パーンディヤ・パター Vikrama Pandyan Pattar という一族とクラセカラ・パーンディヤ・パター Kulasekara Pandyan Pattar という一族が存在する。17世紀、ティルマライ・ナーヤカがミーナクシー寺院の運営改善に直接のりだした際に、ヴィクラマ・パーンディヤ・パターに寺院内でのプージャー（ヒンドゥー教神像礼拝儀礼）を、クラセカラ・パーンディヤ・パターに祭礼でのプージャーを分担したと言われている（Rajaram: 1982, p.42）。ミーナクシー寺院内の僧侶組織や儀礼の分担については、Fuller（1984）に詳細な記述がある。

9）Devaraj, "A Study on Street Names of Madurai City"

10）南インドにおいて王からバラモンへ施与された土地を指す語。タミル地方では単にバラモンの居住地を指す場合もある。

11）しかし現在では乳業に従事するヤーダヴァの人々は減少しつつある。以前はタミル語で「コナー Konar」と称されていたが、現在ではヤーダヴァという名称が一般的である。彼らはインド古代の叙事詩『マハーバーラタ』の一部を成す宗教・哲学的教訓詩編「バガヴァットギーター」において、クリシュナ（ヴィシュヌ神の化身の一）の血統に連なるものとされている。

12）Balasubramanian:1997, pp.54。

13）タミル語で、Periya は「大きな」、Vallayalkara は「バングル（金属やガラスで作った腕輪）を売る」の意。

14）Rajaram:1982, pp.83

15）Balasubramanian:1997, pp.73。

16）ヴェッラーラは、トンダイマンダラム、チョーリヤ、パーンディヤ、コングの四つのサブカーストに分かれ、それぞれがパッラヴァ、チョーラ、パーンディヤ、コング・チョーラという、南インドの四つの王朝に関係づけられるという。

17）Balasubramanian:1997, pp.63。#16は旧市街にある最大のヴィシュヌ派寺院（クーダル・アラガー Koodal-Alagar 寺院）。マドゥライの守護神はシヴァ神であるため、ヴィシュヌ派の住民はヴィシュナヴァートによって市街外縁の地を与えられたという。

18）「南にヴァイシャ」という規定は、ナンディヤーヴァルタの項（IX.222）をはじめ複数の類型について見られる。ヴァイシャはヴァルナの第三位で、庶民（農・牧・商）階級。

19）サルヴァトヴァドラ Sarvatobhadra についての記述（IX.146-148）。

20）『マーナサーラ』（IX.217-219）、『マヤマタ』（9.61b-63）。シュードラはヴァルナの第四（最下）位に置かれた隷属民。

21）Balasubramanian: 1997, p.59。

22）1907年に作成された地図を調査のベースマップとして、各住居の実測を行った。1907年の地図には当時の宅地割りから建物の輪郭まで記されているが、必ずしも現在のものと一致しないため、各住居の実測結果から現在の宅地割り図を作成した。

23）全体としては50㎡以下のものが6割弱を占めるが、街区がそのような小規模な敷地で細分されているわけではない。例えばヤーダヴァ地区で、それぞれの規模毎の合計面積を見ると、50㎡以下：2,327㎡、50～100㎡：3,126㎡、100㎡以上：3,314㎡となり、件数としては14%の100㎡以上の敷地が、全体の38%の面積を占める。

24) プージャーとはヒンドゥー教の神像礼拝儀式であり、寺院や祭りの場で詳細な儀軌に基づいて司祭が執行する大規模なものから、日々家庭で水、食物、花などを神像もしくは神の図像に捧げるものまで、その形式は多様である。

25) インドでは、ブランコはヴェーダ時代以来、宗教儀式の中で重要な位置を占めてきた。東西に揺れるブランコは太陽の動きになぞらえられ、東西・上下の揺れの往還は、男女、天地、朝夕、生死のようなあらゆる二元的事象の結合と回帰を象徴するとされる。一般にはクリシュナ神やその妃ラーダ Radha の乗り物とされており、祭礼の祭にはそれらの神像を飾って揺らすことが行われる（辛島ほか : 2002, pp.646-647）。

26) タミル語で部屋は「アライ Arrai」と呼ばれ、台所は「サマヤル・アライ Samayal Arrai」、寝室は「パドゥッカイ・アライ Padukkai Arrai」、祭祀室は「プージャー・アライ Puja Arrai」と、それぞれの用途に「部屋」をつけた名称で呼ばれるが、ヴェランダ・ホール・廊下はそれぞれ固有の名称を持つので、以下タミル語の名称で記述する。

27) クーダムは家屋の中央部にあるた外部に面した窓が設けられず、また他の部屋に比べて幅・奥行きとも広いため、この列柱には環境的・構造的補強の意味があるのはもちろんであるが、筆者には、むしろ住居の中心としての象徴性を付与するための手立てと思われる。タミル地方の寺院の内陣では、しばしば天井に同様のハイサイドライトが設けられ、神像に光が降り注ぐような構成がとられているからである。

28) 棚やテレビが置かれている場合もあるが、基本的にほとんど家具は置かれない。人々は床に座ることが多く、特定の場所に椅子が置かれていることもない。壁に設けられたニッチが棚の役割を果たしている。

29) 他カーストの内訳は以下のようである。住居利用：ヤーダヴァ 3・チェッティヤール 5、商業利用：ヤーダヴァ 3・その他 7。

30) #27, 31。居住者へのヒアリングによれば、#27 は 1956 年、#31 は 1989 年に、前所有者のバラモンから購入したという。

31) #16, 17, 19, 22, 29 居住者へのヒアリングによれば、#19 は 1965 年、#22 は 1983 年、#29 は 1996 年に前所有者のバラモンから購入したという。#16, 17 は #18 に居住するバラモンが現在も所有している。

32) Balasubramanian: 1997, p.47。

33) 寺院（#33, 40, 49, 57）の中で、外観から寺院と判断できる建物は #33 のみである。残りの 3 軒は寺院としての特徴的な外観をもたず、中に神像が安置されていることから寺院とわかるのみである。規模も住居の宅地規模を逸脱するものではない。#33 は普段閉鎖されており、年に一度祭礼時に開かれるのみである。他の寺院も通常は開かれているが、神像が箱に仕舞われている場合もあり、人々が参拝に来る姿はあまり見られない。

34) 回答を得られたのは全 95 軒中 53 軒である。

35) K ヤーダヴァは南エリアで 3 件しか確認できなかったのに対して、A ヤーダヴァは北エリアで回答を得た 34 件中 28 件（82%）を占める。

36) K ヤーダヴァの住居は大規模で、建物も立派なしつらえである。K ヤーダヴァである #8 の住人はマドゥライ中心市街に映画館を所有している。#14 の住人の職業は医者であり、裕福な生活を送っている。それに対して、A ヤーダヴァの居住区の宅地面積は K ヤーダヴァの約 1/5 であり、職業は現在でも乳業・農業に従事しているものが多い。

37) 石畳で舗装された街路が多いのも、ヤーダヴァの居住地の特徴である。ヤーダヴァ地区においても、北の NK 通とそこから分岐する袋小路はすべて石畳で舗装されている。

38) #15 のみは宅地が他とは異なるが、以前は #14 の一部であり、現在は他の家族に賃貸されていることが分かっている。

39) #9 だけは街路との境界が格子であるが、他の住居（#4, 5, 8）では壁に窓が設けられている程度である。また #14 においては前庭と非常に広いティナイが設けられているが、街路との境界には壁と門が設置されていて、外部からの視線は閉ざされている。

40) #49 は寺院であるが、前面にティナイを設けられ、他の路地型住居と同じ構成をとっている。

41) #44 は一家族の住居であるが長屋形式であり、各部屋間は路地で繋がっている。つまり路地が住居の廊下として機能している。

42) 路地型のティナイは小規模であるためエントランスとの区別がつきにくいが、前面が大きく開放されており明確にティナイと判断できるものは 12 件ある。

43) カーストに関する調査では 155 件中 14 件から回答があり、13 件がカスカラ・チェッティヤールである。ヒアリングでも西チェッティ通沿いは同カーストの居住地であるという複数の回答を得た。カスカラ・チェッティヤールの居住区の境界ははっきりと分からないが、南アヴァニムーラ通の北側で実測した 2 軒（S1、S2）はマンチャプドゥ・チェッティヤールであるから、南アヴァニムーラ通がチェッティヤール地区の中でサブカーストの居住エリアの境界線となっている可能性がある。

44) 寺院名はマニカ・マンダパ・コイル Manicka Mandapam Koil、学校名はアイラ・ヴァイシャ・プライマリー・スクール Ayira Vaisya Primary School である。寺院は大規模で多くの人々が参拝に訪れる。マハルは普段は閉鎖されており、二階部分のみ

が事務所として日常的に使用されている。一階は集会や結婚式の時にだけ使用される。マハルは元々カスカル・チェッティヤールのコミュニティのための施設であったが、現在では他のコミュニティの結婚式などにも貸し出されている。

45) #47から61は、寺院(#1)の街路沿いの1階部分を細かく分割した(平均8㎡)貸店舗スペースである。1907年の地図からは、以前は寺院の一部であったことがわかる。

46) 例外はL1の#68, 69とL6の#90〜92のみである。

47) 実測を行った建物のうち、現在住居として使用されていない建物は7軒(寺院1、学校1、マハル1、商業利用4)である。商業利用のうち2件(#31, 72)は近年、商業利用のために新築されたRC造ビルで、店舗が建ち並ぶショップ・コンプレックスとなっているが、残り2件(#7, 43)は以前は住居として使用されていたものが商業利用に転用されたものであるため対象に加える。よって住居として分析対象となる建物は、#1寺院、#46学校、#89マハル、#31, 72の商業利用を除く22件となる。

結章

5-1　各章で得られた知見のまとめ

本論文では、「ヒンドゥー聖都」の代表的都市である、ヴァーラーナシーおよびマドゥライの旧市街を対象に、都市構造と理念的モデルの関係性、および居住空間構成とその変容を視点として、ヒンドゥー教のコスモロジーが都市空間の構成に及ぼした影響とその特質に関する検討を行った。両都市について得られた知見を、視点毎にまとめると以下のようである。

5-1-1　ヴァーラーナシー

(1) 都市構造の形成と理念的モデルの関係

ヴァーラーナシーでは、都市の中心寺院・ヴィシュワナート寺院を中心とした五重の同心円をなす巡礼路＝聖域群およびそれらが結びつける寺院・祠の体系が、ヒンドゥー的コスモロジーを表象する理念的モデルである。しかしながら、既往研究に基づき、古代における居住地の発生および初期の発展過程、街路パターンの形成を検討した結果、都市の基本構造は主として地理的要因に基づいたものであることが指摘できる。このような都市構造の形成過程と、各巡礼路の推定成立年代と形態の比較を照らし合わせれば、ヴァーラーナシーの巡礼路＝聖域群と寺院・祠の体系は、そのようにして形成された市街地を背景として、宗教的理念だけでなく地理的・社会的条件に基づき後から設定されたものであると考えられる。その意味では、巡礼路の描く理念的モデルはヴァーラーナシーの都市構造を規定するアプリオリな要因であったとはいいがたい。

しかしながら、上記のようにして設定された巡礼路や寺院・祠は、住宅など個々の建築や街路形態の変容など、よりミクロなスケールにおいては都市空間の構成に少なくない影響を与えていることを、現在の都市空間における諸要素の実態調査を通して、明らかにすることができた。一度建設された寺院･祠は原則として破壊されず、地形と同様に新規の建設に際しての前提条件と見なされている。また、寺院・祠の多くが防衛上の理由や個人所有であることから、住宅の内部に設置されたり増改築によって周辺建物に取り込まれている事例が多いことを確認した。巡礼地の核となるような宗教的に重要な施設や巡礼者の通行は、新たな寺院・祠の建設を促す傾向があり、巡礼路は都市各部のローカルな聖地＝近隣単位の中心寺院を組織化する機能をも有していることが指摘できる。さらに街区内を通る巡礼路は、都市空間の変容過程において一定の決定要因として作用していた可能性がある。これらの事情が重層することにより、都市全体が寺院・祠との複合体であるようなヴァーラーナシー特有の景観が生み出されているのである。

(2) 居住空間の構成と変容

ヴァーラーナシーの居住空間は、都市スケールにおいてはモハッラと呼ばれる伝統的近隣単位の集合によって構成されている。本論文では臨地調査に基づいて、アンタルグリハ地区における53のモハッラの範囲と境界とその基本的空間構成を明らかにし、これまでほとんど明らかになっていなかったモハッラの空間構成を具体的に提示することができた。各モハッラは基本的に街路を軸として形成さ

れ、境界部の門や祠、中心的宗教施設、小広場、井戸などの施設セットを備えている。モハッラはその規模と形状、街路構造などの相違から、二つの類型に分類することができ、両者はヴィシュワナート寺院を焦点とする明快な分布を見せている。それぞれの街区構成には、街区面積や敷地割り、袋小路の多寡などの相違点も多いが、それらの多くは、市街化の歴史的経緯と関連づけて解釈することができる。早くから高度に市街化の進んでいたヴィシュワナート寺院周辺の中心部と、比較的近年に市街化の進んだ周縁部では、都市の成り立ちが基本的に異なっており、それがモハッラの空間構成にも色濃く反映されていると考えられるのである。

個々のモハッラは、街路を軸として集合する中庭式住居によって構成されている。これらの中庭式住居は、周辺街路の複雑な形状にもかかわらず基本的に矩形の輪郭を有しており、内外の空間を段階的に接続する構成が特徴的である。この構成は近郊村落の住居や18～19世紀に建設された貴族の邸宅ハヴェリにも共通して見られる特徴であり、ヴァーラーナシーの都市住居は同地方の伝統的な住居の構成を今もよく残している。住居の入口が設けられる方位には、南向きを避けるという顕著な傾向が見られた。街区構成の変容は、これらの個々の住居の変化に伴い街路の幅や形状、敷地割りが複雑に変化しながら進行しているが、全体として街路の建て詰まりと敷地の細分化による高密化が進行してきた。中庭を持たない住居の多くは、この過程で新規に建設されたものである。このような変化の中で注目されるのが、定点としての寺院・祠の存在である。街路上に建っていた多くの寺院・祠が、住居の増築あるいは新規建設に際してそのまま住居内部に取り込まれており、巡礼対象となっている寺院・祠にみられた、一度建設された寺院・祠は基本的に破壊されないという原則が、一般の寺院・祠についてもあてはまることが確認された。

5-1-2　マドゥライ

(1) 都市構造の形成と理念的モデルの関係

マドゥライについては、ナーヤカ朝時代に「シルパ・シャーストラ」の都市計画理念に則り建設されたとされる、都市の中心寺院・ミーナクシー寺院を中心とする五重の同心方形状街路が、ヒンドゥー的コスモロジーを明確に具現している。しかしながら、具体的にマドゥライがどのような理念的モデルを想定して計画・建設されたかは、必ずしも明らかではなかった。本論文では、まず既往研究を元にマドゥライの都市構造の歴史的形成過程をあとづけ、ナーヤカ朝時代の都市建設に先立って、現在見られるような寺院を中心とする同心方形状の都市がすでに存在していた可能性を示した。続いて現在の街路形態の検討から、マドゥライの都市構造は各所に少なくない歪みを見せつつも、矩形の街路によって区切られた同心方格囲帯状の空間構造を有しており、『マーナサーラ』に示される村落類型「ナンディヤーヴァルタ」に近いことを指摘した。この理念的モデルの構造は、ティルマライ・ナーヤカによって創始された巡行祭礼によって、現在でも象徴的に再生・補強され続けている。

都市構造の骨格となる同心方形状街路は、少なからず矩形から逸脱しているが、歪みの大きな要因となったのは、シャーストラの規定からはずれる都市南東の位置に建設された王宮である。また祭礼

における巨大な山車の巡行も、同心方形状街路を歪める要因であったと考えられる。臨地調査により得られた宗教施設の分布状況からは、ヒンドゥー寺院はマシ通の内側に多く集まり、モスクとキリスト教会は旧市街周縁部にかけて位置するという傾向が明らかとなった。ナーヤカ朝時代にはミーナクシー寺院を中心とする旧市街中心部にヒンドゥー教徒が居住し、周縁部に外来の異教徒が居住するという居住地区分があったことが考えられる。

(2) 居住空間の構成と変容

マドゥライの居住空間構成を大きく規定するのは、カースト集団毎の住み分けである。プラーナ文献には古来カーストに基づく居住地区分があったことが記されているが、そのようなカースト毎の住み分けは現在でも見ることができる。具体的には、店舗分布・街路名称・寺院の所有者などを手がかりとして、8つのカースト集団の居住地分布を明らかにすることができた。中でもバラモン、ヤーダヴァ、チェッティヤール、サウラシュトラ、ナダールの集住傾向は顕著である。居住地の変化を逆にたどりナーヤカ朝時代初期の居住地配置を推定すると、寺院近傍にバラモン、その外側に一般住民、特に南部には商人と職人階層が居住していたという構図が浮かび上がる。先に見た宗教別の居住地区分を加えると、さらにその外側に外来者や異教徒が居住していたことになり、都市の理念的モデルに沿った、同心方格囲帯状の居住地ゾーニングが存在した可能性が指摘できるのである。ただし、このようなカーストの住み分けは、近年の商業利用の増大や住民の移転に伴い徐々に崩壊しつつある。

個々のカースト居住地内の街区構成においては、宗教施設の分布密度にカーストの性質の差を見ることができるが、多くの特徴は共通する。まず住居形式は、いずれのカースト居住地においても大きく二つの形式が見られる。基本となるのは、主要街路沿いの大規模な敷地に建てられる、諸要素が中心軸上に並ぶ奥行きの深い伝統的住居である。原型は中庭式住居である。もう一つは、袋小路に面する小規模な住居である。主要街路沿いの大規模な敷地が人口増大に伴い細分化されるプロセスの中で、袋小路とともに生まれた住居形式である。二つの住居形式は住民の経済状況を反映して明確に分かれて分布する。1907年からの街区構成の変化は、このような敷地の細分化が一貫して進行してきたことを示している。この変化を遡ることで推測される1907年以前のマドゥライの街区構成は、同心方形状街路とそれを繋ぐ比較的幅の広い主要街路によって区切られた街区が、整然と背割りに区画されたものである。街区空間の変化の中で注目されるのは、敷地の細分化によって生じた袋小路内の住居が、いずれも東側を入口とするように配置されている点である。この傾向は住居内の祭祀の空間にもあてはまり、ヒンドゥーの方位観が住居レベルの配置構成に影響を与えていることが伺われる。

5-2　結論と今後の課題

ヴァーラーナシーとマドゥライはどちらも、ヒンドゥー教のコスモロジーに基づく、中心に最聖の存在（中心寺院）を据えた求心的階層性をもつ同心状構造の理念的モデルを有している。理念的モデル

の存在は、具体的には寺院・祠をつなぐ巡礼路、あるいは中心寺院を囲む街路という形で都市空間に表象されている。また、どちらも巡礼・巡行祭礼という都市空間における儀式的行為を通じて、繰り替えし理念的モデルの構造をトレースし、それを維持・再生・強化するというシステムを備えている。序章に述べたように、都市にコスモロジーが投影されることは「ヒンドゥー都市」の特徴の一つであるが、両都市は、都市とコスモロジーとの関係が、都市空間と人々の行為が複合するかたちで極めて精緻に表現されている点で、とりわけ「聖なる都市」であり、ヒンドゥーの「聖都」の代表的都市と位置づけられる。

しかしながら、両都市における理念的モデルと都市形態の関係は大きく異なっている。ヴァーラーナシーにおける理念的モデルは、基本的に川沿いに自然発生的に形成された都市を後追いする形で投影されたものであり、いわば都市の形態が理念に先行している。そのため、既存の複雑な都市形態にあわせて、理念的モデルを表象する巡礼路＝聖域の形態もまた大きく歪んでいる。都市の成長・発展にともない、それらが適宜修正されてきたことは、本論文を通して詳しく見てきたところである。一方マドゥライは、パーンディヤ朝時代、ナーヤカ朝時代を通じて、理念的モデルに基づく都市の計画的建設・再建が、王権により繰り返し実施されてきた。

このような両都市の歴史的・社会的背景を反映した経緯の差はあるが、一旦都市に投影された理念的モデルあるいはそれを表象する空間的要素が、具体的に都市空間にどの程度実現し、影響を与えてきたか、また、都市が生きられる中で両者の関係がどのように変容してきたか、というのが本研究の主要な関心の一つであった。

ヴァーラーナシーについては、これまで巡礼路＝聖域の体系が織り成す精緻な理念的モデルの構造に注目が集まっていたが、実際には理念的モデルはマクロスケールでの都市構造とは一致しない。むしろ、それを表象する巡礼路や寺院・祠の存在が、新たな寺院・祠の発生や住居の増改築、街路形態の変容など、よりミクロなスケールの都市空間構成に、間接的ではあるが一定の影響を与えている。この点を臨地調査に基づき具体的に明らかにしたことは、本論文の成果の一つである。これに巡礼路＝聖域が都市の成長・変化に応じて歴史的に変遷していることを合わせて考えると、都市空間と理念的モデルとの相互規定的な関係を伺うことができ、ヒンドゥーの聖都の都市空間構成の形成・変容過程の理解に寄与する一知見を示しえたものと考えている。

マドゥライについては、同心方格囲帯状構造の理念的モデルを推定した上で、これまで街路形態や祭礼との関連からのみ指摘されていた理念的モデルとの存在が、カーストや宗教種別の居住地配置にまで適用されていた可能性を、宗教施設やカースト居住地の分布実態に拠りながら具体的に示した点が大きな成果である。しかしその一方で、都市形態には、地形や王宮建設、山車の巡行などを要因とする少なくない歪みも生じており、理念的モデルがそのまま正確に実現しているわけではない。

居住空間構成については、これまで都市の表象する理念的モデルの図式的理解に関心が集中していた両都市について、臨地調査に基づきながら具体的な居住形態のパターンを取り出したことは、本論文の主要な成果の一つである。ヴァーラーナシーにおいては、街路を軸とする伝統的近隣単位モハッ

ラが、マドゥライにおいてはカースト（あるいはサブ・カースト）毎のコミュニティが基本単位となって、都市レベルでの居住空間が構成されている。モハッラについては、ヴァーラーナシーを含む諸都市について、元々は同カーストの集団によって形成されていたことがしばしば指摘されており 、カースト毎の居住単位は、インドの伝統的都市の多くに共通する都市空間構成上の特徴と考えられる。ただしマドゥライにおいては、ヴァーラーナシーのモハッラのような街路を軸とする地縁的近隣単位の存在は確認できなかった。モハッラが西方イスラーム世界を起源とすることを考えると、興味深い差異である。本論文では、これまであまり知られていなかった、モハッラあるいはカースト集団別の居住地の地理的広がりとその空間構成を、臨地調査により都市の一定の範囲にわたって面的に明らかにした。街路単位での聞き取りに基づくという方法論的限界は残るものの、この成果は、建築学分野にとどまらず都市地理学や文化人類学等の関連分野における今後のインド都市研究にも資する、新たな知見を提供することができたと考えている。

街区・住居レベルにおいては、両都市はそれぞれ中庭を中心とする固有の伝統的住居形式を発達させており、今日見られる街区の大半も、それらの住居が集合することで構成されていることを明らかにした。しかし、20世紀初頭からの街区構成の変化は、両都市に共通して、人口密度の増大にともなう敷地の細分化と高密化が進行してきたことを示している。このような変化の中で、伝統的住居形式と異なる小規模な住居形式が生み出されてきている。居住空間構成における理念的モデルの影響については、マドゥライではカースト別の居住地配置が理念的モデルの影響下にあること、ヴァーラーナシーでは巡礼路が近隣単位を結びつける側面を有していることを指摘したが、この他には理念的モデルの存在が、街区・住居スケールにおける物理的空間構成に直接の影響を及ぼしていた形跡は確認されなかった。街区・住居スケールの空間構成では、熱帯性の気候やプライバシーに配慮した住居内外の段階的空間構成など、個々の住居レベルでの機能的な要因が支配的であるといえる。ただし、ヴァーラーナシーの住居の多くが南向きの入口を避け、マドゥライでは袋小路沿いの住居がほぼ全て東向きに配置されていることは、ヒンドゥーのコスモロジーが、方位観という素朴な形で居住空間の構成に一定の影響を与えていることを示唆するものと考えられる。

本論文では、インドの伝統的都市の中でも、とりわけヒンドゥー教のコスモロジーとの密接な関係が指摘されるヴァーラーナシーおよびマドゥライを対象として、都市構造と理念的モデルの関係性および居住空間構成とその変容を視点としながら、コスモロジーが都市空間の構成に及ぼした影響に関する検討を行ってきたが、以上見てきたように、両都市ではヒンドゥー教のコスモロジーの都市への影響は、それぞれ異なったレベルで作用している。言葉をかえれば、都市がコスモロジーを受容する形式は都市により様々であると考えられる。都市とコスモロジーとの密接な関係が、インドの伝統的都市に共通する一つの特徴であるとすれば、その差異のあり方にこそ、それぞれの都市の固有性・地域性に関わる問題が示唆されると考えられるのである。ヴァーラーナシーでは、イスラーム起源の近隣単位が都市の基本単位となっている中、コスモロジーと直接結びつく理念的モデルの構造よりも、むしろ理念的モデルを具現する巡礼路や寺院・祠の物理的存在が、都市空間に少なくない影響を及ぼ

している点が特徴的である。マドゥライでは、理念的モデルの構造が都市形態やカースト居住地の配置に色濃く影響しているが、街区単位の空間構成は、カースト毎の特徴を反映しつつ多様な展開を見せている。

◉ 今後の課題

本論文では、都市構造と理念的モデルの関係性および居住空間構成とその変容を視点としながら、コスモロジーが都市空間の構成に及ぼした影響に関する検討を行い、上記のような知見を得たが、いまだ多くの課題を残している。以下に今後の研究課題の方向性を簡単に示したい。

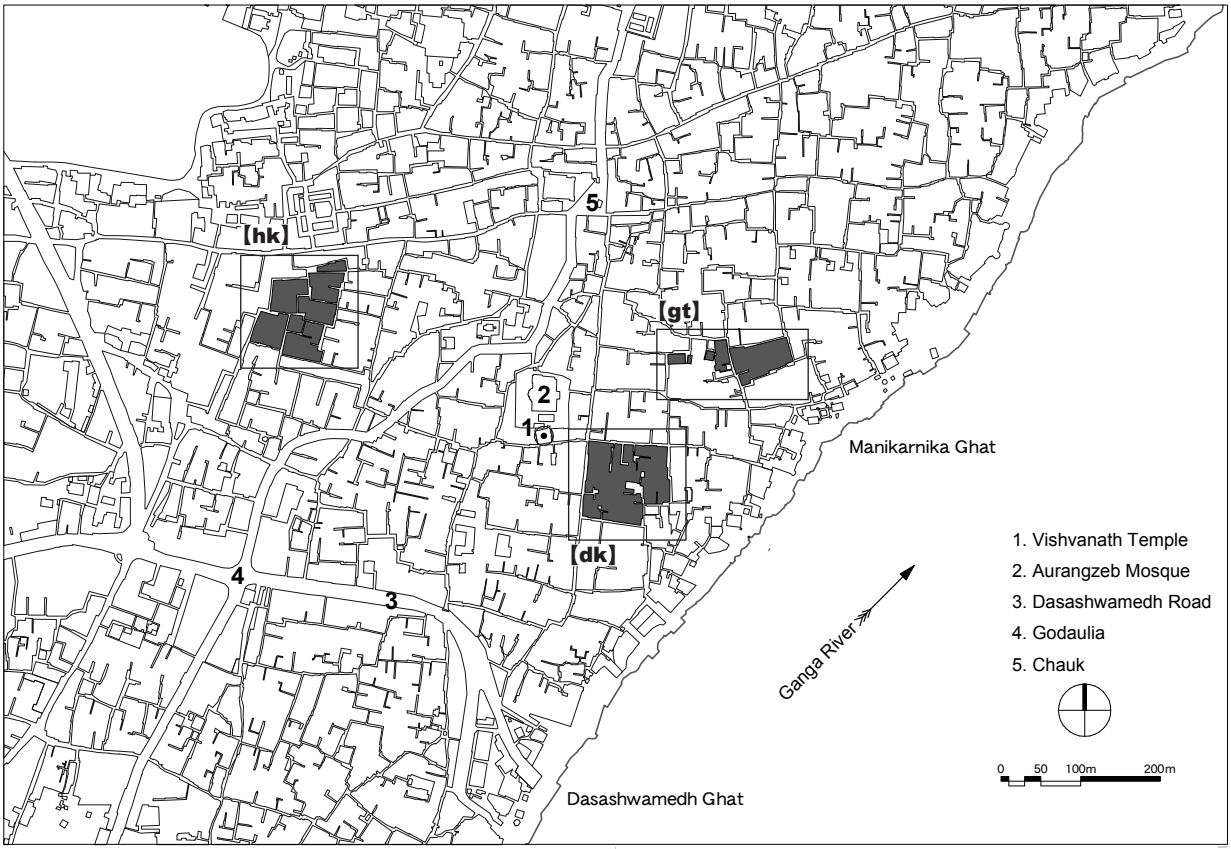
① 本論文では、理念的モデルとの対照を視点としながら都市とコスモロジーの関係の読解を試みたが、そこには対象が大都市であるがゆえの様々な複雑性が大きな困難としてあった。両者の関係をより明快に理解するためには、「聖都」の原型としての、小規模な寺院や聖地を核とした村落への着目が必要となろう。個々の寺院・建築スケールにおけるコスモロジーとの関係については一定の研究がある。都市スケールについては、冒頭に述べたように「ヒンドゥー都市」研究の成果が蓄積されつつあるが、これらをつなぐ村落規模の事例の具体的検討は、いまだほとんどなされていない。

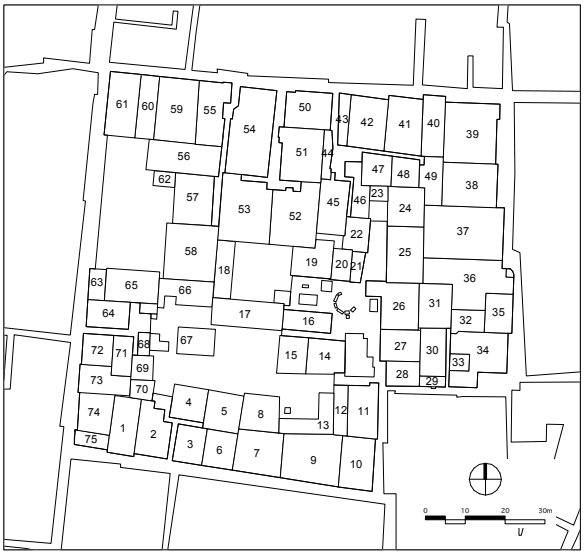
② 本論文では詳細に触れることができなかったが、都市の空間構成、とりわけ居住空間構成を理解するには、それを形成し運用する主体としての社会集団に関する考察が不可欠である。民族・宗教・カースト・職業・親族などの様々な社会組織の構造や生活様式の理解が、まずは重要な課題である。加えて、それらと都市の物的空間構成との関係をパターンとして抽出することができるかどうか、今後の大きな課題である。文化人類学、社会学分野との学際的な課題でもある。

③ 序章においても述べたように、またヴァーラーナシーがモハッラによって構成されているように、たとえヒンドゥーの「聖都」であっても、都市の空間構成をヒンドゥー教との関連からのみ理解することは適切ではない。特に北インドの都市については、12世紀以降のイスラーム文化の影響をどのように評価するかが大きなテーマとなる。この問題については、広大なインドにおける地域性の問題も重層している。本論文の対象二都市の空間構成には、大小様々な相違が見られたが、それらが地域的特性によるものか、イスラーム文化の影響によるものか、あるいは他の要因に基づくものか、周辺都市との比較や都市内部での多様な居住区の内部構成の比較など、広範な比較を通して詳細に検討していくことが必要である。具体的には、序章にあげた他の「聖都」やヒンドゥー「王都」、デリーなどのイスラーム政権により建設された諸都市との様々なレベルにおける比較とともに、ヴァーラーナシー、マドゥライにおけるムスリム居住区の空間構成の比較検討が必要となろう。

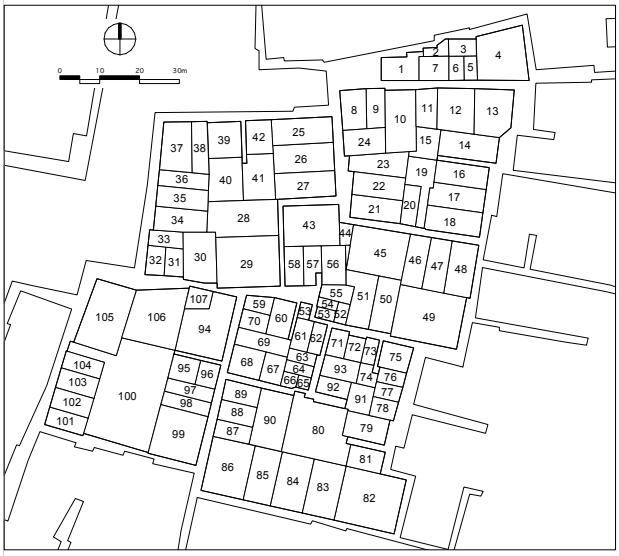
付録　実測住居平面図

付 -1　ヴァーラーナシー：実測調査対象住居分布図

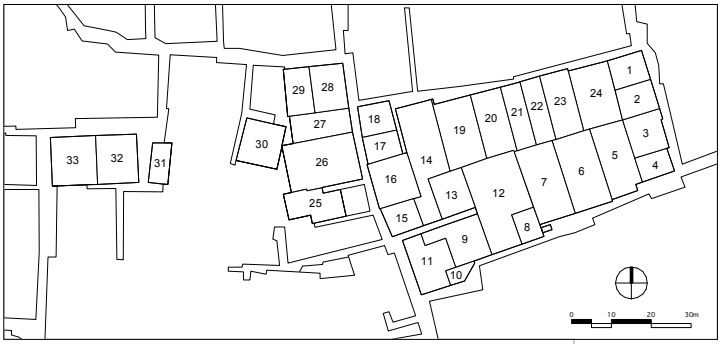




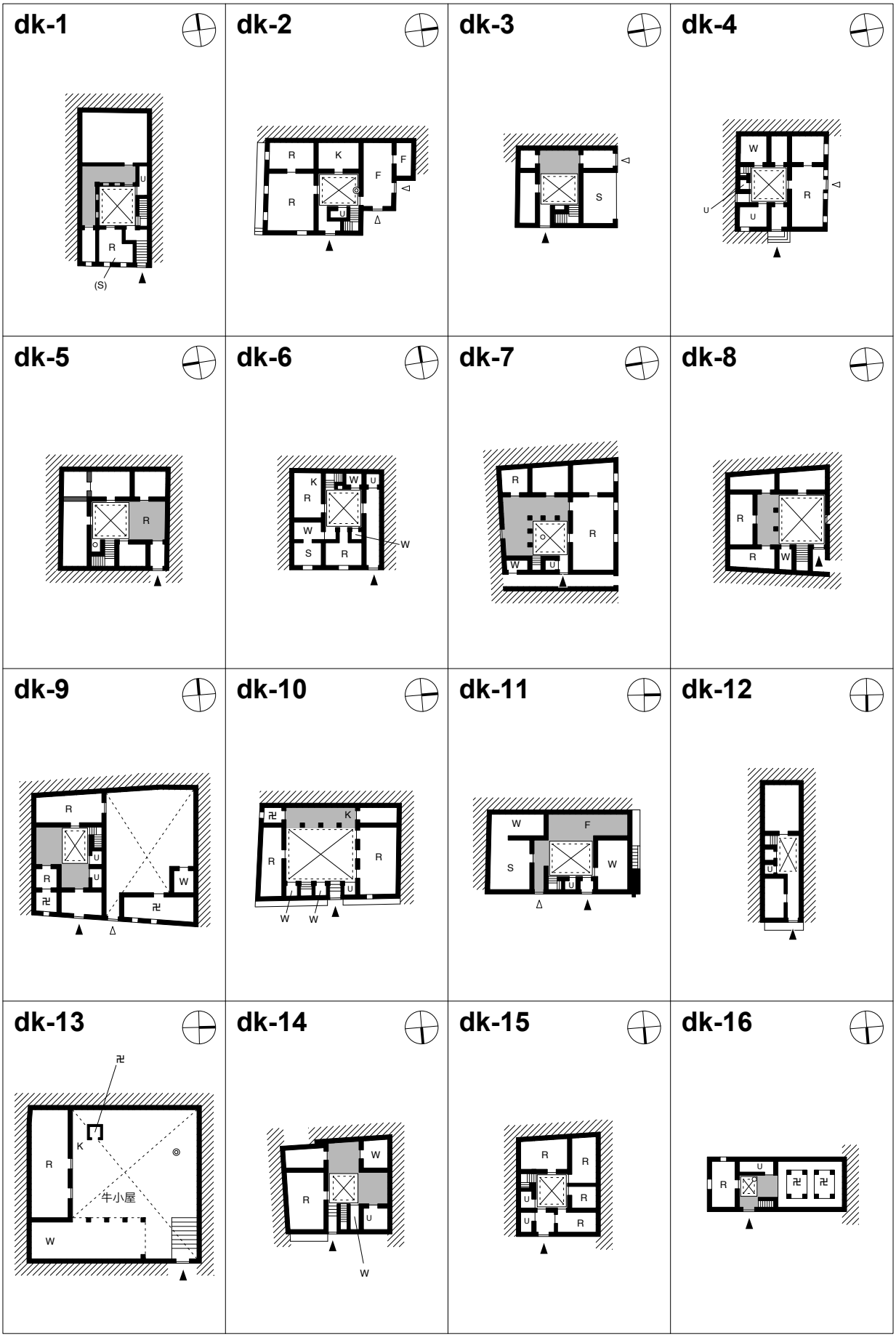
【dk】ダルマクープ Dharmakoop 地区



【hk】チャフメフマン Chahmehman 地区

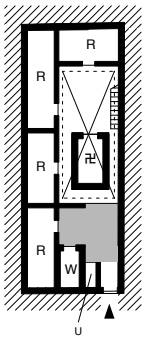


【gt】ガルバシートーラ Garbasitola 地区

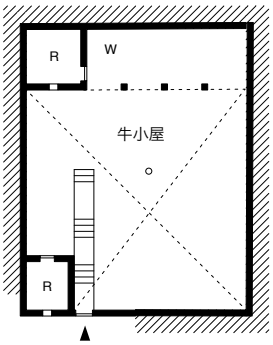


縮尺：1/500　［凡例］　網掛け：ダラン　R：居室　W：倉庫　F：作業場　S：店舗　K：台所　卍：寺院・祭祀室　U：トイレ・浴室　( )：階下　◎：井戸　○：ポンプ

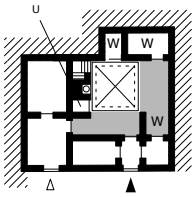
dk-17



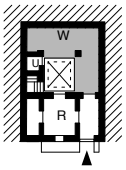
dk-18



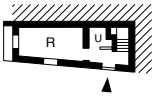
dk-19



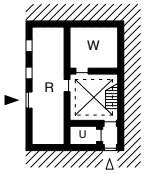
dk-20



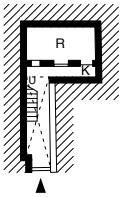
dk-21



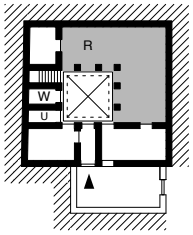
dk-22



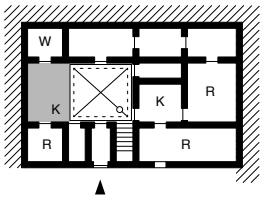
dk-23



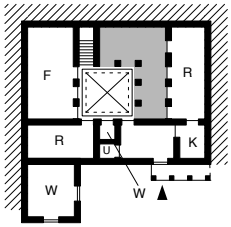
dk-24



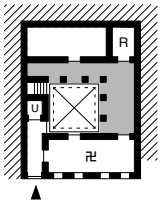
dk-25



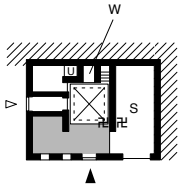
dk-26



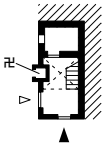
dk-27



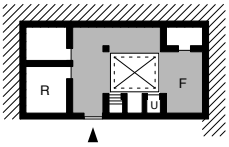
dk-28



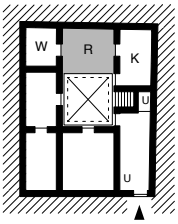
dk-29



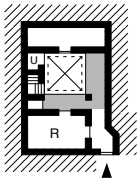
dk-30



dk-31

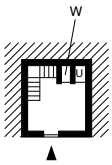


dk-32

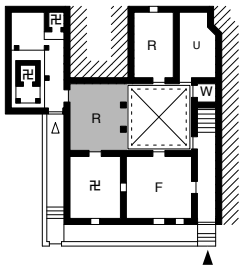


縮尺：1/500　［凡例］　網掛け：ダラン　R：居室　W：倉庫　F：作業場　S：店舗　K：台所　卍：寺院・祭祀室　U：トイレ・浴室　( )：階下　◎：井戸　○：ポンプ

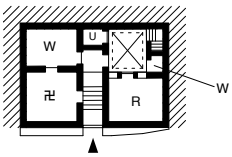
dk-33



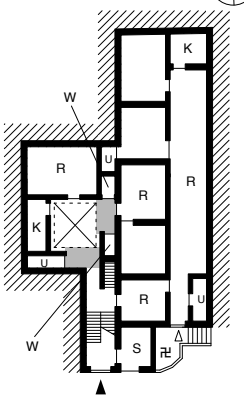
dk-34



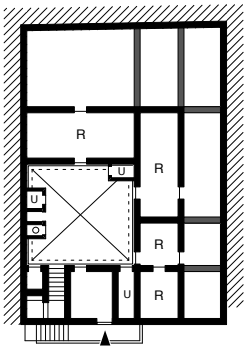
dk-35



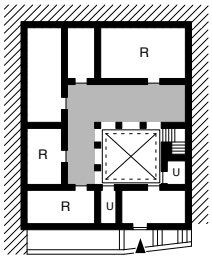
dk-36



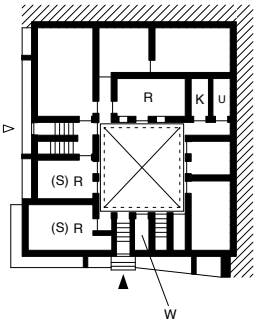
dk-37



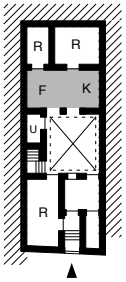
dk-38



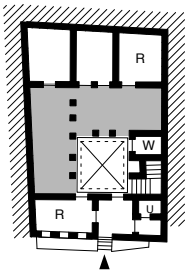
dk-39



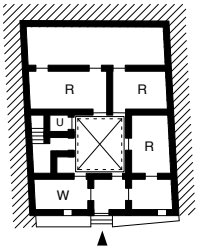
dk-40



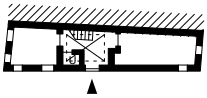
dk-41



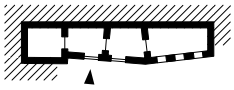
dk-42



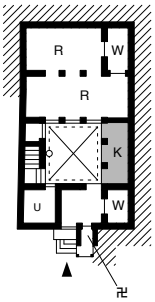
dk-43



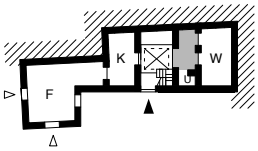
dk-44



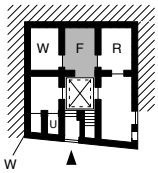
dk-45



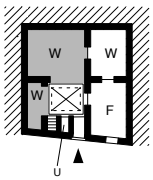
dk-46



dk-47

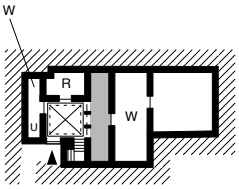


dk-48

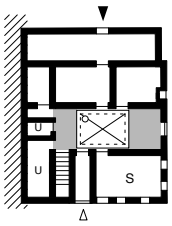


縮尺：1/500 ［凡例］ 網掛け：ダラン R：居室 W：倉庫 F：作業場 S：店舗 K：台所 卍：寺院・祭祀室 U：トイレ・浴室 ( )：階下 ◎：井戸 ○：ポンプ

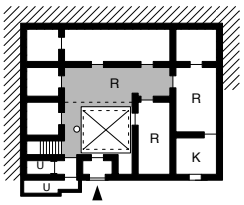
dk-49



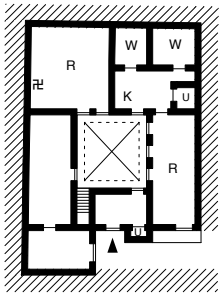
dk-50



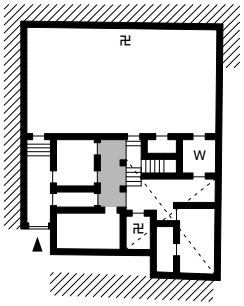
dk-51



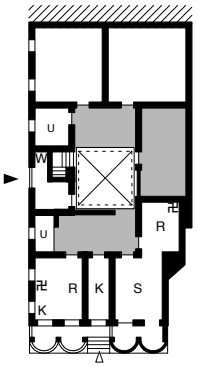
dk-52



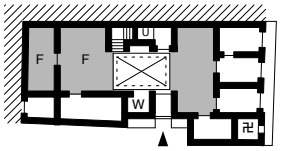
dk-53



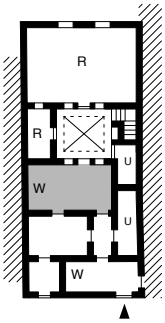
dk-54



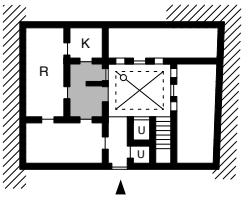
dk-55



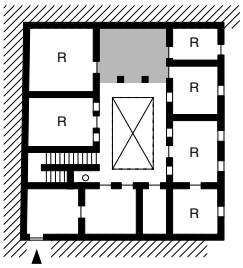
dk-56



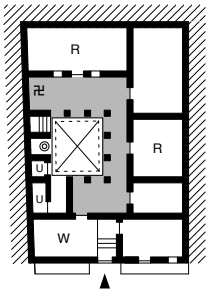
dk-57



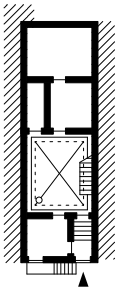
dk-58



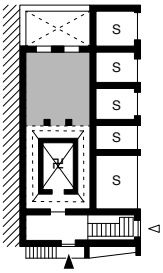
dk-59



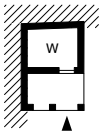
dk-60



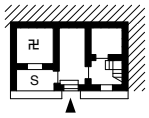
dk-61



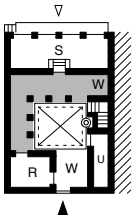
dk-62



dk-63

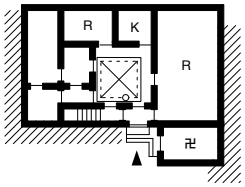


dk-64

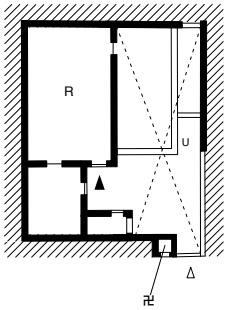


縮尺：1/500 ［凡例］ 網掛け：ダラン R：居室 W：倉庫 F：作業場 S：店舗 K：台所 卍：寺院・祭祀室 U：トイレ・浴室 ( )：階下 ◎：井戸 ○：ポンプ

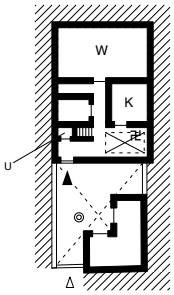
dk-65



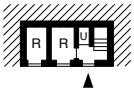
dk-66



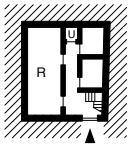
dk-67



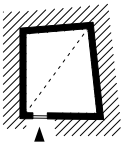
dk-68



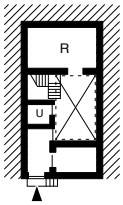
dk-69



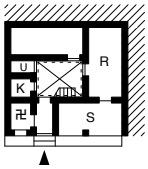
dk-70



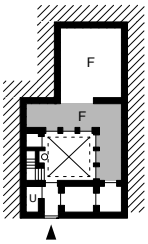
dk-71



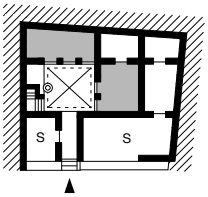
dk-72



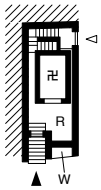
dk-73



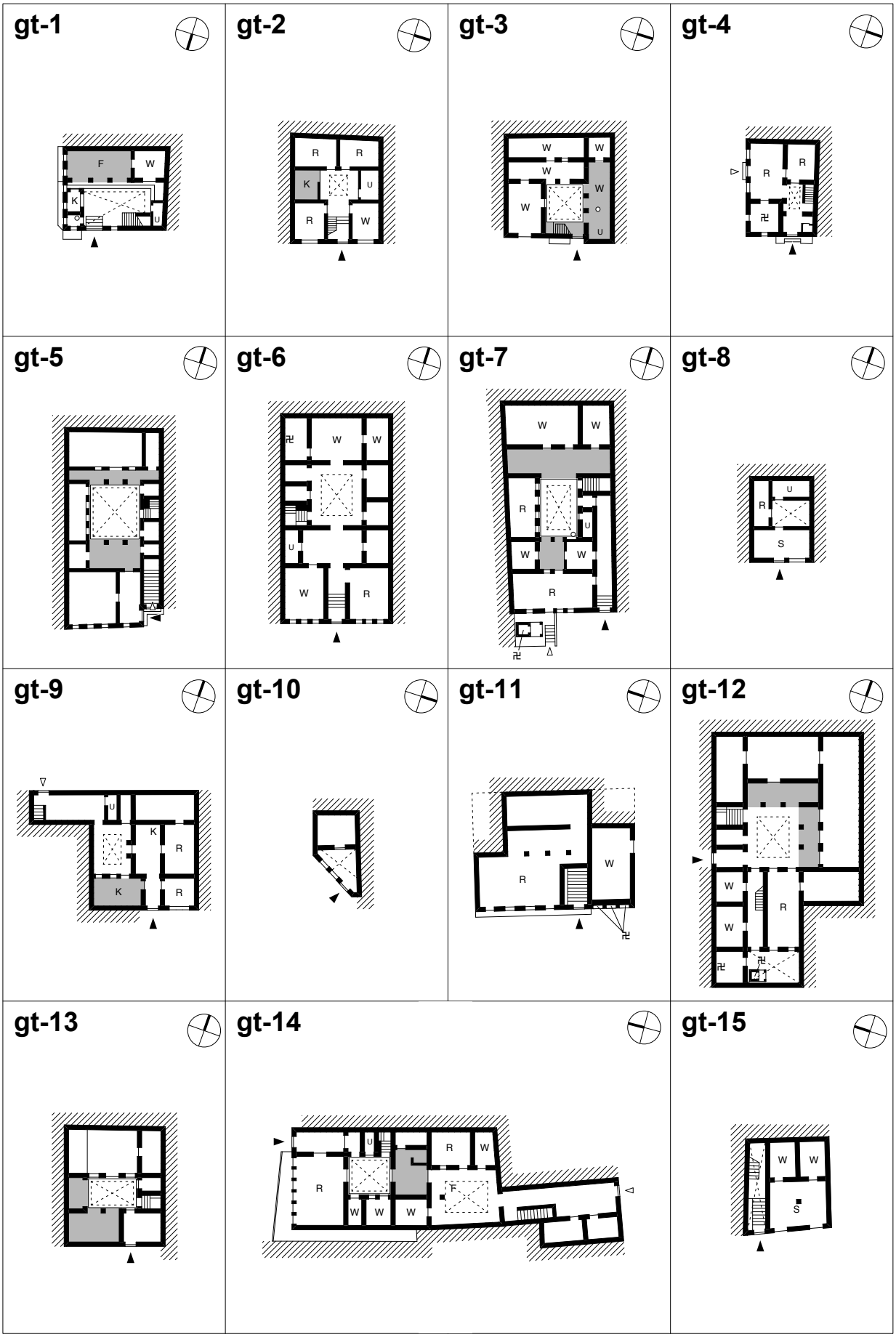
dk-74



dk-75

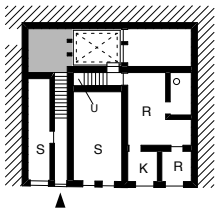


縮尺：1/500 ［凡例］ 網掛け：ダラン R：居室 W：倉庫 F：作業場 S：店舗 K：台所 卍：寺院・祭祀室 U：トイレ・浴室 ( )：階下 ◎：井戸 ○：ポンプ



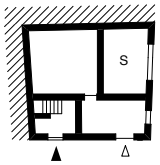
縮尺：1/500 ［凡例］ 網掛け：ダラン R：居室 W：倉庫 F：作業場 S：店舗 K：台所 卍：寺院・祭祀室 U：トイレ・浴室 ( )：階下 ◎：井戸 ○：ポンプ

gt-16

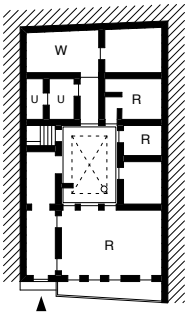


gt-17

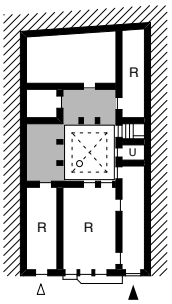
gt-18



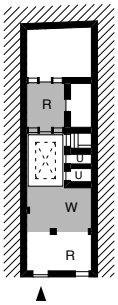
gt-19



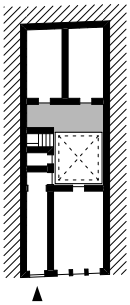
gt-20



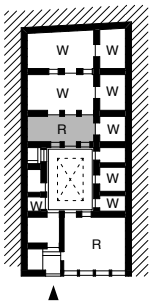
gt-21



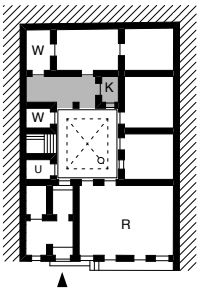
gt-22



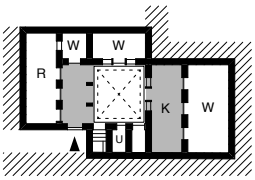
gt-23



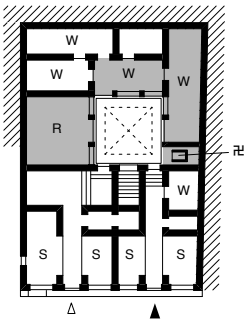
gt-24



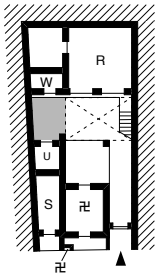
gt-25



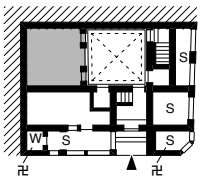
gt-26



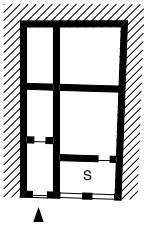
gt-27



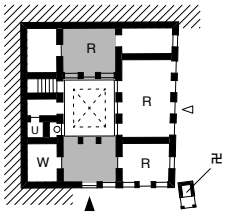
gt-28



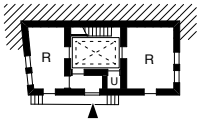
gt-29



gt-30

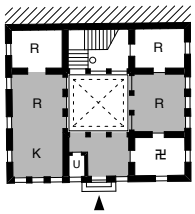


gt-31

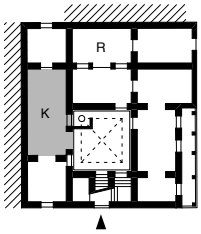


縮尺：1/500　［凡例］　網掛け：ダラン　R：居室　W：倉庫　F：作業場　S：店舗　K：台所　卍：寺院・祭祀室　U：トイレ・浴室　( )：階下　◎：井戸　○：ポンプ

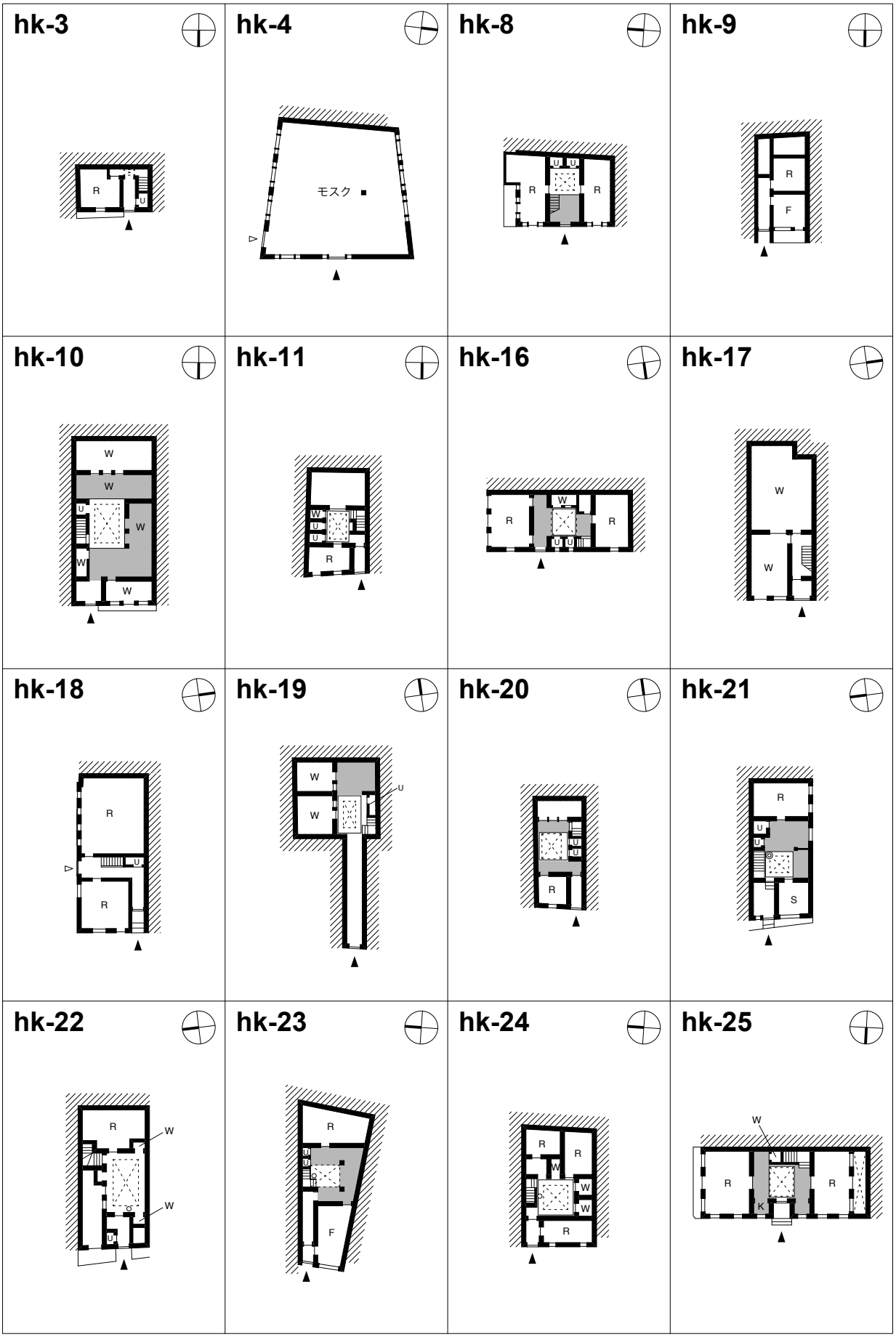
gt-32



gt-33

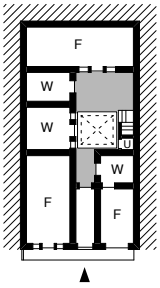


縮尺：1/500 ［凡例］ 網掛け：ダラン R：居室 W：倉庫 F：作業場 S：店舗 K：台所 卍：寺院・祭祀室 U：トイレ・浴室 ( )：階下 ◎：井戸 ○：ポンプ

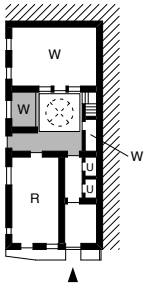


縮尺：1/500　［凡例］　網掛け：ダラン　R：居室　W：倉庫　F：作業場　S：店舗　K：台所　卍：寺院・祭祀室　U：トイレ・浴室　( )：階下　◎：井戸　○：ポンプ

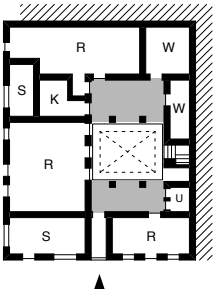
hk-26



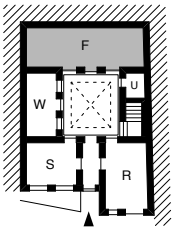
hk-27



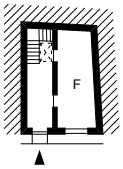
hk-29



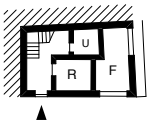
hk-30



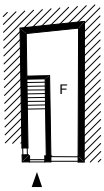
hk-31



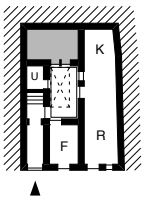
hk-32



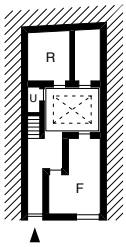
hk-33



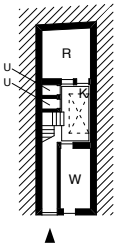
hk-34



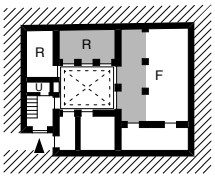
hk-35



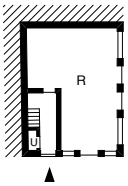
hk-36



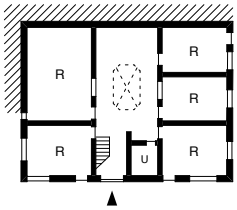
hk-41



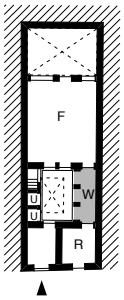
hk-42



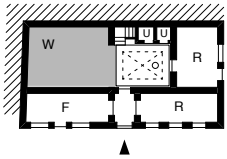
hk-43



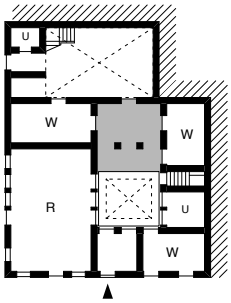
hk-46



hk-48

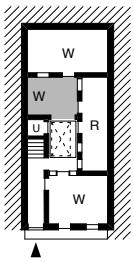


hk-49

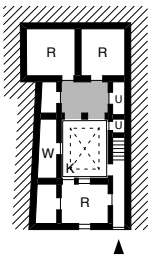


縮尺：1/500 ［凡例］ 網掛け：ダラン R：居室 W：倉庫 F：作業場 S：店舗 K：台所 卍：寺院・祭祀室 U：トイレ・浴室 ( )：階下 ◎：井戸 ○：ポンプ

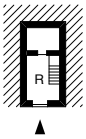
hk-50



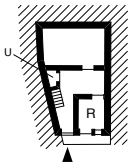
hk-51



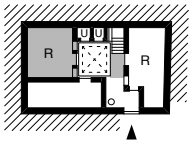
hk-52



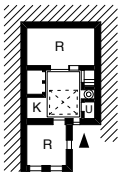
hk-55



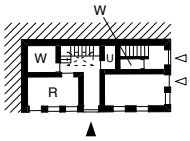
hk-56



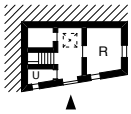
hk-57



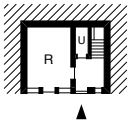
hk-58



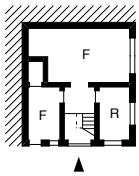
hk-59



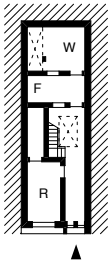
hk-67



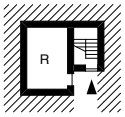
hk-68



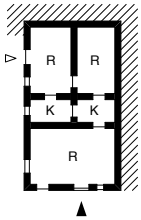
hk-69



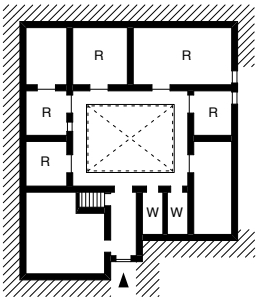
hk-74



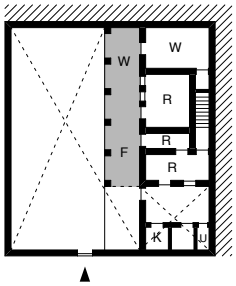
hk-79



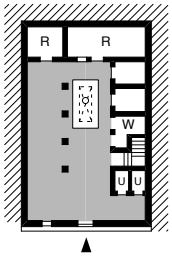
hk-80



hk-82

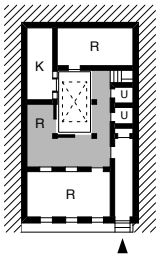


hk-84

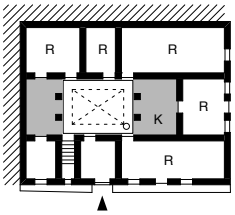


縮尺：1/500 ［凡例］ 網掛け：ダラン R：居室 W：倉庫 F：作業場 S：店舗 K：台所 卍：寺院・祭祀室 U：トイレ・浴室 ( )：階下 ◎：井戸 ○：ポンプ

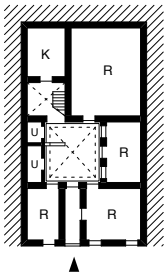
hk-85



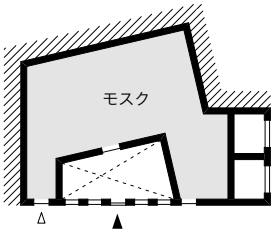
hk-86



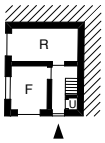
hk-90



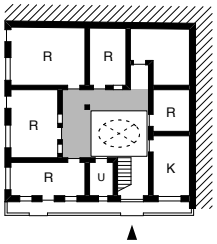
hk-94



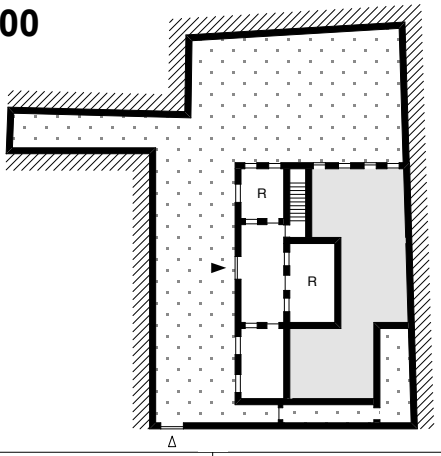
hk-96



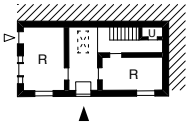
hk-99



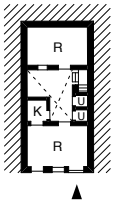
hk-100



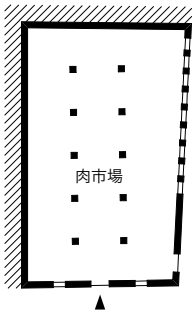
hk-101



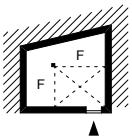
hk-104



hk-105

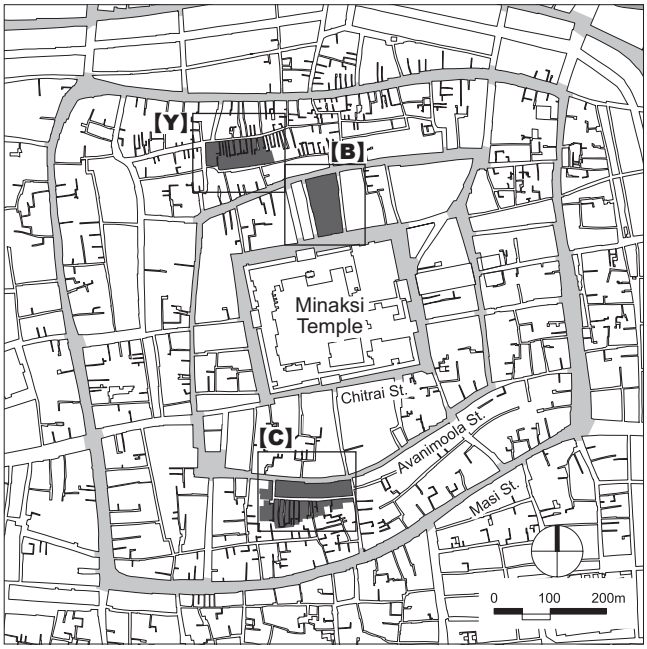


hk-107



縮尺：1/500 ［凡例］ 網掛け：ダラン R：居室 W：倉庫 F：作業場 S：店舗 K：台所 卍：寺院・祭祀室 U：トイレ・浴室 ( )：階下 ◎：井戸 ○：ポンプ

付 -2　マドゥライ：実測調査対象住居分布図



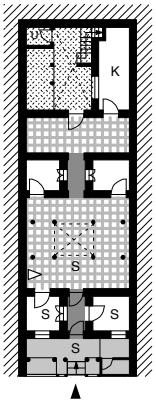
【B】バラモン Brahman 地区

【Y】ヤーダヴァ Yadhava 地区

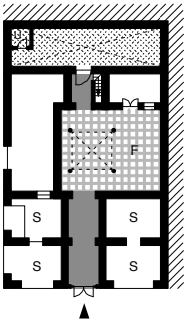
【C】チェッティヤール Chettiyar 地区

※ 網掛けは未実測敷地

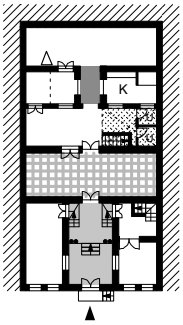
B-3



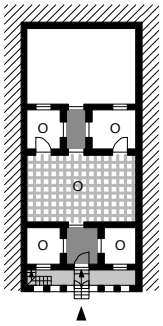
B-5



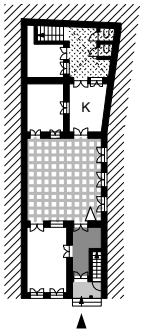
B-7



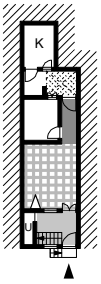
B-8



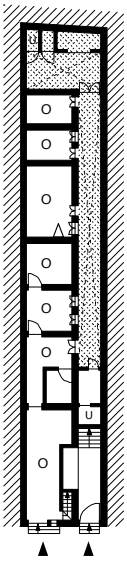
B-10



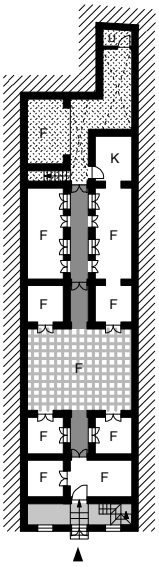
B-14



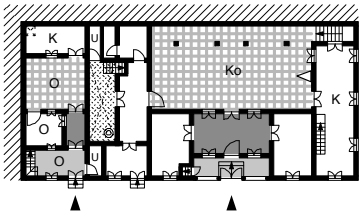
B-16



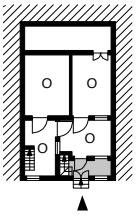
B-17



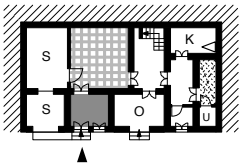
B-18



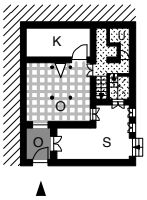
B-19



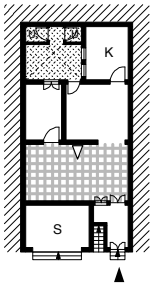
B-21



B-22



B-23

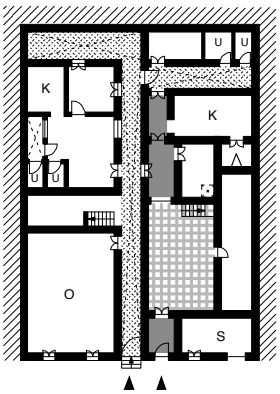


縮尺：1/500

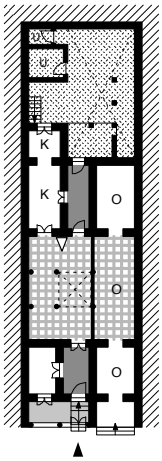
［凡例］ K：台所　△：神図像　U：トイレ・浴室　F：作業場　O：事務所　S：店舗　◎：井戸　○：ポンプ

：ティナイ　：ナダイ　：クーダム　：バックヤード

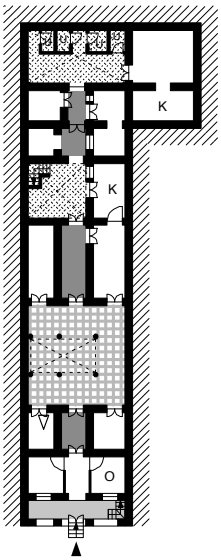
B-24



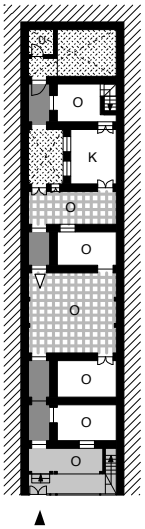
B-26



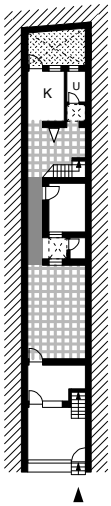
B-27



B-28

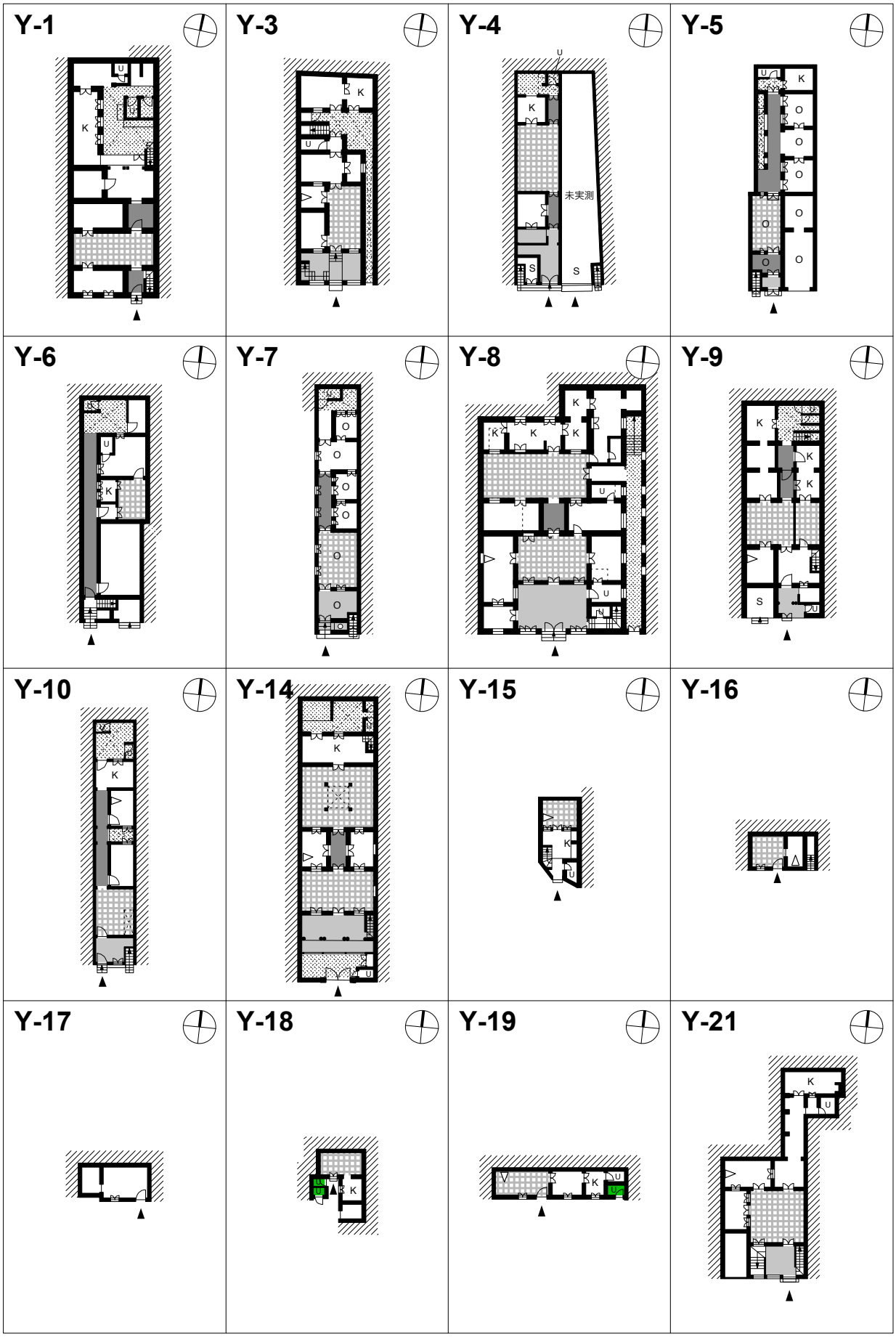


B-31



縮尺：1/500

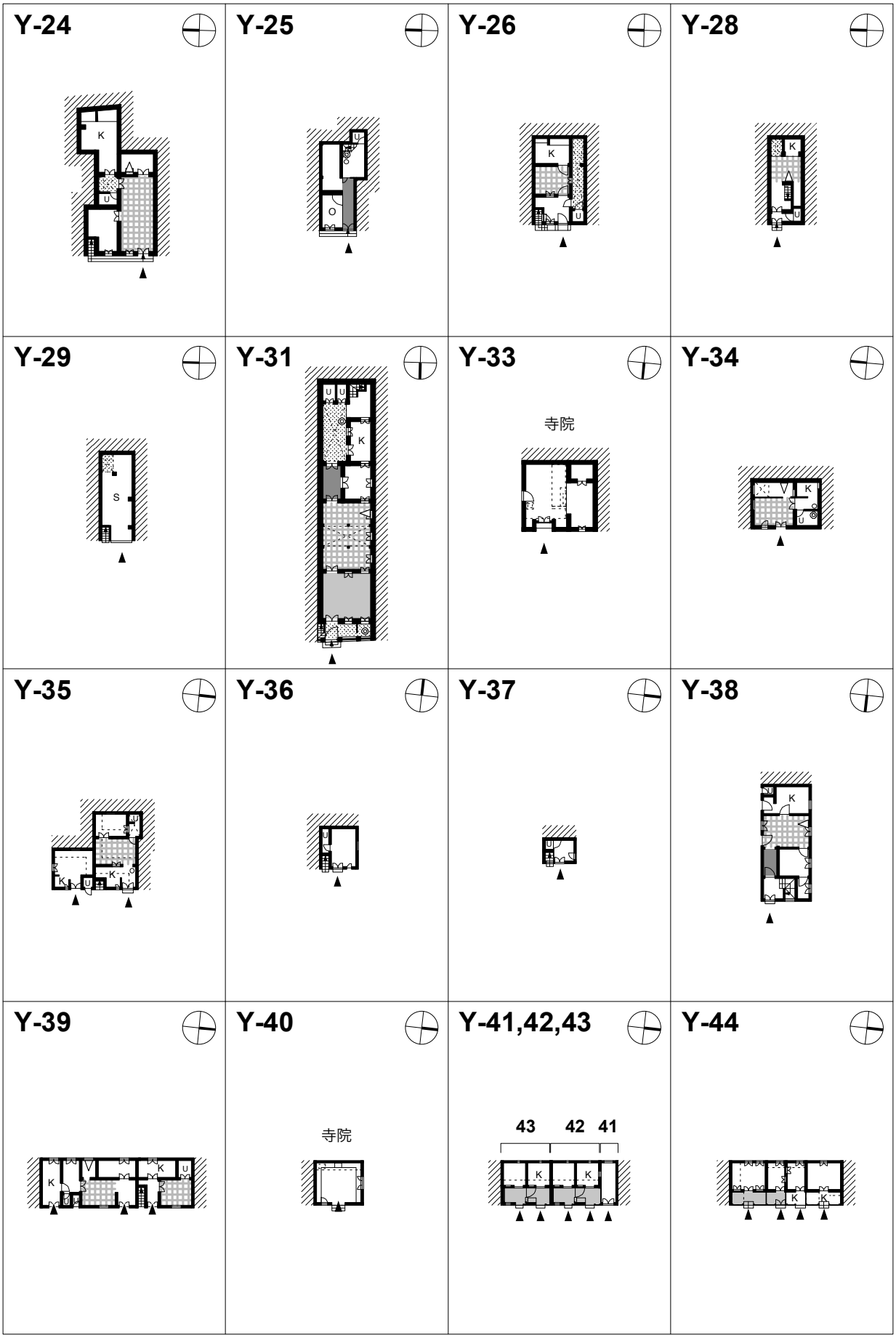
［凡例］ K：台所　△：神図像　U：トイレ・浴室　F：作業場　O：事務所　S：店舗　◎：井戸　○：ポンプ
：ティナイ　：ナダイ　：クーダム　：バックヤード



縮尺：1/500

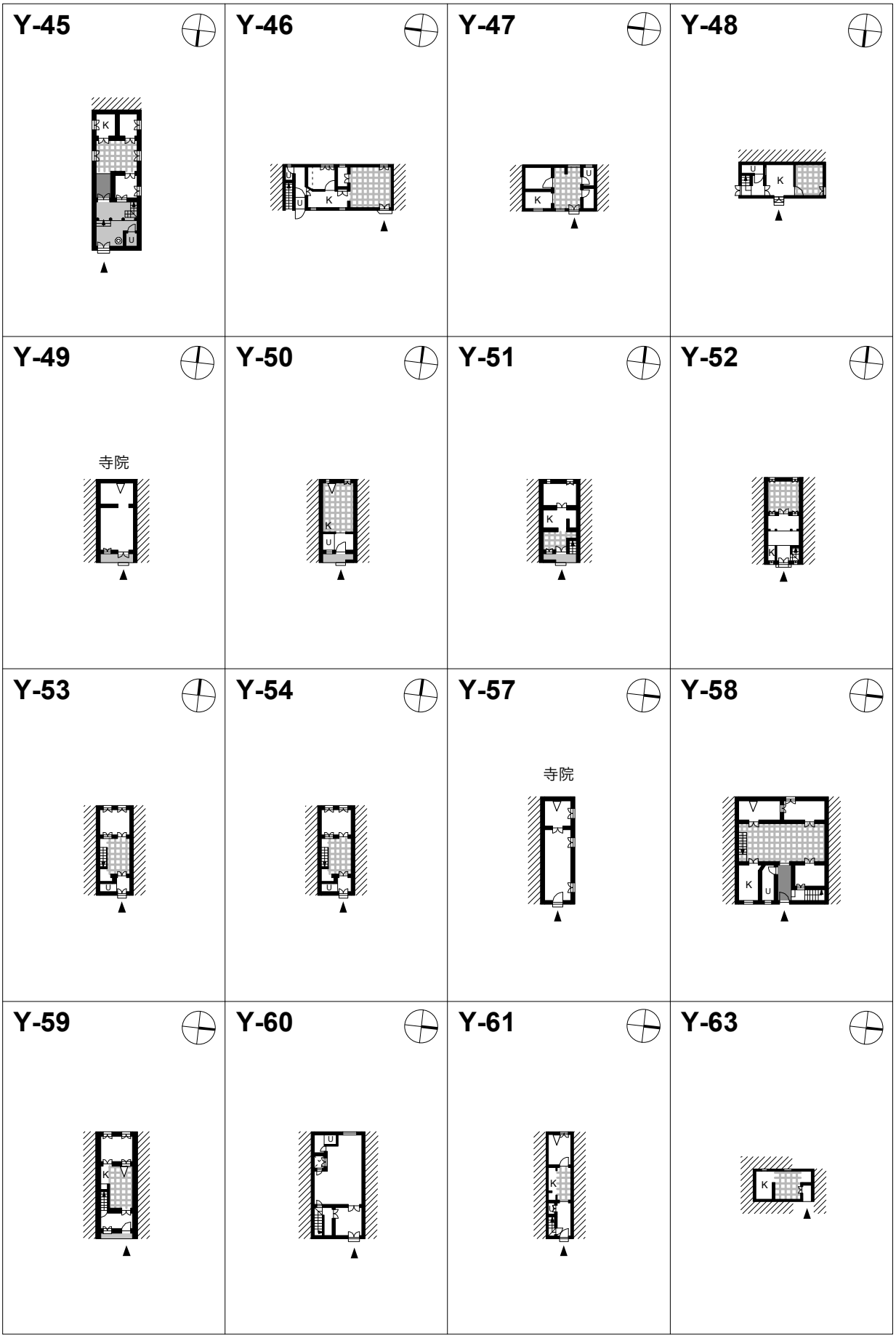
［凡例］ K：台所 △：神図像 U：トイレ・浴室 F：作業場 O：事務所 S：店舗 ◎：井戸 ○：ポンプ

：ティナイ ：ナダイ ：クーダム ：バックヤード



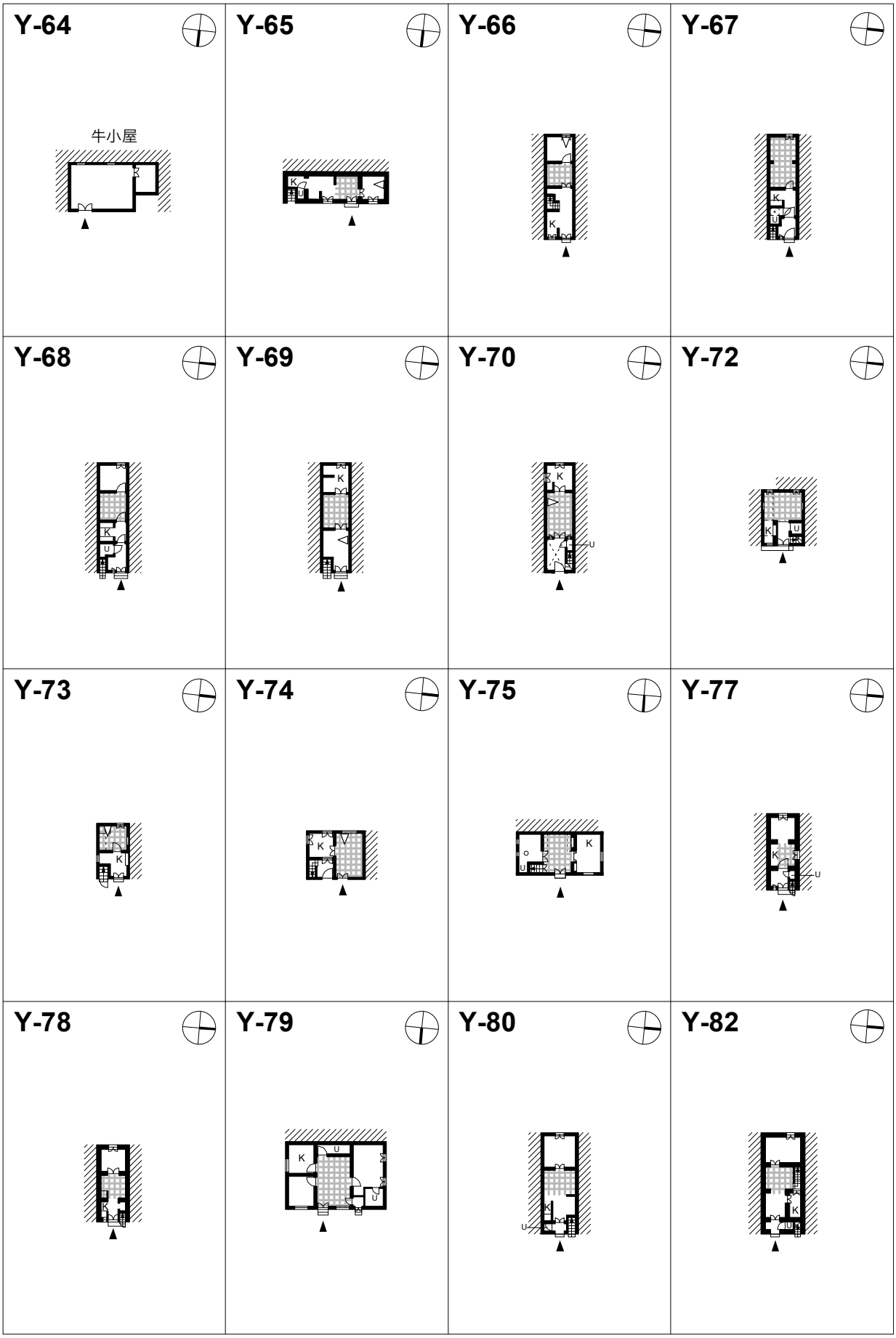
縮尺：1/500

［凡例］ K：台所 △：神図像 U：トイレ・浴室 F：作業場 O：事務所 S：店舗 ◎：井戸 ○：ポンプ
：ティナイ ：ナダイ ：クーダム ：バックヤード



縮尺：1/500

［凡例］ K：台所 △：神図像 U：トイレ・浴室 F：作業場 O：事務所 S：店舗 ◎：井戸 ○：ポンプ
：ティナイ ：ナダイ ：クーダム ：バックヤード

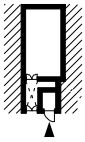


縮尺：1/500

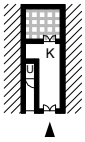
［凡例］ K：台所 △：神図像 U：トイレ・浴室 F：作業場 O：事務所 S：店舗 ◎：井戸 ○：ポンプ
：ティナイ ：ナダイ ：クーダム ：バックヤード

Y-85

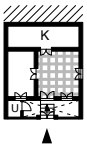
Y-86



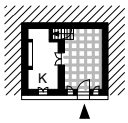
Y-87



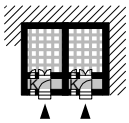
Y-92



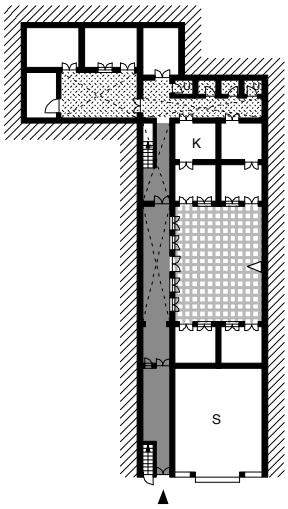
Y-94



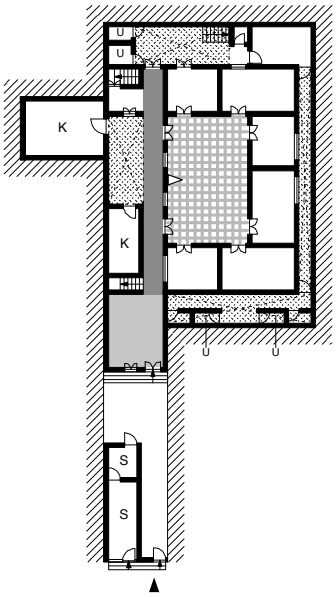
Y-95



C-S1

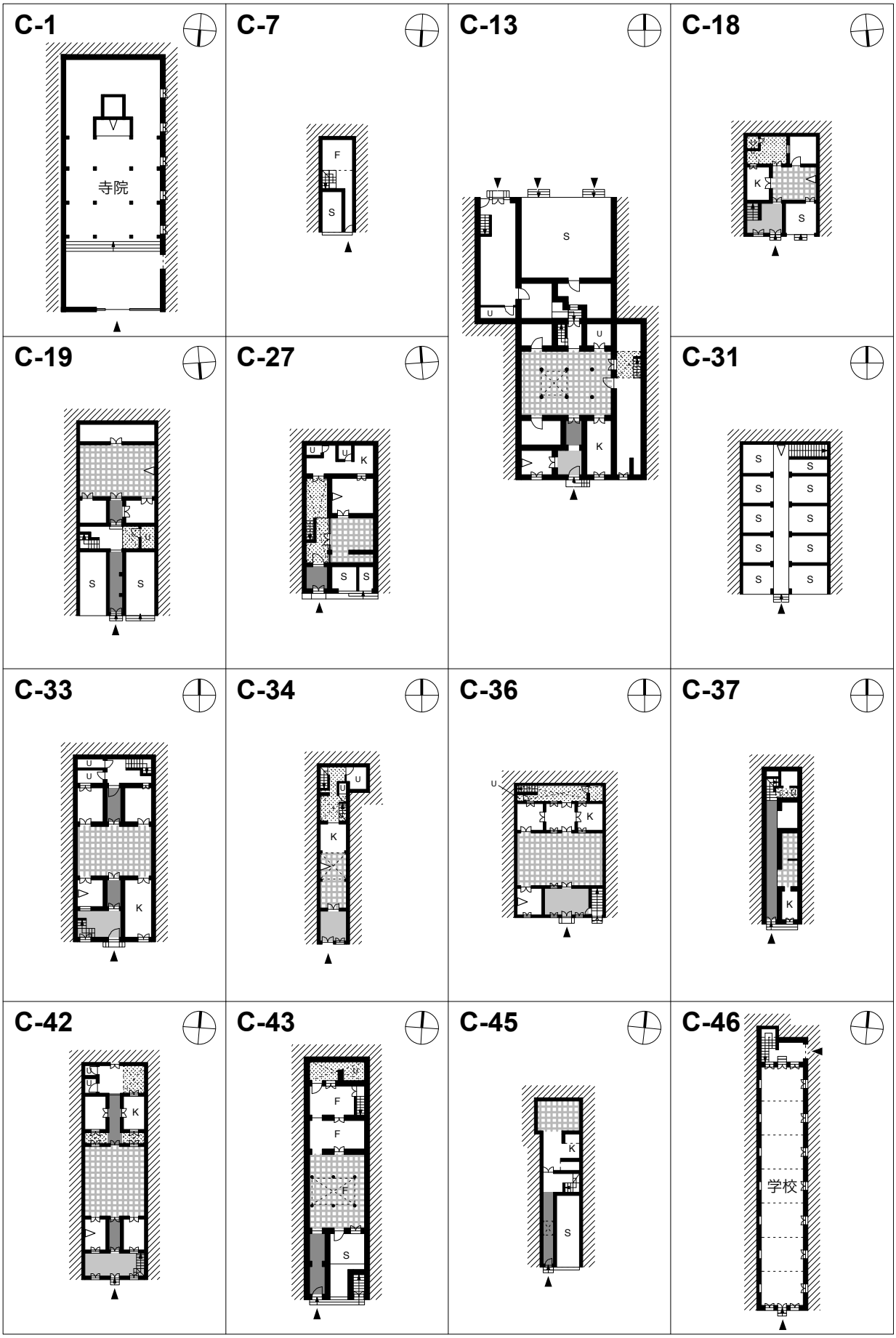


C-S2



縮尺：1/500

［凡例］ K：台所 △：神図像 U：トイレ・浴室 F：作業場 O：事務所 S：店舗 ◎：井戸 ○：ポンプ
：ティナイ ：ナダイ ：クーダム ：バックヤード

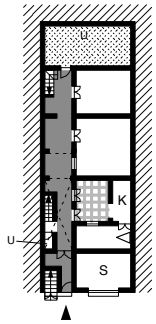


縮尺：1/500

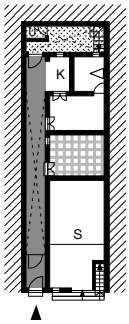
［凡例］ K：台所　△：神図像　U：トイレ・浴室　F：作業場　O：事務所　S：店舗　◎：井戸　○：ポンプ

：ティナイ　：ナダイ　：クーダム　：バックヤード

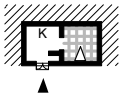
C-65



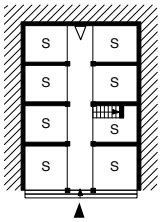
C-66



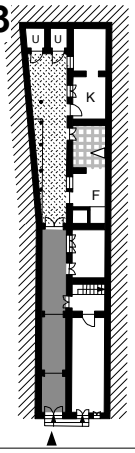
C-69



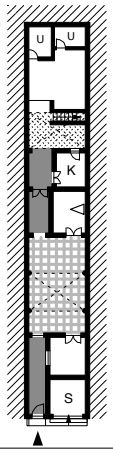
C-72



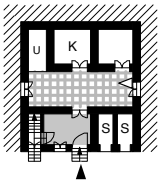
C-73



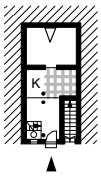
C-74



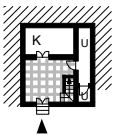
C-83



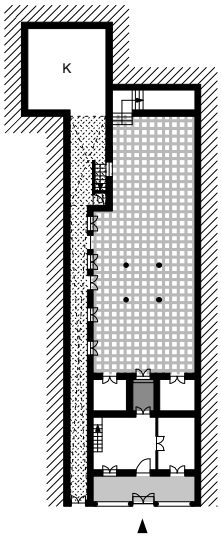
C-84



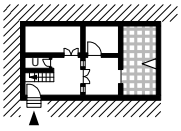
C-88



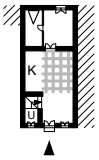
C-89



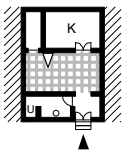
C-93



C-117



C-128



縮尺：1/500

［凡例］ K：台所　△：神図像　U：トイレ・浴室　F：作業場　O：事務所　S：店舗　◎：井戸　○：ポンプ

：ティナイ　：ナダイ　：クーダム　：バックヤード

参考文献

◉英文文献

Acharya, Prasanna Kumar, "Architecture of Manasara : Illustrations of architectural and sculptural objects, with a synopsis", Manasara series ; Vol.5, New Delhi : Munshiram Manoharlal Publishers, 1995 [reprint of 1934]

Acharya, Prasanna Kumar, "Architecture of Manasara : vol.1-4, 6, 7", Manasara series ; vol.1-4, 6, 7, Low Price Publications, 1995 [reprint of 1934]

Aiyangar, Krishnaswami S., "South India and Her Muhammadan Invaders", Asian Educational Services, 1998 [reprint of 1921]

Aiyar, R.S., "History of the Nayaks of Madura", Asian Educational Services, 1991

Akhtar, Jamal, "Muslims in Varanasi City : A Study in Cultural Geography", Ph.D Thesis, Banaras Hindu University, 1992

Altekar, A.S., "Benares and Sarnath : Past and Present", Culture Publication House, Banaras Hindu University Press, 1947

Arunachalam, M., "Festivals of Tamil Nadu", Gandhi Vidyalayam, 1980

Assistant Director of Statistics Madurai, "Madurai District Statistical Hand Book 2001-2002", 2002

Auboyer, J.; Taylor, S.W.(trans.), "Daily life in ancient India : from approximately 200 BC to AD 700", London : Weidenfeld and Nicolson, 1965 [Originally published: Hachette, 1961 in French]

Ayyar, C. P. Venkatarama , "Town planning in Ancient Dekkan", Asian Educational Services, 1994 [reprint: of 1916]

Ayyar, P.V. Jagadisa, "South Indian Customs", Asian Educational Services, 1982

Ayyar, P.V. Jagadisa, "South Indian Festivities", Asian Educational Services, 1982

Bafna, Sonit, "On the Idea of the Mandala as a Governing Device in Indian Architectural Tradition", The Journal of the Society of Architectural Historians, Vol.59, No.1 (Mar., 2000), pp.26-49, 2000

Bakker, Hans, "The history of sacred places in India as reflected in traditional literature : papers on pilgrimage in South Asia", Panels of the VIIth World Sanskrit Conference : Kern Institute, Leiden, August 23-29, 1987 (Eds. Johannes Bronkhorst) ; v. 3, Leiden ; New York : E.J. Brill, 1990

Bakker, Hans , "Construction and Reconstruction of Sacred Space in Varanasi", Numen, Vol.43, No.1 (Jan., 1996), pp.32-55, Leiden : E.J. Brill, 1996

Bakker, Hans T. ; Isaacson, Harunaga , "The Varanasi cycle", The Skandapurana, Vol.IIA, Groningen : E. Forsten, 2004

Balaji, G., "Conservation Plan for the Historic City of Madurai", Master Thesis, School of Planning & Architecture, New Delhi, 2002

Balasubramanian, V., "Transformation of Residential Areas in Core City - Madurai", Ph.D Thesis, School of Planning & Architecture, New Delhi, 1997

Baliga, B.S, "Madras District gazetteers : Madurai", Gazetteer of India, Government of Madras, 1960

Basham, A.L, "The Wonder That Was India, Picador", 2004 [First published 1954]

Bayly, C.A. , "From Ritual to Celemony : Death Ritual and Society in Hindu North India since 1600", in "Mirrors of mortality : studies in the social history of death" (eds. Whaley, Joachim), London : Europa, 1981

Bayly, C.A. , "Rulers, townsmen, and bazaars : north Indian society in the age of British expansion, 1770-1870", Oxford University Press, 2002 [first published 1983]

Begde, Prabhakar V., "Ancient and mediaeval town-planning in India", New Delhi : Sagar Publications, 1978

Bhardwaj, S.M, "Hindu Places of Pilgrimage in India : A Study in Cultural Geography", University of California Press, 1973

Blake, Stephen P., "Cityscape of an Imperial Capital : Shahjahanabad in 1739", in "Delhi Through the Ages : essays in urban history, culture, and society" (eds. R. Frykenberg), Oxford University Press, 1986

Blake, Stephen P., "Shahjahanabad : The Sovereign City in Mughal India 1639-1739", Cambridge University Press, 2002

Boudignon, Francoise ; Muyzenburg, E.V.D., "A Pilgrimage to South India in 1845 : Tiruvannamalai", Tiruvannamalai : Sri Ramana Kshetra, 1995

Branfoot, Crispin, "Tiruchirappalli and the Sacred Island of Srirangam", Mārg: A Magazine of the Arts, vol.51, No.1, pp.11-24, 1999

Cambridge, R.O, "An Account of the War in India : Between the English and French on the Coromandel from the year 1750 to the year 1760", London : T. Jefferys, 1761

Chakrabarti, Vibhuti, "Indian architectural theory : contemporary uses of Vastu Vidya", Oxford University Press, 1999

Champak Lakshmi, R., "Growth of urban centres in South India: Kudamukku-Palaiyarai, the twin-city of the Colas", Studies in History, vol.1-1, pp.1-29, 1979

Chenoy, S.M, " Shajahanabad : A City of Delhi 1638-1857", Munshiram Mahoharlal Publishers, 1998

Coccari, Diane Marjorie, "Protection and Identity : Banaras's Bir Babas as Neighborhood Guardian Deities", in "Culture and power in Banaras : community, performance, and environment, 1800-1980" (eds. Freitag), pp.130-146, University of California Press, 1989

Coccari, Diane Marjorie, "The Bir Babas of Banaras : an analysis of a folk deity in north Indian Hinduism", Ann Arbor, Mich. : UMI Dissertation Information Service, 1995 [First published 1986]

Couté, Pierre Daniel ; Léger, Jean Michel, "Bénarès : un voyage d'architecture", Paris : Editions Creaphis, 1989

Dagenz, B, "Mayamata : An Indian Treatise in Housing, Architecture and Iconography", Sitaram Bhartia Institute of Scientific Research, 1985

Das, R.K., "Temples of Tamilnad", Bhavan's Book University, 2001

Devadoss, Manohar, "Multiple Facets of My Madurai", Madras: EastWest Books , 2007

Devakunjari, D, "Madurai Through the Ages : from the earliest times to 1801A.D.", Society for Archeological, Historical & Epigraphical Research, 1979

Devaraj, D., "A Study of Street Names of Madurai City", Madurai : Pasumalai Higher Secondary School, unknown [in Tamil]

Dutt, Binode Behari, "Town Planning in Ancient India", Calcutta : Thacker, Spink, 1925

Eck, Diana L., "A Survey of Sanskrit Sources for the Study of Varanasi", Purana, vol.22, No.1, pp.81-101, 1980

Eck, Diana L., "The City as a Sacred Center", in "The City as a Sacred Center : Essays on Six Asian Contexts" (eds. B.Smith ; H.B.Reynolds), pp.1-11, Leiden : E.J.Brill, 1987

Eck, Diana L., "Banaras : City of Light", Penguin Books, 1993 [first published 1982]

Fergusson, James, "History of Indian and Eastern Architecture", Munshiram Manoharlal, New Delhi, 1876 [reprint of 1972]

Fischer, K, "Architektur des indischen Subkontinents", Darmstadt: Wissenschaftliche Buchgesellschaft, 1987

Flitz, J.; Michell, G. "Where Kings and Gods Meet: the Royal Centre at Vijayanagara, India", Tucson: University of Arizona Press, 1984

Flitz, J.; Michell, G. "City of Victory : Vijayanagara, the medieval Hindu capital of southern India", New York: Aperture, 1991

Francis, W, "Imperial gazetteer of India : Madras I", Provincial Series vol.9, New Delhi : Usha Jain, 1985 [first published Calcutta : Supt. of Govt. Print, 1908]"

Francis, W, "Imperial gazetteer of India : Madras II, the southern and west coast districts, native states, and french possessions", Provincial Series Vol.10, New Delhi : Usha Jain, 1985 [first published Calcutta : Supt. of Govt. Print, 1908]

Freitag, Sandria B., "Culture and power in Banaras : community, performance, and environment, 1800-1980", Delhi : Oxford University Press, 1989

Freitag, Sandria B., "Sacred Symbol as Mobilizing Ideology : The North Indian Search for a 'Hindu' Community", Comparative Studies in Society and History, Vol.22, No.4, pp.597-625, 1980

Frintz, John, "Features and Layout of Vijayanagara : The Royal Centre", in "Vijayanagara - city and empire : new currents of research", pp.240-256, Wiesbaden : Steiner, 1985

Frintz, John, "Was Vijayanagara a 'Cosmic City'", in "Vijayanagara - city and empire : new currents of research", pp.257-273, Wiesbaden : Steiner, 1985

Fritz, John M. ; Michell, George, "Interpreting the Plan of a Medieval Hindu Capital, Vijayanagara", World Archaeology, Vol.19, No.1, Urbanization (Jun., 1987), pp.105-129, 1987

Fuller, C. J., "Servants of the goddess : the priests of a south Indian temple", Cambridge University Press, 1984

Fuller, C. J. ; Logan, Penny , "The Navaratri Festival in Madurai", Bulletin of the School of Oriental and African Studies, University of London, Vol.48, No.1 (1985), pp.79-105, 1985

Fuller, C.J., "Madurai", in "Temple Towns of Tamil Nadu" (eds. G. Michel), pp.94-113, Marg Publications, 1993

Gaenszle, Martin ; Gengnagel, Jörg, "Visualizing space in Banaras : Images, maps, and the practice of representation", Ethno-Indology : heidelberg studies in South Asian rituals ; v. 4, Wiesbaden : Harrassowitz, 2006

Gesler, Wilbert M. ; Pierce, Margaret, "Hindu Varanasi", Geographical Review, Vol.90, No.2 (Apr., 2000), pp.222-237, American Geographical Society, 2000

Gibb, H.A.R; Kramers, J.H., "Shorter encyclopaedia of Islam", Leiden : E.J. Brill, 1953

Gonda, J., "Ancient Indian Kingship from the Religious Point of View", E.J. Brill, 1966

Gowri, K., "Madurai under the English East India company, 1801-1857", Madurai : Raj Pub., 1987

Greaves, Edwin, "Kashi : The Illustrious or Benares", New Delhi : Asian Educational Services, 2003 [reprint of 1909]

Gutschow, Niels, "Varanasi/Benares : the Centre of Hinduism?", Archiv fur Wissenschaftliche Geographie 48, pp.194-209, 1994

Hankin, Nigel, "Hanklyn-Janklyn : A Rumble-Tumble Guide to Some Words, Customs, and Quiddities Indian and Indo-British ", New Delhi : India Research Press, 2003

Havell, E.B. , "Benares the Sacred City : Sketches of Hindu Life and Religion", Vishwavidyalaya Prakashan, 1905

Havell, E.B. , "The ancient and medieval architecture of India : a study of Indo-Aryan civilisation", London: J. Murray, 1915

Hazra, R.C., "Studies in the Puranic Records on Hindu Rites and Customs", The University of Dacca, 1940

Heitzman, James, "Temple Urbanism in Medieval South India", The Journal of Asian Studies, Vol.46, No.4, pp.791-826, 1987

Hertel, Bradley R. ; Humes, Cynthia Ann, "Living Banaras : Hindu religion in cultural context", State University of New York Press, 1993

Hudson, D.D, "Two Citra Festivals in Madurai", in "Religious festivals in South India and Sri Lanka" (eds. G.R.Welbon ; G.E.Yocum), pp.101-156, Manohar, 1982

Hudson, D.D, "Madurai : The City as Goddess", in "Urban Form and Meaning in South Asia : The Shaping of Cities from Prehistoric to Precolonial Times" (eds. H. Spodek ; D.M. Srinivasan), pp125-142, Washington, D.C. : National Gallery of Art, 1993

Jagadisa Ayyar, P.V., "South Indian shrines : Illustrated", Asian Educational Services, 1993 [first published 1922]

Jain, Usha Rani, "Imperial gazetteer of India : United Provinces of Agra and Oudh Vol.I", New Delhi : Usha, 1984 [first published Calcutta : Supt. of Govt. Print., 1908]

Jain, Usha Rani, "Imperial gazetteer of India : United Provinces of Agra and Oudh Vol.II : the Allahabad, Benares, Gorakhpur, Kumaun, Lucknow, and Fyzabad divisions, and the native states", Provincial Series Vol.6, New Delhi : Usha, 1984 [first published Calcutta : Supt. of Govt. Print., 1908]

Jennifer Howes, "The Courts of Pre-Colonial South India : Material culture and kingship", New York: RoutledgeCurzon, 2003

Jeyechandrun, A.V., "The Madurai Temple Complex : with special reference to literature and legends", Madurai Kamaraj University, 1985

Kalia, Ravi, "Bhubaneswar : From a Temple Town to a Capital City", Oxford University Press, 1994

Kalidos, R., "Temple Cars of Medieval Tamilaham", Vijay Publications, 1989

Kangle, R.P., "The Kautilia ArtaSastra : Part 1, 2, 3", Delhi : Motial Banarsidass Publisher, 1986, 1988, 1992 [first published Bombay University, 1965]

Kesavan, A., "The Town Planning of Madurai : A Reconstruction", in "The Madurai Temple Complex : Kumbabhisheka souvenir" (eds. Jeyechandrun, A.V.), pp.220-224, Madurai : Arulmighu Meenakshi Sundaresvarar Tirukkoil, 1974

Kramrisch, Stella, "The Hindu Temple vol.1-2", Calcutta : University of Calcutta, 1946

Kulke, H., "Legitimation and Town Planning in the Feudatory States of Central Orissa", Art and Archaeology Research Papers, 17, pp.30-40, Ritual space in India: studies in architectural anthropology, 1980

Kumar, Nita, "The Artisans of Banaras : Popular Culture and Identity, 1880-1986", Princeton University Press, 1988

Kumar, Nita, "Where are you from? : The Mohalla of Banaras", in "Bénarès : un voyage d'architecture" (eds. Coute), pp.29-37, Paris : Editions Creaphis, 1989

Lannoy, Richard, "Benares : seen from within", Callisto Books, 1999

Lewandowski, Susan J., "Changing Form and Function in the Ceremonial and the Colonial Port City in India : An Historical Analysis of Madurai and Madras", Modern Asian Studies, Vol.11, No.2, pp.183-212, 1977

Marshall, J.(Ed), Taxila, Vol.I-III, University Press, Cambridge, 1951

McGregor, R.S., "The Oxford Hindi-English Dictionary", Oxford University Press, 1999

Medhasananda, Swami, "Varanasi at the crossroads : a panoramic view of early modern Varanasi and the story of its transition", Kolkata : Ramakrishna Mission Institute of Culture, 2002

Menon, A.G.K., "Cultural Identity and Urban Development", Conservation of Immovable Property-2, The Indian national Trust for Art and Cultural Heritage, 1989

Menon, A.G.K. ; Thapar, B.K., "Historic Cities and Heritage Zones", Conservation of Immovable Property-3, The Indian national Trust for Art and Cultural Heritage, 1988

Michell, George, "Temple Towns of Tamil Nadu", Marg Publications, 1993

Mishra, Kamala Prasad, "Banaras in transition, 1738-1795 : a socio-economic study", New Delhi : Munshiram Manoharlal Publishers, 1975

Moor, Edward, "The Hindu Pantheon", Asian Educational Services, 1999 [reprint of 1810]

Morinis, E. Alan, "Pilgrimage in the Hindu tradition : a case study of West Bengal", Oxford University Press, 1984

Morris, A. E. J., "History of Urban Form: Before the Industrial Revolutions", Longman Scientific & Technical, 1994 [3rd ed.]

Nelson, J. H., "The Madura country, a manual", New Delhi : Asian Educational Services, 1989 [first published Madras : Asylum Press., 1868]

Nevill, H. R., "Benares : a gazetteer", District gazetteers of the United Provinces of Agra and Oudh ; v. 26, Allahabad : F. Luker Govt. Press, 1909

Parry, Jonathan P., "Death in Banaras", Cambridge University Press, 1994

Peggs, James, "India's cries to British Humanity, relative to Ghat murders etc.", The Culcutta Review, vol.10 (Jul.-Dec.1848), pp.404-436, 1848

Pieper, J., "A Pilgrims' Map of Benares : Notes on Condification in Hindu Cartography", GeoJournal, Vol.3, No.2, pp.215-218, 1979

Prinsep, James, "Benares Illustrated : In a Series of Drawings", Vishwavidyalaya Prakashan, 1996 [first published 1833]

Rajaram, K., "History of Thirumalai Nayak", Madurai : Ennes Publications, 1982

Rajayyan, K, "History of Madurai (1736-1801)", Madurai : Madurai University, 1974

Randhawa, T.S., "The Indian courtyard house", Prakash Books, 1999

Rangarajan, L.N., "Kautilya: The Arthashastra", Penguin Books, 1992

Ray, H.P., "Early Historical Urbanization : The Case of the Western Deccan", World Archaeology, Vol.19, No.1, Urbanization, pp.95-104, 1987

Reynolds, H.B., "Madurai : Koyil Nakar", in "The City as a Sacred Center : Essays on Six Asian Contexts" (eds. B.Smith ; H.B.Reynolds), pp.12-44, Leiden : E.J.Brill, 1987

Rotzer, Klaus, "19 CenturyBuilding Materials and Construction Techniques", in "Bénarès : un voyage d'architecture" (eds. Coute), pp.113-119, Paris : Editions Creaphis, 1989

Sahni, D.R., "Benares Inscription of Pantha", Epigraphia Indica and Record of the Archaeological Survey of India, vol.9, no.8, pp.59-62, Bombay ; Education Society's Press, 1907

Sen, R. R., "The Holy City : Benares", Gurgaon : Shubhi Publications, 2005 [first published 1912]

Sharma, R.S., "Urban Decay in India : c.300-c.1000", New Delhi: Munshiram Manoharlal Pub., 1987

Shenoy, J.P.L., "Madura : The Temple City", C.M.V. Press, 1937

Sherring, M.A., "Benares : the Sacred City of the Hindus in Ancient and Modern Times", Low Price Publications, 1996 [first published 1868]

Sherring, M.A., "Hindu tribes and castes : as represented in Benares", vol.1-3, Cosmo Publications, 1974-1987 [first published 1872-1881]

Singh, Birendra Pratap, "Life in Ancient Varanasi : An Account Based on Archaeological Evidence", Sundeep Prakashan, 1985

Singh, R.L., "Banaras : A Study in Urban Geography", Nand Kishore&Bros. Varanasi, 1955

Singh, R.L., "Social Factors in the Morphogenesis of Varanasi : A Suggestion in Technique for Form Evaluation", Urban geography in developing countries : proceedings of I.G.U. Symposium No.15, pp.3-27, National Geographical Society of India, 1973

Singh, R.L., "Origin, Growth and Morphological Structure of Varanasi", Reprint from Indo-Soviet Collaborative Volume : Urbanization in Developing Countries, Osmania Univ., pp.475-500, National Geographical Society of India, 1976

Singh, R.L., "Ecology of Urban Habitat and Environmental Planning in India", National Geographical Journal of India, vol.31-4, pp.280-290, 1985

Singh, Rana P.B., "The Pilgrimage Mandala of Varanasi / Kashi : A Study in Sacred Geography", National Geographical Journal of India, vol.33-4, pp.493-524, 1987

Singh, Rana P.B., "Banaras (Varanasi) : Cosmic Order, Sacred City, Hindu Traditions", Tara Book Agency, 1993

Singh, Rana P.B., "Towards the Pilgrimage Archetype : The Pancakrosi Yatra of Banaras", Varanasi : Indica Book, 2003

Singh, Shashi B., "Socio-Demographic Structure of Linguo-Cultural Groups in Varanasi UA：A Geographical Analysis", Ph.D Thesis, Banaras Hindu University, 1992

Singh, Shashi B., "Setting Process and Spatial Pattern of Linguo-Cultural Groups in Varanasi City", National Geographical Journal of India, vol.42, pp.116-132, 1996

Smith, J.S, "Madurai, India : The Architecture of a City", Master Thesis, Massachusetts Institute of Technology, 1976

Stoddard, Robert H. ; Morinis, E. Alan, "Sacred places, sacred spaces : the geography of pilgrimages", Geoscience and man ; v. 34, Geoscience Publications, Dept. of Geography and Anthropology, Louisiana State University, 1997

Sukul, Kuber Nath, "Varanasi down the ages", Patna : Kameshwar Nath Sukul, 1974

Sukul, Kuber Nath, "Varanasi Vaibhav", Bihar Rashtrabhasha Parishad, 1977 [in Hindi]

Thakur, Baleswer ; Parai, Anindita , "A review of recent urban geographic studies in India", GeoJournal, Volume 29, Number 2, pp.187-196, 1993

Thakur, Renu, "Mechanisms of urban growth in India: AD 600–1200", Urban History, 29, pp.187–196, 2002

Thakur, Renu, "Urban hierarchies, typologies and classification in early medieval India: c. 750-1200", Urban History, vol.21, pt.1, pp.61-76, 1994

Thiagarajan, K., "Meenakshi Temple Madurai", Meenakshi Sundareswarar Temple Renovation Committee, 1965

Vidyarhti, L.P., "the Sacred Complex of Kashi : A Microcosm of Indian Civilization", Concept Publishing Company, 1979

Volwahsen, Andreas, "Living architecture: Indian", London : Macdonald, 1969

◉和文文献

SD 編集部（編）,「都市形態の研究：インドにおける文化変化と都市のかたち」, 鹿島研究所出版会 , 1971

荒松雄 ,「多重都市デリー：民族、宗教と政治権力」, 中央公論社 , 1993

粟屋利江 ,「イギリス支配とインド社会」, 山川出版社 , 1998

飯塚キヨ ,「図説インド都市建築史」, SD：スペースデザイン , No.64-66, 1970年 2-4月 , 鹿島研究所出版会 , 1970

飯塚キヨ ,「イギリス植民都市の研究：インド亜大陸の場合」, 都市計画論文集 , 10-34, pp.199-204, 1975

飯塚キヨ ,「イギリス植民都市の構造的特質の研究：とくにインド亜大陸における都市構成にみられる普遍的法則に関して」, 都市計画論文集 , 11-45, pp.265-270, 1976

飯塚キヨ ,「日本におけるインド都市史研究概況と文献目録」, アジア都市研究文献シリーズ ; no.3, 東京大学工学部アジア都市研究会 , 1981

飯塚キヨ ,「インド建築の 5000年：変容する神話空間」, 世田谷美術館 , 1988

上杉彰紀 ,「古代インドの都市と社会：考古学的知見を中心に」, 季刊文化遺産 , vol.7, pp.13-17, 1999

上杉彰紀 ,「初期歴史時代／鉄器時代における北インドの都市、インド考古研究」, No.19,pp.25-50, 1998

エリアーデ , ミルチャ ; 訳 / 風間敏夫 ,「聖と俗：宗教的なるものの本質について」, 法政大学出版局 , 1969

応地利明 ,「南アジアの都城思想：理念と形態」,「イスラームの都市性」（編 / 板垣雄三 ; 後藤明）所収 , 日本学術振興会 , 1993

大塚和夫 ; ほか ,「岩波イスラーム辞典」, 岩波書店 , 2002

大辻絢子 ,「マドゥライ（タミル・ナードゥ、インド）の都市空間構成に関する研究」, 修士論文 , 京都大学 , 2004

小倉泰 ,「タミル・ナードゥにおける王権と寺院：王の神格化をめぐって」, 東洋文化研究所紀要 , 第 118冊 , 1992

小倉泰 ,「中世都市ヴィジャヤナガル：ヒンドゥー王都のレイアウトとその解釈」, 東洋文化 , 第 72号 , pp.165-189, 1992

小倉泰 ,「王の神格化と大寺院の建立：チョーラ朝の試み」,「ドラヴィダの世界：インド入門 II」（編 / 辛島昇）所収 , 東大出版会 , 1994

小倉泰 ,「インド世界の空間構造：ヒンドゥー寺院のシンボリズム」, 春秋社 , 1999

カウティリヤ ; 訳 / 上村勝彦 ,「実利論（上・下）：古代インドの帝王学」, 岩波書店 , 1984

辛島昇 ; ほか ,「南アジアを知る事典」, 平凡社 , 1992

辛島昇（編）,「世界歴史大系 南アジア史 3：南インド」, 山川出版社 , 2007

辛島昇 ; 坂田貞二 ,「北インド」, 山川出版社 , 1999

辛島昇 ; 坂田貞二 ,「南インド」, 山川出版社 , 1999
小西正捷 ,「インド世界の住文化：5000年の建築伝統にみる特質」, 季刊文化遺産 , vol.7, pp.4-12, 1999
近藤隆二郎 ,「バナーラスにおける水のゆくえ」, 季刊文化遺産 , vol.7, pp.59-61, 1999
定方晟 ,「インド宇宙誌：宇宙の形状・宇宙の発生」, 春秋社 , 1985
デュモン , ルイ ; 訳 / 竹内信夫 ; 小倉泰 ,「インド文明とわれわれ」, みすず書房 , 1997
Doshi, Balkrishna V.; 訳 / 山根周 ,「持続可能な地域、持続可能な地球への戦略」、建築雑誌 , vol.117, No.1492, pp12-19, 2002
都市史図集編集委員会 ,「都市史図集」, 彰国社 , 1999
根上英志 ; 山根周 ; 沼田典久 ; 布野修司 ,「マネク・チョウク地区（アーメダバード，グジャラート，インド）における都市住居の空間構成と街区構成」, 日本建築学会計画系論文集 , No.535, pp.75, 2000
ハキーム , ベシーム・S. ; 訳 / 佐藤次高 ,「イスラーム都市：アラブのまちづくりの原理」, 第三書館 , 1990
橋本慎吾 ,「河岸空間と周辺コミュニティとの関係性に関する研究：Varanai (INDIA) における Dev Diwali 祭り」, 修士論文 , 滋賀県立大学 , 2002
橋本泰元 ; 山下博司 ; 宮本久義 ,「ヒンドゥー教の事典」, 東京堂出版 , 2005
ピーパー , ヤン ; 訳 / 佐藤恵子 ; 加藤健司 ,「迷宮：都市・巡礼・祝祭・洞窟：迷宮的なるものの解読」, 工作舎 , 1996
弘中誠二 ,「聖都ワーラーナスィーに関する研究：都市・住宅・祝祭の空間構造」, 修士論文 , 法政大学 , 1996
布野修司（編）,「アジア都市建築史」, 昭和堂 , 2003
布野修司 ,「曼荼羅都市：ヒンドゥー都市の空間理念とその変容」, 京都大学学術出版会 , 2006
布野修司 ; 黄蘭翔 ; 山根周 ; 荒仁 ; 山本直彦 ; 渡辺菊真 ,「ジャイプルの街路体系と街区構成：インド調査局作製の都市地図（1925-28年）の分析 その１」, 日本建築学会計画系論文集 , No.499, pp.113, 1997
布野修司 ; 黄蘭翔 ; 山根周 ; 荒仁 ; 山本直彦 ; 渡辺菊真 ; 沼田典久 ,「ジャイプルの住区構成と住居類型：インド調査局作製の都市地図 (1925-28年) の分析 その２」, 日本建築学会計画系論文集 , No.508, pp.121, 1998
布野修司 ; 黄蘭翔 ; 山根周 ; 山本直彦 ; 渡辺菊真 ,「ジャイプルの街区とその変容に関する考察：インド調査局作製の都市地図（1925-28年）の分析 その３」, 日本建築学会計画系論文集 , No.539, pp.119, 2001
布野修司 ; 脇田祥尚 ; 青井哲人 ; 牧紀男 ,「チャクラヌガラ（インドネシア・ロンボク島）の街区構成：チャクラヌガラの空間構成に関する研究 その１」日本建築学会計画論文集 , No.491, pp.135, 1997
松井透 ,「イギリス支配とインド社会：19世紀前半北インド史の一研究」, 東京大学出版会 , 1987
丸山次雄 ,「パータリプトラの都市形態」,「都市形態の研究：インドにおける文化変化と都市のかたち」所収 , pp.82-91, 鹿島研究所出版会 , 1971）
三尾稔 ; ほか ,「北・西インドにおける都市型祭礼の変容に関する文化人類学的研究：経済自由化、宗教ナショナリズムと宗教実践との相互連関の民族誌的把握を目指して」, 平成 15-17年度科学研究費補助金研究成果報告書 , 2006
水谷真成 ,「大唐西域記（1）～（3）」, 平凡社 , 1999
ミッチェル , ジョージ ; 訳 / 神谷武夫 ,「ヒンドゥ教の建築：ヒンドゥ寺院の意味と形態」, 鹿島出版会 , 1993
宮本久義 ,「天界に連なる巡礼路」,「インド道の文化誌」（編 / 小西正捷 ; 宮本久義）, pp.106-122, 春秋社 , 1995
宮本久義 ,「『カーシー・ラハスヤ』に見られる聖地巡礼の作法」, 東洋学研究 , No.44, pp.119-130, 2007
八木祐子 ,「ワーラーナスィーにおける都市祭礼の変化：ドゥルガー・プージャを中心に」,「北・西インドにおける都市型祭礼の変容に関する文化人類学的研究」（三尾稔ほか）所収 , pp.27-44, 平成 15-17年度科学研究費補助金研究成果報告書 , 2006
山折哲雄 ,「聖地と仏教の機能」, 日本仏教学会年報 , No.47, pp.331-343, 1981
山下博司 ,「巡礼のシンボリズム」,「インド：暮らしがわかるアジア読本」（編 / 小西正捷）所収 , pp.198-206, 河出書房新社 , 1997
山根周 ; 布野修司 ; 荒仁 ; 沼田典久 ; 長村英俊 ,「モハッラ，クーチャ，ガリ，カトラの空間構成：ラホール旧市街の都市構成に関する研究　その１」, 日本建築学会計画系論文集 , No.513, pp.227, 1998
山根周 ; 布野修司 ; 荒仁 ; 沼田典久 ; 長村英俊 ,「ラホールにおける伝統的都市住居の構成：ラホール旧市街の都市構成に関する研究　その２」, 日本建築学会計画系論文集 , No.521, pp.219, 1999
山根周 ; 沼田典久 ; 布野修司 ; 根上英志 ,「アーメダバード旧市街 (グジャラート，インド) における街区空間の構成」, 日本建築学会計画系論文集 , No.538, pp.141, 2000
米倉二郎 ,「インド集落の変貌：ガンガ中・下流域の村落と都市」, 古今書院 , 1973

研究業績リスト

■本論文に関連する研究業績

《学術論文（審査付）》

1）柳沢究、布野修司：「ヴァーラーナシー（ウッタル・プラデーシュ州、インド）におけるモハッラの空間構成」、日本建築学会計画系論文集第 623 号、pp.153-160、2008 年 1 月　（本論文関連章：第２章）

2）柳沢究、大辻絢子、布野修司：「マドゥライ（タミル・ナードゥ州、インド）の都市形成と住み分けの構造」、日本建築学会計画系論文集第 605 号、pp.93-99、2006 年 7 月　（本論文関連章：第３，４章）

3）柳沢究、布野修司:「ヴァーラーナシー（ウッタル・プラデーシュ州、インド）の都市空間形成と巡礼路および寺院・祠との関係」、日本建築学会計画系論文集第 583 号、pp.75-82、2004 年 9 月　（本論文関連章：第１章）

《会議論文》

1）Ayako Otsuji, Kiwamu Yanagisawa, Shuji Funo: "Spatial Formation of Madurai, India - Compared with Rajdhani Plan", Proceedings of the 5th International Symposium on Architectural Interchange in Asia, pp.333-336, June 1-4, 2004, Matsue, Japan　（本論文関連章：第３，４章）

2）Kiwamu Yanagisawa, Shuji Funo: "Spatial Formation of Varanasi, India - An Analysis of the Urban Structure, Pilgrimage Roads, Mohalla as Community, Composition of Block and Houses", Proceedings of the 4th International Symposium on Architectural Interchange in Asia, pp.216-221, Sep.17-19, 2002, Chongqing, China　（本論文関連章：第１，２章）

《学会発表》

1）柳沢究、大辻絢子、布野修司：「マドゥライ（インド）の都市空間構成に関する研究 その 1：都市構造の形成過程と基本理念」、日本建築学会学術講演梗概集 2003 年、F-1 分冊 pp.179-180、2003 年 9 月

2）大辻絢子、柳沢究、布野修司:「マドゥライ（インド）の都市空間構成に関する研究 その 2:都市祭礼と空間構成」、日本建築学会学術講演梗概集 2003 年、F-1 分冊 pp.181-182、2003 年 9 月

3）柳沢究、布野修司、魚谷繁礼：「ヴァラナシ（インド）の都市空間構成に関する研究 その 1：都市構造と巡礼路」、日本建築学会学術講演梗概集 2001 年、F-1 分冊 pp.343-344、2001 年 9 月

4）魚谷繁礼、柳沢究、布野修司：「ヴァラナシ（インド）の都市空間構成に関する研究 その 2：コミュニティ空間・モハッラと街区構成、住居」、日本建築学会学術講演梗概集 2001 年、F-1 分冊 pp.345-346、2001 年 9 月

■その他の研究業績

《学術論文（審査付）》

1）Kiwamu Yanagisawa, Shojiro Nagata: "Fundamental Study on Design System of Kolam Pattern", Forma, Vol. 22-1, pp.31-46, Society for Science on Form, 2007

2）山本直彦、小澤雄樹、柳沢究、牧紀男、森田一弥、山田協太：「伝統技術を活用した災害仮設住宅の建設技術開発に関する研究：左官技術を用いた自助建設型シェル構造ユニット」、住宅総合研究財団研究論文集 No.33、

p.393-404、2007年3月

3) 山口潔子、布野修司、安藤正雄、脇田祥尚、柳沢究:「ヴィガン(イロコス、フィリピン)の街区構成に関する考察」、日本建築学会計画系論文集第553号、pp.209-215、2002年3月

《学術論文(審査無)》

1) 山本直彦、柳沢究ほか4名:「左官技術を活用した災害仮設住宅の建設技術開発に関する研究」、歴史都市防災論文集vol.1、2007年6月

2) 齊木崇人、柳沢究ほか7名:「東アジアの稲作文化における集落・居住空間と伝統的環境観に関する国際比較:中国貴州省トン族集落における風水観と住居・鼓楼・水系・広場が生み出す空間構成原理」、神戸芸術工科大学紀要:芸術工学2006、2007年3月

《会議論文・学会発表》

1) 石塚祐至、小澤雄樹、山本直彦、柳沢究、平尾和洋、井上真澄:「伝統的左官技術を用いた薄肉楕円体シェル構造の開発:水平加振実験」、日本建築学会学術講演梗概集2007年、B-1分冊pp.731-732、2007年8月

2) 林亮介、山本直彦、小澤雄樹、井上真澄、平尾和洋、柳沢究、石塚祐至:「籾殻混入モルタルの材料性質に関する基礎的研究:左官による薄肉シェル材料として」、日本建築学会学術講演梗概集2007年、A-1分冊pp.333-334、2007年8月

3) Kiwamu Yanagisawa, Shojiro Nagata: "Fundamental Study on Design System of Kolam Pattern", Proceedings of The International Symposium on Katachi/Form in Folk Art, Osaka, Japan 2006/11/3

4) 石塚祐至、小澤雄樹、山本直彦、柳沢究、平尾和洋、井上真澄:「伝統的左官技術を用いた薄肉楕円体シェル構造の開発:シェルの概要と鉛直荷重載荷実験」、日本建築学会学術講演梗概集2006年、B-1分冊pp.665-666、2006年9月

5) 長田昌次郎、柳沢究:「Kolam紋様の魅力:もう一つの一筆図像の性質」、第58回形の科学会シンポジウム、沖縄、2004年11月10-14日

6) Kiyoko Yamaguchi, Shuji Funo, Kiwamu Yanagisawa: "Historical Poblacines and Preservation Movement in Cebu, Philippines", Proceedings of the 5th International Symposium on Architectural Interchange in Asia, pp.106-109, June 1-4, 2004, Matsue, Japan

7) 長田昌次郎、柳沢究:「KOLAM一筆書き紋様の図学的考察1:概要とその性質」、形の文化会、京都、2004年4月25日

8) 柳沢究、長田昌次郎:「KOLAM一筆書き紋様の図学的考察2:数値表現と線形化」、形の文化会、京都、2004年4月25日

9) 脇田祥尚、布野修司、安藤正雄、平田隆行、柳沢究:「フィリピンにおけるスペイン統治期の都市計画 その3:ヴィガンの都市構成」、日本建築学会学術講演梗概集1999年、F-1分冊pp.281-282、1999年9月

10) 柳沢究、布野修司、安藤正雄、平田隆行、脇田祥尚:「フィリピンにおけるスペイン統治期の都市計画 その4:ヴィガンの街区構成」、日本建築学会学術講演梗概集1999年、F-1分冊pp.283-284、1999年9月

《研究報告書》

1) 山田協太、柳沢究ほか６名：「2×4構法による京町家改修手法の研究：セルフビルドによる技術的可能性の考究を中心として」、第１回坪井記念研究助成・対象研究、2005年５月

2) 椎名健、長田昌次郎、柳沢究ほか６名：「インド吉祥紋様・コーラム Kolam のパズル的生成と立体表示法の開発：天空の律動（こころ）に遊ぶ」、平成15年度中山隼雄科学技術文化財団・『人間の遊び』という視点に立った研究開発助成、財団レポート第13号、中山隼雄科学技術文化財団、2005年８月

《著書》

1)『無有』、共著（著：竹原義二、写真：絹巻豊、構成：柳沢究）、学芸出版社、2007年３月

2)『京都げのむ No.6：みやこきわめぐり～京都境界巡行』、責任編集、京都コミュニティデザインリーグ、2006年５月

3)『世界住居誌』、分担執筆（編：布野修司）、昭和堂、2005年12月（分担：「南アジア」pp.138-139、「ハヴェリ」pp.152-153、「装飾と住居」pp.133-136）

4)『京都げのむ No.5：ＣＤＬ西安へ行く』、責任編集、京都コミュニティデザインリーグ、2005年６月

5)『アジア都市建築史』、分担執筆（編：布野修司）、昭和堂、2003年８月（分担：「ヴァーラナシーのガート」pp.154-155）

6)『京都げのむ No.2：京都売ります！』、責任編集、京都コミュニティデザインリーグ、2002年６月

《総説・一般論文》

1)「京都ゲノムを探して」、寄稿、京都新聞 2005/10/24、2005年10月

2)「『古材色の再現』から『新しい表現』へ」、『コンフォルト』No.76、建築資料研究社、2004年５月

3)「『古色仕上げ』を楽しむ：素材編・実践編」、『コンフォルト』No.76、建築資料研究社、2004年５月

4)「ヴァーラーナシー（インド）：死を待つ人の家」、『建築雑誌』2003年２月号、日本建築学会、2003年２月

5)「1948年：池辺陽と住宅 No.1」、『HIROBA』2001年11月号、大阪府建築士会、2001年11月

《計画・設計作品（雑誌掲載分）》

1)「SAKAN Shell Structure」、伝統的左官技術を用いた自助建設型仮設住宅実験棟、彦根、共同：小澤雄樹・森田一弥・山本直彦、2007年８月［掲載誌：『新建築住宅特集』2007年９月号 p.128-131、『住宅建築』2007年９月号 p.152-155、『コンフォルト』2007年10月号 p.131、『建築ジャーナル』2007年８月号 p.18］

2)「ビューティアム京都・四条富小路店」、店舗設計、京都、2005年６月［掲載紙：『商店建築』2005年８月号 p.214-215、商店建築社］

3)「読谷トルネード」、SHARP 液晶テレビ AQUOS 雑誌広告用テレビ台、沖縄、協働：久住鴻輔、2004年７月［主な広告掲載紙：『家庭画報』2004年10月号、『CASA BRUTUS』2004年10月号、『pen』2004/9/15号、『Esquire』2004/No.11］

4)「荒壁を廻る家」、マンション・リノベーション、京都、2004年４月［掲載紙：『別冊太陽・古民家再生術Ⅲ 住み継ぐ家』p.62-65、平凡社、2005年］

5)「SHELL-TER」、13th タキロン国際建築コンペ「仮の恒久住宅」応募作品（２等入賞）、協働：森田一弥・山田協太、

2002年［掲載紙：『新建築』2002年3月号 p213、『JA』2002年春号 p.130］

6)「繭」、京町家再生複合店舗、京都、協働：森田一弥・奥村彰浩、2000年9月

7)「TISTOU」、卒業設計作品、京都大学、1999年3月［掲載紙：『近代建築』1999年5月号別冊 p.258-260］

《受賞》

1) 京都大学卒業設計最優秀賞（武田五一賞）、1999年3月

2) 第53回近畿地区卒業設計コンクール入賞、1999年7月

3) JCD日本商環境デザイン賞2001新人賞（共同）、2001年12月

4) 第13回タキロン国際デザインコンペ「仮の恒久住宅」二等入賞（共同）、2002年1月